

岩手県埋文センター文化財調査報告書第87集

曲田 I 遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(第1分冊)

岩手県埋蔵文化財センター

日本道路公団

曲田 I 遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(第 1 分冊)

序

地域開発にともなう交通網の整備事業は、本県にとって重要な施策のひとつであり、特に東北縦貫自動車道の建設は、産業経済開発の大動脈として多方面からの期待をになうものであります。

一方、県内には数多くの遺跡が確認されており、これらの貴重な文化遺産を保護するとともに開発との均衡を保つことも大きな課題であります。

当埋蔵文化財センターは、昭和52年に発足して以来、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発によって消滅する遺跡の発掘調査を行ない、記録保存する措置をとってまいりました。

東北縦貫自動車道青森線の建設に関連する発掘調査は、西根町から秋田県境までの18遺跡について実施し、昭和53年から56年にかけてすべての野外調査を終了しました。発掘調査によって出土した資料の整理及び報告書の作成は、これまで16遺跡について、13分冊の発掘調査報告書として刊行しております。

本報告の曲田Ⅰ遺跡は、昭和55・56年度に発掘調査を行ない、引き続き出土資料の整理及び報告書作成の業務をすすめてまいりましたが、このたびその調査成果を発刊するのはこびになりました。発見された縄文時代晩期の集落跡をはじめとする多くの遺構や遺物は、県北の歴史を解明する重要な資料になるものと期待されます。

本報告書が研究者のみならず、多くのかたがたに活用され、埋蔵文化財に対する理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書の作成にいたるまでの間、御援助と御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、安代町教育委員会をはじめ、関係各位に感謝申し上げますとともに、今後の御指導と御協力をお願い申し上げます。

昭和59年11月

財団法人岩手県埋蔵文化財センター

理事長 金子彰吉

例 言

1. 本報告書は、東北縦貫自動車道青森線の建設に伴って実施した岩手県二戸郡安代町曲田^{まがた}I遺跡の発掘調査報告書である。

2. 曲田I遺跡は、岩手県教育委員会作成の遺跡台帳にコード番号69-2151として登録された遺跡であるが、隣接する上の山XII遺跡、コード番号69-2029を含めて単一遺跡とし、略号をMT-80・81とした。

3. 発掘調査は、下記のとおり実施した。

第1次調査

調査期間 昭和55年4月4日～11月8日

調査面積 20,600㎡（曲田I遺跡11,800㎡・上の山XII遺跡 8,800㎡）

調査担当者 高橋文夫、鈴木隆英専門調査員

第2次調査

調査期間 昭和56年4月6日～7月16日

調査面積 5,500㎡

調査担当者 近藤宗光主任専門調査員、高山靖彦、朝野孝二、小平忠孝、棚沢満郎、平井進、鈴木隆英専門調査員

4. 発掘調査にあたっては、以下の方々と機関の御協力をいただいた。（敬称略）

東北大学文学部・須藤 隆 岩手県立博物館・小田野哲憲

一戸町教育委員会・高田和徳

安代町教育委員会 安代町建設課

有限会社都南建設 東邦航空株式会社

新日本土木株式会社 古久根建設株式会社

5. 本報告書の作成にかかわる資料の分析鑑定については、以下の方々の御協力をいただいた。

（敬称略）

東京国立文化財研究所・見城敏子 アスファルト標付着物、漆様樹脂

岩手大学農学部・吉田 稔 リン分析、火山灰同定

岩手県立博物館・赤沼英男 赤色顔料、アスファルト標付着物

岩手県木炭協会・早坂松次郎 炭化材の樹種

岩手県立大船渡農業高校・佐藤二郎 石材鑑定

岩泉町立大川中学校・高山 剛 炭素鑑定

6. 本報告書の執筆は、調査経過の概要を鳴千秋、他を鈴木隆英が分担して行なった。
7. 掲載した実測図の縮尺は、一部を除いて下記のとおり統一し、遺物写真についてもできる限りこれに準じた。
 - 遺構 住居跡及びピット 40分の1 その他 40分の1, 80分の1, 100分の1
 - 遺物 大型の土器及び石器 4分の1
 - 小型の土器, 拓本, 土製品, その他 3分の1
8. 掲載した遺物及び土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著「新版標準土色帖」第5版によった。
9. すでに公表されている曲田I遺跡の「現地説明会資料」及び「発掘調査略報」との間に、記載事実の異なる場合は、すべて本報告書の記載によるものを正とする。
10. 掲載したすべての遺物と実測図・写真等の調査記録資料は、岩手県埋蔵文化財センターに一括保管している。

本文目次

(第1分冊)

序

例言

第1章 経過と方法

第1節 調査経過の概要	1
第2節 野外調査と室内整理の経過	1
(1) 野外調査の経過	1
i 昭和55年度	1
ii 昭和56年度	2
(2) 室内整理の経過	2
i 昭和55年度	2
ii 昭和56年度	2
iii 昭和57年度	2
iv 昭和58年度	2
第3節 野外調査と室内整理の方法	3
(1) 野外調査の方法	3
i 調査区の設定	3
ii 地区割測量	3
iii 遺構の名称	4
iv 粗掘と遺構検出	4
v 遺構の精査	4
vi 遺物と記録資料の整理	4
vii 普及活動	7
(2) 室内整理の方法	7
i 遺物の整理	7
ii 記録資料の整理	7
iii 報告書の作成	7
iv 報告書の記述	7

第2章 位置と地形

第1節 位置と地形	9
(1) 位置	9
(2) 安代町付近の地形と地質	9
(3) 遺跡付近の地形と現状	17
第2節 気候と動植物相	18
(1) 気候	18
(2) 動植物相	18
i 植物相	18
ii 動物相	21
第3節 周辺の遺跡	22

第3章 調査の成果

第1節 基本層序	28
第2節 発見された遺構と遺物	31
(1) 概要	31
(2) 縄文時代及び弥生時代の住居跡と掘立柱建物跡	32
(3) 歴史時代の住居跡状遺構と掘立柱建物跡	263
(4) ビット	271
(5) 焼土遺構	320
(6) 集石遺構	327
(7) 捨て場跡	330
(8) 溝跡	355
(9) 道路跡	366
(10) 炭焼場跡	367

挿 図 目 次

第1図	遺跡地区割模式図……………3	第58図	E III-012住居跡出土遺物 ……88
第2図	曲田 I 遺跡グリッド配置図……………5	第59図	F III-012住居跡平・断面図……………89
第3図	土器・石器の実測説明図……………8	第60図	F III-012住居跡出土遺物 ……90
第4図	曲田 I 遺跡周辺の山系・水系図…11	第61図	F III-013住居跡出土遺物 ……90
第5図	遺跡周辺の地形概念図……………13	第62図	F III-013住居跡平・断面図……………91
第6図	遺跡周辺の地質概念図……………14	第63・64図	
第7図	遺跡付近の詳細地形図……………15		F III-013住居跡出土遺物 ……92・93
第8図	岩手県各地の年間平均 降水量及び気温……………19	第65図	F III-014住居跡平・断面図……………96
第9図	岩手県北西城現生植生分布図……………20		F III-014住居跡出土遺物 ……97-99
第10図	周辺の遺跡分布図……………25	第68図	F III-015住居跡平・断面図……………100
第11図	遺跡の基準土層図……………29	第69図	F III-015住居跡出土遺物 ……101
第12図	E II-011住居跡出土遺物 ……32	第70図	F III-016住居跡平・断面図……………102
第13図	E II-011住居跡平・断面図……………33	第71・72図	
第14図	E II-012住居跡出土遺物 ……34		F III-016住居跡出土遺物 ……103・104
第15図	E II-012住居跡平・断面図……………35	第73図	F III-017住居跡平・断面図……………106
第16図	E II-013住居跡平・断面図……………37	第74-76図	
第17図	E II-013住居跡出土遺物 ……38		F III-017住居跡出土遺物 ……107-109
第18図	E II-014住居跡平・断面図……………39	第77図	F III-018A・B住居跡 平・断面図……………111
第19-21図		第78図	F III-018A住居跡出土遺物 ……113
	E II-014住居跡出土遺物 ……40-42	第79図	F III-018B住居跡平・断面図…115
第22図	E II-015住居跡出土遺物 ……43	第80図	F III-019A~D住居跡埋土上部 遺物分布平面図及び平・断面図…117
第23図	E II-015住居跡平・断面図……………44	第81図	F III-019住居跡重複開析図 ……119
第24図	E III-011住居跡平・断面図……………47	第82-84図	
第25図	E III-011住居跡遺物 出土状況平面図……………49		F III-019住居跡出土遺物 ……121-124
第26-56図		第85図	F III-0110・0111住居跡 平・断面図……………127
	E III-011住居跡出土遺物 ……51-86		
第57図	E III-012住居跡平・断面図……………87		

第86図	F III-0111住居跡平・断面図…	128		重複開析図……………	175
第87図	F III-0112住居跡出土遺物……	129	第120図	G III-012E住居跡出土遺物 …	180
第88図	F III-0112住居跡及び周辺 ビット平・断面図……………	130	第121図	G III-013住居跡平・断面図……	181
第89図	F III-0112住居跡出土遺物……	131	第122図	G III-013住居跡出土遺物 ……	182
第90図	F III-0113・0114住居跡 平・断面図……………	133	第123図	G III-014住居跡平・断面図……	183
第91～93図			第124図	G III-014住居跡出土遺物 ……	184
	F III-0113住居跡出土遺物…135～137		第125図	G III-015住居跡平・断面図……	185
第94図	F III-0114住居跡平・断面図…	139	第126図	G III-015住居跡出土遺物 ……	186
第95・96図			第127図	G III-016A～E住居跡 平面図……………	187
	F III-0114住居跡出土遺物…141・142		第128図	G III-016住居跡重複関係 解析図……………	189
第97図	F III-0115住居跡平・断面図…	144	第129～131図		
第98～100図				G III-016住居跡出土遺物 …182～184	
	F III-0115住居跡出土遺物…145～147		第132図	G IV-011住居跡出土遺物 ……	195
第101図	F III-0116住居跡平・断面図…	149	第133図	G IV-011住居跡平・断面図……	196
第102～108図			第134図	G IV-012住居跡平・断面図……	197
	F III-0116住居跡出土遺物…151～158		第135図	G IV-012住居跡出土遺物 ……	198
第109図	F III-0113～0116住居跡 遺物出土状況……………	159	第136図	G IV-013住居跡平・断面図……	199
第110図	F III-0117住居跡平・断面図…	162	第137図	G IV-014住居跡平・断面図……	201
第111図	F IV-011A・011B住居跡 平・断面図……………	163	第138図	G IV-014住居跡遺物 出土状況平面図……………	203
第112図	F IV-011B住居跡出土遺物 …	165	第139～141図		
第113図	F IV-012住居跡出土遺物 ……	166		G IV-014住居跡出土遺物 …204～206	
第114図	F IV-012住居跡平・断面図……	167	第142図	G IV-015住居跡出土遺物 ……	207
第115図	G II-011住居跡平・断面図……	169	第143図	G IV-015住居跡平・断面図……	208
第116図	G II-012住居跡平・断面図……	170	第144図	G IV-015・H V-012住居跡及び G VI-051雨裂跡埋土上部 の遺物出土状況平・断面図	209
第117図	G II-012住居跡出土遺物 ……	171	第145図	G V-016住居跡平・断面図……	211
第118図	G III-012A～E住居跡 平・断面図……………	173	第146図	G V-016住居跡出土遺物 ……	211
第119図	G III-012A～E住居跡		第147図	H III-011住居跡平・断面図……	212

第148図 H III-011住居跡出土遺物 …… 213	第184図 L V-011建物跡ピット内 遺物出土状況平・断面図 …… 260
第149図 H III-015住居跡出土遺物 …… 214	第185図 L V-011建物跡出土遺物 …… 260
第150図 H III-012・013・014住居跡 平・断面図 …… 215	第186図 J IV-011住居跡遺構 平・断面図 …… 264
第151図 H III-015住居跡平・断面図 …… 217	第187図 J IV-011住居跡遺構・J IV-012-016掘立柱建 物跡平面図 …… 267
第152図 H IV-011住居跡平・断面図 …… 218	第188図 埋葬ピット平・断面図 …… 279
第153図 H IV-011住居跡出土遺物 …… 219	第189図 K VI-025ピット遺物 出土状況平・断面図 …… 279
第154図 H IV-012住居跡平・断面図 …… 220	第190-215図 大～中型ピット 平・断面図 …… 280-305
第155-164図 H IV-012住居跡出土遺物 …… 221-231	第216・217図 柱穴状ピット 平・断面図 …… 306・307
第165図 H IV-013住居跡出土遺物 …… 232	第218-225図 ピット出土遺物 …… 312-319
第166図 H IV-013住居跡平・断面図 …… 233	第226図 E III-031・032・033焼土 遺構平面図 …… 321
第167図 J V-011住居跡平・断面図 …… 234	第227図 E III-034・035・E IV-031 焼土遺構平面図 …… 322
第168図 J V-011・012住居跡 出土遺物 …… 235	第228図 H III-031焼土遺構及び周辺の ピット・雨裂状遺構平・断面図 …… 323
第169図 J V-012A・012B住居跡 平・断面図 …… 237	第229図 I V-031・032焼土遺構と柱穴状 ピット群平面図 …… 324
第170図 J V-012住居跡内 土器出土状況図 …… 238	第230図 I V-033・034焼土遺構 平・断面図 …… 325
第171図 J V-012住居跡出土遺物 …… 239	第231図 I VI-031・J V-031焼土遺 構平面図 …… 326
第172図 J V-013住居跡平・断面図 …… 242	第232図 F III-041集石遺構出土遺物 …… 328
第173図 J VI-011住居跡平面図 …… 245	第233図 F III-041・I V-041集石 遺構平・断面図 …… 329
第174-177図 J VI-011住居跡出土遺物 …… 246-250	
第178図 J VI-012掘立柱建物跡 平・断面図 …… 252	
第179図 K VI-011住居跡出土遺物 …… 253	
第180図 K VI-011住居跡平面図 …… 254	
第181図 K VI-012住居跡平・断面図 …… 256	
第182図 K VI-012住居跡出土遺物 …… 257	
第183図 L V-011掘立柱建物跡 平・断面図 …… 259	

第234図 G II-061捨て場跡遺物出土状況平・断面図	331
第235-250図 G II-061捨て場跡出土遺物	333~349
第251図 I III-061捨て場跡範囲図	351
第252図 I III-061捨て場跡出土遺物	352
第253図 M IV-061捨て場跡平・断面図及び出土遺物	353
第254図 M IV-061捨て場跡出土遺物	354
第255図 G V-052溝跡平・断面図	356
第256図 G V-051雨裂跡平・断面図	357
第257図 G V-051雨裂跡出土遺物	359

第258図 H III-051溝跡平・断面図	360
第259図 H IV-051溝跡出土遺物	361
第260図 H IV-051溝跡平・断面図	362
第261図 I V-051溝跡南半部平・断面図・I V区土層断面図	363
第262図 E III-071道路跡出土遺物	367
第263図 F IV-081炭焼場跡現状地形平面図	369
第264図 F IV-081炭焼場跡平面図	371
第265図 F IV-081炭焼場跡断面図	373
第266・267図 F IV-081炭焼場跡出土遺物	375-376

目 次

周辺の遺跡地名表	23
ビット計測表	307

焼土遺構計測表	321
---------	-----

第1章 経過と方法

第1節 調査経過の概要

東北縦貫自動車道建設に伴う安代町の遺跡分布調査は、岩手県教育委員会によって昭和49年10月に実施された。その結果、松尾村～安代インターチェンジの27.4km間に、赤坂田Ⅰ、赤坂田Ⅱ、扇畑Ⅰ、扇畑Ⅱ、荒屋Ⅰ、荒谷Ⅱの6遺跡、安代インターチェンジ～秋田県境の19.5km間に有矢野、上の山Ⅹ、上の山館、上の山Ⅶ、上の山Ⅵ、曲田Ⅰ、越戸Ⅱ、越戸館の8遺跡が確認された。このため、日本道路公団仙台建設局と協議が重ねられ、越戸館跡については路線変更によって現状保存とし、他の13遺跡については現状保存が困難であり、記録保存のための緊急発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は岩手県教育委員会の調整のもとに、岩手県埋蔵文化財センターが日本道路公団の委託をうけて行なうこととなり、昭和52年7月から開始された。昭和53年には荒谷Ⅰ、荒谷Ⅱ、扇畑の3遺跡が調査され、翌54年には上の山Ⅹ、有矢野、越戸Ⅱの3遺跡の調査が終了した。昭和55年には曲田Ⅰ遺跡をはじめ、上の山Ⅶ、上の山館、赤坂田Ⅰ、赤坂田Ⅱ、扇畑Ⅱの6遺跡が調査された。当初安代町に所在する14遺跡の発掘調査は昭和55年に終了する見込みであったが、曲田Ⅰ遺跡の調査が延期になったため、翌56年7月に至って完了した。

第2節 野外調査と室内整理の経過

(1) 野外調査の経過

ⅰ 昭和55年度（第1次調査）

調査対象面積13,000㎡について、4月14日から11月8日までの6.5ヵ月を要して実施した。経過の概要は以下のとおりである。

4月11・12日	現地確認	5月27日	空中写真撮影
4月14～16日	器材搬入、調査事務所の設営	8月25日	日本道路公団の視察
4月17日～5月1日	雑物撤去	9月5～17日	一部重機による排土作業
4月18～30日	基準測量	10月28日	現地説明会
4月21日	表土除去作業開始	10月30日	空中写真撮影
5月6日	遺構の精査開始	11月6・7日	器材搬出、調査事務所撤去

なお、調査の後半になって調査区域の西端には縄文時代晩期の遺構が確認され、調査区域外に続いていることが予想されたため、建設予定地内の試掘調査を実施した。

ii 昭和56年度（第2次調査）

前年度の試掘調査によって確認された用地内 5,500㎡を調査対象として、4月6日から7月18日までの3.5ヵ月間実施した。経過の概要は次のとおりである。

- | | | | |
|------------|---------------|------------|------------|
| 4月6～11日 | 調査事務所の設置、基準測量 | 5月18日～6月1日 | 調査員の増員 |
| 4月15～17日 | 雑物撤去、基準測量 | 6月4日 | 空中写真撮影 |
| 4月15～17日 | 雑物撤去、基準測量 | 6月12日 | 工事用道路分明け渡し |
| 4月18～5月13日 | 山林部分の重機排土作業 | 7月14日 | 調査終了 |
| 4月24日～ | 遺構の精査開始 | 7月18日 | 調査事務所の撤去 |

このほか、雨天の際には前年度と同様、出土遺物の水洗、注記、調査記録の整理等を行なう。

(2) 室内整理の経過

調査資料の整理は、現地における整理のほか、昭和55年11月～3月、同56年11月～59年3月に渡って実施した。年度別の整理作業の概要は、以下のとおりである。

i 昭和55年度

遺物の注記・仕分けと仮登録、遺構図面の整理と一部トレース、写真の整理等を実施したが、第1次調査に伴う調査略報を作成している。

ii 昭和56年度

第2次調査における資料の整理である。遺物の仕分け、遺構図面及び写真の整理と仮登録を行なっている。併わせて第2次調査の略報を作成した。

iii 昭和57年度

4～6月にかけて遺物の注記及び分類作業をすゝめ、一部併行して4月～11月に土器の接合復元、登録及び計測、石器及びその他の遺物について登録、写真撮影、計測等を行なう。これ以後3月までは、遺物の実測を継続する。

iv 昭和58年度

4月中旬まで引き続き土器の実測を行ない、以後遺物実測図のトレース、遺物観察表の作成を8月まで継続している。これらの作業とともに5月から8月にかけて土器の写真撮影、8月～11月に遺物図版、遺構図面の作成・トレース、続いて遺構図版、写真図版、遺構観察表の作成、あわせて本文原稿の執筆・割付を行なった。

第3節 野外調査と室内整理の方法

(1) 野外調査の方法

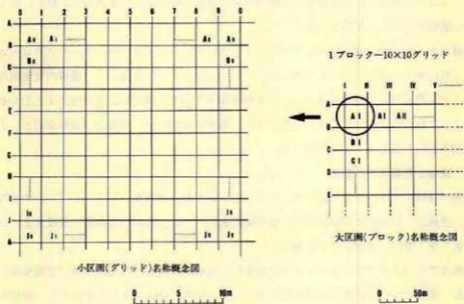
i 調査区の設定

曲田 I 遺跡は、「岩手県遺跡台帳」に東南東から西北西に走る町道を挟んで 2 遺跡として登録されており、総面積は 20,600m²ほどと推定される。調査対象区域は、町道部分を中心とした幅 50~60m、長さ約 250m、総面積 13,000m²の範囲であったが、その後、調査の進行に伴い、調査区をさらに西北西に拡大し、5,500m²を加えて総調査面積は結局 18,000m²となった。

ii 地区割測量 (第 1・2 図)

遺物の整理及び記録のため、調査対象区域に 3×3m のグリッドを単位とする平面直角座標を設定し、地区割を行なった。座標原点は東北縦貫自動車道予定中軸線上に設定した STA-22+60 (青森線安代分岐点から 2,260m、標高 328,061m) を用い、基準経線としては STA-22+60 と STA-21+96.7 を結ぶ直線の延長線を用いた。基準緯線は STA-22+60 に直交する直線である。座標北は真北から西へ 4°15' 振れている。

各経線には A~J、緯線には 0~9 の記号・数字を付し、その組合せを各グリッドの名称と



第 1 図 遺跡地区割模式図

し、さらに縦10行、横10列の大区画を設け、経線方向にA～X、緯線方向に0～Ⅸの記号・数字を付してブロック名とした。ブロック名とグリッド名の関係は、EⅢ-A9のように表記し、座標の原点がOⅥ-A0となるように調整した。

iii 遺構の名称

遺構名は遺構の所在するブロック名と遺構の種類と発見順を表わす数字を並列し、さらに個々の遺構の具体名を付して呼称している。2ブロックに及ぶ遺構については、その遺構の北西部に位置するブロック名を付すこととした。実際の表示では、EⅢ-011 住居跡、GⅢ-028 ビット等となるが、当初命名した遺構が別種の遺構となったり、遺構と認められなかった場合は欠番として省略している。

iv 掘削と遺構検出

掘削は現地確認のもとに、遺構の存在が期待できない一部の調査区域を除いて実施した。作業は遺構や遺物を損わないよう人力によることにしたが、表土層の深い部分や山林・荒地の表土除去のため機械力も援用した。機械による表土除去に際しては、あらかじめテストビットにより深度の調整を行なっているが、土層の判別がつかず掘り過ぎた部分もあった。

v 遺構の精査

検出した遺構の精査は、主として住居跡を4分法、ビットを2分法で行なっているが、状況に応じて他の方法も適用した。各遺構の埋土の状況は、観察結果を図にしたが、小さいビットについては図化を省略した。遺構中の遺物は確実に遺構に伴うものを重点的に記録し、埋土中の遺物は層別に記録し一括採集した。

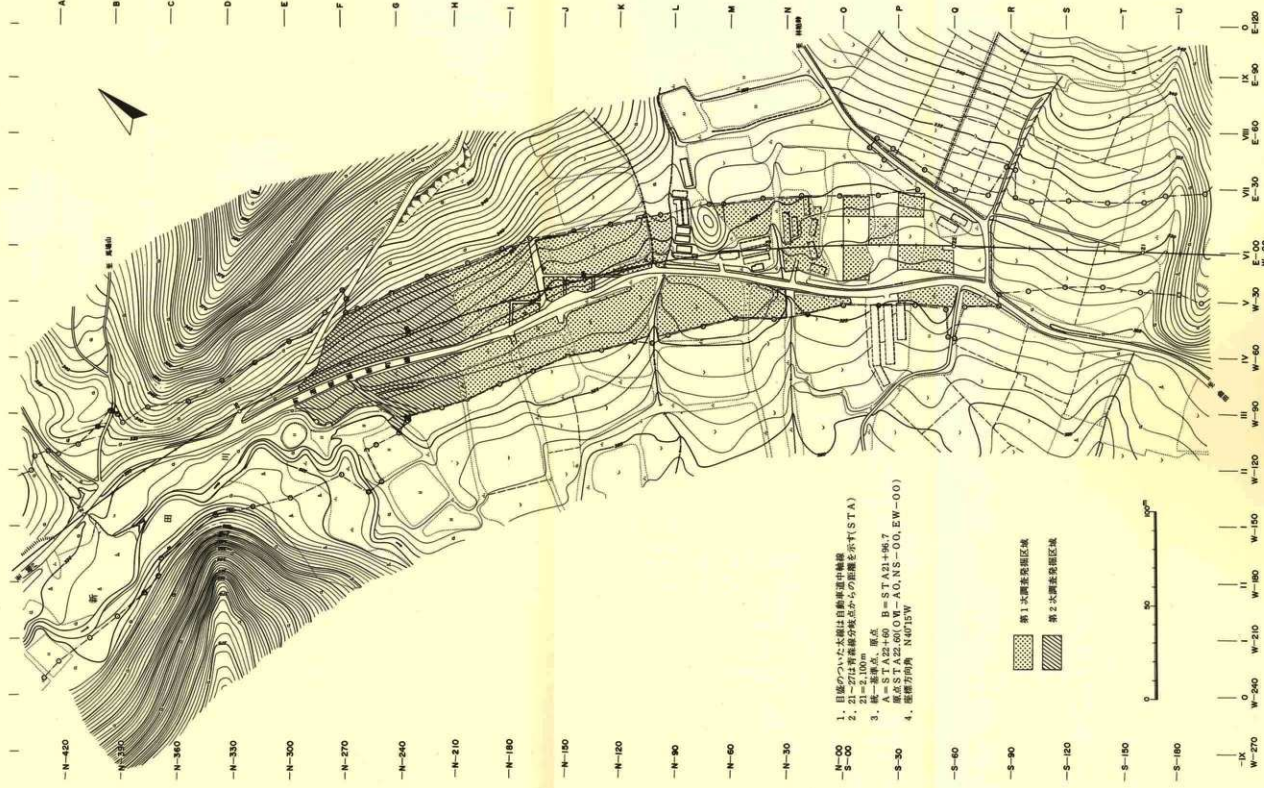
記録は主として実測図、36mmカラーズライド及びモノクローム、6×7cmモノクローム写真によったほか、一部はフィールドカード、フィールドノートに記録した。遺構の実測図作成にあたっては簡易遣り方測量を主に、一部平板測量を用いた。縮尺は通常20分の1としたが、遺構によって40分の1、100分の1とした。また、写真の撮影には、遺構名、撮影年月日、その他の状況を記した撮影カードを使用した。

vi 遺物と記録資料の整理

遺物の種類・大小・数量に応じて、大小のビニール袋、標本版、シャーレ、コンテナ等を使用し、遺構別、器種別に仮収納した。仮収納にあたっては、容器に遺跡名、遺構名またはグリッド名、出土層位、採集年月日を明記した。

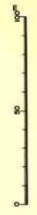
写真はアルバムやスライドファイルを用意し、遺構別、撮影時期別に分類して仮整理した。

なお、遺物については極力洗浄・注記を行ない、鉄器にはシリカゲルを封入し、炭化材には合成樹脂によって硬化処理を施した。



1. 目録のついた本圖は自動車道中線
2. 21-27は管線番号から距離を示す(STA)
21-2100m 原A
3. A=STA21+60 B=STA21+96.7
原B STA22.60(原-A.O.NS-O.O.EW-O.O)
4. 道路方向 N6°15'W

第1次調査地区
第2次調査地区



第2回 曲田I遺跡グリッド配置図

vii 普及活動

現地説明会を開催したほか、調査期間中を通じて視察・見学・取材等の関係者に対して協力した。

(2) 室内整理の方法

i 遺物の整理

遺物は遺構別に仮分類して洗浄—注記—接合、復元—登録—実測、計測—収納の順に行なったが、室内では注記の一部から整理をすゝめた。

注記は3×3cm以上の遺物を対象とし、それ以下のものは特殊な遺物を除いて省略した。特に必要あるものは小型容器に収納し、必要事項を明示することとした。注記した遺物は遺構別、グリッド別、器種別に台帳に登録した。

登録後の復元可能な遺物は接合し、石膏入れをして原形を修復した。原形の保存状態が良好なものを優先的に実施したが、文様や形態上重要な場合には一部分の修復も行なっている。

修復の不能な土器片は遺構別、器種別に分類し、文様・形態上特徴のあるものを拓本資料とし、他は一括収納した。

自然遺物についても台帳に登録し、分析・鑑定を依頼した。

ii 記録資料の整理

図面は種類別、遺構別にまとめ、整理番号を付して台帳に登録した。写真はアルバム別に目次、注記をつけて、索引を作成した。

iii 報告書の作成（第3図）

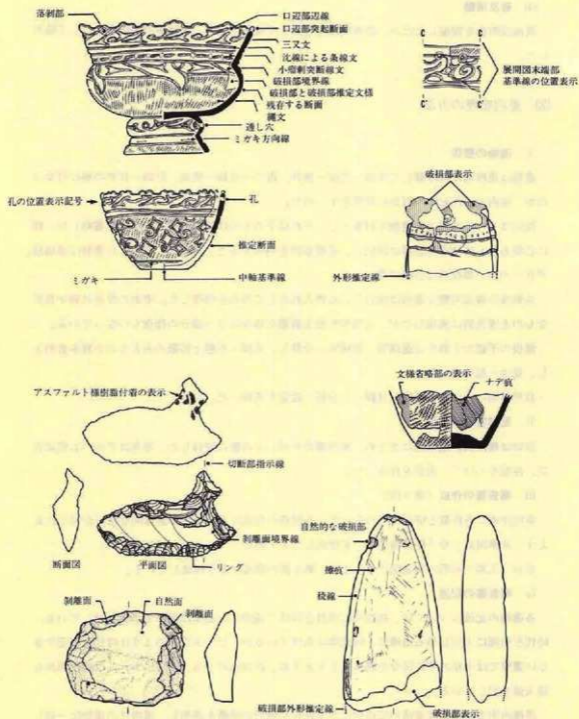
原稿作成は各作業と併行して行なった。各図表の作成にあたっては全体的な統一が保たれるよう「基準図式」や「作業指示書」を作成してすゝめた。

なお、土器・石器の実測図については、第3図の図式により作成している。

iv 報告書の記述

各遺構の記述については、類型別に項目を設けて説明し、必要に応じて小括を付している。時代を明確に大別し得る遺構は、時代順にあげているが、ビットなどのように時代を特定できない遺構では小括の中に区分を試みることにする。計測値のうち、深さについては検出面から最大値を記している。

遺構内出土の遺物は遺構の記述中に出土状況や個別の特徴を説明し、遺構外の遺物は一括している。個々の記述は最低限に留め、詳細な観察結果は別表にしている。



第3図 土器・石器の実測説明図

第2章 位置と環境

第1節 位置と地形

(1) 位置 (第4～7図)

曲田 I 遺跡は岩手県北西域の二戸郡安代町字曲田及び上の山地内に所在し、北緯40°06'45"、東経141°02'11"付近に位置している。馬場山南麓部に広がる遺跡から国鉄花輪線の荒屋新町駅までは南々東へ2.5km、奥羽山地の分水嶺までは西へ約4km、県都盛岡市までは南々東へ約46km離れている。

(2) 安代町付近の地形と地質 (第4～6図)

岩手県の北西端に位置する安代町は、東西約26km、南北約34km、総面積456.94km²に及ぶ。北は青森県三戸郡田子町と接し、西は秋田県鹿角市と境し、南は岩手郡岩手町、西根町、松尾村、東は二戸郡一戸町、浄法寺町とそれぞれ境を接している。^{注1}

東北地方を東西に二分する脊梁、奥羽山地の中にあり、町域の約9割は山地で占められている。最南端の八幡平(標高1613.6m)を最高として、源太森(1578.3m)、恵美須森(1496.0m)、安比岳(1493.0m)、大黒森(1446.0m)、前森山(1307.4m)、高倉山(1051.3m)、四角岳(1003.0m)、七時雨山(1060.0m)、田代山(954.0m)等を主峰とする標高400～1600m級の山嶺が多数連なっている。

これらの山嶺の一部は、八幡平～安比岳～桂久保山(902.5m)～野沢欠峠(792.0m)～野沢欠山(865.4m)～鍋越峠(710.0m)～比山(1037.8m)～高倉山(1051.3m)～大尺山(741.2m)～残欠山(651.0m)～梨木峠(476.0m)～貝梨峠(476.0m)～上の木山(768.5m)～大倉森(896.9m)～四角岳と結びながら、町域のほぼ中央を南北に蛇行してり、奥羽山地の主分水嶺を形成している。

安代町はこの分水嶺によって地形的に大きく東西に二分される。東の荒沢地区は、北東に流れる安比川本支流の流域となる。安代町南端部、秋田県境の黒谷地湿原に源を発する安比川は二戸郡一戸町鳥越付近で北流する馬淵川^{注2}と合流する、全長約52.8kmの小河川である。安比川水系の西側は、奥羽山地の分水嶺によって区切られるが、東南部は八幡平山頂付近から安比岳、茶臼岳(1578.3m)～恵美須森～大黒森～屋の棟岳(1397.4m)～前森山～細野原～大場谷地峠(500.0m)～竜ヶ森(679.1m)～深沢峠(540.0m)～御月山(954.4m)～高住山(620.0m)～七時雨山～田代平北(620.0m)～西岳(1018.1m)～高森高原(600～800m)と連なる分水嶺

によって北上川水系の谷と境される。この稜線がほゞ岩手郡と二戸郡を分ける郡境となっている。

安代町付近の安比川本支流水系は、前記の分水嶺に狭まれた地域の山地を開析して流れ、恵美須森と安比岳の間を縫って安比高原を開折した後、細野付近にや、広大な扇状地を形成する。^{注3}さらに、北西部を黒森山（972.0m）、大尺山、飲の山（635.9m）、馬場山（531.5m）、大平山（588.2m）、花小袖峰（513.1m）等の山塊に、南東部を深沢山（690.4m）、国樽山（580.0m）、神楽山（431.1m）、大代平山（549.3m）等の七時雨山系に狭まれた細長い谷を蛇行しながら北東に流れ、浄法寺町に達する。

一方、西の田山地区は秋田県北を西流し、日本海に注ぐ米代川水系の流域に属する。米代川は青森県田子町と安代町の境界付近の分水嶺に根石川として源を發し、長者前、栗木田を経て田山付近で大沢川、矢神川等を合わせ、合流点付近にや、広大な平坦地を發達させる。さらに瀬ノ沢川、相沢川、兄川などの諸河川を合流し、県境付近の地峡部を蛇行しながら西へ下る。

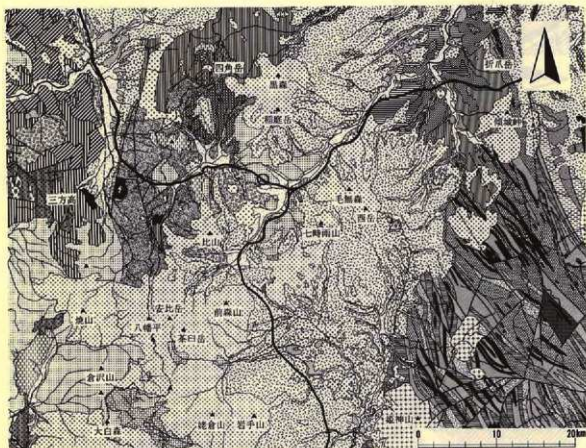
安比、米代川両水系を隔てる分水嶺の高度は、町城南半部の編越、野沢欠両峠付近及び北半部の貝梨、梨木両峠付近で著しく低下し、地形のなだらかな鞍部が形成されている。特に後者では標高450~480m未満となり、斜面の最大傾斜度は15~20°未満となる。この様な地形は、急峻な山列によって東西が大きく隔てられる奥羽山地の分水嶺付近の地形のあり方からすれば異例であり、東西を結ぶ回廊地形とみなすべき要素を多分にもっているといえよう。

このような鞍部地形は、安比、北上川両水系の境界にもみられ、稜線には西から大場谷地峠、深沢峠、車之走峠、田代平北などの峠が並び、一部は最大傾斜度15~20°未満の緩傾斜地になっている。これらの地点のいくつかは、安比川流域と平館盆地等の北上川流域を結ぶ山越えの交通路の通過場所になっている。

安代町一帯の地質はこれらの地形と無関係ではなく、かなり密接な関係によって成り立っている。安代町付近の山地は、一部に露出した古生代・中世代の基盤岩類を除いて、大部分が新生代第3紀中新世以降の比較的若い地質年代の堆積岩類や火山岩類で構成されている。^{注5}特に八幡平付近の山地や遺跡周辺及び七時雨山系では、ほとんど新生代第4紀更新世前期以降の安山岩、流紋岩、石英安山岩、その他の新期火山噴出物で構成されている。

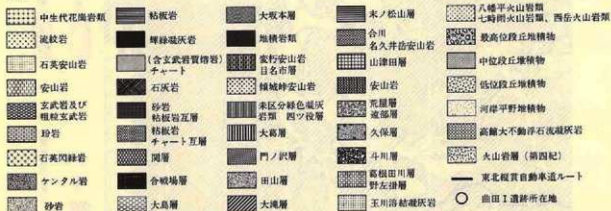
安山岩など比較的硬質の火山岩で構成されるところでは浸食が進まず、比較的高高度の急峻な地形をなしているが、軟質の凝灰岩やその他の新期堆積岩類の卓越する地域は浸食や崩落が進行し、各所に崖錐や丘陵状の緩斜地形が出現している。分水嶺中の各峠はその顕著な例といえよう。

安代町域全体に占める安比、米代川両水系の流域面積の割合は大凡1:1であるが、^{注6}両者ともそのほとんどが山地である。沖積平野や河岸段丘などの平坦地は両水系の本支流河谷部に発

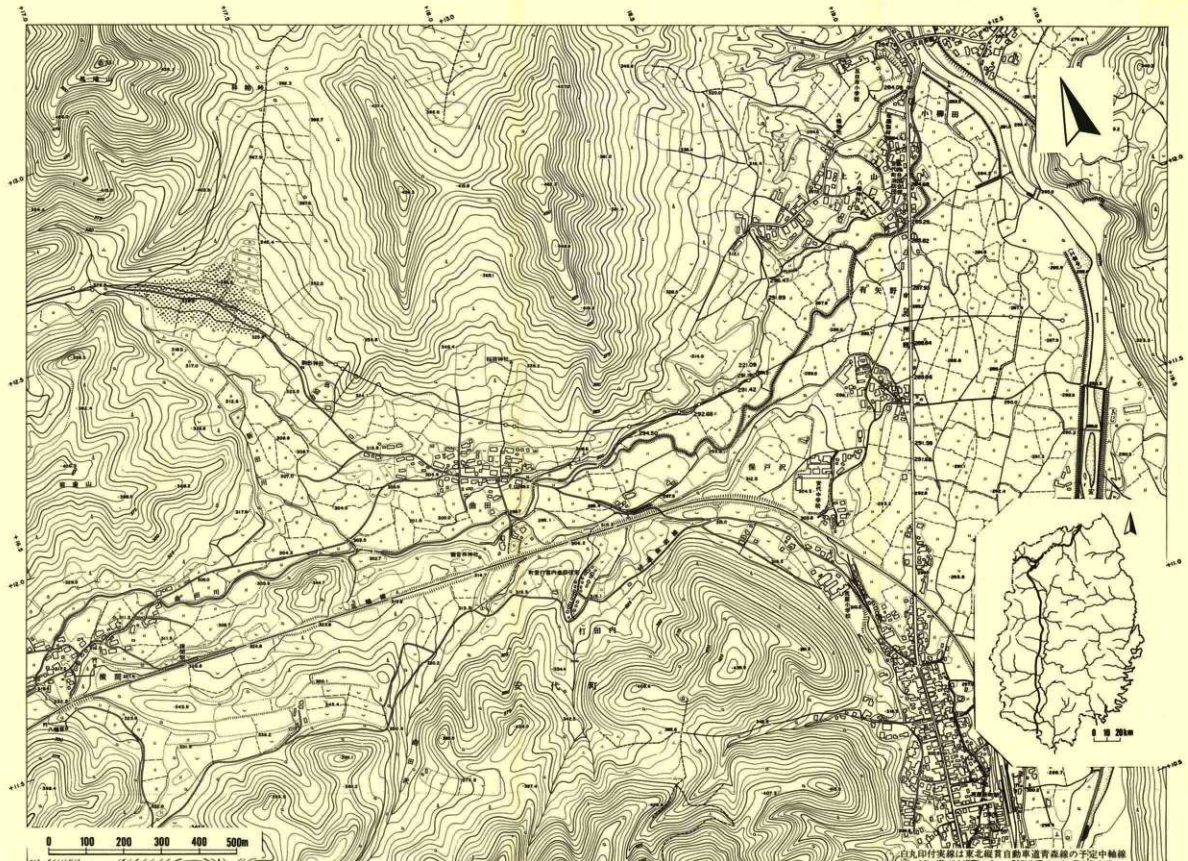


(出典小貫義男ほか、1981、「北上川流域地質図」及び「説明図」,一部加筆)

凡例



第6図 遺跡周辺の地質概念図



第7図 遺跡付近の詳細地形図

達しているが、いずれも狭小である。特に安代町付近で、少なくとも上・下2段に区分される河岸段丘の発達は貧弱で狭く連続性に乏しい。

このような中で米代川流域の田山、折壁付近、安比川流域の細野～豊畑付近、赤坂田～扇畑付近、荒屋新町～五日市付近、浅沢付近にや、広大な平野地形の発達がみられる。これらの平坦地は標高300m前後を中心に240～450mの高度域に広がっており、居住人口の大半がこの地域に集中している。

(3) 遺跡付近の地形と現状 (第4～7図 写真図版1)

遺跡の周囲には奥羽山地の分水嶺に連なる馬場山、上の山、岩倉山などの低い山地が続いている。これらの山地は主に石英安山岩によって構成されており、その一部は遺跡の北面にせり出した馬場山の尾根南壁の崖面にもみることができる。さらにこの付近には、山地の裾を被うように新生代第3紀鮮新世の浮石質凝灰岩を主体とする荒屋層が、河岸段丘や沖積平野の基盤層として広がっている。

遺跡は馬場山と上の山を結ぶ稜線の南面にあり、荒屋層を被って形成された小規模な崖錐性扇状地の扇端部西辺に立地している。すぐ北側には馬場山の山頂から延びる尾根が比高20～60mの断崖及び急斜面となって迫り、南側には安比川の支流曲田川に注ぐ新田川が遺跡西方の梨木峠付近の水を集めて北西から南西に向かって流れている。遺跡のある扇状地縁辺部は南向きの緩斜面となって新田川の沖積面に移行しているが、上流部に面した部分では比高2～3mの段丘崖が形成されている。また、遺跡の中央部には残丘状に露出した荒屋層の一部がみられる。

遺跡付近の高度は標高325～340mであり、南向き緩斜面の大部分が畑地として利用されている。一部には整地された水田や農作業用施設があり、西辺部には山林や荒地がみられる。地形の原状は全体に良好に保たれているが、遺跡の中央部には町道が敷設され、主要遺構の密集する西辺地区が開田工事によって削平されている。

注1. 安代町役場 「安代町20周年記念誌 あしろ」 1976

2. 岩手郡葛巻町の東辺城、袖山南面に源を発して岩手県北部を貫流し、青森県八戸市で太平洋に注ぐ岩手県北部最大の河川。全長 142km、うち岩手県域流路85.1km、流域総面積 2,050km²。

3. 岩手県歴史文化財センター 「上の山遺跡発掘調査報告書」 1983

4. 秋田県北の鹿角、大館、鷹巣の各盆地を経て、能代市で日本海に注ぐ。全長 136kmの秋田県第2の長流。岩手県域の流路距離12.8km、流域総面積 4,100km²。

5. 小貫義男ほか 「北上川流域地質図」及び「説明書」 長谷地質調査所 1981

八幡文夫ほか 「二戸の地学」 二戸地学研究会 1979

6. 地域開発コンサルタント 「土地分類基本調査 荒屋」 岩手県総務部 1975

同 「土地分類基本調査 花輪、田山」 岩手県農政部 1981

7. 現地ではこの崖を「イワクラ」と呼んでいるが、引用した図にはその位置が示されていない。

第2節 気候と動植物相

(1) 気候 (第8図)

岩手県の年間平均気温は最も暖かい南部海岸地域で11°前後、北部海岸～南部山間地や北上川流域で10～11℃、最も低い北上山地北西～中西部の奥中山、蔵川、門馬周辺及び奥羽山地の和賀岳～八幡平周辺で7～8℃を示す。遺跡のある安代町では荒屋新町で9.2℃であり、年間平均気温10～20℃のいわゆる温帯よりやや、冷涼な冷温帯の気候域に属している。

安代町の最暖月8月の平均気温は28.3℃、最寒月の2月は-7.9℃である。年間降水量は1,295mmと県内では少ない方である。降水量は3～5月に少なく、7～9月に多くなる傾向がみられる。一般的な特徴として、暑い夏は短かく冬が長い。

最高気温30℃を越える真夏日はほとんどなく、10月中旬には初霜がある。積雪の期間は例年12月下旬から3ヵ月半続き、桜の開花時期は5月上旬であり、県南地域より半月程遅い。晩霜は5月中旬まで降り、早春と晩秋にしばしば西から突風が吹き荒れる。全体に遺跡付近の現在の気候は、やや冷涼な内陸高地型の温帯性気候であるといえる。

(2) 動植物相

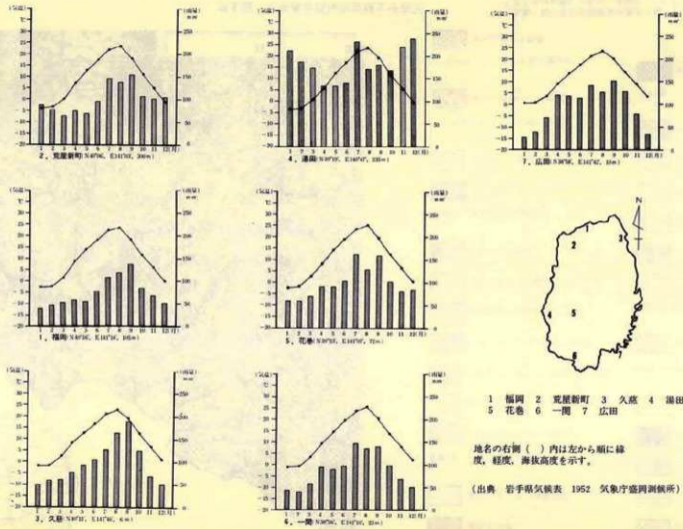
i 植物相 (第9図)

遺跡付近の気候はやや、冷涼な温帯性の気候区分に属するが、周囲の気候山地は高度によって異なり、冷温帯から亜寒帯へと著しい変化がみられる。このような気候条件は、植生にも大きな影響を与えている。

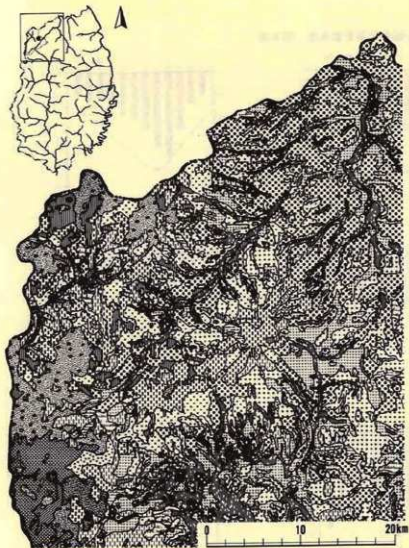
安代町を含む岩手県北西部の山地では、牧野の造成や植林などの山地利用が行なわれ、植生は人工的に著しく改変されている。そのため旧来の自然植生をみることは難しいが、各所に残る自然植生をもとにこの地域の自然植生を復元的にみることは十分可能である。

安代町南西部の八幡平周辺(標高800～1600m)は亜寒帯、亜高山性の植生域である。最高部周辺ではアオモリトドマツ群落が卓越し、やや、高度が下がるとアオモリトドマツとコマツガやブナを主体とする群落やダケカンバ群落が広がり、一部にミヤマハンノキやチシマザサの群落がみられる。

さらに高度の低い亜高山・冷温帯性の植生域(標高400～800m)では極生相であるチシマザサ・ブナの群落が一部にみられるが、周囲には二次植生のブナ・ミズナラ群落やクリ・ミズナラ群落が広く分布する。これより低い所では、同じ二次植生のアカマツ群落やススキ群落も形成されている。



第8図 岩手県各地の年間平均降水量及び気温



- | | | | | | |
|--------------|-----------------|-----------|-----------------|----------------|-----------|
| 寒帯 高山帯自然植生 | 高山帯自然植生 | 高山低木林 | 高山ハイエ及び風衝草原 | ミズナラーカシワーコナラ群落 | クリーミズナラ群落 |
| 至寒帯 至高山帯自然植生 | アオモリトドマツ群落 | コメツグ群落 | アオモリトドマツコメツグ群落 | ススキ群落 | シバ群落 |
| アオモリトドマツブナ群落 | ダケカンバ群落 | ミヤマハンノキ群落 | チシマザサ群落 | 伐採跡地群落 | アカマツ群落 |
| 至寒帯 至高山帯代償植生 | ササ群落 | ダケカンバ群落 | ミズナラーブナクラス域自然植生 | ヤブツバキクラス域代償植生 | コナラ群落 |
| チシマザサブナ群団 | ミズナラーブナクラス域代償植生 | ブナミズナラ群落 | 植林地 耕作地(各クラス共通) | アカマツ植林 | スギ・ヒノキ植林 |
| | | | カラヅツ植林 | 畑地 | 牧草地 |
| | | | 水田 | その他 | 市街地 |

第9図 岩手県北西城現生植生分布図

(出典 岩手県自然環境保全調査会編
岩手県現存植生分布図 環境庁 1975)

遺跡の属する低山・温-冷温帯性の植生域（標高300~400m）になるとヤブツバキ-コナラ群落の自然植生が一般的であるが、原生状態を留める植生はほとんど存在せず、多くはクリの混在するコナラ群落となっている。

低地・温帯性のヤブツバキ植生域（標高240~300m）では耕地化が進行しており、ほとんど人為的な改変の影響をうけているといえる。代表的な植生としては二次林を代表するコナラ群落があげられるが、クリを混えることが多い。

このほか、亜高山・亜寒帯性植生域を除く各植生域には人工的な改変地がみられ、アカマツ、スギ、ヒノキなどの植林地や牧草地、ススキ群落となっている。また、ヤブツバキ域を中心に河川流域には水田があり、ブナ帯の下部に及んでいる。

安代町付近では比較的狭い地域に多くの気候域と植生域が集中しており、一帯に存在する植物の多様性が何われ、同時に食料や工芸材料となる各種の植物資源の存在することが予想される。

ii 動物相

植物相の多様な分布は、この地域の野生動物の分布にも深い影響があると考えられる。安代町付近に生息する動物の分布調査や生態調査に関する資料は乏しいが、多種の動物が生息しているようである。遺跡の調査中に観察したものを含めて列記すると以下のとおりである。

- 哺乳類 ツキノワグマ、アナグマ、カモシカ、キツネ、タヌキ、イタチ、テン、ノウサギ、ヤマネ、モグラ、ハタネズミ、リス、シカ
- 両生類 トノサマガエル、ガマガエル、アオガエル、サンショウウオほか
- 爬虫類 トカゲ、ヤマカガシ、シマヘビ、アオダイショウ、マムシ
- 鳥類 ハシブトガラス、スズメ、カワセミ、セグロセキレイ、ヤマバト、キジ、ヤマドリ、ウグイス、トビほか
- 魚類 カジカ、ウグイ、ヤマメ、イワナ、ドジョウ、ウナギ、マス、タナゴ、ニジマス
- 貝類 カタツムリ、タニシ
- 環形動物 ミミズなど
- 昆虫類 バック、エゾハルゼミ、テントウムシ、カブトムシ、カメムシ、ハエ、ブヨ、アブ、アシナガバチ、スズメバチ、カ、チョウ、ガ、オニヤンマ、トンボ、コオロギ、カマキリ、アリほか
- その他 ゲニ、クモ、ヤスデほか

人間生活に関わりをもつ動物は、狩猟の対象とされるツキノワグマ、カモシカ、シカ、キツネ、タヌキ、ウサギなどのや、大型~中型の哺乳類と漁撈の対象となる各種の魚類であろう。哺乳類のうち、シカは近世の中頃まで生息していたようである。また、キツネ、タヌキはかなり多く生息しており、カモシカも増加しているらしい。

魚類ではイワナの生息する川が多く、下流ではカジカやヤマメが生息しているが魚影が薄くなったといわれている。曲田川や新田川にはウナギもいたといわれるが、現在はみることができない。

注1. 気象庁盛岡測所 「岩手県気候表」 1952

2. 工藤敏雄 「変化に富む気候」 『新岩手風土記』 創土社 1980

3. 岩手県自然環境調査会 「岩手県現存植生図」 環境庁 1975

4. 岡野廣穂博士が 「豊かな動物群」 『新岩手風土記』 創土社 1980

5. 菅江真澄の「けふのせはの、」に曲田付近の山中で鹿の声を聞いたという記事がある。南部農書刊行会「南部農書」第6冊所収 1926（原本は天明5—1785年発行）

第3節 周辺の遺跡（第10回）

遺跡の所在する安代町は奥羽山地最奥都という地理的制約にもかかわらず、北上川、馬淵川、米代川の各河川流域を結ぶ中間に位置しているため、古くから交通上の要衝として機能していたものと思われ^{注1}。

安代町内には縄文時代早期以降近世までの137遺跡が知られて^{注2}いる。その大部分は縄文時代の遺跡であり、127遺跡を数える。弥生時代以降の遺跡は著しく少なく、弥生時代4、奈良～平安時代13、鎌倉～安土桃山時代19、江戸時代10遺跡である。これらの遺跡はほとんど沖積平野を囲む周辺の河岸段丘や山麓の緩斜面縁辺部に立地している。

縄文時代の遺跡には、安比川上流域における複合拠点集落跡と予想される有矢野遺跡、集落跡と多数のフラスコビット群の発見された後～晩期の赤坂田Ⅰ・Ⅱ遺跡^{注4}、大型住居跡や台地縁辺に陥し穴状遺構の発見された中期の荒屋Ⅱ遺跡^{注5}、沢沿いに小集落跡の発見された中期の湯ノ沢Ⅰ遺跡^{注6}、台地の縁辺部や山麓斜面上に集落跡の発見された後期の扇畑Ⅱ遺跡^{注7}、中期の越戸Ⅱ遺跡^{注8}、上の山館跡などの代表的な遺跡が含まれている。

弥生時代の遺跡の確認された例は少ないが、上の山Ⅱ・Ⅲ遺跡^{注10}からは土器が多数発見されたほか、管玉などがかつて採集されたといわれている。奈良～平安時代の遺跡としては、平安時代中期の保土沢遺跡^{注11}、上の山Ⅶ遺跡^{注12}、扇畑Ⅰ・Ⅱ遺跡^{注13}などの集落跡があるが、愛の山遺跡、戸沢Ⅰ遺跡などには奈良時代の集落が存在する可能性もある。

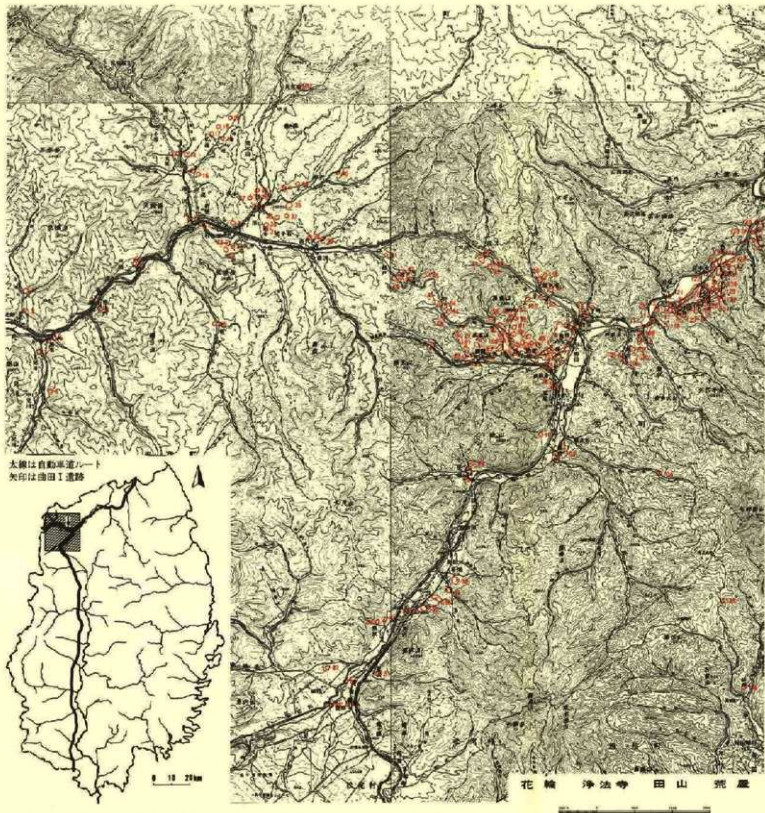
鎌倉～安土桃山時代の遺跡は、ほとんど館跡である。田山城跡（沢口館跡）、五日市館跡、北の城跡などはこの地域の代表する館跡として知られている。発掘調査された上の山館では、薬研状の空堀や窪穴住居跡が発見されている。近世以降の遺跡には、苗代沢や瀬戸谷地の竈跡、旧鹿角街道の一里塚、曲田の経塚などがある。

137遺跡のうち、発掘調査された遺跡は15ヵ所と少なく、実態の不明な遺跡が多い。発掘調査されたうちの15遺跡は昭和49年以降の東北縦貫自動車道の建設に伴い緊急調査されたが、安代町付近の原始古代を中心とする各時代の様子も次第に明らかになってきたといえる。

周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	種 別	所 属 時 期	番号	遺跡名	種 別	所 属 時 期
1	大又沢口	散布地	縄文時代	38	菅代沢一里塚	一里塚	近 世
2	兄 畑	〃	〃	39	菅代沢窯跡	窯 跡	〃
3	アダラ	〃	〃	40	杉 沢	散布地・館跡	縄文時代・中世
4	館 市	〃	〃	41	越戸館	館 跡	中 世
5	館市館	居館跡	中 世	42	越戸II	集落跡	縄文時代中期末
6	兄 川	散布地	縄文時代	43	越戸I	散布地	縄文時代
7	中ノ平	〃	〃	44	越戸田	〃	縄文時代
8	佐比内	〃	〃	45	曲田Ⅴ	〃	縄文時代後～晩期
9	戸領I	〃	〃	46	戸沢Ⅳ	〃	縄文時代
10	戸領II	〃	〃	47	戸沢Ⅲ	〃	〃
11	二 子	〃	縄文時代後～晩期	48	戸沢I	〃	縄文時代晩期・古代
12	田山番所跡	番所跡	近 世	49	戸沢II	〃	縄文時代中～晩期
13	小 原	散布地	縄文時代	50	目名市	〃	縄文時代後期
14	比路平I	〃	〃	51	目名市館	館 跡	中 世
15	焼 屋 敷	〃	縄文時代前期	52	五日市館	〃	〃
16	日 泥 館	館跡・散布地	縄文時代	53	有矢野館	散布地・館跡	縄文時代中～ 後期・中世
17	比路平II	散布地	〃	54	曲田Ⅳ	散布地	縄文時代中期
18	切通長志田	〃	〃	55	曲田一里塚	一里塚	近 世
19	勝曹川原	〃	〃	56	上の上Ⅳ	散布地	縄文時代前～晩期 弥生時代早期
20	大ブナ沢	〃	〃	57	上の上I	〃	弥生時代中期
21	愛 の 山	〃	古代中～後期	58	上の上Ⅲ	集落跡	縄文時代後～晩期 弥生時代中期
22	矢 神 II	〃	縄文時代後期	59	上の上II	散布地	縄文時代 弥生時代後期
23	矢 神 I	〃	古 代	60	曲 田 I	〃	縄文時代
24	矢 神 III	〃	縄文時代後期	61	上の上Ⅳ	〃	縄文時代中期
25	相 沢	〃	縄文時代	62	曲田経塚II	経 塚	近 世
26	安保館跡	〃	縄文時代・古代	63	曲田経塚I	〃	〃
27	沢 口	〃	〃	64	曲 田 II	散布地	縄文時代
28	沢口館I	散布地・館跡	縄文時代・古代・中世	65	曲 田 III	〃	〃
29	沢口館II	集落跡	〃	66	上の上Ⅴ	集落跡	縄文時代・古代後期
30	丑 山	散布地	縄文時代	67	上の上Ⅵ	散布地	縄文時代
31	殿坂経塚	経 塚	近 世	68	上の上Ⅶ	〃	縄文時代中～後期 古代後期
32	長者前	散布地	縄文時代	69	上の上Ⅷ	〃	縄文時代中～後期 古代後期
33	馬揚沢II	〃	縄文時代後～晩期	70	上の上Ⅷ	〃	縄文時代中～後期
34	馬揚沢I	〃	〃	71	上の上Ⅷ	集落跡・館跡	縄文時代中期・ 古代後期
35	大沢田II	散布地	縄文時代	72	上の上Ⅹ	散布地	縄文時代中～後期 古代後期
36	大沢田I	〃	古 代	73	保土坂	〃	古 代
37	花 館	館跡・散布地	縄文時代・中世	74	有矢野	集落跡・キャンプ	縄文時代早～晩期 古代

番号	遺跡名	種別	所属時期	番号	遺跡名	種別	所属時期
75	保土坂	集落跡・キャンプ	縄文時代・古代	114	山口	散布地	縄文時代
76	荒屋一里塚	一里塚	近世	115	日影 I	#	#
77	荒屋館	散布地	縄文時代・古代・中世	116	八幡館跡	館跡	縄文時代前～中期
78	曲田Ⅴ	集落跡	縄文時代	117	石神Ⅱ	散布地	縄文時代
79	曲田Ⅳ	散布地	#	118	石神Ⅳ	#	縄文時代後～晩期
80	曲田Ⅲ	#	#	119	石神Ⅲ	#	縄文時代前期
81	曲田Ⅱ	#	#	120	石神Ⅴ	#	縄文時代後～晩期
82	曲田Ⅰ	#	#	121	石神Ⅰ	集落跡	縄文時代前期末
83	ヤカマシダ	#	縄文時代晩期?	122	北ノ城	館跡	縄文時代・中世
84	横間合	#	縄文時代前～中期	123	古屋敷	散布地	古代
85	横間Ⅱ	#	縄文時代	124	間沢口	集落跡	縄文時代中～晩期
86	横間Ⅰ	#	#	125	山ノ神	#	縄文時代後～晩期
87	細野	集落跡	縄文時代後期	126	中佐井Ⅳ	#	縄文時代中～晩期
88	豊畑Ⅰ	散布地	縄文時代中期～ 後期初	127	中佐井Ⅰ	#	縄文時代後～晩期
89	豊畑Ⅱ	キャンプ	縄文時代後期	128	中佐井Ⅱ	#	#
90	豊畑Ⅲ	#	縄文時代	129	中佐井Ⅲ	#	縄文時代中～晩期
91	星沢Ⅳ	#	縄文時代中期	130	山岸Ⅰ	散布地	縄文時代後～晩期
92	星沢Ⅲ	#	縄文時代	131	中佐井Ⅴ	#	縄文時代
93	星沢Ⅱ	#	#	132	山岸Ⅱ	集落跡	縄文時代晩期
94	赤坂田Ⅱ	集落跡	縄文時代後期 古代後期	133	下の田	散布地	縄文時代後期
95	寄木Ⅱ	散布地	縄文時代中期末	134	下の田館跡	館跡	縄文時代後～晩期 中世
96	寄木Ⅰ	キャンプ	縄文時代	135	土沢Ⅲ	散布地	縄文時代後～晩期
97	扇畑Ⅱ	散布地	#	136	土沢Ⅱ	#	#
98	扇畑Ⅰ	キャンプ・集落跡	縄文時代後期 古代後期	137	水神	集落跡	縄文時代後期
99	小屋畑	散布地	縄文時代前～中期 中世	138	土沢Ⅰ	散布地	縄文時代後～晩期
100	小屋畑館	館跡	#	139	門崎	#	縄文時代
101	瀬戸谷地蔵跡	窟跡	近世	140	下藤Ⅰ	#	縄文時代後～晩期
102	荒屋Ⅱ	散布地	縄文時代前～中期	141	下藤Ⅱ	#	縄文時代
103	荒屋Ⅰ	#	縄文時代前～中期 中世	142	下藤館	館跡	#
104	七時崎一里塚	一里塚	近世	143	下藤Ⅲ	散布地	縄文時代後～晩期
105	湯の沢Ⅰ	集落跡	縄文時代中～晩期	144	上杉沢	#	縄文時代晩期
106	湯の沢Ⅱ	#	縄文時代中～後期	145	—	—	—
107	湯の沢Ⅲ	#	縄文時代中～晩期	146	白坂観音堂跡	寺院跡	古代末
108	湯の沢Ⅳ	散布地	縄文時代	147	梨木崎南東墓	集落跡	縄文時代・晩期
109	日影Ⅱ	#	#	148	一里塚跡	一里塚	近世
110	粟沢Ⅱ	#	#	149	横間夷	散布地	縄文時代
111	日影Ⅰ	#	#	150	横間東	#	縄文時代・前後時期 平安時代
112	兼沢Ⅰ	#	縄文時代中期	151	林柏峠北	#	縄文時代・後期
113	岩屋	#	縄文時代	152	田ノ沢Ⅱ	#	#



岩手県教育委員会発行「遺跡高平図」1980年度版のうち「Ⅱ」に第1次調査時の見知調査成果を加えて作成。

第10図 周辺の遺跡分布図

- 注1. 板橋 源 「流霞道考」『奥羽史談』第46号 1961
2. 岩手県教育委員会 「岩手県遺跡分布地図」 1973
同 「岩手県遺跡基本図」 1979 ほかに現地踏査資料による。
3. 岩手県埋蔵文化財センター 「有矢野遺跡・上の山Ⅹ遺跡発掘調査報告書」 1982
4. 同 「赤坂田Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 1983
5. 同 「東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告(安代町荒屋Ⅰ遺跡・荒屋Ⅱ遺跡・越戸Ⅱ遺跡)」 1982
6. 岩手県埋蔵文化財センターが1983年に発掘調査を行った。
7. 岩手県埋蔵文化財センター 「東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 二戸郡安代町厨畑Ⅰ遺跡」
1981
同 「厨畑Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 1982
8. 注5 参照
9. 岩手県埋蔵文化財センター 「上の山館跡発掘調査報告書」 1982
10. 注3 参照
11. 安代町教育委員会 「保土沢遺跡発掘調査報告書」 1976
12. 岩手県埋蔵文化財センター 「上の山Ⅷ遺跡発掘調査報告書」 1983
13. 注7 参照
14. 江上波夫ほか 「館址—東北地方における集落址の研究—」 東京大学東洋文化研究所 1958

第3章 調査の成果

第1節 基本層序(第11図 付図1~2)

遺跡周辺の山地は主として石英安山岩によって構成されており、その周囲に新生代第3紀鮮新世の浮石質凝灰岩及び凝灰質泥岩からなる荒屋層が分布している。

遺跡付近では周囲の山地から流出堆積した崖錐性堆積物が荒屋層を被い、その上に何層かの火山灰土壌が堆積している。場所によって多少の相異があるが、層序が比較的明瞭なJVI区のトレンチによって遺跡の土層堆積状況を見ることにする。

JVI区の層序は別図のとおりであり、上層1~6の順に堆積する土層のうち、人為的な遺物が含まれている層は1~3層である。4層以下には遺物の存在は認められない。

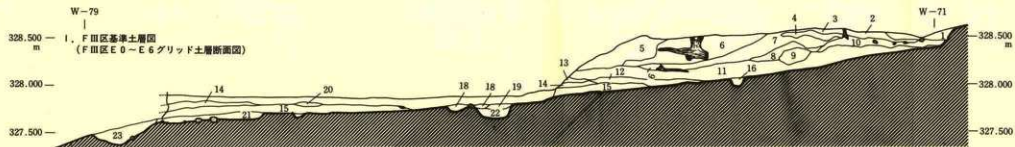
1層は表土層である。JVI区付近では単層で畑地の耕作土になっているが、山林や草地では上下に分かれ、最上層がいわゆる草つきの層である。

2層は耕作土層ではないが、土性や土色に多少ムラがある。層中では遺構の存在を明確に認めることはできなかったが、縄文時代~弥生時代の遺物が多く含まれており、この時期の生活面が存在するものと思われる。遺物は弥生時代のものがや、上から出土するようであるが、明瞭に区分できなかった。

1層と2層の間には、沢沿いの低地を中心に、しばしば厚さ5cm前後の黄白色火山灰層が確認される。従来の十和田B火山灰層に相当するものと考えられ、縄文時代晩期の遺構の埋土上層中にも含まれる例がある。

3層は2~4層の漸移層である。一部に人工遺物の含まれている部分もあるが、遺物の量は少ない。遺構の検出は主としてこの層の中~下部から4層上面で行なわれている。

4~5層は無遺物層であるが、各遺構の基底をなす層である。4~5層は浮石粒を含むほぼ同色の堆積層であり、層を構成する土性の違いにより区分されるものである。4層はかなり固く締っているが、同種の層は周辺の上の山Ⅹ、上の山Ⅹ、荒屋Ⅱ、越戸Ⅱなどの遺跡にもみられ、八戸火山灰層やその風化層と思われる。5層は流水によって堆積した層と思われ、雨天時には滞水がある。6層は崖錐性の泥流堆積物と思われ、付近の山地から流出した石英安山岩の垂角礫を多く含む。調査区西北部ではさらに細分され、その上位部分では一部に浮石質凝灰岩塊を含んでいる。また、EⅢ~HⅣ区の一部では4~5層が非常に薄くなり、6層が3層の直下に露出している。このほか、調査区東部のLⅥ区付近では、さらに下層の浮石質凝灰岩が小山となって地表に露出しているのが観察される。



F 田区 基準土層注記 (1)

層番号	色調	土性	土のしまり・結り・混入物・その他	層厚(m)	備考
1	黒褐色 10Y R 半	粘土	非常に強い	0.1内外	礫土
2	黒褐色 10Y R 半	粘土	赤褐色・褐色土を含む	0.05内外	礫土
3	黒褐色 10Y R 半	粘土	木屑を含む	0.04内外	礫土
4	黒褐色 10Y R 半	赤褐色土を多く含む		0.05内外	礫土
5	黒褐色 10Y R 半	砂質シルト	腐植質を含む	0.25内外	礫土
6	黒褐色 10Y R 半	粘土	木屑を含む	0.25内外	礫土
7	黒褐色 10Y R 半	礫土	緑褐色・褐色土を含む	0.25内外	礫土
8	黒 10Y R 半	砂	赤褐色土を含む	0.15内外	礫土
9	黒 10Y R 半	砂	②より少し褐色が強い	0.15内外	礫土

層番号	色調	土性	土のしまり・結り・混入物・その他	層厚(m)	備考
10	黒褐色 10Y R 半	砂質シルト	強く木屑を含む	0.10内外	田道礫土
11	黒 10Y R 半	アロポダ質シルト	やや赤み・水色を含む	0.17内外	田道礫土
12	黒 黒褐色 10Y R 半	砂質シルト	②よりほんの少し赤い土を含む	0.20内外	田道礫土
13	黒 10Y R 半	細いシルト	強い	0.04内外	田道礫土
14	黒褐色 10Y R 半	砂	やや赤みを含む	0.05内外	田道礫土
15	黒褐色 10Y R 半	礫土	①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺	0.09内外	田道礫土
16	黒 10Y R 半	アロポダ質シルト	①とほとんど同じ	0.09内外	田道礫土
17	黒褐色 10Y R 半	砂質シルト	腐植質を含む	0.13内外	田道礫土
18	黒褐色 10Y R 半	粘りあり	大きい石が1つ	0.07内外	田道礫土

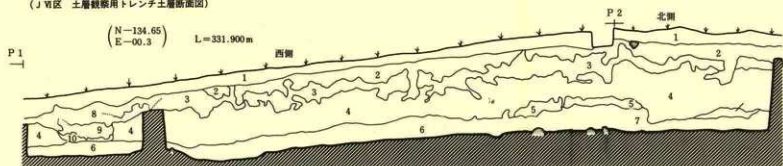
H 田区 深掘り土層注記

1. 明 黒 10Y R 半 礫土+粘土質シルト、粘り混入
2. 明 黒 10Y R 半 砂質シルト、強い
3. 明 黒 10Y R 半 砂質シルト、強い
4. 純黄褐色 10Y R 半 礫石を含む 砂質シルト
5. 明 黒 10Y R 半 粘土質シルト
6. 純黄褐色 7.5Y R 半 粘土質シルト、強い
7. 純黄褐色 10Y R 半 シルト、粘土少し含む
8. 純黄褐色 10Y R 半 シルト、粘土少し含む
9. 純黄褐色 10Y R 半 粘土、腐植質を含む
10. 純黄褐色 10Y R 半 粘土質シルト、腐植質を含む

E 田区 深掘り土層注記

1. 黒 10Y R 半 礫石を含む 砂質シルト
2. 黒 10Y R 半 砂質シルト
3. 黒 10Y R 半 砂質シルト、少くも赤みを含む
4. 黒 10Y R 半 砂質シルト、強い
5. 黄 黒 10Y R 半 粘土質シルト
6. 純黄褐色 粘土質シルト
7. 純黄褐色 シルト質粘土、粘り混入
8. 純黄褐色 砂質シルト

2. J 田区 基準土層図 (J 田区 土層観察用トレンチ土層断面図)



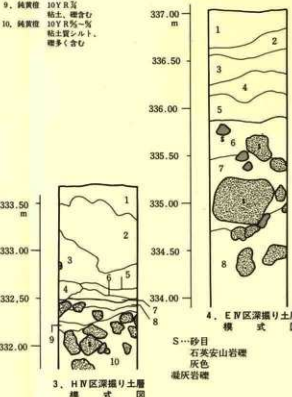
J 田区 基準土層注記

層番号	色調	土性	土のしまり・結り・混入物・その他	層厚(m)	備考
1	黒 10Y R 半	シルト質粘土	赤褐色・粘土質シルト	0.15内外	粘り土
2	黒 10Y R 半	砂	1.5よりやや粗く少し赤みを含む	0.15-0.2	田道礫土層 2-4の礫層
3	黒-黒褐色 10Y R 半	2.4の混合土	強くしまっていて粘りはほとんどない	0.1-0.2	な-い土層
4	黄 黒 10Y R 半	砂質シルト	強くしまっていて粘りはほとんどない	0.4-0.5	風化の進んだ浮石層か
5	黄 黒 7.5Y R 半	砂質粘土	少し赤みを含む	0.2-0.3	水色粘り層か
6	明黄褐色 10Y R 半	腐植質粘り土	強くしまっている。Sとの間に赤褐色鉄やマンガンが見られる	不明	下部にいくほど粘りがよくなる

F 田区 基準土層注記 (2)

層番号	色調	土性	土のしまり・結り・混入物・その他	層厚(m)	備考
19	暗褐色 10Y R 半	粘土	木屑混入層	0.05内外	
20	暗褐色 10Y R 半	粘土	やや赤い粘り層あり、赤褐色土に多い	0.05内外	
21	黒褐色 10Y R 半	砂質シルト	F田-014腐植質土	0.05内外	
22	黒 10Y R 半	粘土	ビツト粘土	0.05内外	
23	黒 10Y R 半	砂質シルト	水濁り層	0.05内外	

第11図 遺跡の基準土層図



3. H 田区 深掘り土層 横式図

第2節 発見された遺構と遺物

(1) 概要

二次にわたる発掘調査の結果、縄文時代前期以降の多数の遺構が発見された。その概要は下記のとおりである。

縄文時代の住居跡	69	歴史時代の竪穴住居跡状遺構 1	埋葬遺構 3
縄文時代の掘立柱建物跡	3	歴史時代の掘立柱建物跡 5	石囲い炉 1
縄文時代その他のピット	156		
フラスコ型ピット		摺鉢型ピット	
円型皿型ピット (大)		円型皿型ピット (小)	
楕円・不整楕円・隅丸ピット		不整形ピット	
方型舟底型ピット		柱穴状ピット	2,500
縄文時代の集石遺構	3	縄文時代の捨て場跡	4
縄文時代その他の焼土遺構	12	歴史時代の溝跡	4
歴史時代の道路跡	3	歴史時代の製炭場跡	1

このほか、縄文時代の遺構に関連した自然地形の跡として、埋没谷2と雨裂跡1が発見されている。

遺構の内外から出土した遺物は、縄文時代の土器・石器を中心に多数出土している。内容は下記のとおりである。

縄文時代・弥生時代の土器	89,000点
" 石器・石片	} 2,075点
" 石製品	
" 土製品	
歴史時代の須恵器・陶器	3点
" 石器・石製品	3点
" 鉄製品	5点
" 骨片	1点

(2) 縄文時代及び弥生時代の住居跡と掘立柱建物跡

E II-011 住居跡 (第12・13図 第1・3表 写真図版14・81)

〔位置〕 調査区西辺部の河岸段丘崖辺に位置している。

〔検出面〕 F III区基準土層第3層相当層の下部。床面は石英安山岩の亜角礫を混える砂礫層。

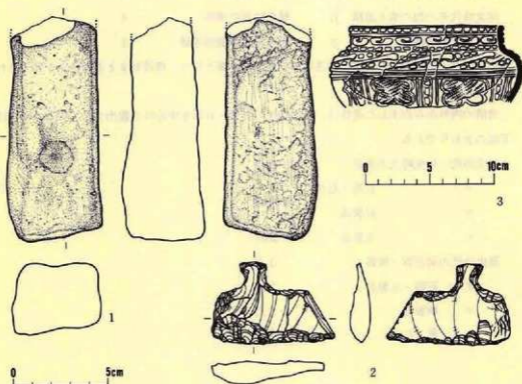
〔保存状況〕 南西部は黒色土層が深く、形状は不明瞭である。

〔重複〕 E II-014住居跡と重複、前後関係は不明である。

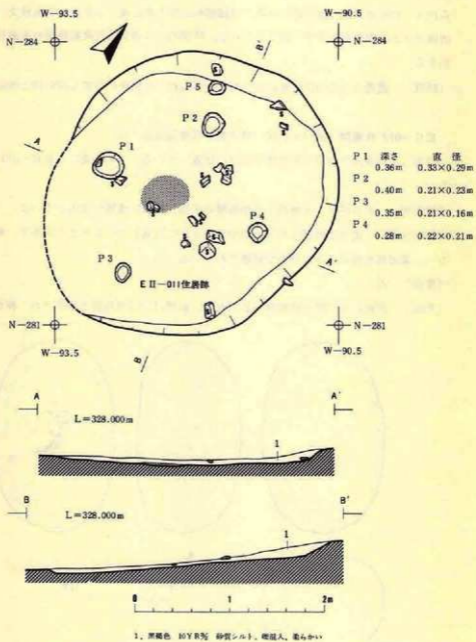
〔形状〕 南北方向にや、長い不整形の縦穴住居跡。直径は南北 3.1m、東西 2.9m、検出面からの深さは最大 0.2m、床面はかなり強い南下がりになっている。

〔内部施設〕 柱穴は5基である。そのうち、床の中心を囲むように四角形をなす4基が上層構造に関連した支柱穴と思われる。柱穴の埋土は住居跡床面の埋土と同様の黒褐色土である。

炉跡は床の中央部に直径0.4×0.5mの地床炉が1基ある。



第12図 E II-011 住居跡出土遺物



第13図 E II-011住居跡平・断面図

〔埋土〕 砂礫混りの黒褐色土1層だけが確認されている。

〔遺物〕 埋土中から1～3の遺物が出土している。1は四角柱状をなす石英安山岩の亜角礫の凹み石であり、1面に凹みがみられる。2はつまみ付きの横型石匙である。3は埋土下部から出土した広口の直口壺と思われる。口縁部から胴上部に横C字形文、羊歯状文、胴下部に磨消縄文による四つ葉彩文等が施されている。時期的には縄文時代晩期前葉の大洞B-C式に相当する。

〔時期〕 遺物3はこの住居跡に伴うものとみられ、住居跡の時期も同時期と推定される。

E II-012 住居跡 (第14・15図 第3表 写真図版15・81)

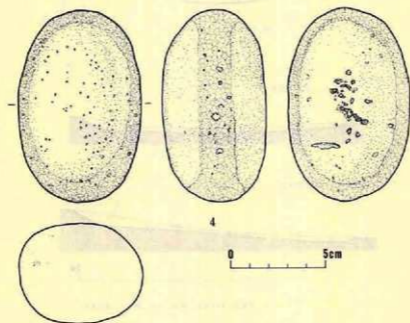
〔位置〕 調査区西辺部の河岸段丘崖辺に位置している。すぐ北東にはE II-011 住居跡がある。

〔検出面〕 F III区基準土層第3層相当層の下部。床面に礫層が露出している。

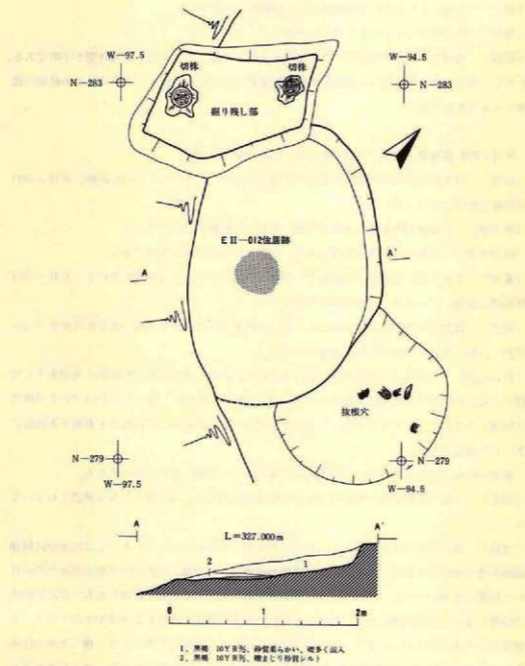
〔保存状況〕 遺構南西部は黒色土層が深いうえに崩落しているところがあり、形状は明確でない。東辺部も抜根により壁面が破壊されている。

〔重複〕 なし。

〔形状〕 円形に近い竪穴住居跡と思われる。直径は3.2m程度と推定され、検出面からの深



第14図 E II-012 住居跡出土遺物



第15図 E II-012住居跡平・断面図

さは最大 0.2mである。床面は崖側にやや傾斜している。

〔内部施設〕 床の中央部付近に直径0.45×0.45mの地床炉が1基ある。

〔埋土〕 2層からなるが、自然堆積に近い様相を示している。

〔遺物〕 埋土中から4に示した擦石1点が出土している。

〔時期〕 遺構中からは時期決定できる遺物が出土しておらず、正確な所属時期が不明である。しかし、検出段階に周辺部から縄文時代晩期前葉の土器片が多く出土しており、この時期の遺構である可能性が強い。

E II-013 住居跡 (第16・17図 第2表 写真図版15・81)

〔位置〕 調査区西辺部の河岸段丘崖辺に位置しており、E II-011~014住居跡、E III-011住居跡が周囲にまわっている。

〔検出面〕 F III区基準土層第3層の下部。床面には礫層が露出している。

〔保存状況〕 遺構全体が浅い位置にあり、明確な形状や規模は不明である。

〔重複〕 E II-011住居跡と近接しているが、重複はしていないと推定される。E II-014住居跡と重複しているが、前後関係は不明である。

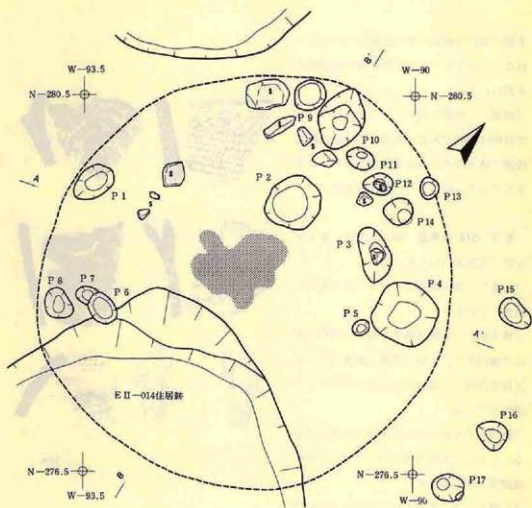
〔形状〕 詳細な形状や規模は不明であるが、炉跡を囲む柱配置や床面の深さから直径6.0mほどの円形に近い形の竪穴柱居跡と推定される。

〔内部施設〕 柱居跡とその周辺部に16に及ぶ柱穴がある。埋土は竪穴住居跡の床面直上と同様である。柱居跡に直接関連する柱穴はP₁~P₁₆までが予想され、特にP₁~P₇までが上層構造に関連した支柱穴として有力である。また支柱穴の一部はE II-014住居跡と重複する部分であったと推定される。

床面の中央部には不整形をした地床炉が一基があり、直径0.93×0.96mである。

〔埋土〕 上層の土層を剥いだ段階で床面が検出されたため、埋土層の状況は確認されていない。

〔遺物〕 埋土中及び床上面から5~10に示す土器や石器が出土している。5は胎土中に植物繊維を含む深鉢型土器片である。胴部に単節の斜縄文、口辺部に横方向に不整の捻糸文状の狭い文様帯が取巻いている。文様的には東北地方南部の大木1式などに類例をもち、前期最初頭に位置しよう。6は内脣した口辺部のまわりに隆線と列点文の施される深鉢型土器であり、中期後葉の大木10式に相当しよう。7は筒状突起からなる波状縁の土器であり、横行沈線で区画された縦方向の刻線文様帯を持つ。関東地方の安行3a式、宮城県で宮戸Ⅲa式と称されるものの中に類例がみられ、後期後葉に位置付けられよう。8は口辺部に三叉状沈線を有し、晩期前葉の大洞B式に相当する。9は上端に歯列文をもち、下部に雲形文の施される朱塗りの壺型



序号	直径	深度	口径	口径	深度	口径	口径
P1	0.34m	0.45	0.30m				
P2	0.36m	0.57	0.55m				
P3	0.27m	0.57	0.31m				
P4	0.49m	0.70	0.69m				
P5	0.17m	0.18	0.15m				
P6	0.20m	0.25	0.24m				
P7	0.10m	0.30	0.28m				
P8	0.23m	0.35	0.26m				
P9	0.22m	0.35	0.32m				
P10	0.54m	0.70	0.46m				
P11	0.25m	0.30	0.21m				
P12	0.43m	0.32	0.23m				
P13	0.18m	0.23	0.20m				
P14	0.21m	0.31	0.28m				
P15	0.27m	0.38	0.34m				
P16	0.22m	0.31	0.27m				
P17	0.19m	0.31	0.30m				

第16图 E II-013住居跡平·断面图

土器の破片で晩期中葉の大河C₃式に比定される。10は小型でや、肉厚細身の石楯破片と思われる。

〔時期〕 時期を特定できる遺物がないので詳細は不明である。付近からは検出作業段階で縄文時代晩期前葉の遺物が多く採集されており、同時期の可能性がある。

E II-014 住居跡 (第18~21図 第1・3表 写真図版14・81~83)

〔位置〕 調査区西辺部の河岸段丘崖辺に位置している。

〔検出面〕 F III区基準土層第15層相当の部で検出され、床面に礫層が露出している。

〔保存状況〕 南辺部は崖面の崩落により消失している。

〔重複〕 E II-013 住居跡と重複している。しかし、土層堆積関係が不明のため前後関係は明らかでない。

〔形状〕 や、不整な円形の竪穴住居跡である。南北4.00m、東西4.10m、検出面からの深さ0.44mとみられ、床面はや、西下がりである。

〔内部施設〕 柱穴は床の中央部を囲むように5基検出されている。上屋構造に関連した支柱穴と思われる。柱穴埋土は床の埋土と同様の黒褐色土で柔らかい。

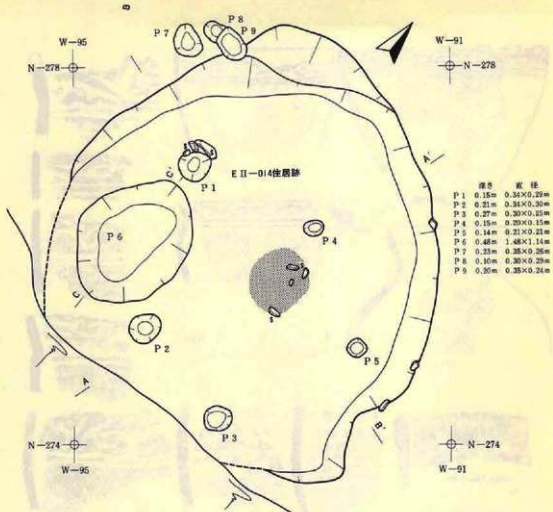
炉跡は不整円形の地床炉が1基、床中央部のや、東寄りに設けられている。南北0.58m、東西0.62mである。

そのほか、東西1.15m、南北1.47m、床面からの深さ0.42mの不整楕円形のピットが西辺部に発見されている。埋土の層位関係が確認されていないので付属遺構とみなすことができないが、別遺構とする積極的な根拠もない。埋土は柱穴や床面の埋土と同様の黒褐色土で砂礫が多く含まれている。遺物は出土していない。

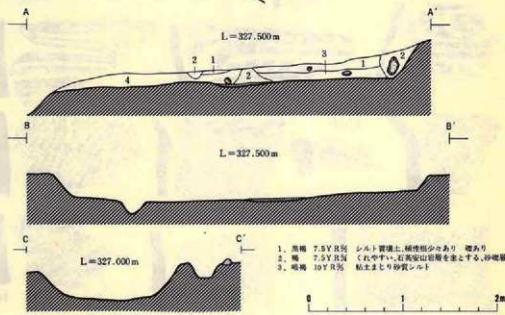
〔埋土〕 7層からなるが、埋土断面には別遺構の重複を思わせるような堆積状況がみられる。



第17図 E II-013 住居跡出土遺物

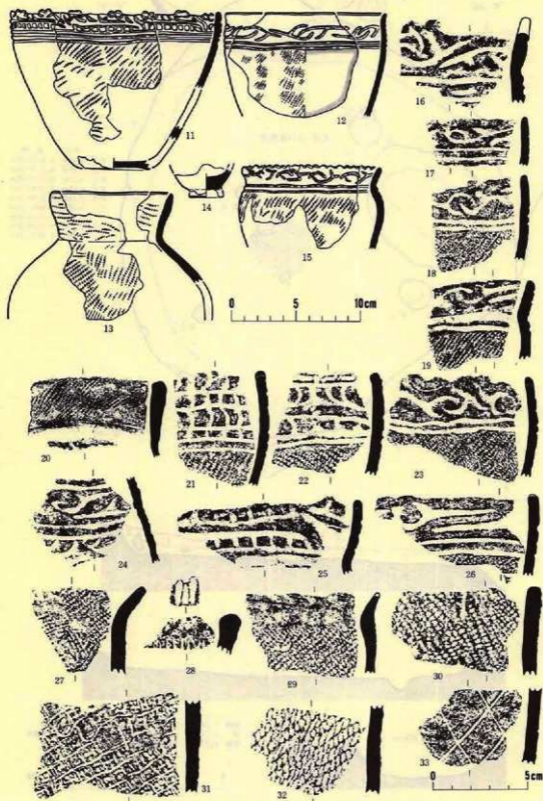


深さ	直径
P 1	0.15m 0.34×0.29m
P 2	0.21m 0.34×0.30m
P 3	0.27m 0.30×0.25m
P 4	0.15m 0.20×0.15m
P 5	0.14m 0.21×0.21m
P 6	0.48m 1.48×1.14m
P 7	0.23m 0.35×0.26m
P 8	0.16m 0.30×0.29m
P 9	0.20m 0.35×0.24m

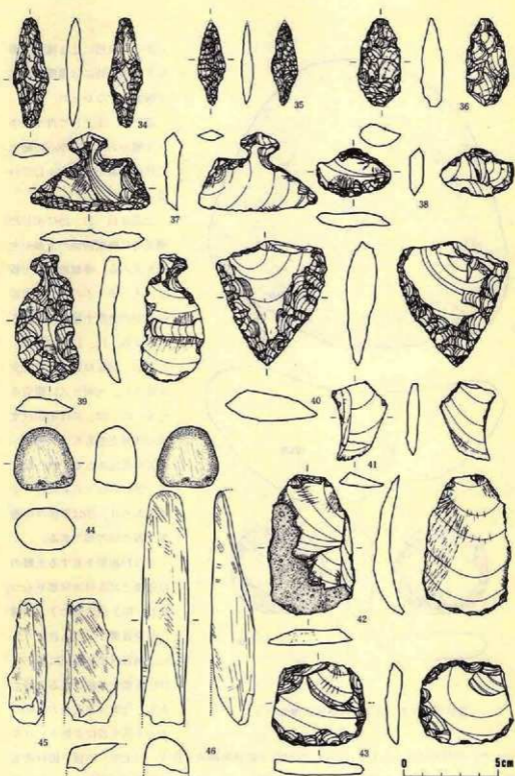


1. 黒褐色 7.5Y R 5/シルト質壤土、硬塊相少あり 礫あり
2. 黒 7.5Y B 3/（れやすい、右裏山石層を主とする、砂礫層
3. 暗褐色 10Y R 5/粘土まじり砂質シルト

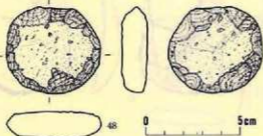
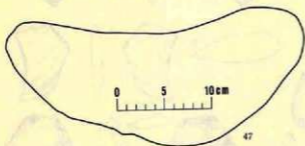
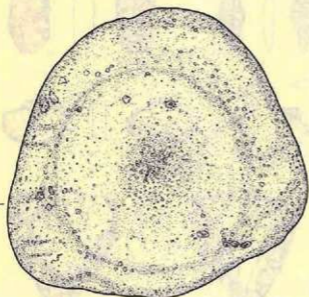
第18図 E II-014住居跡平・断面図



第19圖 E II—014住居跡出土遺物 (1)



第20图 E II-014住居跡出土遺物(2)



第21図 E II-014住居跡出土遺物(3)

といわれ、時期的に近いかもしれない。32は胎土に植物繊維を含み、右上がりの複雑斜縄文の施された土器である。前期前葉に入るものと思われる。33は格子目状の沈線をもつ土器である。同様の文様は後期中～後葉にかけてみられるが、本例は後期後葉のものかもしれない。

しかし、抜根による擾乱が著しく、調査時には遺構の存在が確認できなかった。

〔遺物〕 主として埋土の中～上層から土器を中心に縄文時代の遺物が多数出土している。

土器は11～27、29に示した縄文時代晩期前葉の土器が主体を占める。晩期前葉の土器は、大・中・小の深鉢型土器や小型の壺型土器がみられる。このうち、12、13、17～19、23、24、26は口辺部に三叉文が施され、大洞B式に同定される。21、22、25は羊歯状文風の沈線文をもち、大洞B-C式に比定される。14、20、27、29、30はこれらに伴う土器であろう。20は朱塗りの壺型土器の口辺部である。

28は刻線帯を有する土器の口辺部で刻み付波頂部をもつ。E II-013 住居跡の7と同様に後期後葉に入れられよう。31は網目状摺糸文風にみえる付加条縄文の施される土器である。類例は東北地方南部の大木3式土器に少数みられる

石器は15点がある。34は有茎の石鏃に似ているが、全体に厚みがあり石錐であろう。35は有茎の打製石鏃である。36は肉厚巾広の石槍状の石器であるが、半製品かもしれない。37-40、43は切削器である。37、39はつまみ付きの石匙である。41、42は使用痕と思われる小さい剥離痕をもつ剥片である。44、45は磨製石斧の頭部破片であり、44は擦石に転用されている。46は無彫刻の小型石棒の頭部破片である。47は安山岩製の大振りな石皿で扁平な自然礫の片面を利用している。48は完形の円板状石製品である。

〔時期〕 床面直上から出土した土器がないので断定できないが、埋土出土の土器の大部分が縄文晩期前葉の土器で占められていることからほぼこの時期に属すると思われる。

E II-015 住居跡 (第22・23図 第1・3表 写真図版15・83)

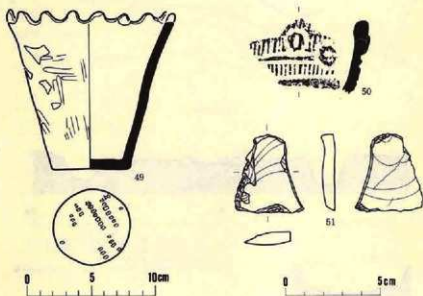
〔位置〕 調査区西辺部崖下に位置している。E II-014 住居跡のすぐ東側にあたり、北側にはE III-011 住居跡がある。

〔検出面〕 F III区基準土層第3層の相当する下部から検出され、床面に礫層が露出する。

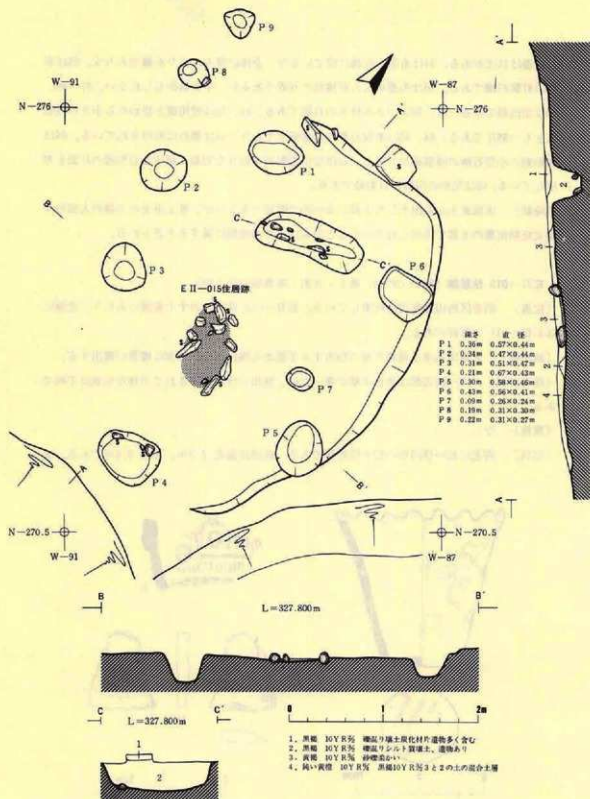
〔保存状況〕 南-西辺部は黒色土層が深いため、検出に伴い削平されて明確な形状は不明である。

〔重複〕 なし。

〔形状〕 南北に長い楕円形の竪穴柱居跡である。直径は南北 4.3m、東西 3.4mである。床



第22図 E II-015 住居跡出土遺物



第23図 E II-015住居跡平・断面図

面はほぼ平らであるが、南の部分がやや低い。

〔内部施設〕 柱穴のうち、P₁～P₅が上屋構造に関連した主柱穴と思われる。いずれも壁際に位置しており、規模も比較的大きい。各柱穴の柱部分では柔らかい黒褐色土である。

炉跡は床面中央部の南寄りに位置する。直径0.6～1.0mほどの石囲炉であるが、木根貫入により形が崩れている。

床面北側には東西に細長い楕円形のピットがある。埋土は床面北側の第1層と同様である。東西0.9m、南北0.4m、床面から0.3mの深さである。埋土から住居跡に伴う遺構と推定されるが、性格は不明である。遺物は出土していない。

〔埋土〕 床面を被う埋土は4層からなるが、自然堆積の様相を示している。

〔遺物〕 床面中央部から49～51の遺物が出土している。49、50はEⅡ-013住居跡の7と同じ後期後葉の土器である。49は無文の小型深鉢形土器で細かな波状口縁を有し、底部にはわずかに網代底を残す。51はつまみのない切削器と思われる破片である。

〔時期〕 床面に出土した土器から縄文時代後期後葉と推定される。

EⅢ-011 住居跡 (第24～56図 第1・3表 写真図版16～19・84～107)

〔位置〕 調査区西辺部崖辺のやや北側山寄りに位置する。すぐ南側にはEⅡ-011～015住居跡が崖沿いに並んでいる。

〔検出面〕 FⅢ区基本土層第3層相当層の中～下部で検出され、床面に礎層が露出している。

〔保存状況〕 南辺部の一部は黒色土層が深く、検出時に削平され消失している。

〔重複〕 柱穴数からみて同一平面の中に2期の建替えがあるかもしれない。しかし、土層や遺物の出土状況からは、重複遺構の存在は確認されていない。南東壁隅にのみ縄文時代後期前葉のEⅢ-021ピットが重複している。

〔形状〕 隅丸六角形状の竪穴住居跡であり、東西6.2m、南北6.0m、検出面からの深さ0.44mである。

〔内部施設〕 柱穴その他のピットは16基がある。埋土はほとんど住居跡の床面直上と同様である。このうち、上屋構造に関連する主柱穴と思われるものは六角形状に配置されるP₁、P₂、P₃またはP₇、P₄、P₃、P₅の組かP₈またはP₅、P₁₀、P₁₃、P₁₅、P₆、P₁₇の組が考えられる。

床面の焼けた部分は各所にみられるが、炉跡の可能性をもつ焼土は床面中央部の南西寄りやや北西寄りのものである。前者は直径0.5×0.6m、後者は0.3×0.3mほどの不整形円形をなし、地床炉と思われる。しかし、床の中央部周辺には最大0.40m未満の焼けた石英安山岩の重角礫が散乱しており、石囲炉であった可能性も否定できない。

〔埋土〕 5層からなり、自然堆積の様相を示している。特に埋土上層には十和田a火山灰に

類似する黄灰白色火山灰の薄層がみられ、新しい時期になって完没した様子が伺える。

〔遺物〕 埋土中の主として第2層から石英安山岩の礫塊とともに多数出土し、土器及び石器の総数は11,300点ほどである。縄文時代晩期前葉の土器が多く、床中央部に捨てられたように密塞地積していたものである。

土器の大部分は破片であるが、完形品は3点である。大・中・小の鉢型土器をはじめ、台付土器、注口土器、浅鉢型土器、皿型土器、壺形土器など多器種があり、朱塗り土器もみられる。ほとんど縄文時代晩期前葉の土器で占められるが、前期前葉、中期後葉、後期中～後葉の土器細片が少量混入している。

これらの土器には、無文の壺形土器や椀型土器を除いてすべて文様が施されている。地文の場合、55のようにL < $\frac{R}{2}$ の原体を横～斜方向に回転施文した右上がりの単節斜縄文が一般的であるが、53のようなR < $\frac{L}{2}$ 、52のようなL < $\frac{R}{2}$ 、143のようなR < $\frac{L}{2}$ 、149のように右上がり斜縄文に付加条を伴う原体などを回転施文した例や86のように縄文が縦になる原体を回転させるもの、66のように摺り方向の異なる原体が横方向に交互に回転施文した羽状縄文が含まれる。

地文以外に口辺部を中心に施される文様では、61、191、192のような刺突列点を伴う横線文または微波状線文、55のような横長の刺突列点文、60、61のように横線や列点文を伴う三叉文53、54のような半歯状文、59のような歯列文、110のような類半歯状文、128のようなX字状文、145のような原始的な半歯状文、156のような横S字状文、194のような縦S字状文、195のような玉抱き三叉文状の文様、217にみられる半円状文や尾付きの菱形状文などがある。

これらのうち、横線文や微波状線文、横長刺突列点文を伴う土器の詳細な時期は不明であるが、晩期前葉の早い時期に入ると思われる。三叉状文をもつ土器は、晩期前葉の早い段階にあたる大洞B式に入れられる。縦横のS字状文のある土器もS字状文が三叉文の一変形とみられるところから、ほぼ同時期に入れられよう。X字状文は三叉文や歯列文と併用される例があり、大洞B式ないしB—C式に相当しよう。玉抱き三叉文状の文様は晩期前葉の初期に盛行することが知られており、三叉文盛行期の土器を大洞B₂式とし、それより先行するこの種の土器を大洞B₁式とする考えも出されている。

半歯状文や歯列文、類半歯状文の施される土器は従来晩期前葉の遅い段階の大洞B—C式に入れられており、原始的な半歯状文も同時期とみられる。半円状文や尾付きの菱形文は217のようにこれらの文様のみ施される場合もあるが、214、232、237などのように半歯状文や三叉文の施される土器の体部文様として併用されることがある。

このほか、大洞B、B—Cの両型式の過渡的な文様構成の土器が出土している。176、193では棘のついた三叉文が交互に連結し、半歯状文に類似した文様を構成している。208では同一個体のうえに三叉文と半歯状文が併用され、この種の文様は306にもみられる。

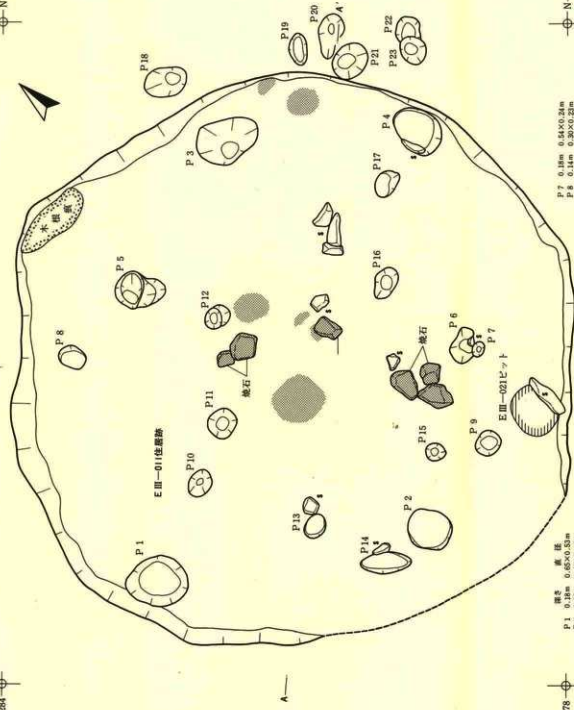
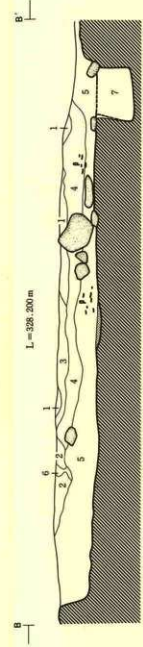
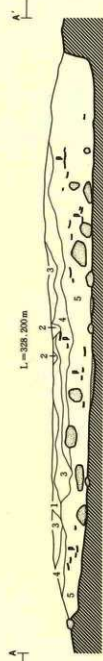


表 1

坑名	径	深
P1	0.33m	0.650-0.83m
P2	0.33m	0.650-0.83m
P3	0.33m	0.650-0.83m
P4	0.33m	0.650-0.83m
P5	0.33m	0.650-0.83m
P6	0.33m	0.650-0.83m

表 2

坑名	径	深
P7	0.33m	0.650-0.83m
P8	0.33m	0.650-0.83m
P9	0.33m	0.650-0.83m
P10	0.33m	0.650-0.83m
P11	0.33m	0.650-0.83m
P12	0.33m	0.650-0.83m
P13	0.33m	0.650-0.83m
P14	0.33m	0.650-0.83m

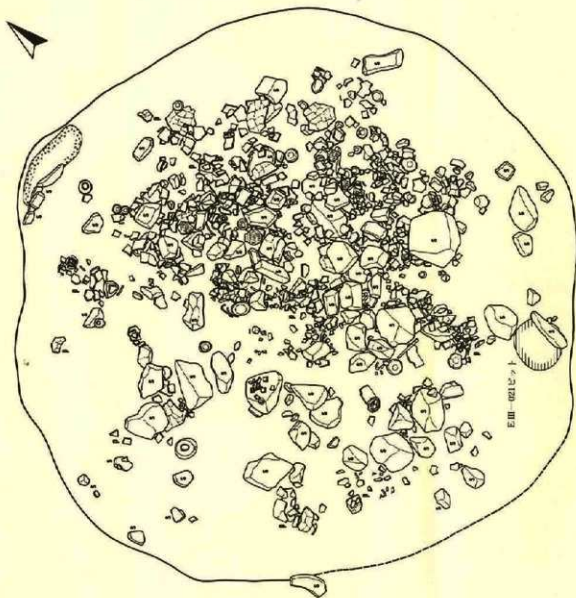


1. 土層 1973年、N 層面掘削、砂礫層、小石層、硬質土
 2. 土層 1973年、N 層面掘削、砂礫層、小石層、硬質土
 3. 土層 1973年、N 層面掘削、砂礫層、小石層、硬質土
 4. 土層 1973年、N 層面掘削、砂礫層、小石層、硬質土
 5. 土層 1973年、N 層面掘削、砂礫層、小石層、硬質土
 6. 土層 1973年、N 層面掘削、砂礫層、小石層、硬質土
 7. 土層 1973年、N 層面掘削、砂礫層、小石層、硬質土

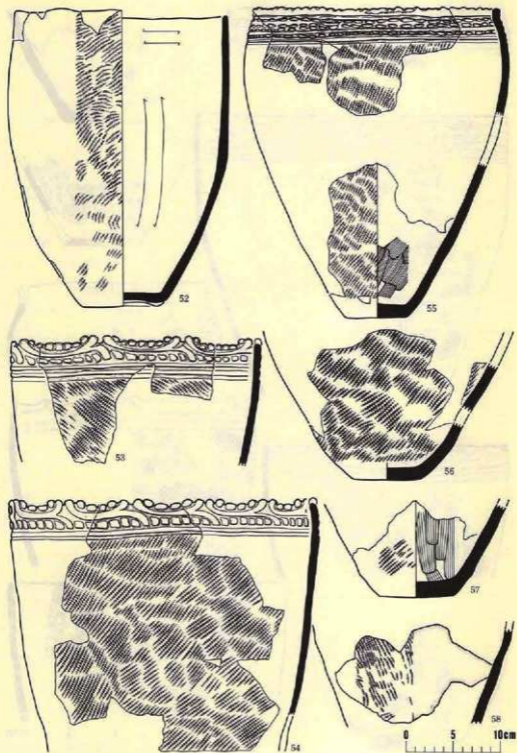
表 3

坑名	径	深
P15	0.33m	0.650-0.83m
P16	0.33m	0.650-0.83m
P17	0.33m	0.650-0.83m
P18	0.33m	0.650-0.83m
P19	0.33m	0.650-0.83m
P20	0.33m	0.650-0.83m
P21	0.33m	0.650-0.83m
P22	0.33m	0.650-0.83m

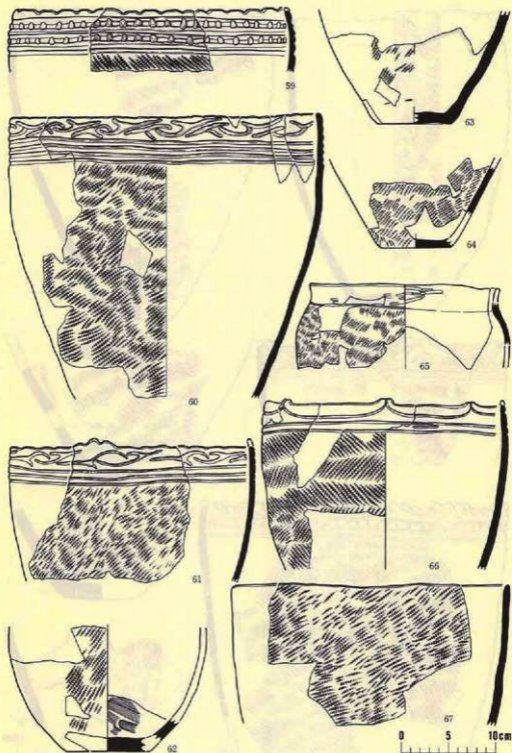
第24図 E III-011住居跡平・断面図



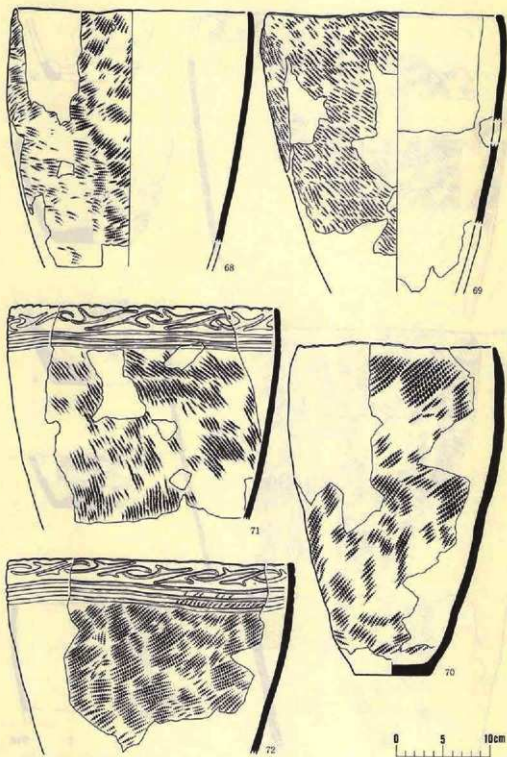
第25図 E III-011(住居跡)遺物出土状況平面図



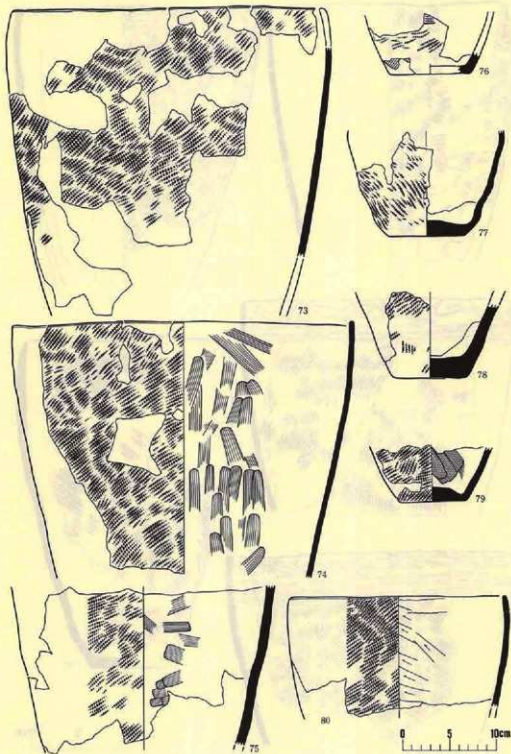
第26圖 E III-011住居跡出土遺物(1)



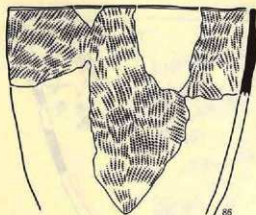
第27图 E III-011住居跡出土遺物(2)



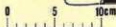
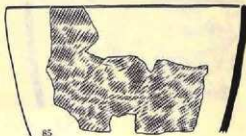
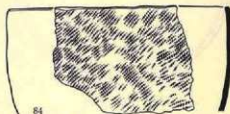
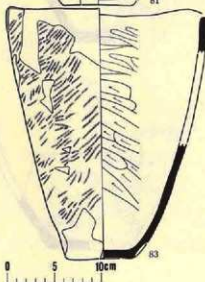
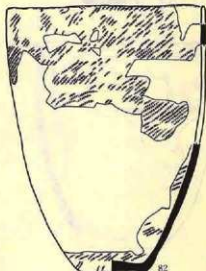
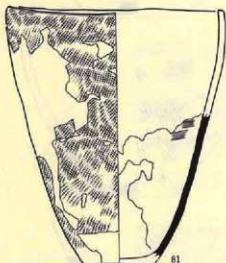
第28圖 E III-011住居跡出土遺物(3)



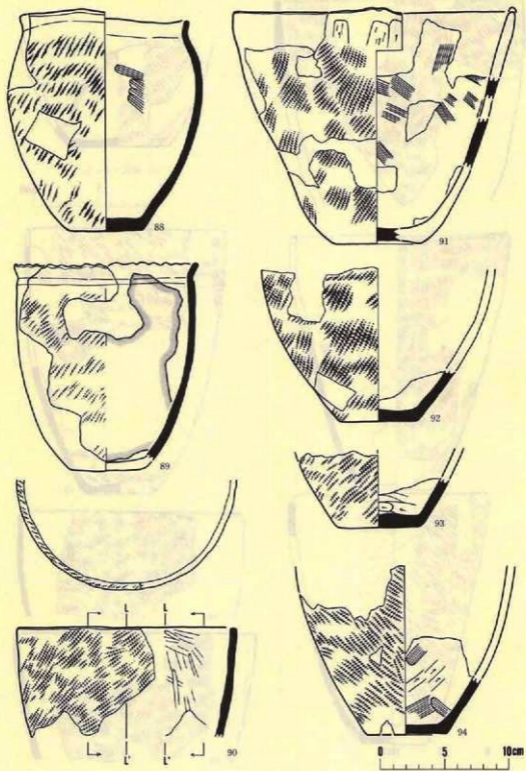
第29図 E III-01|住居跡出土遺物(4)



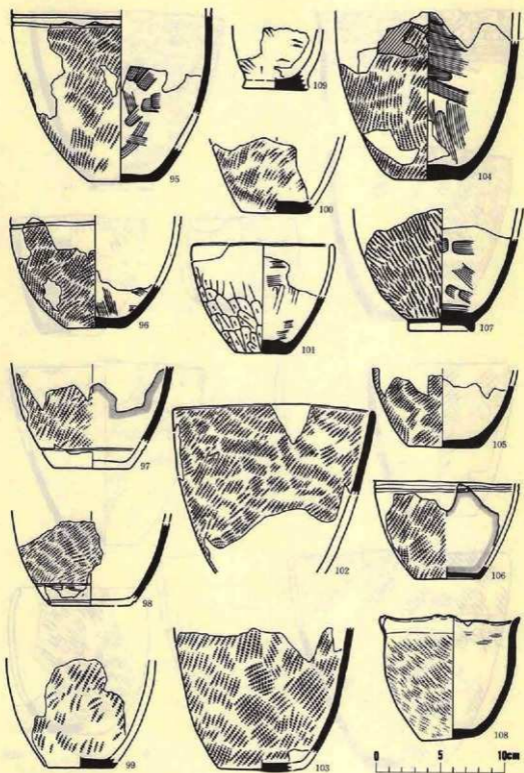
86, 87のスケール



第30図 E III-011住居跡出土遺物(5)



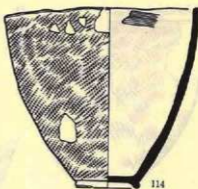
第31图 E III—D11住居跡出土遺物(6)



第32圖 E III-011住居跡出土遺物(7)



110



114



111



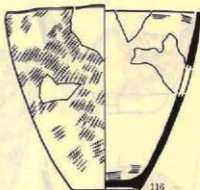
118



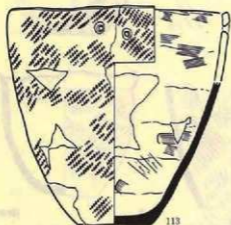
115



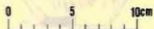
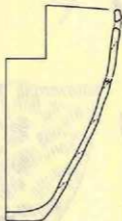
112



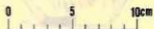
116



113



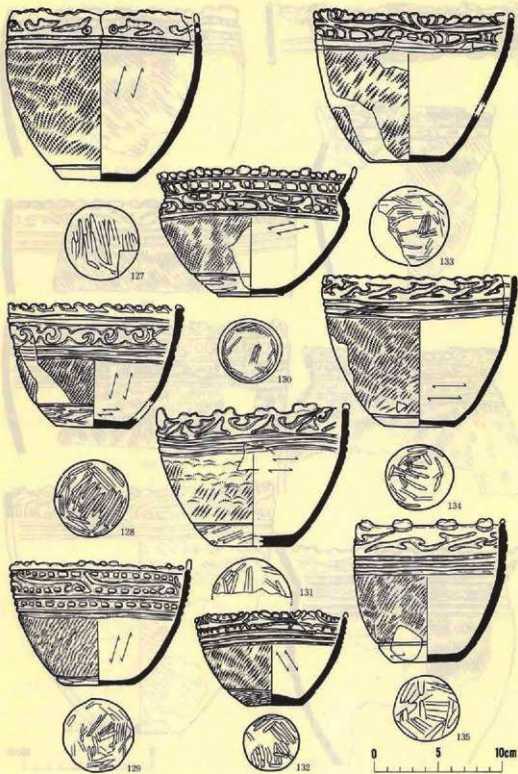
117



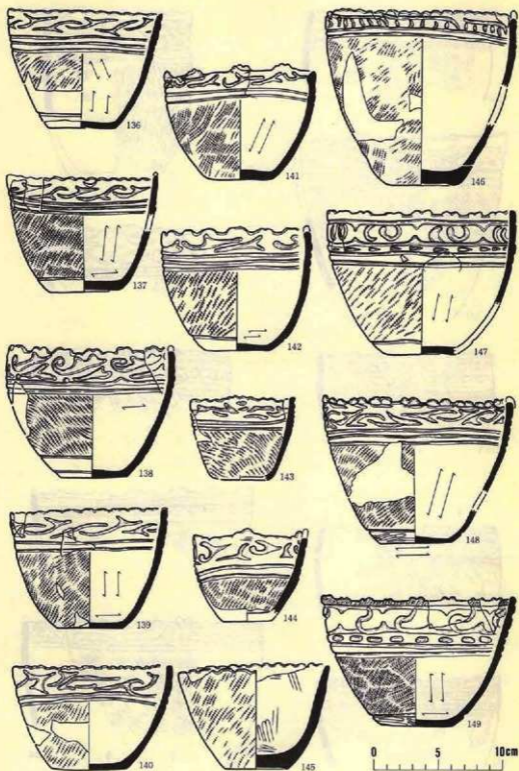
第33图 E III-011住居跡出土遺物(8)



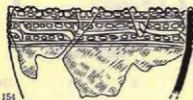
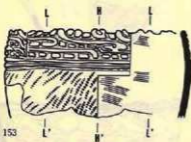
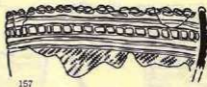
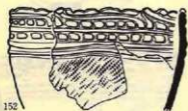
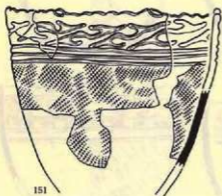
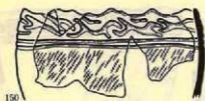
第34图 E III-011住居跡出土遺物(9)



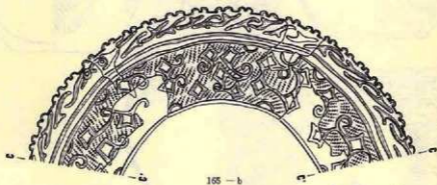
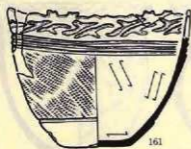
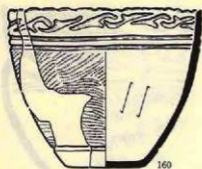
第35图 E III-011住居跡出土遺物 (10)



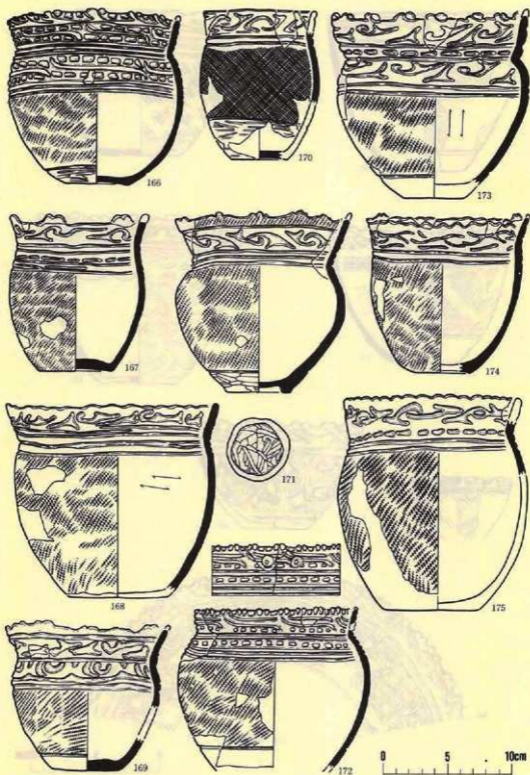
第36圖 E III—011住居跡出土遺物 (11)



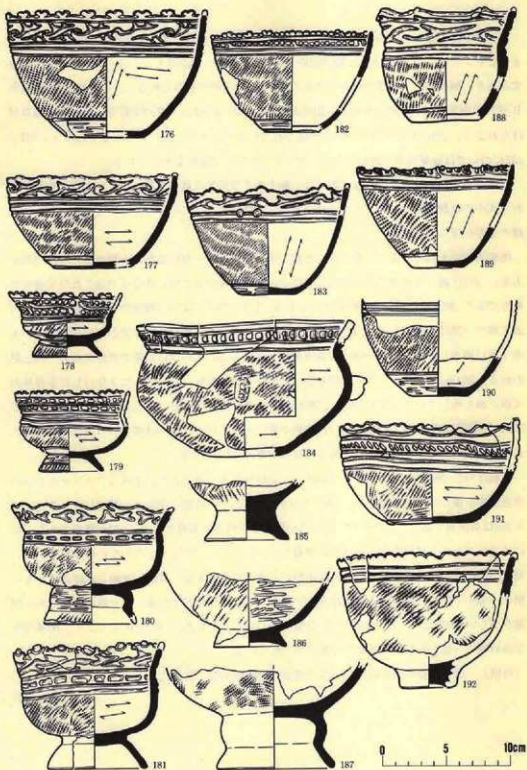
第37圖 E III—011住居跡出土遺物 (12)



第38图 E III-011住居跡出土遺物(13)



第39图 E III—011住居跡出土遺物(14)



第40圖 E III-011住居跡出土遺物 (15)

口辺部文様では323～325のような円文、または半円文、164のような連続する皿状文、333のようなレンズ状文、331のように横線区画された断列線文、332のような斜、横方向に走る条線文があり、胴体部に三叉文や渦巻状沈線の施される329の例もみられる。このうち、333は大洞B₁式の玉抱き三叉文と同一時期の可能性が大きい。323-325は三叉文の土器等と同時期に位置付けられよう。329は口辺部に羊歯状文が施されているので大洞B-C式に入るであろう。331、332については晩期前葉の資料に含めたが、もっと早い可能性もあげられる。

以上の口辺部文様の施される土器には、無文の小型壺や浅鉢型土器、ほとんど縄文のみ施された大小の粗製深鉢型土器、小型浅鉢型土器、壺型土器をはじめとして、いくつかの異った文様の土器が伴っている。

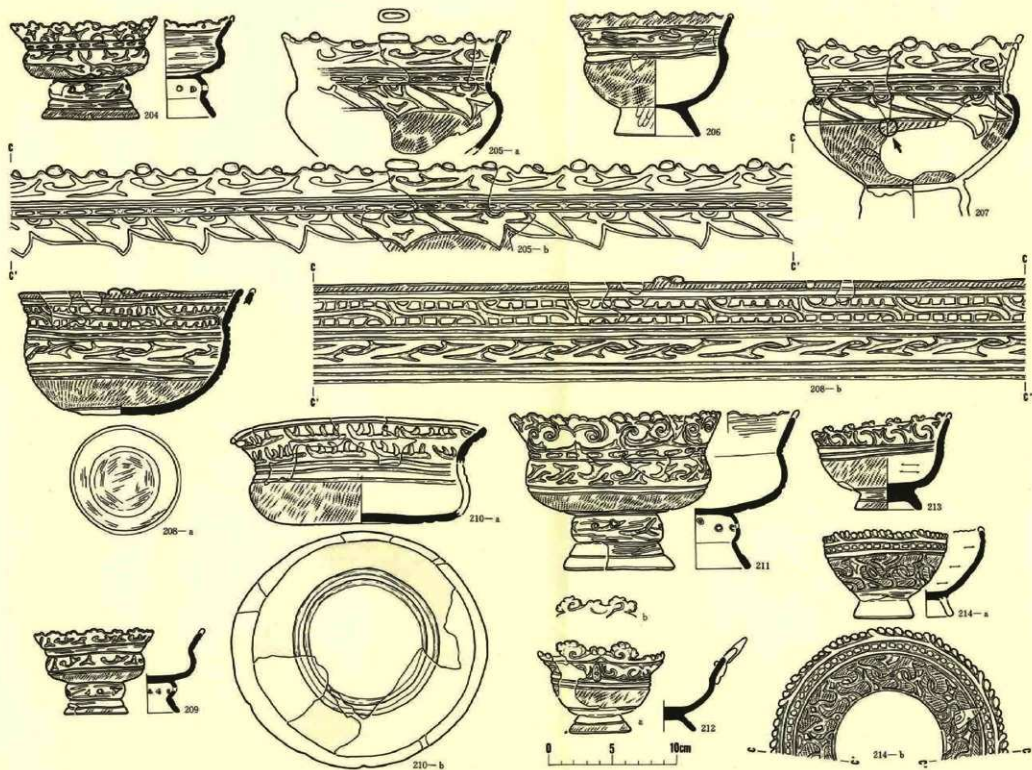
晩期前葉の土器に混入して発見された縄文時代前期前葉～後期後葉の土器には、277～288がある。277は細い薄板状工具の押し引きによって縦横及び斜方向に条線文の施された尖底部の破片であり、胎土中に植物繊維が含まれている。文様の特徴によって縄文時代前期前葉の春日町式土器の一部に比定される。274は胎土に植物繊維を含み、網目状燃糸文があり前期前葉の大木2式に相当しよう。279～283は中期後葉の土器である。279は口辺部の裝飾突起の一部と思われる。280～283は棒にR < ㄣ の縄を巻いて縦～斜に回転施文し、さらにJないしC字状等の文様区画を施している。284、287、288はE II—013住居跡7などと同様後期後葉の土器である。285は加曾利B₁式類似の文様が施され、後期中葉に入れられよう。286は波状の口辺部に線区画された斜方向の割線文をもつ土器であり、後期中葉の可能性が強い。

石器は341～361の21点がある。341はほぼ完形の有茎石鏃であり、基部にアスファルト状の黑色樹脂が僅かに付着している。342、343はつまみのない石錐で先端部が磨滅している。345～353は切削器である。このうち、345～348はつまみ付きの石匙であり、347が碗型である。346にはアスファルト状樹脂がつまみ部に付着している。354、355はつまみのない切削器であり、356は使用痕をもつ剥片である。357は小型の石棒の破片である。頂部に沈線とくぼみ孔をもち胴の一部がくびれている。358は花崗岩の礫を利用した擦り石であるが、火熱をうけたのか剥落が著しい。359は叩き石、360は小型磨製石斧の完形品である。361は砥石であり、肉厚扁平な溶岩礫の一部が打撃調整されて片面利用されている。

〔時期〕 遺物の全体的な特徴からみて縄文時代晩期前葉と思われる。



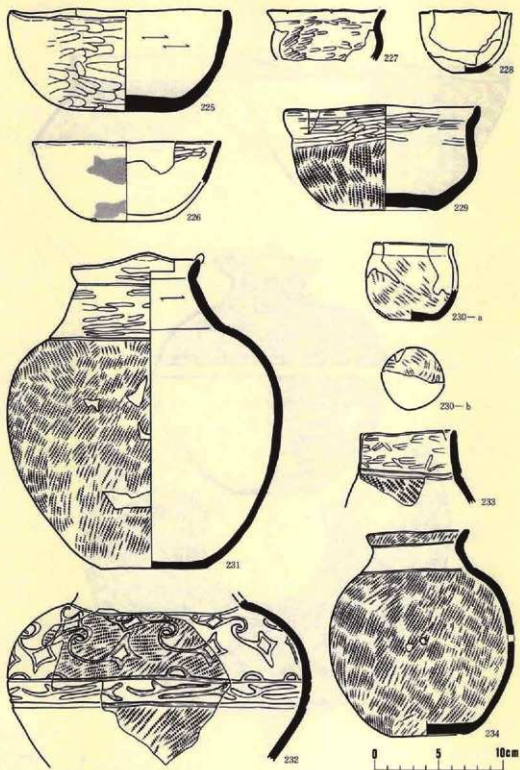
第41图 E III-011住居跡出土遺物 (16)



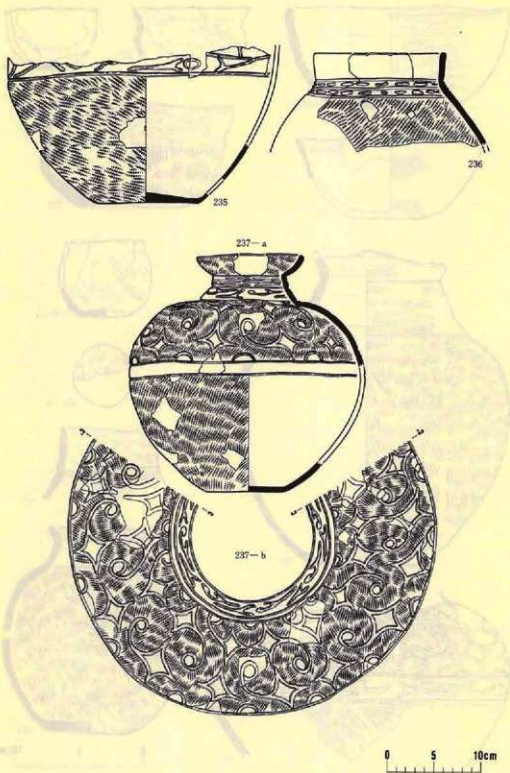
第42圖 E III-011住居跡出土遺物 (17)



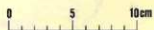
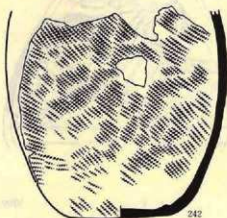
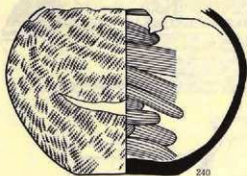
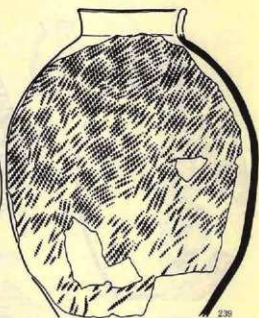
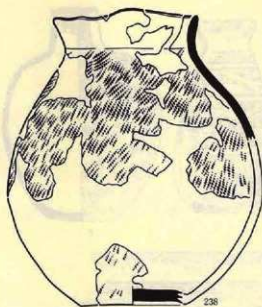
第43图 E III-011住居跡出土遺物 (18)



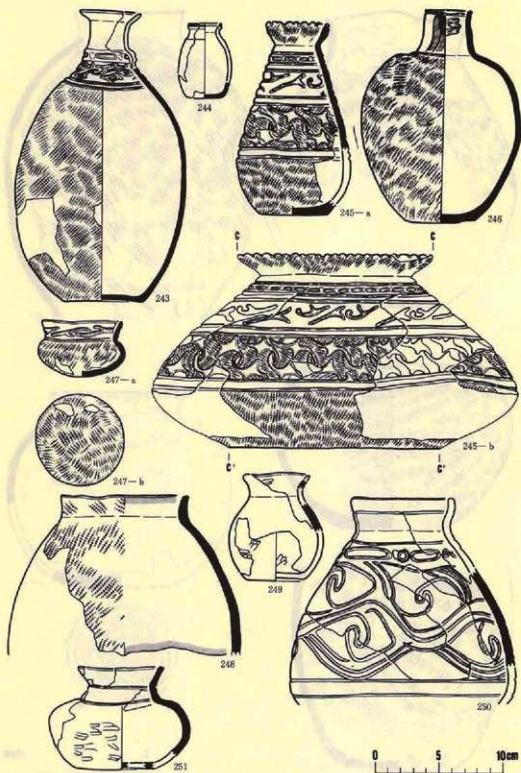
第44图 E III-011住居跡出土遺物 (19)



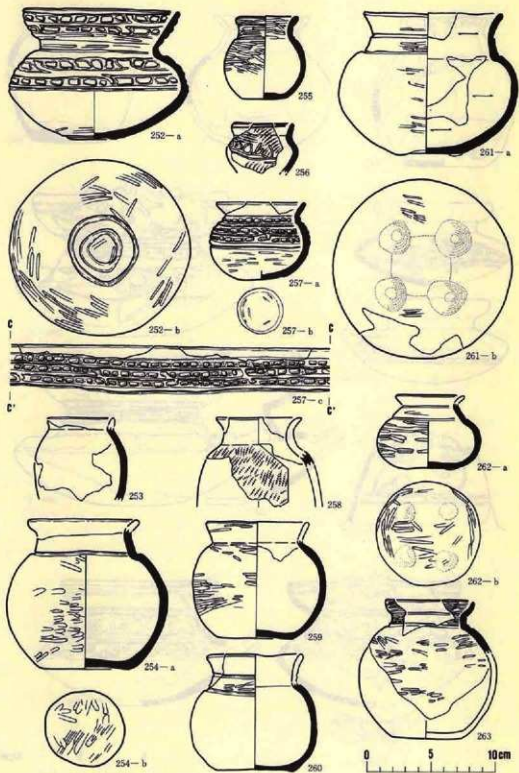
第45図 E III-011住居跡出土遺物 (20)



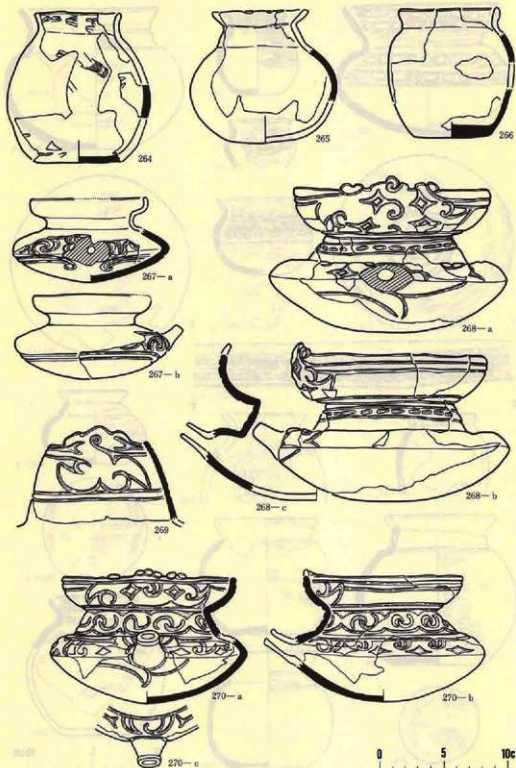
第46图 E III-011住居跡出土遺物 (21)



第47图 E III-01 住居跡出土遺物 (22)



第48圖 E III-011住居跡出土遺物 (23)



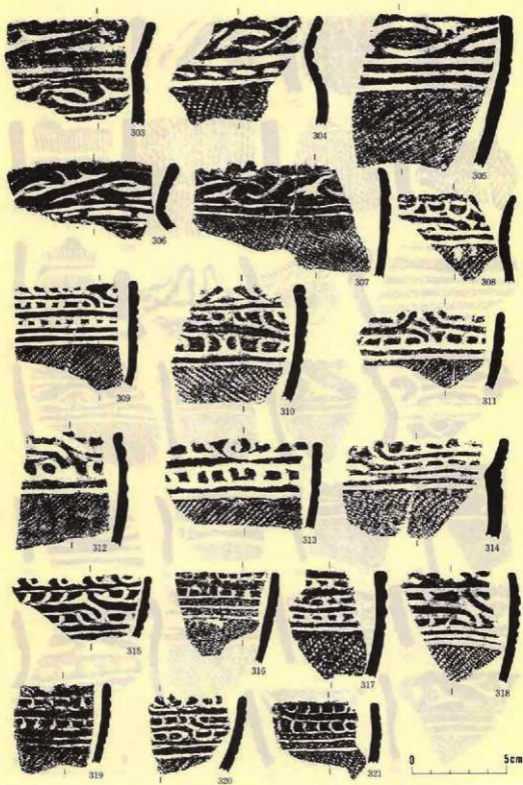
第49圖 E III-011住居跡出土遺物 (24)



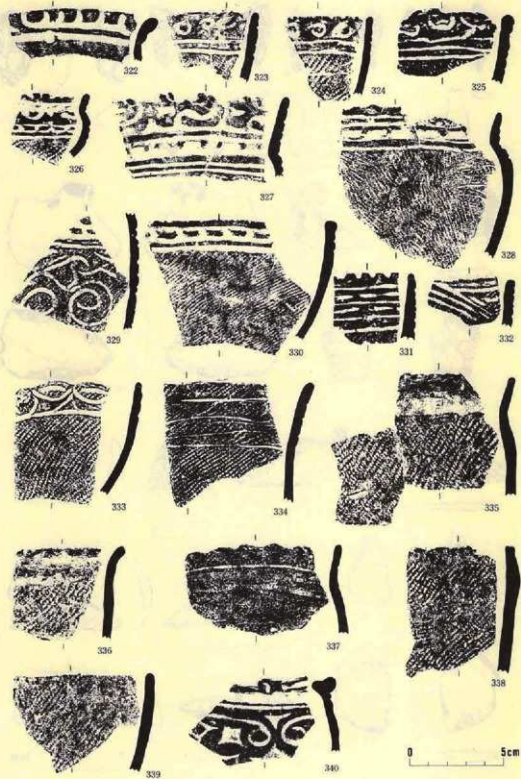
第50図 E III-011住居跡出土遺物 (25)



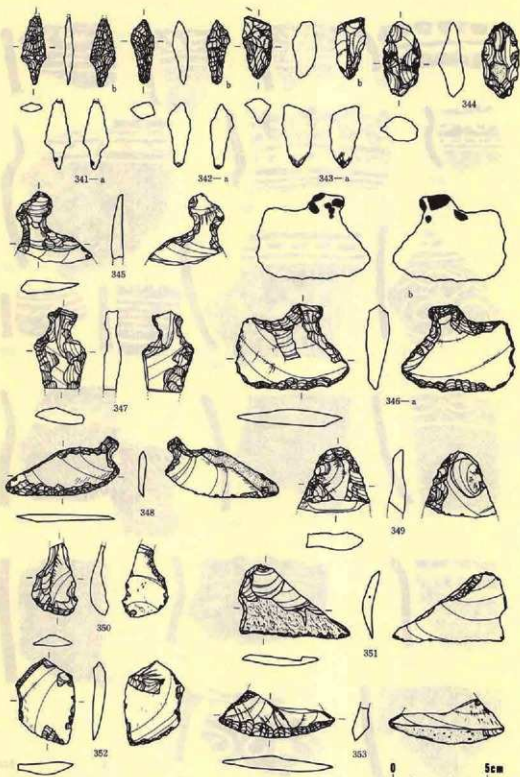
第51圖 E III-01 住居跡出土遺物 (26)



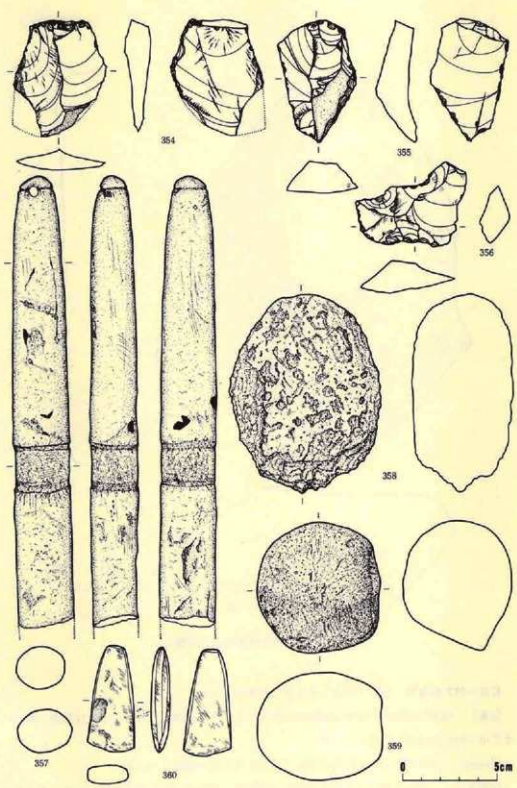
第52图 E III-011住居跡出土遺物 (27)



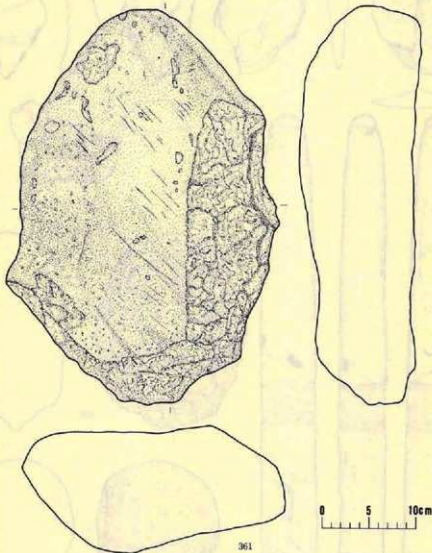
第53圖 E III-011住居跡出土遺物 (28)



第54图 E III-011住居跡出土遺物 (29)



第55图 E III—011住居跡出土遺物 (30)



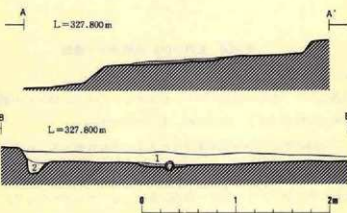
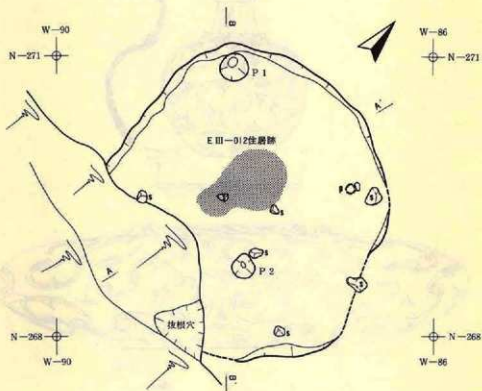
第56図 E III-011住居跡出土遺物 (31)

E III-012 住居跡 (第57・58図 第1表 写真図版108)

〔位置〕 調査区西辺の河岸段丘崖辺部に位置する。すぐ北西にはE II-015 住居跡、南東にはF III-011 住居跡が位置している。

〔検出面〕 水田耕作土直下に検出され、床面には礫層が露出している。

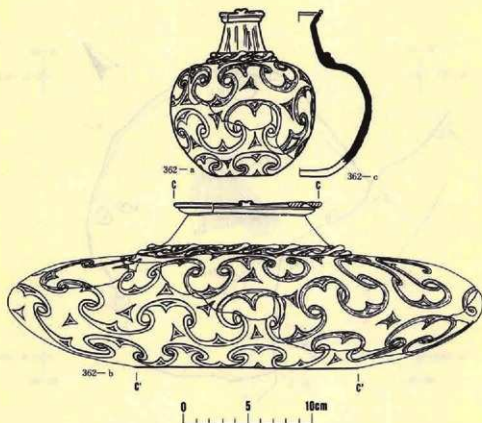
〔保存状況〕 開田工事により削平されているため、東辺の一部が形状不明である。南辺部は段丘崖の崩落により失われている。



1. 深部 10Y 灰列 砂礫混リシルト質黄土
 2. 深部 10Y 灰列 1 と同質中や黒々

深さ	直径
P 1 0.19m	0.33×0.27m
P 2 0.09m	0.26×0.22m

第57図 E III-012住居跡平・断面図



第58図 E III-012 住居跡出土遺物

〔重複〕 なし。

〔形状〕 東西2.70m、南北の推定3.00m、検出面からの深さ0.16mの不整形円形、または不整形隅丸四角形の竪穴住居跡である。床面はや、南下がりである。

〔内部施設〕 北西部壁際と中央部南東寄りに各1基の柱穴がある。柱穴の埋土はいずれも住居跡の埋土2と同様である。

炉跡は中央部に地床炉があり、北東～南西に長いヒョウタン形をなしている。北東～南西が1.0m、北西～南東が0.65mの規模である。

〔埋土〕 床面の埋土は1層だけが残存している。

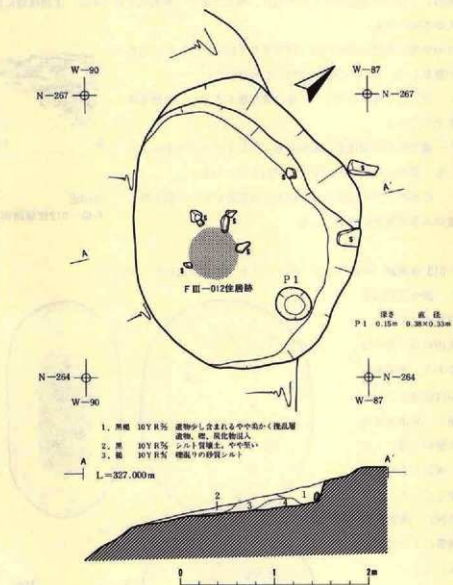
〔遺物〕 小型の壺 362が北東部の床面から出土している。頸部に羊歯状文をもち、胴部には鐮形文の連続組合せ文が施されている。朱塗りの痕跡が認められ、大洞B-C式に比定されよう。

〔時期〕 床面から伴出した土器によって縄文時代晩期前葉と推定される。

F III—012 住居跡 (第59・60図 写真図版20・108)

〔位置〕 調査区西辺部の河岸段丘辺に位置し、すぐ北西にはE III—012 住居跡、南東にはE III—013 住居跡がある。

〔検出面〕 F III区基準土層第3層相当層の下部に検出され、一部は開田による攪乱層の直下



第59図 F III—012住居跡平・断面図

で検出。床面には礫層が露出している。

〔保存状況〕 南西から南側にかけて崖面の崩落によって失われている。

〔重複〕 なし。

〔形状〕 直径3.0mほどの不整円形の住居跡と思われる。検出面からの深さは0.38mである。床面はや、南下がりである。

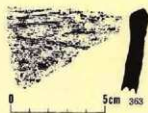
〔内部施設〕 柱穴は南壁際に1基があり、埋土は柔らかい黒褐色土層である。上屋構造に関連する柱穴が不明である。

炉跡は中央部に直径0.28mのほゞ円形をなす地床炉である。周辺には礫が散乱しているが、石囲いに用いた形跡はない。

〔埋土〕 埋土は4層からなる。一部に攪乱層があるが、自然堆積の様相を示している。

〔遺物〕 縄文時代後期後葉～晩期前葉の粗製土器片が埋土から出土している。器面には横方向の条痕文が施されている。

〔時期〕 時期の判明する他の柱居跡との位置関係から、縄文時代晩期前葉に入る可能性が考えられる。



第60図 F III-012住居跡出土遺物

F III-013 住居跡 (第61～64図 第1・3表 写真図版108～110)

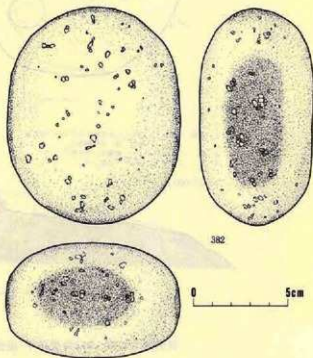
〔位置〕 調査区西辺部の河岸段丘辺に位置し、すぐ西北西にはF III-012住居跡があり、東北東にはF III-014住居跡がある。

〔検出面〕 F III区基準土層第3層相当層の下部で検出。床面と北壁に礫層が露出している。

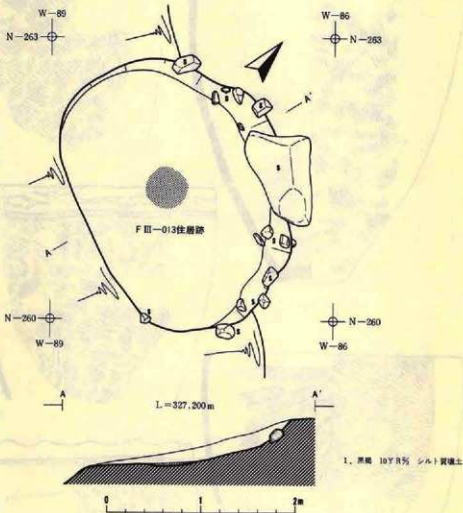
〔保存状況〕 南側が段丘崖の崩落によって失われている。

〔重複〕 なし。

〔形状〕 直径3m内外の円形と推定される。床



第61図 F III-013 住居跡出土遺物 (1)



第62図 F III-013 住居跡平・断面図

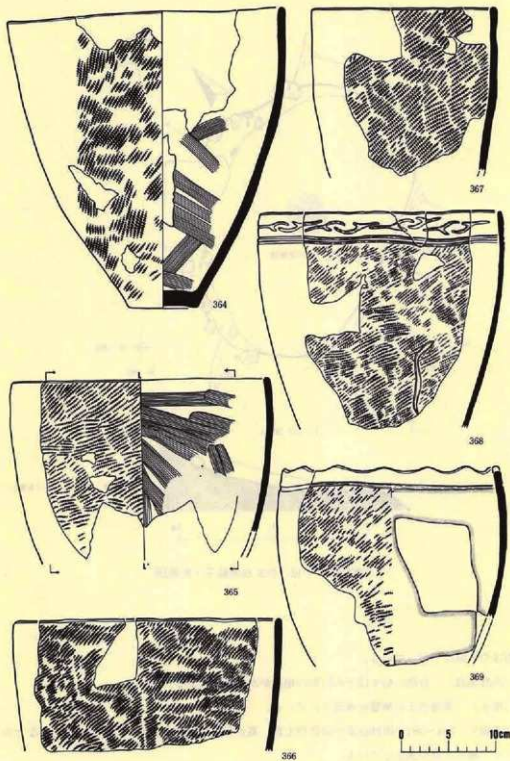
面はや、南に下がっている。

〔内部施設〕 直径0.45mほどの円形の地床炉が中央部にある。

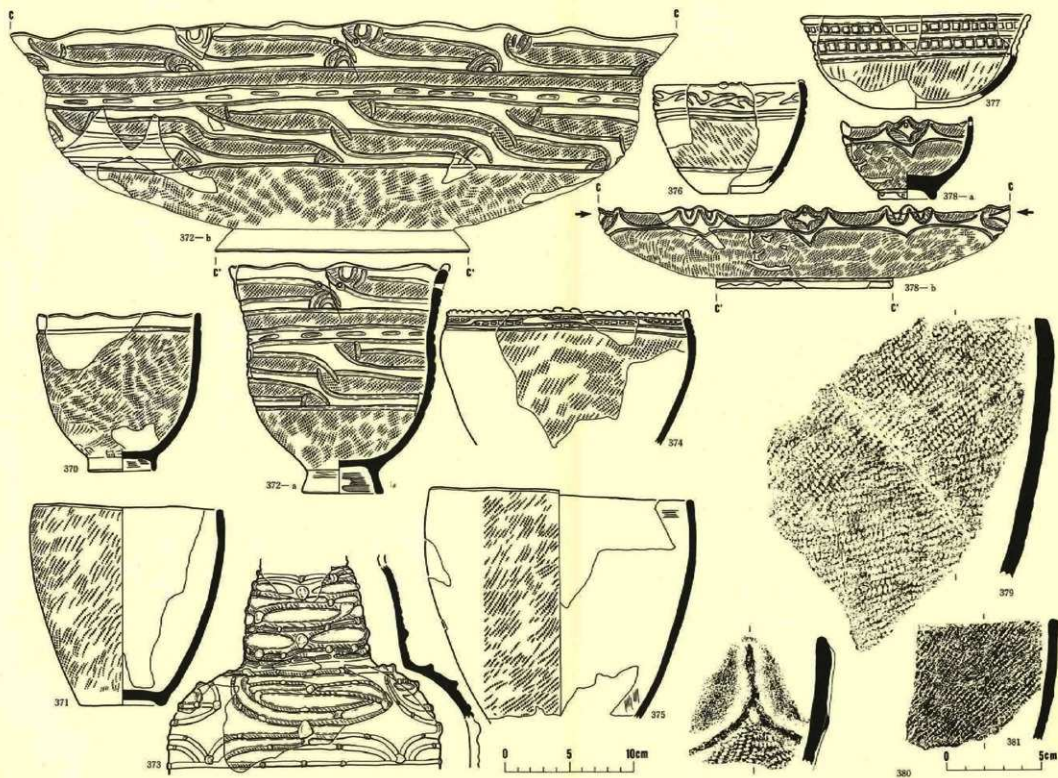
〔埋土〕 黒褐色土の単層が確認されている。

〔遺物〕 364～381の晩期前葉の深鉢型土器、高台付小型深鉢型土器、コブ付壺型土器などのほか、擦石1点が出土している。

〔時期〕 遺物や位置関係から縄文時代晩期前葉に位置付けられる。



第63圖 F III-013住居跡出土遺物(2)



第64图 F III—013住居跡出土遺物(3)

FⅢ-014 住居跡 (第65-67図 第1-3表 写真図版22・29・110・111)

〔位置〕 調査区西側の河岸段丘崖辺に位置し、西北西にや、離れてFⅢ-013住居跡、南東にはFⅢ-0113住居跡が続いている。

〔検出面〕 FⅢ区基準土層第3層相当層の下部であるが、一部は水田耕作土直下で検出される。礎層が床面に露出している。

〔保存状況〕 西-南側部分が段丘崖の崩落や倒木跡によって大きく破壊されている。南-東側では黒褐色土が深く、風倒木による破壊もあって壁の存在は確認されていない。

〔重複〕 FⅢ-0113住居跡と重複している。擾乱が著しく新旧関係は不明であるが、出土遺物によってFⅢ014住居跡が新しいと推定される。

〔形状〕 直径4.10m内外の円形と推定される。東側の床面は風倒木により凹凸が著しい。

〔内部施設〕 床面中央部に直径0.90mほどの円形石囲い炉がある。炉の東半部は風倒木のため他の部分より高くなっている。焼土はほとんどみられない。

〔埋土〕 6層からなるが、一部を除いて自然堆積の様相を示している。

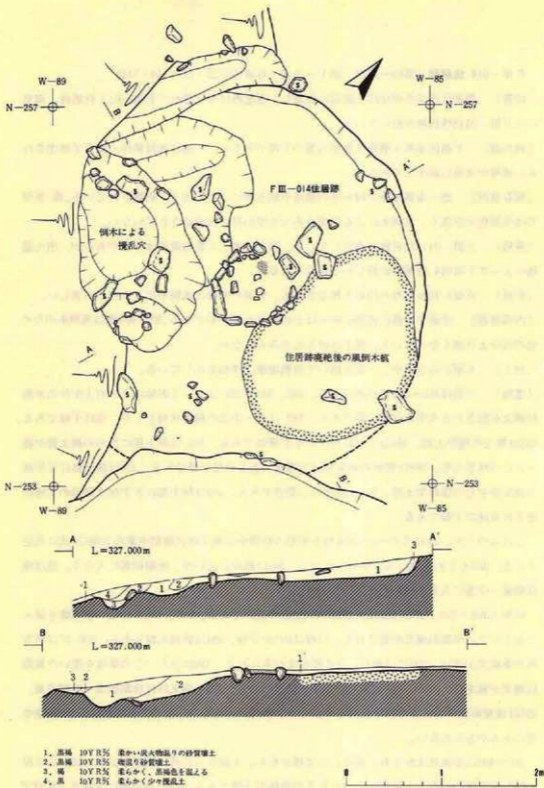
〔遺物〕 土器は383-405の23点である。383、384、387はL< $\frac{R}{R}$ >原体により右上がりの単節斜縄文が施される大型深鉢型土器である。383はや、巾広の鋸歯状縁をもち、他は平縁である。385は無文の椀型土器、386はくびれ付きの小型深鉢である。388は胴上部に雲形の縄文帯が施された浅鉢型土器、389は雲形の刺突列点文様帯のある台付土器である。390は胴上部にX字状の縄文帯をもつ深鉢型土器、391は無文の小型壺である。392は胴上部にX字状文類似の文様が施される注口土器である。

これらのうち、336、338-390は文様と形態の特徴から縄文時代晩期中葉の大洞C₁式に比定される。383もこの時期に入るかもしれない。392は細片に近いが、晩期前葉に入ろう。他は晩期前葉-中葉に入ると思われる。

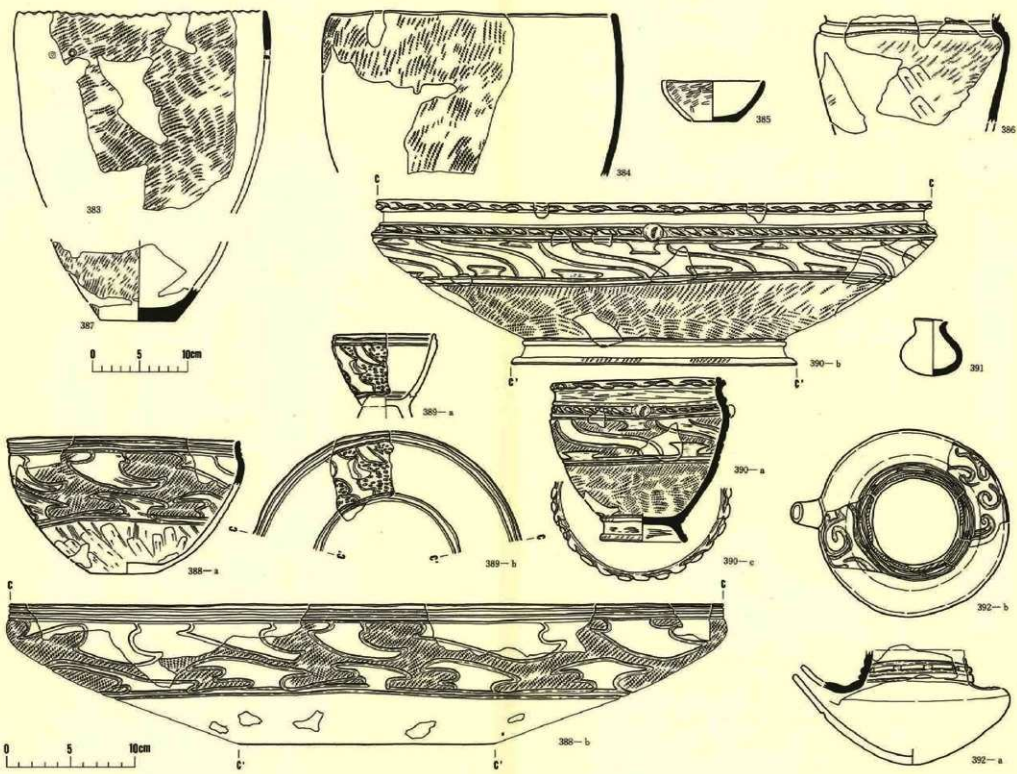
拓本の393-395、397、398は大型深鉢型土器の破片である。393、394にはL< $\frac{R}{R}$ >原体を使って右上がりの単節斜縄文が施される。口縁は393が平縁、394は鋸歯状縁である。395には横方向の条痕文が伴い、396には細かい目の摺糸文がみられる。396にはL< $\frac{R}{?}$ >の原体を用いた無節斜縄文が施されている。397は無文である。以上のうち、395は縄文時代後期後葉-晩期前葉、396は後期前葉-中葉にそれぞれ入るであろう。393、394は晩期の土器であるが、394は晩期中葉に入るかもしれない。

400-403は羊歯状文かこれに類似した文様をもち、大洞B-C式に相当しよう。404はEⅢ-011住居跡の88などと同様にくびれ付きの深鉢型土器である。405は口辺部に玉抱き三叉状文様の文様をもち、三叉文の土器より古い段階に位置付けられよう。

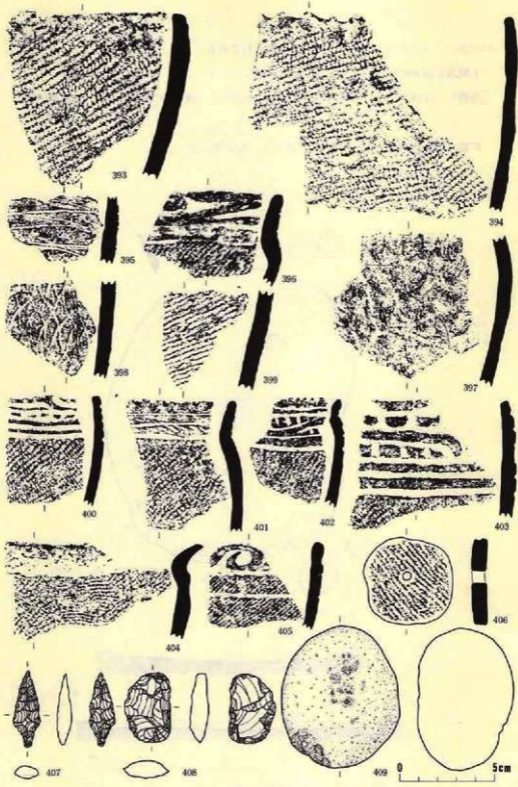
石器は3点である。407は有茎で細身の打製石鏃である。408は切削器でラウンドスクレー



第65図 F III-014住居跡平・断面図



第66圖 F III-014住居跡出土遺物 (1)



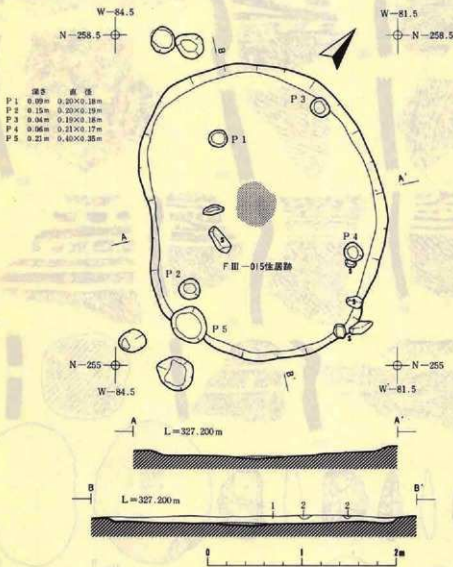
第67图 F III-014住居跡出土遺物(2)

バーというべき形をなしている。409は凹み石である。

土製品では406の円板状土製品1点が出土している。

〔時期〕 主体を占める土器が大洞C₁式に比定され、縄文時代晩期中葉と推定される。

F III-015 住居跡 (第68・69図 第1表 写真図版21・111)



第68図 F III-015住居跡平・断面図

〔位置〕 調査区の西辺部に位置する。FⅢ-014 住居跡のすぐ北東にあり、さらに北東にはFⅢ-016 住居跡がある。

〔検出面〕 水田耕作土層直下にあり、床面の一部に礎層が露出している。

〔保存状況〕 開田工事によって削平されているが、比較的良好に残存する。

〔重複〕 住居跡外の柱穴状ピットP₃に重複しているが、時期差は判明していない。

第69図 FⅢ-015 住居跡出土遺物

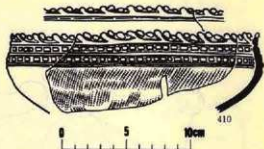
〔形状〕 長径3.15m、短径2.50mの楕円形竪穴住居跡である。

〔内部施設〕 4基の柱穴があり、いずれも黒褐色土の埋土である。配置からみて上屋構造を支える柱穴とするには疑問である。

〔埋土〕 2層からなるが、ほとんど単層に近い様相を示している。

〔遺物〕 埋土中から 410に示す大洞B-C式の小型浅鉢か深皿型の土器1点が出土している。

〔時期〕 土器の時期から縄文時代晩期前葉の竪穴住居跡とみられる。



FⅢ-016 住居跡 (第70~72図 第1~3表 写真図版21・35・112)

〔位置〕 調査区西部に位置している、すぐ南西にはFⅢ-015 住居跡がある。

〔検出面〕 FⅢ区基準土層第12、15層直下に検出された。

〔保存状況〕 南半の壁は黒色土が深く、開田工事による破壊をうけて不明である。また、一部は古い道路によって破壊されている。

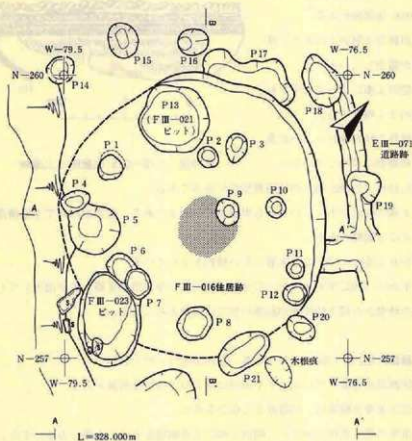
〔重複〕 道路遺構と重複しているほか、FⅢ-021、023の両ピットをはじめ、いくつかの住居跡に伴わない柱穴と重複している。P₈は土層の堆積から住居跡より古いと推定される。

〔形状〕 直径2.80~3.00mほどの円形である。残存する検出面からの深さは0.10mである。床面はや、南に傾いている。

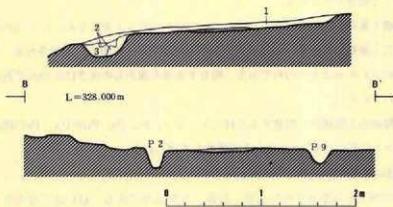
〔内部施設〕 住居跡の上屋構造に関連する支柱穴としては、P₁、P₃、P₁₁かP₁₂、P₈の組合せが推定される。さらにP₁₀、P₆などが加わる可能性もあげられる。

〔埋土〕 床の埋土は1層のみ残存している。

〔遺物〕 検出中に埋土から発見された土器、石器、土製品等である。411は三叉文をもちくびれのある大型深鉢型土器である。413は直口に近い中型の壺である。415、417には羊歯状文、416はEⅡ-013 住居跡の7などに類似する文様が描かれている。文様と形態の特徴から413は縄文時代晩期前葉の大洞B式、412、413は大洞BないしB-C式、415、417が大洞B-

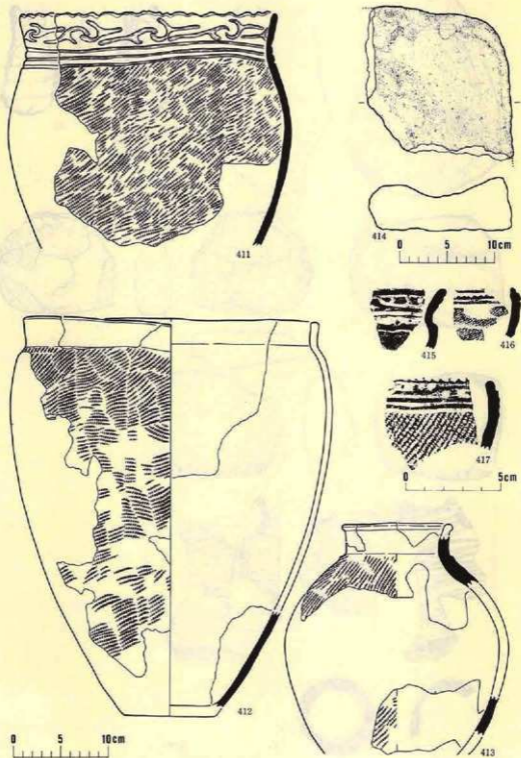


	深さ	直径
P 1	0.28m	0.28×0.26m
P 2	0.18m	0.22×0.20m
P 3	0.27m	0.30×0.21m
P 4	0.19m	0.30×0.21m
P 5	0.23m	0.71×0.47m
P 6	0.21m	0.32×0.24m
P 7	0.37m	0.30×0.34m
P 8	0.16m	0.36×0.33m
P 9	0.27m	0.27×0.24m
P 10	0.30m	0.23×0.20m
P 11	0.16m	0.36×0.33m
P 12	0.13m	0.25×0.22m
P 13	0.15m	0.74×0.70m
P 14	0.10m	0.31×0.29m
P 15	0.12m	0.36×0.32m
P 16	0.33m	0.32×0.27m
P 17	0.05m	0.44×0.30m
P 18	0.06m	0.57×0.37m
P 19	0.04m	0.35×0.29m
P 20	0.20m	0.32×0.22m
P 21	0.19m	0.59×0.35m

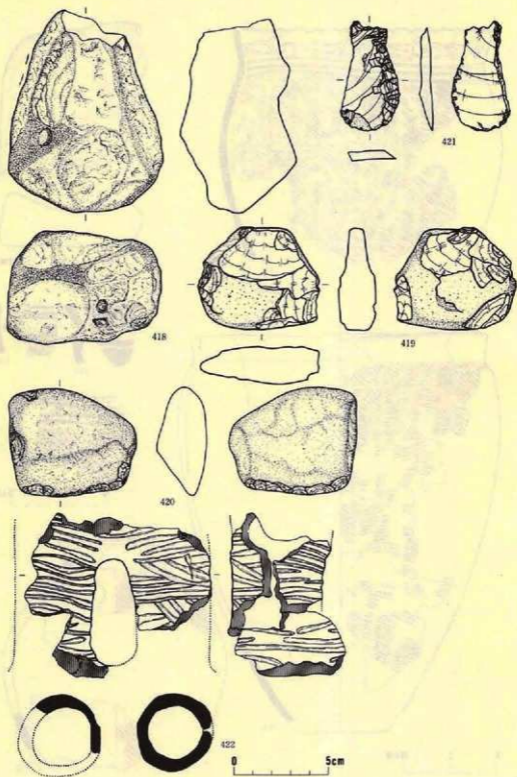


1. 照 10Y R 5 炭かゝ粘土混り砂質シルト遺物含む
2. 照 10Y R 5 炭かゝ粘土質シルト
3. 照 照 10Y R 5 炭かゝ粘土質シルト

第70図 F III-016住居跡平・断面図



第71圖 F III—016住居跡出土遺物（1）



第72圖 F III—016住居跡出土遺物(2)

C式、416が晩期中葉の大洞C₁式にそれぞれ比定できよう。

石器には414の石皿破片、418の叩き石、419、420の円板状石製品、421の切削器がある。419、420は全体の打ち欠きが行なわれておらず未製品かもしれない。

422は中空土偶の脚部破片と思われる。二又に分かれた脚部には横縞状の浅い巾広の沈線が巡らされている。

〔時期〕 主体をなす土器からみて縄文時代晩期前葉の住居跡とみられる。

FⅢ-017 住居跡 (第73～76図 第1～3表 写真図版112～114)

〔位置〕 調査区の西側に位置し、FⅢ-016、018A、018B、0110、0111の各住居跡に囲まれている。

〔検出面〕 FⅢ区基準土層第12～15層の直下及び下部に検出される。

〔保存状況〕 遺構の中央部付近は風倒木によって基盤土層の一部が攪乱を受け、盛り上がった状態になっており、中央部の柱穴は多少ずれている。また、北東部分の埋土は道路遺構によってかなり削平されている。

〔重複〕 周囲には多くの柱穴状ピットがあり、相互に関連しあって別の遺構を構成すると思われるが、この建物跡との重複関係は攪乱が著しく確認されていない。

〔形状〕 柱穴の心々により長さ4.3m、幅1.7m内外の南西—北東方向に長い建物跡である。柱穴はP₁～P₆の6基である。柱穴の直径は0.15～0.20mほどであり、柱穴の埋土よりやや濃い黒褐色をおびている。

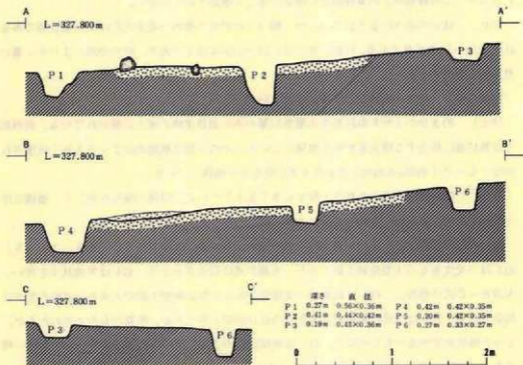
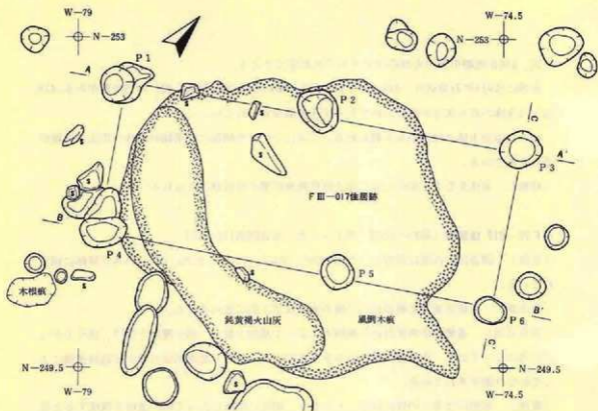
〔内部施設〕 炉跡や周溝などは確認されていない。

〔埋土〕 約3分の1がFⅢ区基準土層第12層の古い道路遺構の床土に被われている。南西部では第15層に相当する埋土層が厚く堆積している。その一部は風倒木によって大きく破壊され凹地となって十和田a火山灰と思われる火山灰などが堆積している。

〔遺物〕 建物跡南西部の黒褐色土層から多く出土している。周囲の攪乱が著しく、遺構に伴う遺物が不明であるが、主要な遺物は土器25点、石器6点、土製品1点である。

423～447の土器は、いずれも縄文時代後期後葉から晩期にかけての土器である。このうち、423は三叉文をもつ大型深鉢土器であり、大洞B式に同定されよう。424は羊歯状文を伴い、大洞B—C式に相当し、429は眼鏡状の文様帯がある小型深鉢型土器で大洞B式直前の型に比定される。425は頸部に刺突列点文をもつ直口壺型土器である。晩期のものと思われるが、もっと時代が下がるかもしれない。416は後期後葉の壺型土器の下部破片でコブ付土器の一種である。425、427、428は晩期前葉に入るものと思われる。

431～440は横長S字状の入組み文の多用される土器であり、429とはほぼ同時期の土器である。



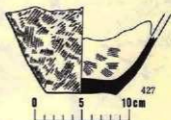
第73图 F III-017住居跡平·断面图



423



424



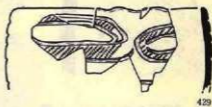
427



428



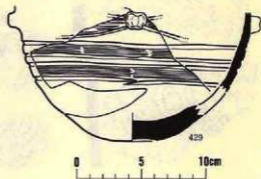
425



429

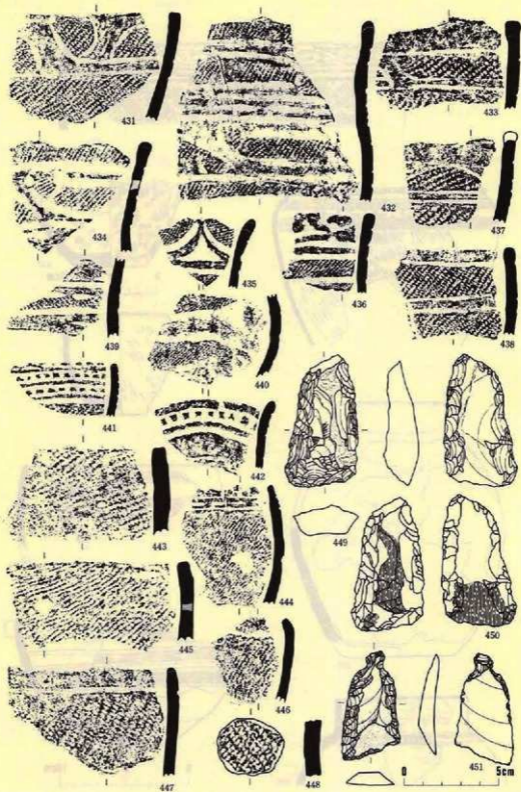


426

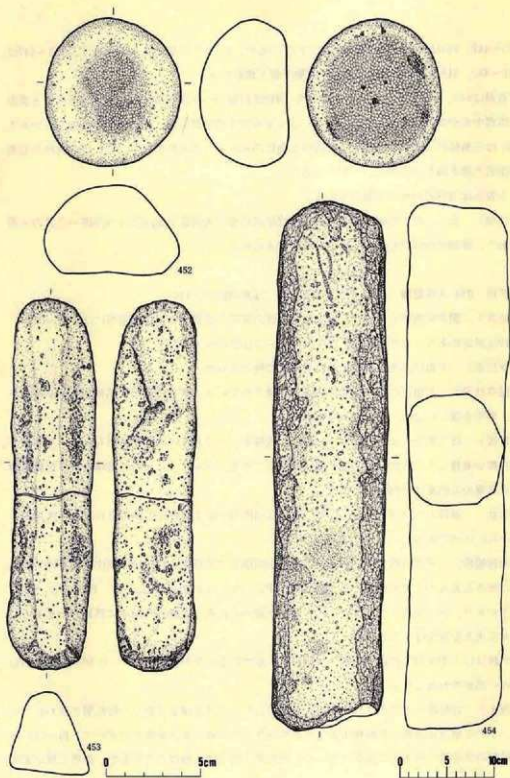


429

第74圖 F III—017住居跡出土遺物 (I)



第75図 F III-017住居跡出土遺物(2)



第76圖 F III-017住層跡出土遺物(3)

440～442、444は歯列文状の文様が放されているが、424と同時期に入れられよう。443～447は、431～442、443などに伴う晩期前葉の粗製土器と思われる。

石器は449、451～454である。このうち、449は打製のヘラ状石器であるが、刃部片面と裏面の体部中央が著しく磨滅している。451 はつまみ付きの縦型石匙、452 は円形のすり石である。453 は三角柱状の細長い石英安山岩礫の2面に凹みをもつ凹み石である。454 は六角柱の石英安山岩の稜を潰した石棒状の石器である。

土製品は 448の円板状土製品である。

〔時期〕 出土した土器の大部分は縄文時代晩期前葉の大洞B₁～B₂式から大洞B～C式の土器であり、建物跡の時期もこれに近い時期と考えられる。

FⅢ—018 A住居跡 (第77・78図 第1表 写真図版23・115)

〔位置〕 調査区西側FⅢ—017 掘立柱建物跡の東隣に位置する。すぐ南西にはFⅢ—0111、0112住居跡があり、東南東にはFⅢ—019 A～D住居跡がある。

〔検出面〕 FⅢ区基準土層第10～12層直下で検出された。

〔保存状況〕 FⅢ区の道路遺構によって破壊されている。さらに南側の黒褐色土層が攪乱され、外形を保つのは北～東の壁のみである。

〔重複〕 ほゞ重なるようにFⅢ—018 B住居跡を切っており、貼床が認められる。このほか、柱穴群が重複しているが、その前後関係は不明である。さらに、これらの遺構を切る道路遺構が東北東から西南西方向に続いている。

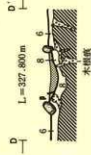
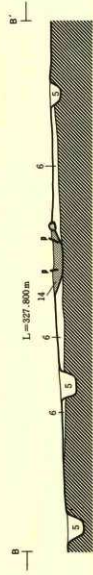
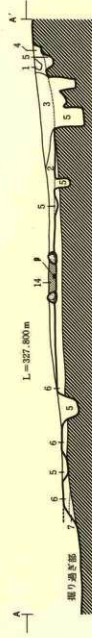
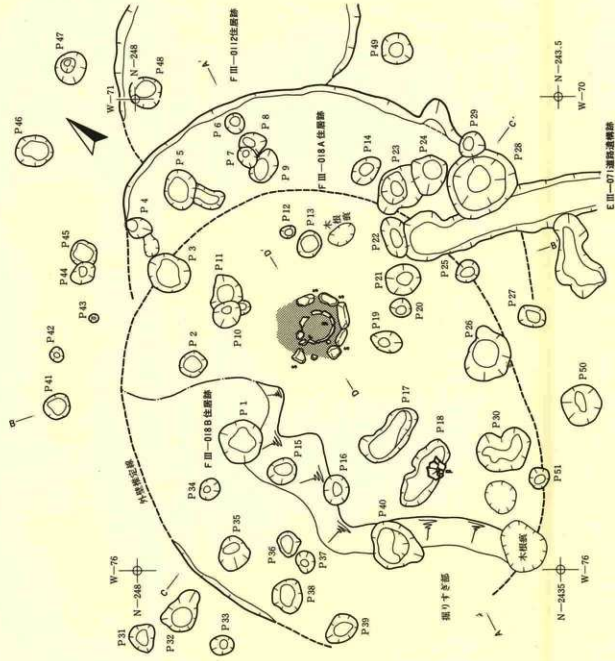
〔形状〕 直径4.2～4.8mほどの円形、または楕円形をなす竪穴住居跡と思われる。残存部の面から0.10mである。

〔内部施設〕 多数の柱穴のうち、住居跡の上屋構造に関係する柱穴は、床中央部を囲む六角形に配されるものと思われる。P₁、P₂、P₃、P₇、P₈、P₉とP₂₃、P₂₄、P₂₅、P₂₆、P₁₇、P₁₈などがあり、同じ竪穴に2期の建替えの形跡が認められる。各柱穴の埋土は黒褐色土を主とし個々に大きな変化はみられない。

炉跡はほゞ中央部に円形の石囲い埋燗炉が1基である。炉の直径は0.70～0.80m、炉を囲む礫の一部が失われている。

〔埋土〕 住居跡の旧埋土はほとんど失われており、道路遺構より新しい攪乱層で被われている。上の2層は住居跡の炉跡検出後の土層であり、住居跡の床は東側をのぞいてFⅢ—018 B住居跡の床を被う貼床上に築かれている。床を被う埋土は4層ほどであるが、黒色土層が主体をなしている。

〔遺物〕 遺構の大部分が削平されているため、遺物は極めて少ない。当初単一の住居跡とし



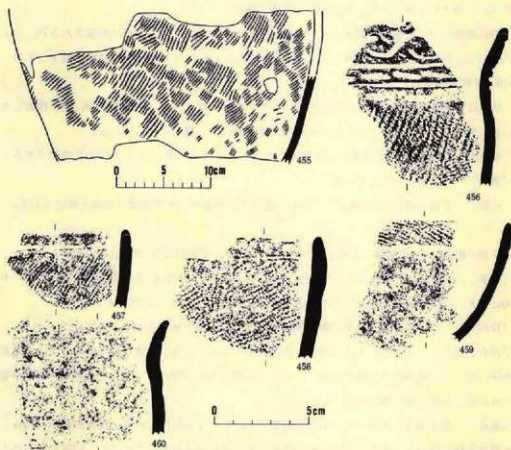
1. 竪穴
2. 竪穴
3. 竪穴
4. 竪穴
5. 竪穴
6. 竪穴
7. 竪穴
8. 竪穴
9. 竪穴
10. 竪穴
11. 竪穴
12. 竪穴
13. 竪穴
14. 竪穴
15. 竪穴
16. 竪穴
17. 竪穴
18. 竪穴
19. 竪穴
20. 竪穴
21. 竪穴
22. 竪穴
23. 竪穴
24. 竪穴
25. 竪穴
26. 竪穴
27. 竪穴
28. 竪穴
29. 竪穴
30. 竪穴
31. 竪穴
32. 竪穴
33. 竪穴
34. 竪穴
35. 竪穴
36. 竪穴
37. 竪穴
38. 竪穴
39. 竪穴
40. 竪穴
41. 竪穴
42. 竪穴
43. 竪穴
44. 竪穴
45. 竪穴
46. 竪穴
47. 竪穴



第77図 F III-018A・B住居跡平・断面図

て調査されたことから、出土遺物に重複するF III-018 B住居跡のものを含む可能性がある。しかし、貼床の下からの遺物はほとんど発見されていないので、混在するにしても数点と思われる。455 は炉に用いられていた大型深鉢の胴部破片である。器面にはしく原体を転がした右上がりの単節斜縄文が施されている。456 は三叉文のある小型深鉢型土器である。557 ~ 459 は胴部縄文、口辺部無文の低い波状口縁をもつ小型深鉢型土器である。456 は胴部無文、口辺部縄文の椀型土器である。456 ~ 459は文様の特徴から縄文時代晩期前葉の大洞B式に比定され、他の土器もほぼ同時期と思われる。

〔時期〕 遺物からみて縄文時代晩期前葉の住居跡と推定される。



第78図 F III-018 A 住居跡出土遺物

FⅢ-018B住居跡（第77図 写真図版24）

〔位置〕 調査区西辺部のFⅢ-018A住居跡とは、同じ位置にある。

〔検出面〕 FⅢ-018A住居跡とは、同一検出面にあり、床面の一部はFⅢ-018住居跡の床直下で検出された。

〔保存状況〕 FⅢ-018A住居跡と同様であり、さらにFⅢ-018A住居跡によっても破壊されている。

〔重複〕 FⅢ-018住居跡に切られる。また、遺構に伴わない多数のピットに重複しているが、新旧関係は不明である。さらにFⅢ-018A住居跡とともに道路遺構によって切られている。

〔形状〕 遺構の原形はほとんど不明であるが、西辺の一部が残存し、東辺の床となるFⅢ-018A住居跡貼床の東側境が丸味をもっていることから円形か楕円形の住居跡と推測される直径は4.1～5.0mと推定され、床面はや、南西に低い。

〔内部施設〕 上屋構造に関連する柱穴は、中央部を囲むように六角形に配置されるP₂、P₁₁、P₁₃、P₂₁、P₃₀、P₃₅の組合せか、それにP₄₀を加えた七角形が有力である。柱穴の埋土はFⅢ-018A住居跡の場合と同様である。

炉跡は中央部に直径0.65mほどの円形の石囲い炉が1基である。炉は破壊され、礎が移動している。炉の北東部には0.35×0.35mの範囲に炭化物の薄い層が広がっている。

〔埋土〕 FⅢ-018A住居跡の貼床が加わるほかは、ほぼFⅢ-018A住居跡と同様である。

〔遺物〕 ほとんど出土していない。

〔時期〕 FⅢ-018A住居跡より古いが、近接する縄文時代晩期前葉の時期と推定される。

FⅢ-019A～D住居跡（第80～84図 第1・3表 写真図版25～27・116～118）

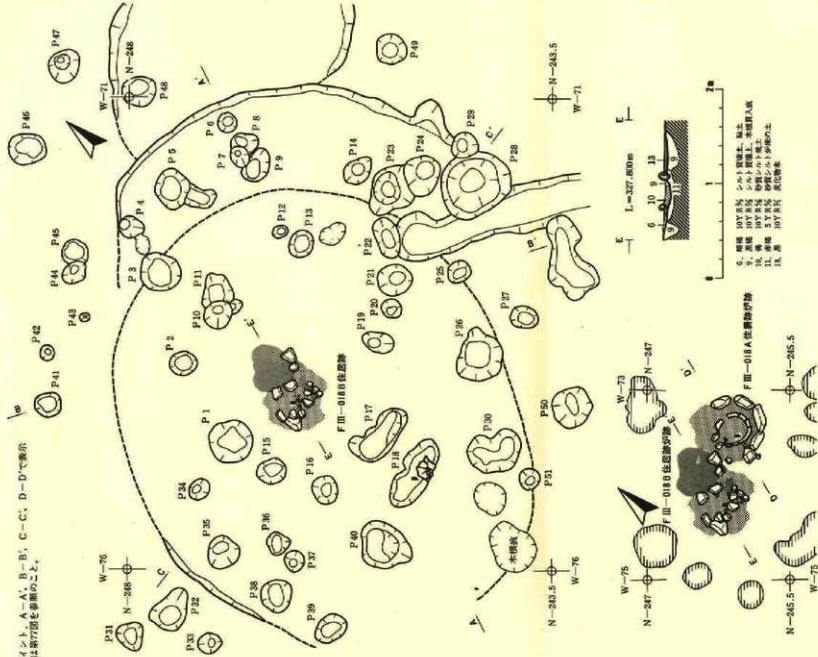
〔位置〕 調査区西側に位置し、すぐ北々西の方向にFⅢ-018A・B住居跡があり、南西の方向にはF-0101、0111住居跡がある。また、東北東にはGⅢ-014住居跡がある。

〔検出面〕 FⅢ区基準土層第15層下部にあり、一部は第12層の直下で検出された。

〔保存状況〕 FⅢ-019A住居跡は、南西が開田工事によって破壊されているほかは、原形を保っている。他のB～D住居跡は、いずれも壁際の小柱穴列によってもとの形状や規模が知られるが、全体に壁は確認されていない。

〔重複〕 最小規模のFⅢ-019D住居跡を中心にして4期の同心円状の重複が認められる。土層の堆積関係からAからDの順に縮小されたものと推定される。そのほか、住居跡の西側と北東側の埋土中層部で石囲炉と地床炉が各1基発見され、北東には倒立した埋土があった。このことからさらに2棟ほどの住居跡の重複する可能性も考えられる。しかし、埋土中では判別が難しく、その規模や形状は確認されていない。

モグラセンボイスト、A-A、B-B、C-C、D-Dで表示
 された断面図は断面位置を参照のこと。

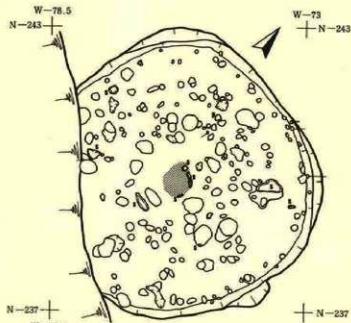


断面

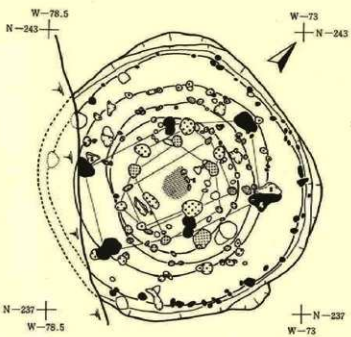
P 1	0.31m	0.45x0.45m
P 2	0.20m	0.25x0.25m
P 3	0.20m	0.25x0.25m
P 4	0.24m	0.25x0.25m
P 5	0.16m	0.25x0.25m
P 6	0.16m	0.25x0.25m
P 7	0.23m	0.18x0.18m
P 8	0.24m	0.25x0.25m
P 9	0.24m	0.25x0.25m
P 10	0.24m	0.25x0.25m
P 11	0.24m	0.25x0.25m
P 12	0.24m	0.25x0.25m
P 13	0.24m	0.25x0.25m
P 14	0.24m	0.25x0.25m
P 15	0.24m	0.25x0.25m
P 16	0.24m	0.25x0.25m
P 17	0.24m	0.25x0.25m
P 18	0.24m	0.25x0.25m
P 19	0.24m	0.25x0.25m
P 20	0.24m	0.25x0.25m
P 21	0.24m	0.25x0.25m
P 22	0.24m	0.25x0.25m
P 23	0.24m	0.25x0.25m
P 24	0.24m	0.25x0.25m
P 25	0.24m	0.25x0.25m
P 26	0.24m	0.25x0.25m
P 27	0.24m	0.25x0.25m
P 28	0.24m	0.25x0.25m
P 29	0.24m	0.25x0.25m
P 30	0.24m	0.25x0.25m
P 31	0.24m	0.25x0.25m
P 32	0.24m	0.25x0.25m
P 33	0.24m	0.25x0.25m
P 34	0.24m	0.25x0.25m
P 35	0.24m	0.25x0.25m
P 36	0.24m	0.25x0.25m
P 37	0.24m	0.25x0.25m
P 38	0.24m	0.25x0.25m
P 39	0.24m	0.25x0.25m
P 40	0.24m	0.25x0.25m
P 41	0.24m	0.25x0.25m
P 42	0.24m	0.25x0.25m
P 43	0.24m	0.25x0.25m
P 44	0.24m	0.25x0.25m
P 45	0.24m	0.25x0.25m
P 46	0.24m	0.25x0.25m
P 47	0.24m	0.25x0.25m
P 48	0.24m	0.25x0.25m
P 49	0.24m	0.25x0.25m
P 50	0.24m	0.25x0.25m
P 51	0.24m	0.25x0.25m

P 20	0.27m	0.25x0.25m
P 21	0.27m	0.25x0.25m
P 22	0.27m	0.25x0.25m
P 23	0.27m	0.25x0.25m
P 24	0.27m	0.25x0.25m
P 25	0.27m	0.25x0.25m
P 26	0.27m	0.25x0.25m
P 27	0.27m	0.25x0.25m
P 28	0.27m	0.25x0.25m
P 29	0.27m	0.25x0.25m
P 30	0.27m	0.25x0.25m
P 31	0.27m	0.25x0.25m
P 32	0.27m	0.25x0.25m
P 33	0.27m	0.25x0.25m
P 34	0.27m	0.25x0.25m
P 35	0.27m	0.25x0.25m
P 36	0.27m	0.25x0.25m
P 37	0.27m	0.25x0.25m
P 38	0.27m	0.25x0.25m
P 39	0.27m	0.25x0.25m
P 40	0.27m	0.25x0.25m
P 41	0.27m	0.25x0.25m
P 42	0.27m	0.25x0.25m
P 43	0.27m	0.25x0.25m
P 44	0.27m	0.25x0.25m
P 45	0.27m	0.25x0.25m
P 46	0.27m	0.25x0.25m
P 47	0.27m	0.25x0.25m
P 48	0.27m	0.25x0.25m
P 49	0.27m	0.25x0.25m
P 50	0.27m	0.25x0.25m
P 51	0.27m	0.25x0.25m

新79図 F III-018 B 住居跡平・断面図

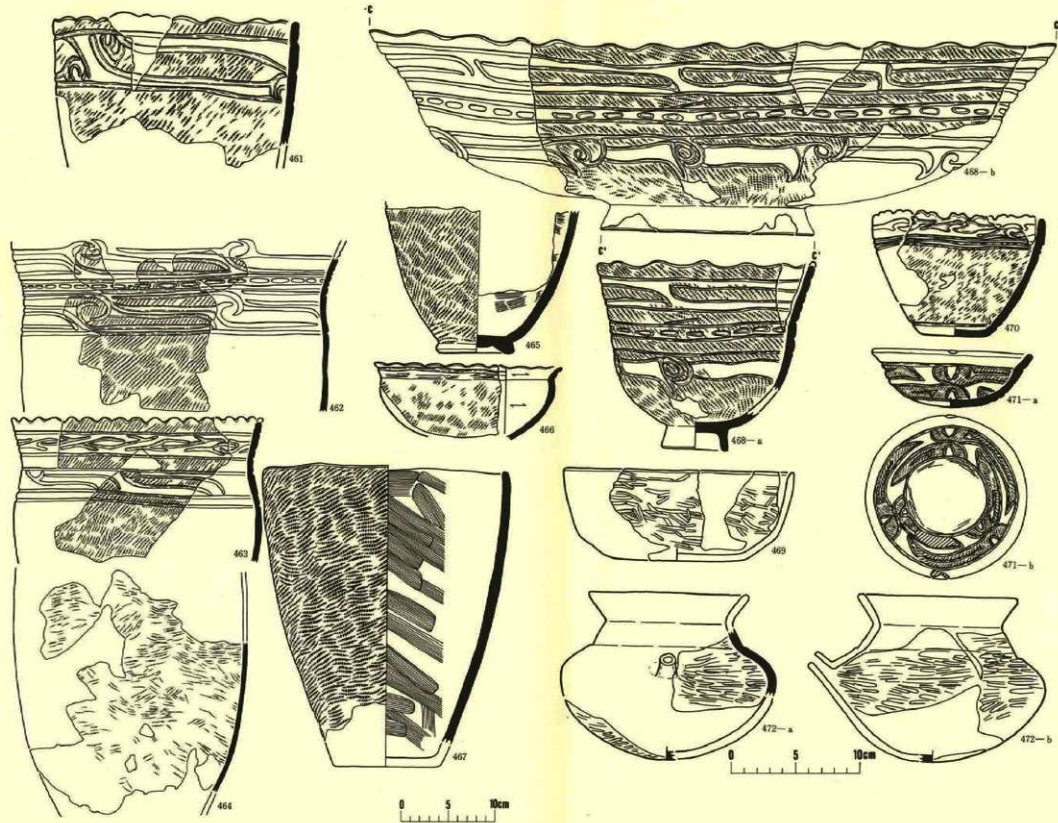


深さ	直径	深さ	直径	深さ	直径
P 1	0.30m x 0.32x0.30m	P76	0.05m x 0.10x0.06m	P120	0.12m x 0.09x0.08m
P 2	0.07m x 0.07x0.07m	P77	0.04m x 0.24x0.08m	P121	0.03m x 0.08x0.08m
P 3	0.08m x 0.20x0.15m	P78	0.12m x 0.11x0.09m	P122	平 明
P 4	0.23m x 0.20x0.18m	P79	0.10m x 0.14x0.12m	P123	0.08m x 0.22x0.20m
P 5	0.25m x 0.20x0.20m	P80	0.22m x 0.14x0.11m	P124	0.07m x 0.11x0.10m
P 6	0.28m x 0.27x0.26m	P81	0.12m x 0.18x0.08m	P125	0.04m x 0.11x0.06m
P 7	0.14m x 0.07x0.06m	P82	0.02m x 0.18x0.12m	P126	0.20m x 0.15x0.14m
P 8	0.10m x 0.19x0.19m	P83	0.11m x 0.09x0.07m	P127	0.21m x 0.45x0.19m
P 9	0.18m x 0.26x0.21m	P84	0.05m x 0.08x0.07m	P128	0.14m x 0.15x0.14m
P10	0.24m x 0.24x0.21m	P85	0.02m x 0.15x0.13m	P129	0.14m x 0.15x0.07m
P11	0.27m x 0.18x0.12m	P86	0.12m x 0.09x0.10m	P130	0.12m x 0.15x0.07m
P12	0.21m x 0.24x0.19m	P87	0.10m x 0.25x0.24m	P131	0.08m x 0.23x0.07m
P13	0.15m x 0.25x0.25m	P88	0.03m x 0.04x0.04m	P132	0.11m x 0.22x0.06m
P14	0.14m x 0.22x0.22m	P89	0.12m x 0.18x0.13m	P133	0.09m x 0.18x0.07m
P15	0.16m x 0.20x0.15m	P90	0.21m x 0.15x0.11m	P134	0.05m x 0.24x0.10m
P16	0.17m x 0.20x0.15m	P91	0.17m x 0.07x0.06m	P135	0.12m x 0.20x0.12m
P17	0.07m x 0.19x0.15m	P92	0.12m x 0.17x0.11m	P136	0.24m x 0.11x0.13m
P18	0.22m x 0.20x0.18m	P93	0.12m x 0.22x0.12m	P137	0.04m x 0.24x0.14m
P19	0.24m x 0.20x0.18m	P94	0.07m x 0.17x0.14m	P138	平 明
P20	0.28m x 0.28x0.18m	P95	0.02m x 0.08x0.04m	P139	0.04m x 0.11x0.08m
P21	0.20m x 0.17x0.14m	P96	0.12m x 0.18x0.08m	P140	0.22m x 0.17x0.15m
P22	0.11m x 0.19x0.13m	P97	0.02m x 0.11x0.08m	P141	0.02m x 0.07x0.07m
P23	0.04m x 0.08x0.08m	P98	0.05m x 0.09x0.07m	P142	0.08m x 0.10x0.10m
P24	0.15m x 0.09x0.08m	P99	平 明	P143	0.08m x 0.10x0.09m
P25	平 明	P100	0.05m x 0.33x0.22m	P144	0.05m x 0.33x0.22m
P26	0.21m x 0.07x0.04m	P101	0.02m x 0.08x0.07m	P145	0.02m x 0.08x0.07m
P27	0.14m x 0.08x0.07m	P102	0.11m x 0.12x0.08m	P146	0.11m x 0.12x0.08m
P28	0.18m x 0.09x0.09m	P103	0.20m x 0.18x0.11m	P147	0.20m x 0.18x0.14m
P29	0.13m x 0.09x0.07m	P104	0.22m x 0.24x0.14m	P148	0.22m x 0.24x0.14m
P30	0.07m x 0.12x0.10m	P105	0.04m x 0.12x0.10m	P149	0.04m x 0.12x0.10m
P31	0.08m x 0.15x0.11m	P106	0.21m x 0.23x0.12m	P150	0.21m x 0.23x0.12m
P32	0.10m x 0.07x0.05m	P107	0.11m x 0.09x0.06m	P151	0.11m x 0.09x0.06m
P33	0.08m x 0.11x0.11m	P108	0.15m x 0.18x0.08m	P152	0.15m x 0.18x0.08m
P34	0.11m x 0.14x0.10m	P109	0.10m x 0.14x0.10m	P153	0.10m x 0.14x0.10m
P35	0.10m x 0.11x0.08m	P110	0.20m x 0.18x0.14m	P154	0.20m x 0.18x0.14m
P36	0.10m x 0.20x0.07m	P111	0.19m x 0.18x0.12m	P155	0.19m x 0.18x0.12m
P37	0.08m x 0.20x0.05m	P112	0.12m x 0.14x0.11m	P156	0.12m x 0.14x0.11m
P38	平 明	P113	0.08m x 0.07x0.04m	P157	0.08m x 0.07x0.04m
P39	0.12m x 0.11x0.10m	P114	0.07m x 0.32x0.20m	P158	0.07m x 0.32x0.20m
P40	0.06m x 0.07x0.05m	P115	0.10m x 0.15x0.08m	P159	0.10m x 0.15x0.08m
P41	0.06m x 0.11x0.05m	P116	0.05m x 0.16x0.08m	P160	0.05m x 0.16x0.08m
P42	0.05m x 0.20x0.04m	P117	0.05m x 0.20x0.04m	P161	0.05m x 0.20x0.04m
P43	0.04m x 0.04x0.04m	P118	0.10m x 0.12x0.11m	P162	0.10m x 0.12x0.11m
P44	平 明	P119	0.12m x 0.13x0.08m	P163	0.12m x 0.13x0.08m
P45	0.15m x 0.11x0.07m	P120	0.12m x 0.13x0.08m	P164	0.12m x 0.13x0.08m
P46	0.03m x 0.18x0.08m	P121	0.02m x 0.18x0.12m	P165	0.02m x 0.18x0.12m
P47	0.04m x 0.22x0.13m	P122	0.11m x 0.17x0.17m	P166	0.11m x 0.17x0.17m
P48	0.02m x 0.04x0.07m	P123	0.10m x 0.12x0.12m	P167	0.10m x 0.12x0.12m
P49	0.03m x 0.08x0.06m	P124	0.11m x 0.13x0.10m	P168	0.11m x 0.13x0.10m
P50	0.04m x 0.11x0.11m	P125	0.02m x 0.12x0.10m	P169	0.02m x 0.12x0.10m
P51	0.13m x 0.15x0.13m	P126	0.11m x 0.13x0.08m	P170	0.11m x 0.13x0.08m
P52	0.04m x 0.11x0.10m	P127	0.11m x 0.08x0.07m	P171	0.11m x 0.08x0.07m
P53	0.05m x 0.08x0.05m	P128	0.11m x 0.10x0.09m	P172	0.11m x 0.10x0.09m
P54	0.10m x 0.10x0.06m	P129	0.15m x 0.07x0.05m	P173	0.15m x 0.07x0.05m
P55	0.16m x 0.22x0.21m	P130	0.02m x 0.06x0.05m	P174	0.02m x 0.06x0.05m
P56	0.16m x 0.20x0.06m	P131	平 明	P175	平 明
P57	0.06m x 0.08x0.06m	P132	平 明	P176	平 明
P58	0.06m x 0.08x0.07m	P133	0.06m x 0.08x0.07m	P177	0.06m x 0.08x0.07m
P59	0.08m x 0.08x0.06m	P134	0.02m x 0.10x0.08m	P178	0.02m x 0.10x0.08m
P60	0.06m x 0.08x0.05m	P135	0.20m x 0.17x0.04m	P179	0.20m x 0.17x0.04m
P61	0.02m x 0.04x0.04m	P136	0.08m x 0.07x0.07m	P180	0.08m x 0.07x0.07m
P62	0.01m x 0.14x0.09m	P137	0.12m x 0.11x0.10m	P181	0.12m x 0.11x0.10m
P63	0.04m x 0.18x0.09m	P138	0.11m x 0.07x0.06m	P182	0.11m x 0.07x0.06m
P64	0.08m x 0.23x0.14m	P139	0.01m x 0.08x0.07m	P183	0.01m x 0.08x0.07m
P65	0.09m x 0.20x0.10m	P140	0.02m x 0.07x0.07m	P184	0.02m x 0.07x0.07m
P66	0.09m x 0.20x0.10m	P141	0.02m x 0.22x0.12m	P185	0.02m x 0.22x0.12m
P67	0.09m x 0.18x0.13m	P142	0.02m x 0.11x0.10m	P186	0.02m x 0.11x0.10m
P68	0.17m x 0.21x0.14m	P143	0.13m x 0.23x0.23m	P187	0.13m x 0.23x0.23m
P69	0.16m x 0.11x0.08m	P144	0.02m x 0.13x0.13m	P188	0.02m x 0.13x0.13m
P70	0.05m x 0.12x0.12m	P145	0.04m x 0.07x0.04m	P189	0.04m x 0.07x0.04m
P71	0.16x0.10x0.10m	P146	0.13m x 0.08x0.08m	P190	0.13m x 0.08x0.08m
P72	0.13m x 0.07x0.06m	P147	0.01m x 0.13x0.10m	P191	0.01m x 0.13x0.10m
P73	0.21m x 0.08x0.07m	P148	平 明	P192	平 明
P74	0.11m x 0.06x0.05m	P149	0.02m x 0.04x0.04m	P193	0.02m x 0.04x0.04m
P75	0.10m x 0.13x0.09m	P150	0.07m x 0.07x0.07m	P194	0.07m x 0.07x0.07m

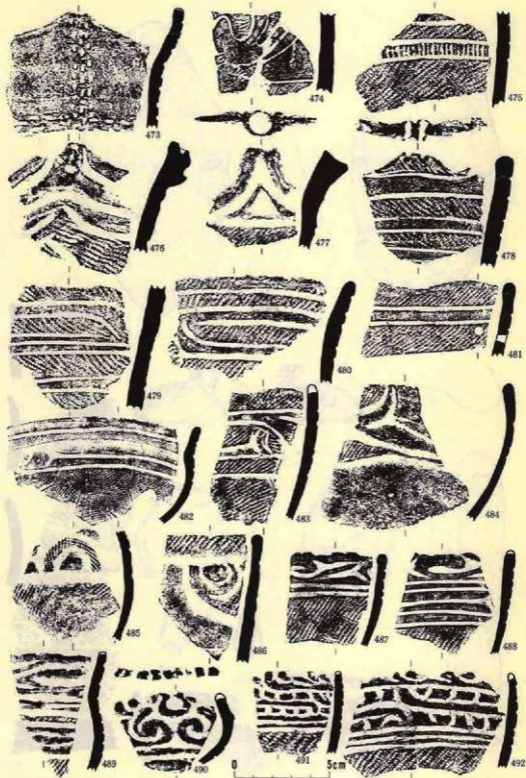


第81図 F III-019A-0住居跡ピット分布図・重複関係解析図

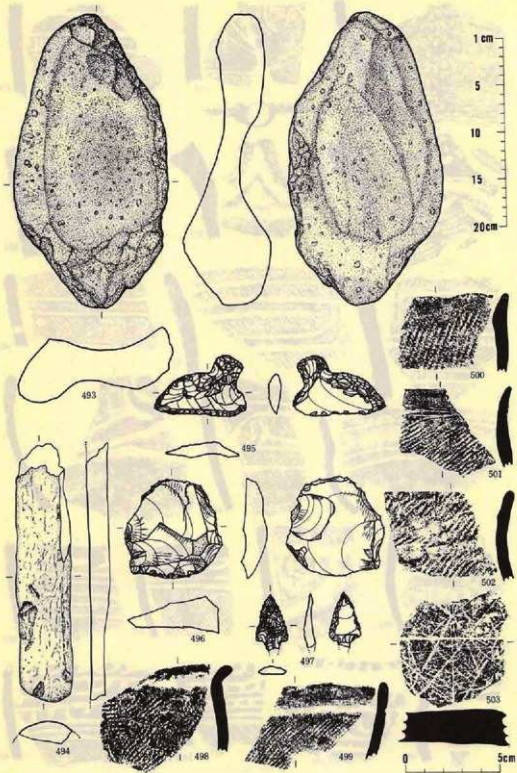
- 土層表記
1. 黒 粘 土
 2. 粘 土
 3. 粘 土
 4. 粘 土
 5. 粘 土
 6. 粘 土
 7. 粘 土
 8. 粘 土
 9. 粘 土
 10. 粘 土
 11. 粘 土
 12. 粘 土
 13. 粘 土
 14. 粘 土
 15. 粘 土
 16. 粘 土
 17. 粘 土
 18. 粘 土
 19. 粘 土
 20. 粘 土
 21. 粘 土
 22. 粘 土
 23. 粘 土
 24. 粘 土
 25. 粘 土
 26. 粘 土
 27. 粘 土
 28. 粘 土
 29. 粘 土
 30. 粘 土



第82图 F III-019住居跡出土遺物(1)



第83图 F III—019住居跡出土遺物(2)



第84圖 F III—019住居跡出土遺物(3)

〔形状〕 FⅢ-019 A住居跡は直径5.7mほどのや、角張った円形の竪穴住居跡であり、検出面からの深さは0.55mである。B～D住居跡は各柱穴列によって、いずれも円形に近い竪穴住居跡と思われる。各住居跡の規模は、Bから順に4.0×4.3m、3.4×2.9m、2.6×2.7mである。

〔内部施設〕 柱穴はFⅢ-019 A住居跡の床面にB～D住居跡に関連する柱穴を含めて多数認められる。柱穴中の埋土は暗褐色または黒褐色土がほとんどである。柱穴の規模からは、上層構造に関連する大きい柱穴と壁際の土留め施設に関連する小さい柱穴に別れる。大きい柱穴では、A住居跡のP₈、P₉、P₁₀₇、P₉₃、P₁₄₂、P₁₄₂、P₁₇、P₁₆、P₁₈、P₁₉の北東から南西方向に長い六角形、B住居跡のP₁、P₂、P₂₀、P₂₁、P₁₀、P₁₂の南北方向の六角形に配置されるものが想定される。また、C住居跡ではP₁₄₉、P₁₁₀、P₁₁、P₃を結ぶ北東から南西方向に長い四角形、D住居跡ではP₇、P₄、P₁₁₂、P₅₄、P₁₄₃を結ぶ五角形状の配置が考えられる。

炉跡は住居跡の中央部にあたる位置にあり、直径0.60～0.77mの卵形をなしている。焼土の周辺に3個の礫が並んでおり、破壊された石囲い炉と思われる。焼土層は2層からなり、2期以上の重複が推定される。

炉跡の南0.5mには、長さ0.52m、幅0.42m、厚さ0.15mの石英安山岩が炉に面して垂直に立つ立石がある。床面に0.12mほど埋め込まれ、高さは0.40mである。また、すぐ北側には立石の抜き取り穴と思われる楕円形のP₁₅₈が長軸を平行にして並んでいる。ピットの大きさは0.45×0.20m、深さは0.30mである。A～Dの各住居跡には位置の移動があるものの、立石の伴っていた可能性が伺われる。

貼床は炉跡を含む北東に直径2.3～2.7mの範囲に認められ、貼床の一部は柄のように東に延びている。貼土の厚さは0.05mほどであるが、どの住居跡に伴うものか明らかでない。住居跡の平面形からはFⅢ-019 B住居跡がもっとも可能性が高いようである。

〔埋土〕 全体的に自然堆積に近い様相を示しているが、最下部や中～上層の一部には貼土や掘り込みの痕跡がみられる。

〔遺物〕 土器は461～463、465、466、468～472、478～492、498～501が縄文時代晩期前葉のものである。このうち、461、462、468、471、448～485などは横S字状の入組文や玉抱き三叉状の文様が多样されており、大洞B式直前の土器と思われる。463、470、487～489は三叉文の施文される土器であり、大洞B式に比定されよう。470はX字状文をもち、大洞B式かB～C式に入れよう。491、492は羊歯状文が施される大洞B～C式、465、466、469、498～501は大洞B式やB～C式の土器に共伴するものとみられる。472は大洞B式直前の土器に入るかもしれない。

473は波状口縁の頂部にむかって三条の列点文が胴体部から施され、474には彎曲する沈線

が描かれている。文様の特徴から後期前葉に入り、前者は十腰内I式に、後者は堀ノ内I式などにみられる。475～477は里浜貝塚などに類例があり、478などよりや、古い後期末の土器であろう。502、503は後・晩期の土器かもしれない。503は木ノ葉荘痕のある底部片である。

461～492、498～503の土器のうち、467は住居跡北西側の中層から埋葬として出土し、北東の同一層かや、下層から471が倒立して出土している。また、立石の南側から468が発見されている。そのほか、中～上層部からは461、462、貼床北側のP₇₂付近からは422が出土している。

石器のうち、493は扁平な安山岩溶岩礫の両面を用いた石皿である。494は石棒の破片、495は横型の石匙、496はつまみのない切削器である。有茎石鏃の497は茎部を折損している。

〔時期〕 土器を主とする遺物から各住居跡はいずれも縄文時代晩期前葉の早い時期と推定される。また、埋土中に想定される未確認の住居跡も同じ頃と考えられる。

FⅢ-0110住居跡（第85図）

〔位置〕 調査区西側のFⅢ-014～019A～D・0112～0116の各住居跡とFⅢ-017掘立柱建物跡に囲まれている。

〔検出面〕 FⅢ区基準土層第15層の下部及び黒褐色土の攪乱層下部で検出された。

〔保存状況〕 東半部は開田工事の際に床面まで削平されている。残存部分も土層の攪乱が著しく、原形はほとんど不明である。

〔重複〕 FⅢ-0111住居跡の埋土を床の一部としている。そのほか、いくつかの柱穴が重複しているが、埋土による新旧関係は不明である。

〔形状〕 2基の地床炉とこれを囲む柱穴群が残存するのみで形状は不明である。P₁、P₂、P₃、P₅、P₇、P₉、P₁₀、P₁₃などを支柱穴とし、中央部の南北に並ぶ1棟の柱居跡を想定したが、あるいは2棟になるかもしれない。床面は比高0.40mの南下がりとなる。

〔内部施設〕 柱穴の埋土はいずれも黒褐色か黒色の土層であるが、詳細は不明である。

炉跡は2基の地床炉が南北に1.50m離れて並んでいる。南側の炉跡は直径0.35mの円形、北側では直径0.75×0.50mほどの楕円形である。いずれもFⅢ-0110住居跡の埋土上に築かれており、後者はP₁₁、P₁₂によって切られている。

〔埋土〕 旧来の埋土層は床面に僅かに残存し、黒褐色のシルト質土である。他の大部分は新しい時期の攪乱土である。

〔遺物〕 確認された遺物はない。

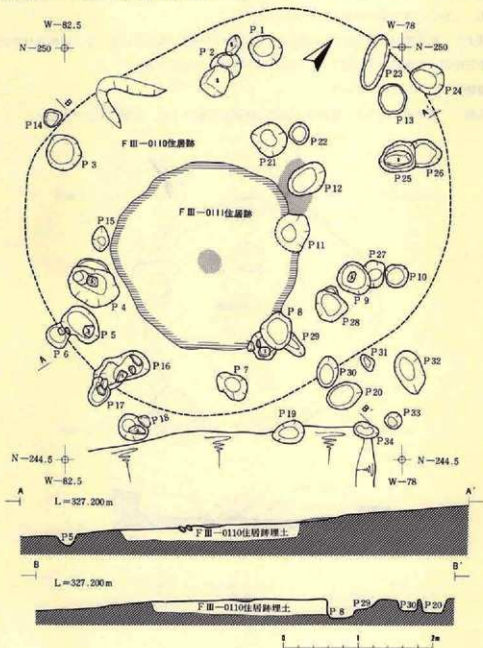
〔時期〕 明らかでない。

FⅢ-0111住居跡 (第85・86図)

〔位置〕 FⅢ-0110住居跡とほぼ同位置にある。

〔検出面〕 FⅢ-0110住居跡の床面に検出された。

〔保存状況〕 全形が比較的よく保たれている。



第85図 FⅢ-0110・0111住居跡平・断面図

〔重複〕 住居跡埋土の上面がFⅢ-0110住居跡の床面となっているほか、P₈、P₁₁が重複しているがほぼ同色の埋土のため新旧関係が確認されていない。

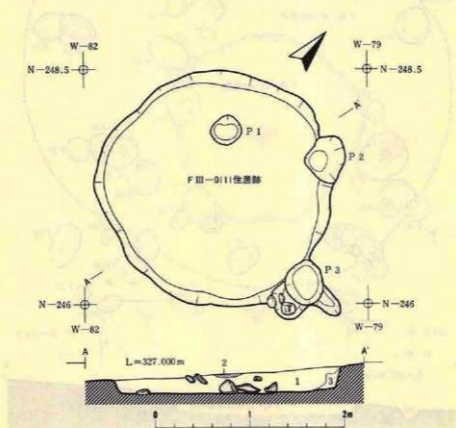
〔形状〕 直径2.5mの円形竪穴住居跡である。検出面からの深さは0.2である。

〔内部施設〕 住居跡北西の床面から直径0.30×0.34mの柱穴と思われるピットが検出されている。しかし、住居跡に伴うものか明らかでない。

〔埋土〕 北壁際の一部を除いて黒褐色シルト質土の単層で占められている。中央部付近には石英安山岩の垂角礫が多く混入し、人為堆積の様相を示している。

〔遺物〕 1点も出土していない。

〔時期〕 遺物がないうえ、重複する遺構の時期が不明であり、時期は特定できない。



	深さ	直径
P 1	0.44m	0.34×0.36m
P 2	0.14m	0.44×0.36m
P 3	0.27m	0.48×0.40m

- | | |
|-----------------|-------------------------------|
| 1. 黒 褐 7.5YR5/1 | 粘土質シルト |
| 2. 黄 褐 5YR5/3 | 粘土質シルト |
| 3. 黒 褐 10YR5/1 | 粘土質シルト |
| | 埋土層境～黒褐色部もあり
部分的に黒褐色もまじる埋土 |

第86図 FⅢ-0111住居跡平・断面図

F III—0112住居跡（第87～89図 第1～3表 写真図版119）

〔位置〕 調査区西側に位置しており、南にF III—018住居跡がある。

〔検出面〕 F III区基準土層第3層の下部で検出された。

〔保存状況〕 南半がF III—018A住居跡及び道路遺構により破壊されている。

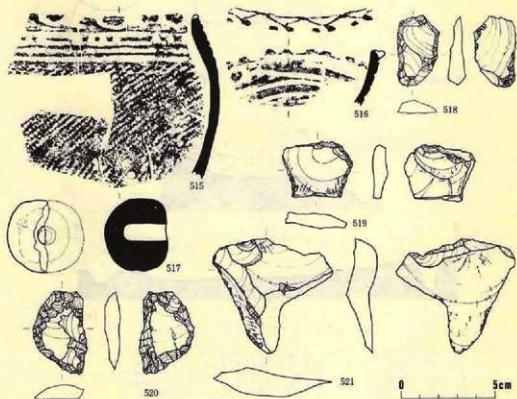
〔重複〕 F III—018A住居跡と道路遺構に重複し、これらより新しい住居跡である。

〔形状〕 北西から南東方向に2.5mほどの隅丸方形形状をなしている。検出面からの深さは0.20mである。

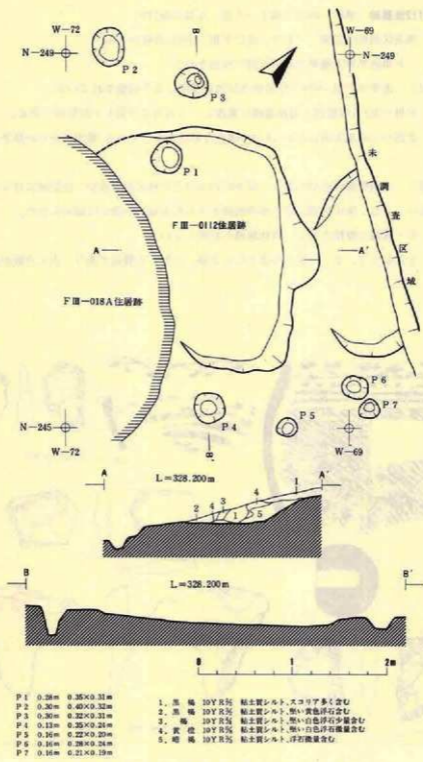
〔内部施設〕 北西壁際に直径0.34m、深さ0.10mほどの柱穴があるが、住居跡に伴うものか明らかでない。また、床中央部には炉跡の痕跡とみられる焼土が微かに認められた。

〔埋土〕 や、複雑な堆積を示し、自然堆積か判明しない。

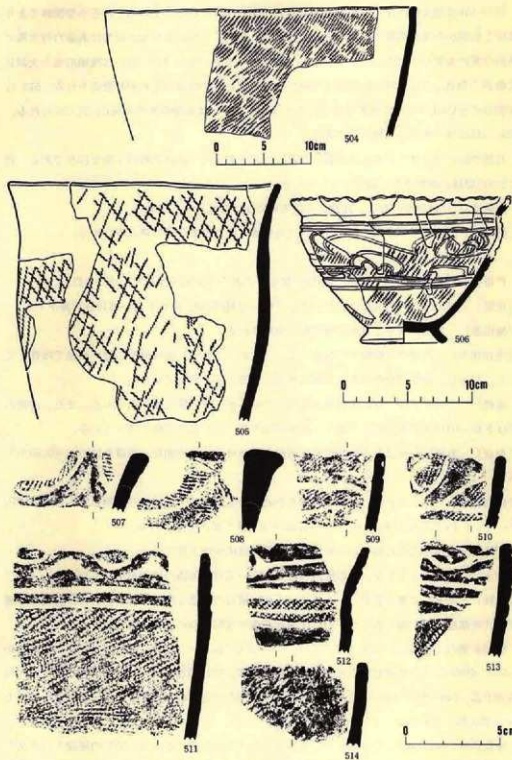
〔遺物〕 主として1、2、5層から出土した土器、石器、土製品であり、出土点数が比較的多い。



第87図 F III—0112住居跡出土遺物（1）



第88図 F III-0112住居跡及び周辺ピット平・断面図



第89图 F III-0112住居跡出土遺物(2)

504～516は縄文時代後～晩期の土器である。505は網目状燕糸文の施される小型深鉢であり文様と形状から後期前葉の土器に入れられよう。506は一種の雲形文が胴部にある台付土器で晩期中葉の大洞C₁式に比定される。507、508は後期末頃、509、510、512は晩期前葉の大洞B式直前の型式、511、513は三叉文の盛行する大洞B式の時期がそれぞれ想定される。515は大洞B式とC₁式の間位置付けられそうであり、516は晩期中葉の大洞C₁式とみられる。504、511は後～晩期の粗製土器である。

石器の518～521はいずれも切削器である。このうち518、520は比較的丁寧な作りである。特に520は周縁が調整され、両刃をなしている。

土製品517は鏡頭型をなし、底部から中央部にかけて穿孔されている。

〔時期〕 出土土器が多期にわたり、縄文時代後～晩期中葉の住居跡とみられる。

FⅢ—0113住居跡（第90～93・109図 第1～3表 写真図版28・29・120・121）

〔位置〕 河岸段丘の西側に位置し、北にFⅢ—014住居跡、南にFⅢ—0114住居跡がある。

〔検出面〕 FⅢ区基準土層第15層下部に検出される。

〔保存状況〕 西側が河岸段丘の崩落によって失われている。他は原形に近い状態で残存している。しかし、南側部分の境界は土層の判別が困難で確認されていない。

〔重複〕 北側がFⅢ—014住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。また、南側の壁はFⅢ—0114住居跡の埋土を切り、北東壁はFⅢ—033焼土遺構を切っている。

〔形状〕 直径5.5 mほどの円形竪穴住居跡と思われる。検出面からの深さは0.35～0.50 mである。

〔内部施設〕 柱穴はFⅢ—0113住居跡を含めて11基があり、上層構造と関連するピットはP₁、P₃、P₃'、P₅である。柱穴の埋土は住居跡の埋土第7層と同様である。

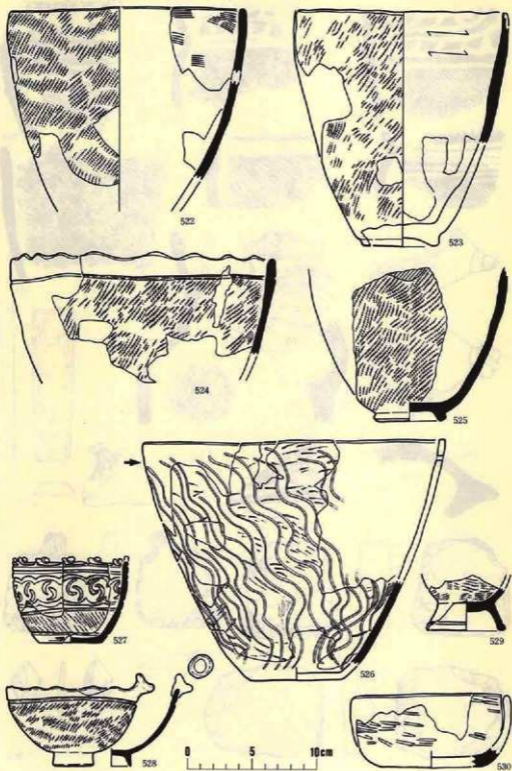
炉跡は中央部に直径1.54×1.60 mほどの円形の地床炉が1基である。

〔埋土〕 8層よりなるが、木根攪乱痕の8を除いて自然堆積の様相を示している。

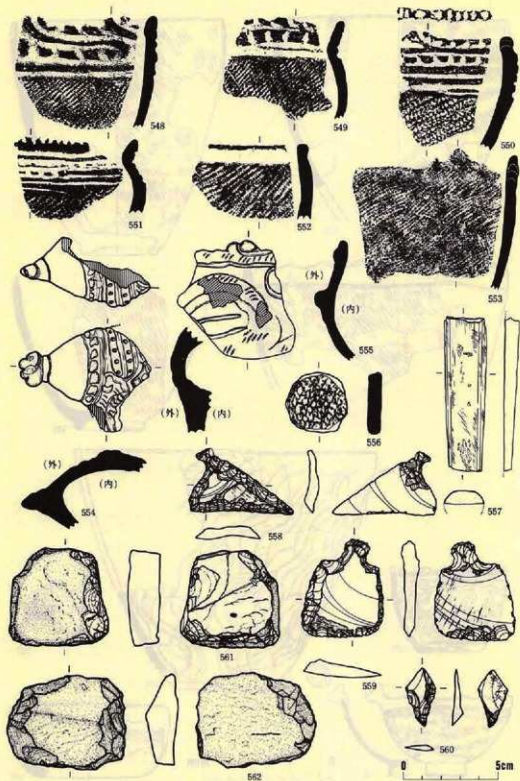
〔遺物〕 主として第6層から出土しているが、層毎の特徴は明確でない。土器はほとんど縄文時代晩期前葉の土器であるが、中には前期前葉や後期初頭の土器も混在している。

晩期前葉の土器は522～525、527～531、540～553である。文様等の特徴から528、531、540～542、553のような晩期初頭の大洞B式直前の土器、524、527、543～547のような大洞B式相当の土器、548～550、552のような大洞B—C式相当の土器が含まれる。551は晩期中葉の大洞C₁式土器と思われる。

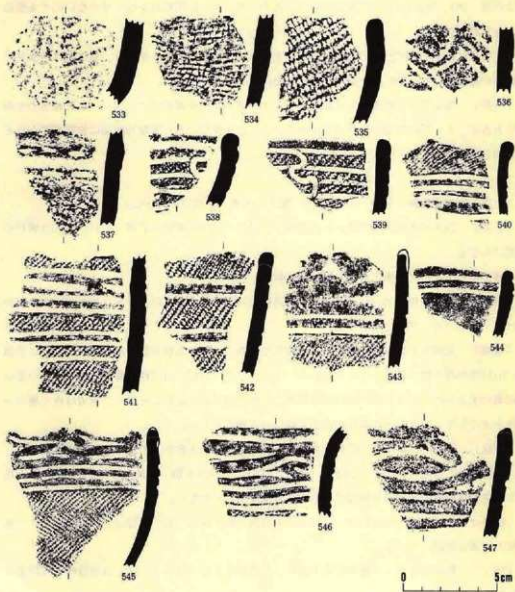
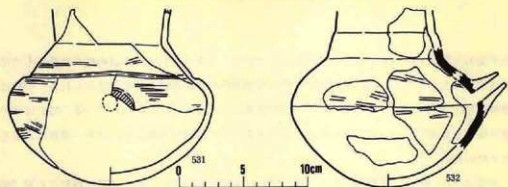
晩期以外の土器には、533の前期前葉の春日町式に比定される土器、537の隆線と列点文をもつ後期初頭の土器、538の縄文の地文に数条の横行する沈線と蛇行する沈線を直交させる後



第91圖 F III-0113住居跡出土遺物 (1)



第92图 F III-0113住居跡出土遺物(2)



第93图 F III-0113住居跡出土遺物(3)

期中葉の土器などがある。さらに 526 のように胴部に 2 条を単位とした斜め蛇行沈線をもつ後期後葉頃の土器がある。537 に類似する例は八天遺跡や鬼柳西表遺跡などにみられる。538 は加曾利 B₁ 式土器に併行する土器であり、類例は東北・北海道でも認められている。526 は西の浜貝塚の 2 類土器にや、似た例があるようである。553 は後期後葉、531 は中～後期に入るものと思われる。

石器は 557～562 の 12 点が出土している。557 は小型石棒の破片、558、559 は横型の石匙、560 は石鎌、561、562 は円板状石製品である。このうち、561 は円形状をなしていないので未製品かもしれない。

土製品には 554 の中空土偶左腕部、555 の大型中空土偶の顔面破片があり、後者には朱塗りの痕跡が認められる。556 は土器片を利用した円板状土製品である。

〔時期〕 第 6 層から出土する土器のほとんどが縄文時代晩期前葉の大洞 B—C 式相当の土器であるが、その間に無遺物の第 7 層があるのでこれよりや、古い晩期初頭頃に位置付けられるものと推定される。

F III—0114 住居跡 (第 94・96・109 図 第 1～3 表 写真図版 30・122)

〔位置〕 調査区西側の河岸段丘辺に位置する F III—0113 住居跡と F III—0115、0116 住居跡の間にあたる。

〔検出面〕 F III 区基準土層第 15 層下部で検出した。

〔保存状況〕 F III—0113 住居跡と同様に西壁が河岸段丘の崩落により失われている。ほかはほぼ原形に近い状態で残存する。

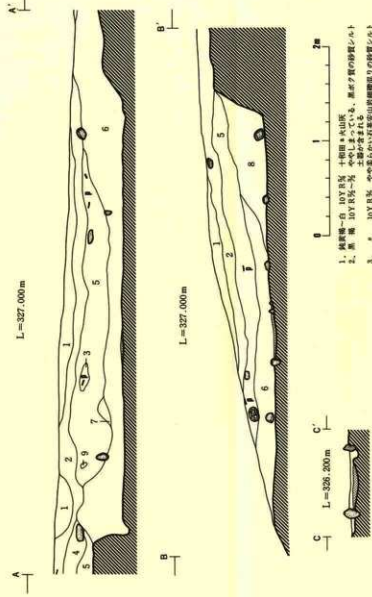
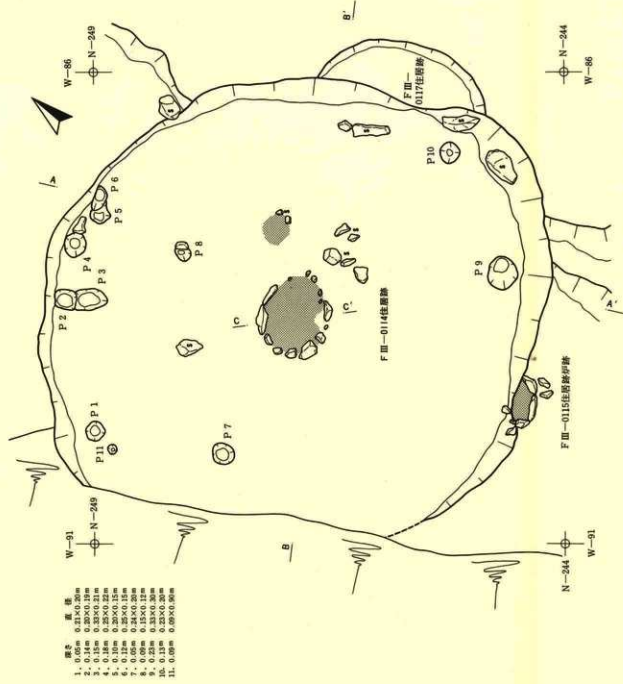
〔重複〕 北側は F III—0113 住居跡に重複している。土層の堆積状況からは埋没した後に F III—0113 住居跡が築かれたようにみられる。また、F III—0115、0117 住居跡にも重複しているが前者の床と炉の一部は F III—0114 住居跡によって破壊されてこれより古く、後者は埋土層の一部を床にしていることから本住居跡より新しいと推定される。

〔形状〕 直径 5.30 m ほどの円形状をなすと思われる。検出面からの深さは 0.62 m である。

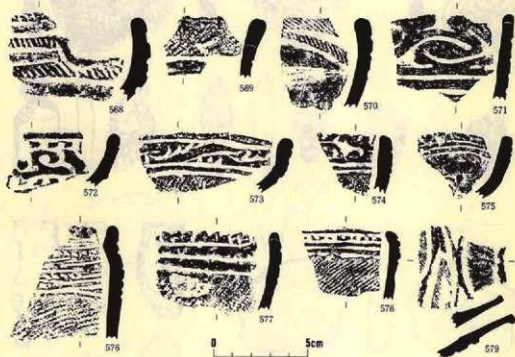
〔内部施設〕 柱穴状のピットは P₁～P₁₀ であるが、P₁₀ は F III—0113 住居跡の P₁₅ である。埋土は住居跡の埋土第 10 層と同質であるが、詳細は明らかでない。

炉跡は直径 0.78×0.85 m のほぼ円形をなす石圍い炉である。石の一部はとりざられ、すぐ東側の床面に散乱している。

〔埋土〕 部分的に 2・3 層が介在するが、全体では 5 層からなり、ほぼ自然堆積の様相を示している。

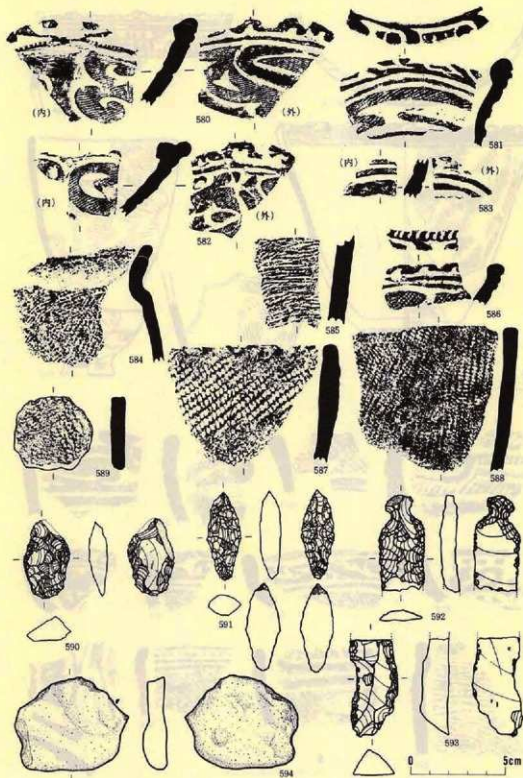


第94図 F III-0114住居跡平・断面図



第95図 F III-0114住居跡出土遺物 (1)

(拓本は断面の下部部)



第96图 F III-0114住居跡出土遺物(2)

〔遺物〕 主として4・9層から出土しており、その大部分は土器である。採集段階で混合しているが、9層出土遺物が4層のものより古いことが確認されている。

9層出土の土器は、564、569～576など大多数が縄文時代晩期前葉の土器であるが、567の小型台付土器や568のように縄文時代後期～末葉頃の土器片も少数含まれている。また、4層では577、578の注口土器、563、580～583、586のようにや、新しい縄文時代晩期中葉の大割C1式相当の土器が主体をなしている。このうち、580、582、583などでは一部に朱塗りの痕跡がみられ、内外に雲形文が施されている。565、566、587、588、589はそれらに伴う粗製土器片である。そのほか、埋土中から出土した小型の台付鉢型土器652がある。胴中央部に横線区画された縄文帯が廻り、縄文帯にコブが伴うことから縄文時代後期後葉に入るとみられるが、他からの流れ込みであろうと思われる。

石器では590の小型スクレーパー状の打製石器、591の両頭の石錐、592、593の石匙破片、594の円盤状石製品の未製品などが出土している。591の石錐は、上方の先端部が使用によって著しく磨滅している。土製品には、589の円板状土製品1点が出土している。

〔時期〕 床面から遺物がほとんど出土していないため、時期を特定することが困難である。遺物や埋土の状況からFⅢ-0113住居跡より古い、かなり近接する時期の遺構と推定される。

FⅢ-0115住居跡（第97～100・109図 第1・3表 写真図版123）

〔位置〕 調査区西側の河岸段丘辺に位置し、すぐ北側にFⅢ-0114住居跡、南側にFⅢ-0116住居跡がある。

〔検出面〕 FⅢ-0114、FⅢ-0116の住居跡と同様、FⅢ区基準土層第15層下部であるが、両住居跡の床面検出段階で確認された。

〔保存状況〕 北半がFⅢ-0114住居跡によって破壊されて消失している。南壁から西壁にかけては黒褐色土層が厚く堆積しており、壁の存在は明らかでない。

〔重複〕 FⅢ-0114住居跡、FⅢ-0116住居跡と重複している。前者は本住居跡を破壊しているので明らかにこれより古く、後者は床面に近い所から出土した遺物が比較的新しく、や、時代の下の可能性がある。

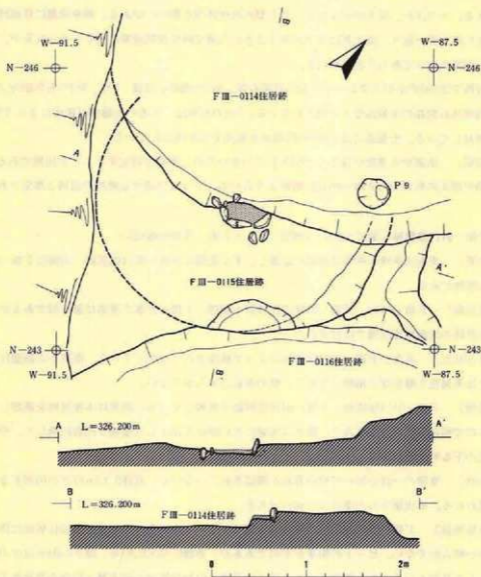
〔形状〕 東壁の一部を除いて壁の存在が確認されていないが、直径3.10mほどの円形をなすと思われる。検出面からの深さは0.40mである。

〔内部施設〕 FⅢ-0116住居跡に重複する部分にピットがあるが、FⅢ-0115住居跡に伴うものか明らかでない。ピットの南東が不明であるが、直径0.35×0.93m、深さ0.04mほどの円形をなす皿型となるものを推定される。埋土はFⅢ-0114住居跡の最下層と同様の黒褐色土である。炉跡は、FⅢ-0111住居跡によって破壊された石囲い炉が床の中央部に残存する。直径

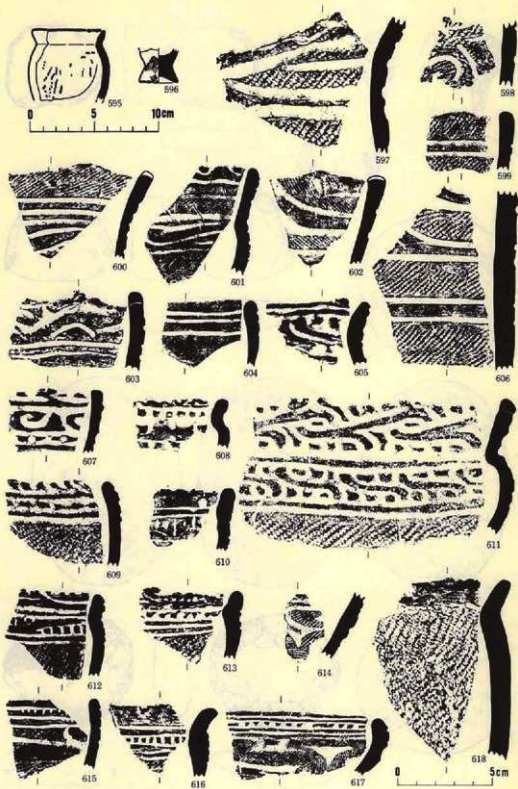
0.60mほどの円形とみられる。

〔埋土〕 最下層にはFⅢ-0114住居跡と同様に、黒褐色の細礫が混じるシルトであるが、詳細は不明である。擾乱を受けていないところは、ほぼ自然地積に近い様相を示している。

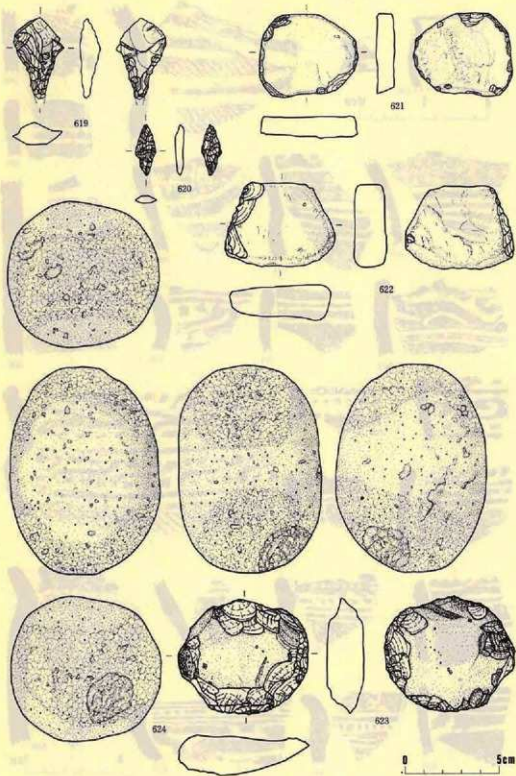
〔遺物〕 縄文時代晩期前葉の土器を主体とし、中葉頃までの遺物である。597～599、602～606などは文様の特徴から縄文時代晩期初頭頃に位置付けられよう。600、601、603～605は同じ晩期の前葉に属する大洞B式に相当し、607～611は大洞B-C式に比定される。612、616、



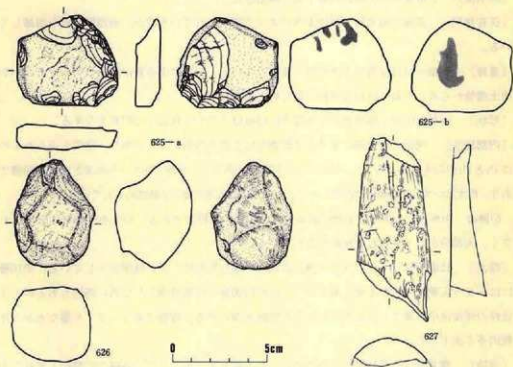
第97図 FⅢ-0115住居跡平・断面図



第98图 F III-0115住居跡出土遺物 (I)



第99圖 F III—0115住居跡出土遺物(2)



第100図 F III-0115住居跡出土遺物(3)

618などもほゞ近い時期と思われる。617は晩期中葉の大洞C1式に比定されよう。595、596は無文の小型鉢型土器であるが、いずれも晩期前葉のものとみられる。

石器は9点が出土している。619は扁平な頭をもつ打製の石錐、620は小さな有茎の打製石鏃、621～623、625は打製の円板状石製品である。このうち、622は扁平な台形状の礫の一边を打ち欠いただけの末製品と思われ、625は二辺を打ちかいているが形状が整っていないことから同様に未製品とみられる。後者では火をうけた痕跡があり、画面の一部に煤が付着している。624はや、細長い擦り石であり、両端に磨擦面をもつ。626は小型の擦り石であるが、全体に角張り、不整な楕円状をなしている。627は大型の磨製石棒の断片である。

〔時期〕 住居跡の重複関係や出土遺物から、縄文時代晩期初頭～前葉の住居跡と推定される。

F III-0116住居跡(第101～109図 第1・3表 写真図版29・124～128)

〔位置〕 調査区西側の河岸段丘辺に位置し、すぐ北西にF III-0115住居跡をはじめとする多くの住居跡がある。

〔検出面〕 FⅢ区基準土層第15層下部で検出された。

〔保存状況〕 遺構の南東側が開田工事によって削平されているほか、南西側の壁も消滅している。

〔重複〕 FⅢ—0115住居跡と北西側で重複している。土層による新旧関係は明らかでないが出土遺物からみてFⅢ—0116住居跡が新しいとみられる。

〔形状〕 直径5.90m、検出面からの深さ0.65mほどのや、角張った円形を呈する。

〔内部施設〕 床面の中央部に2基、北壁寄りに1基の円形ピットがあり、柱穴とみられるのはP₁とP₂中の小さいピット、P₃中のピットなどである。P₁を除く小ピットの深さはほぼ同様であり、埋土はいずれも黒褐色の砂質シルトである。P₂には歪角礫が1個埋められている。

炉跡は、中央部に位置する直径0.80mのほぼ円形の石囲炉である。炉床を囲む石は全体に小さく、大部分が取りさらされるか動かされている。

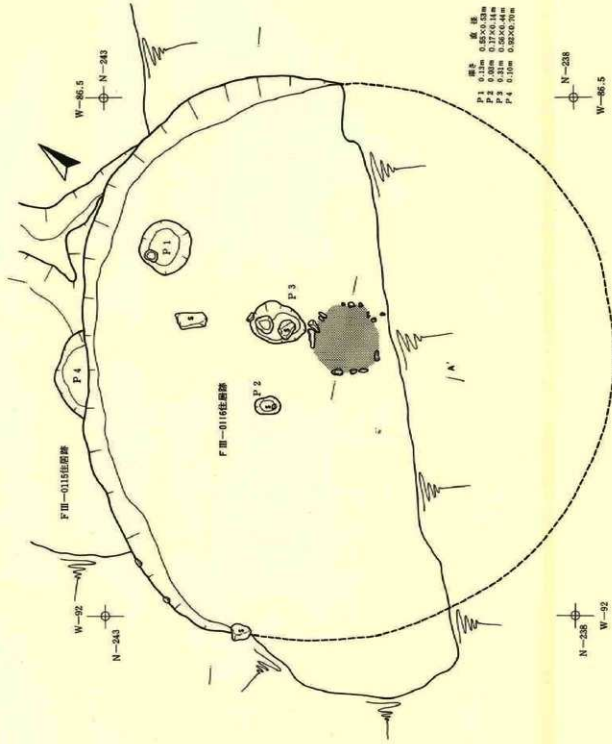
〔埋土〕 12層からなるが、後世の擾乱層のほかは自然堆積に近い様相を示している。第10層にはかなり広範囲にわたる焼土層があり、他の住居跡の付属遺構としての可能性もあるが、住居跡の埋没途中に棄てられたものか焚火の痕跡とみられる。遺物は第3・4・6層などから比較的多く出土している。

〔遺物〕 縄文時代晩期初頭から中葉にいたる土器をはじめとして、各種の石器や土製品が出土している。明確な対比はできないが、下部の埋土中に新期の遺物が多く含まれる傾向がみられる。

土器は628～709であるが、文様等の特徴から次のように分けられる。深鉢型土器では、631が縄文時代晩期前葉の大洞B—C式であり、628、629の小さいくびれのある土器も同時期かもしれない。630、632のくびれない深鉢型土器は、633とともに時期は特定できない。634～636は壺型土器である。634は胴部に単節の斜縄文が施される中型の壺、635は無文で器表面のよく研磨された小型の丸胴壺、636はや、胴長の無文壺で比較的粗雑なつくりである。

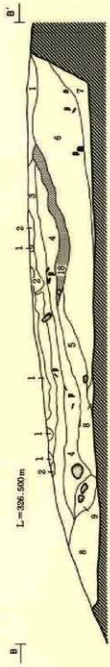
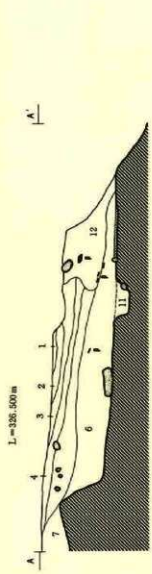
637、639、641、643、645、647、649は各種の古付土器であり、各時期に渡るものが含まれる。641は縄文時代晩期初頭の大洞B₁式に、643、649は晩期前葉の大洞B—C式に、637、645、647は晩期中葉のC₁式にそれぞれ比定される。639は無文の小型製品であるが、上記のいずれかの時期に伴出するものと思われる。これらのうち、641、643は煮沸のためか、外面には煤が広く付着している。647は接合破片の色調が異なる資料であり、図中の縦線部分が黒色、他は淡黄灰褐色をおびている。破損後の埋没状況によって色の違いの生ずる事を示す一例である。

そのほか、638、644のような無文の小型浅鉢型土器、642、646、648のような文様付きの中小型浅鉢型土器や640、650の小型深鉢型土器がある。このうち、640は晩期前葉の大洞B式、646は晩期前葉の大洞B—C式にそれぞれ比定されるであろう。648は同時期かや、時期の降



遺構 敷 表

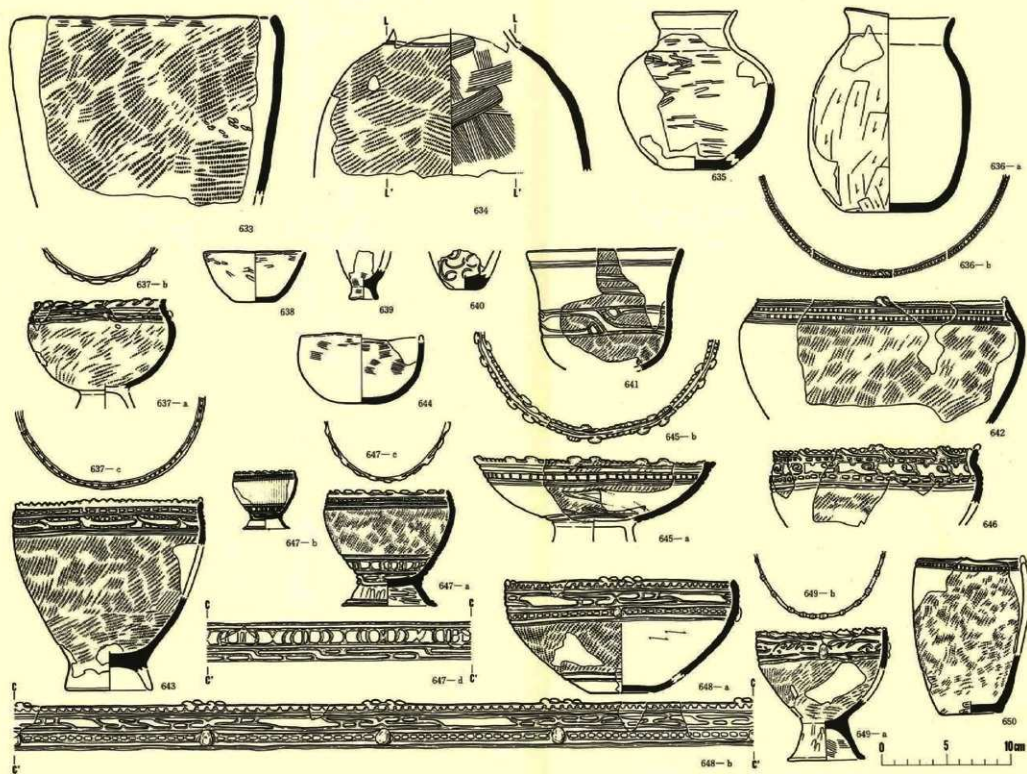
P1	0.250x0.250m
P2	0.200x0.200m
P3	0.210x0.260x0.44m
P4	0.210x0.260x0.30m



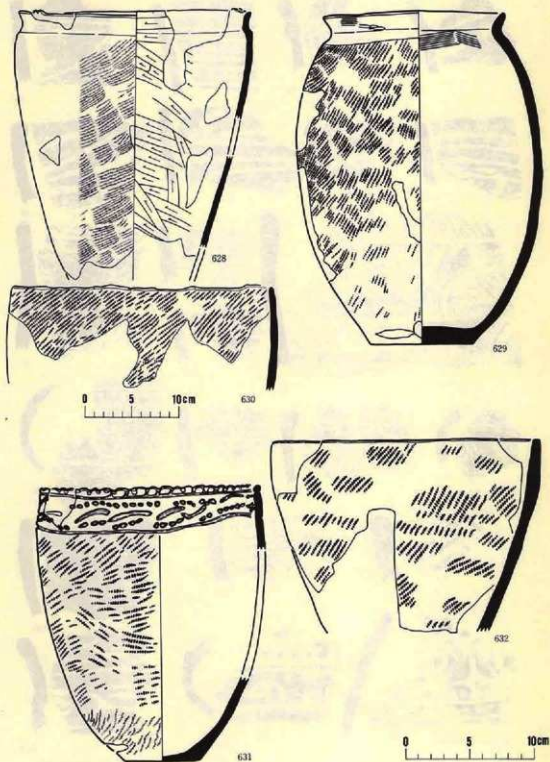
C L=326,500m C'

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 1. 溝 | IVV 灰 | 1. 溝 | IVV 灰 |
| 2. 溝 | IVV 灰 | 2. 溝 | IVV 灰 |
| 3. 溝 | IVV 灰 | 3. 溝 | IVV 灰 |
| 4. 溝 | IVV 灰 | 4. 溝 | IVV 灰 |
| 5. 溝 | IVV 灰 | 5. 溝 | IVV 灰 |
| 6. 溝 | IVV 灰 | 6. 溝 | IVV 灰 |
| 7. 溝 | IVV 灰 | 7. 溝 | IVV 灰 |
| 8. 溝 | IVV 灰 | 8. 溝 | IVV 灰 |
| 9. 溝 | IVV 灰 | 9. 溝 | IVV 灰 |
| 10. 溝 | IVV 灰 | 10. 溝 | IVV 灰 |
| 11. 溝 | IVV 灰 | 11. 溝 | IVV 灰 |
| 12. 溝 | IVV 灰 | 12. 溝 | IVV 灰 |
| 13. 溝 | IVV 灰 | 13. 溝 | IVV 灰 |
- 上層は粘土状にしてあるが硬くしまで心
 2層はIVV灰の層で、IVV灰の層が
 2層にIVV灰の層が重なっている
 3層はIVV灰の層で、IVV灰の層が
 3層にIVV灰の層が重なっている
 4層はIVV灰の層で、IVV灰の層が
 4層にIVV灰の層が重なっている
 5層はIVV灰の層で、IVV灰の層が
 5層にIVV灰の層が重なっている
 6層はIVV灰の層で、IVV灰の層が
 6層にIVV灰の層が重なっている
 7層はIVV灰の層で、IVV灰の層が
 7層にIVV灰の層が重なっている
 8層はIVV灰の層で、IVV灰の層が
 8層にIVV灰の層が重なっている
 9層はIVV灰の層で、IVV灰の層が
 9層にIVV灰の層が重なっている
 10層はIVV灰の層で、IVV灰の層が
 10層にIVV灰の層が重なっている
 11層はIVV灰の層で、IVV灰の層が
 11層にIVV灰の層が重なっている
 12層はIVV灰の層で、IVV灰の層が
 12層にIVV灰の層が重なっている
 13層はIVV灰の層で、IVV灰の層が
 13層にIVV灰の層が重なっている

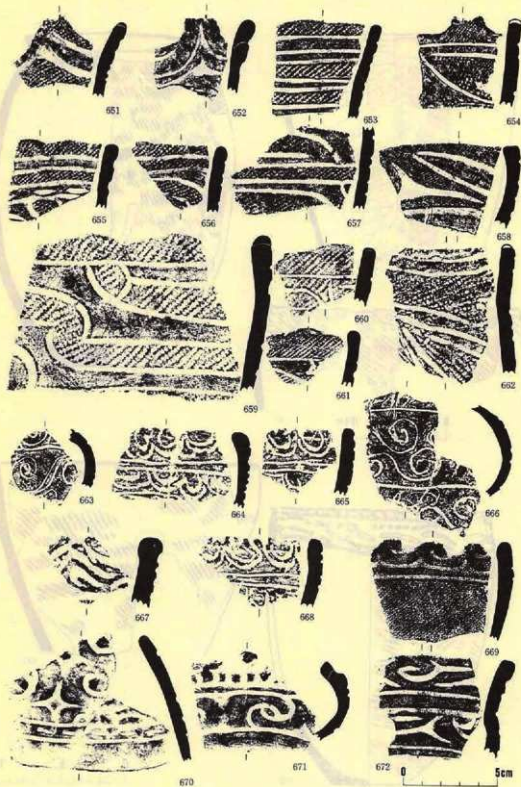
第10図 F III-0116住居跡平・断面図



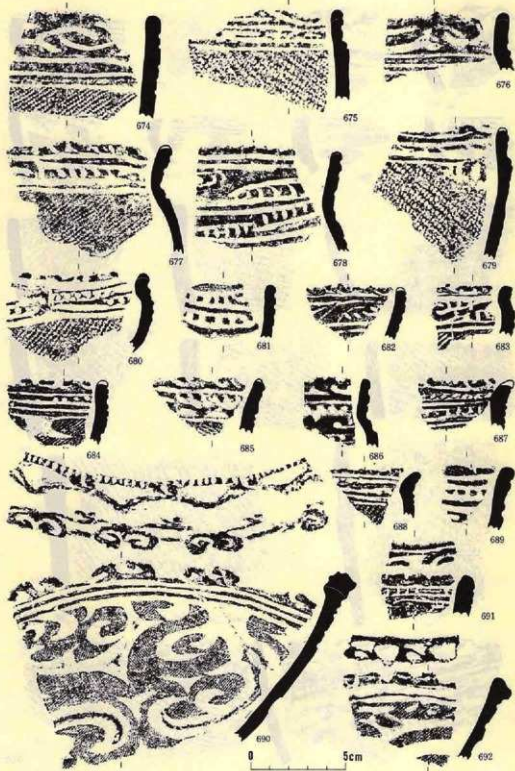
第102图 F III-0116住居跡出土遺物(1)



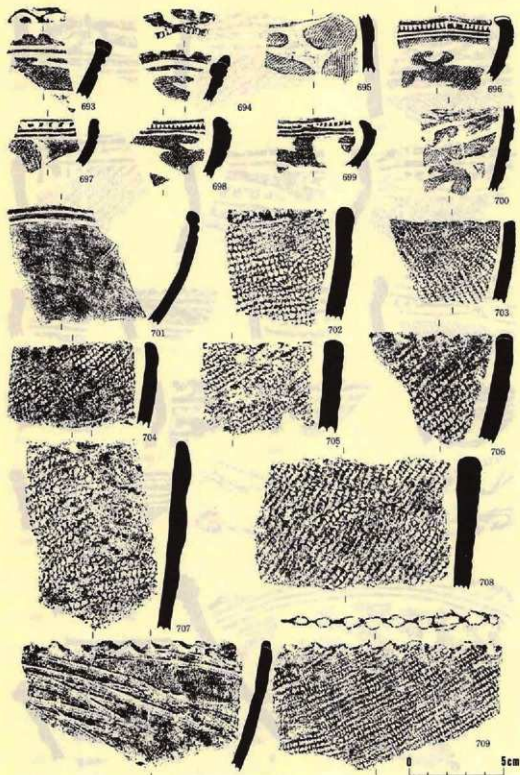
第103圖 F III—0116住居跡出土遺物(2)



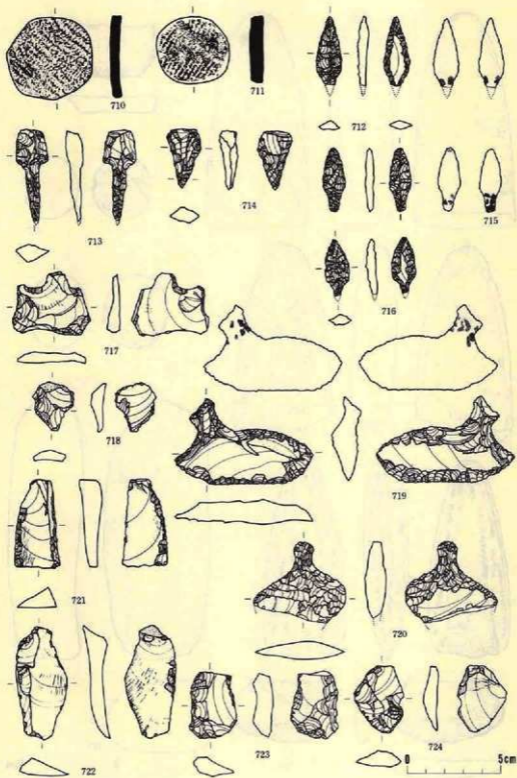
第104图 F III—0116住居跡出土遺物(3)



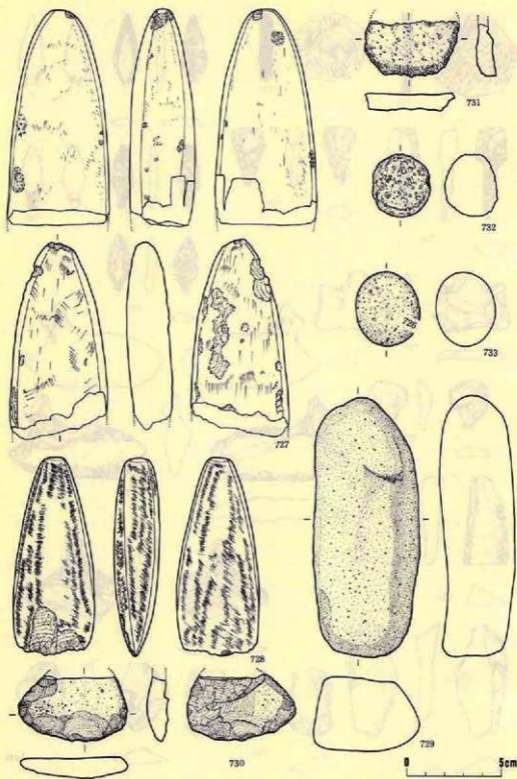
第105圖 F III-0116住居跡出土遺物(4)



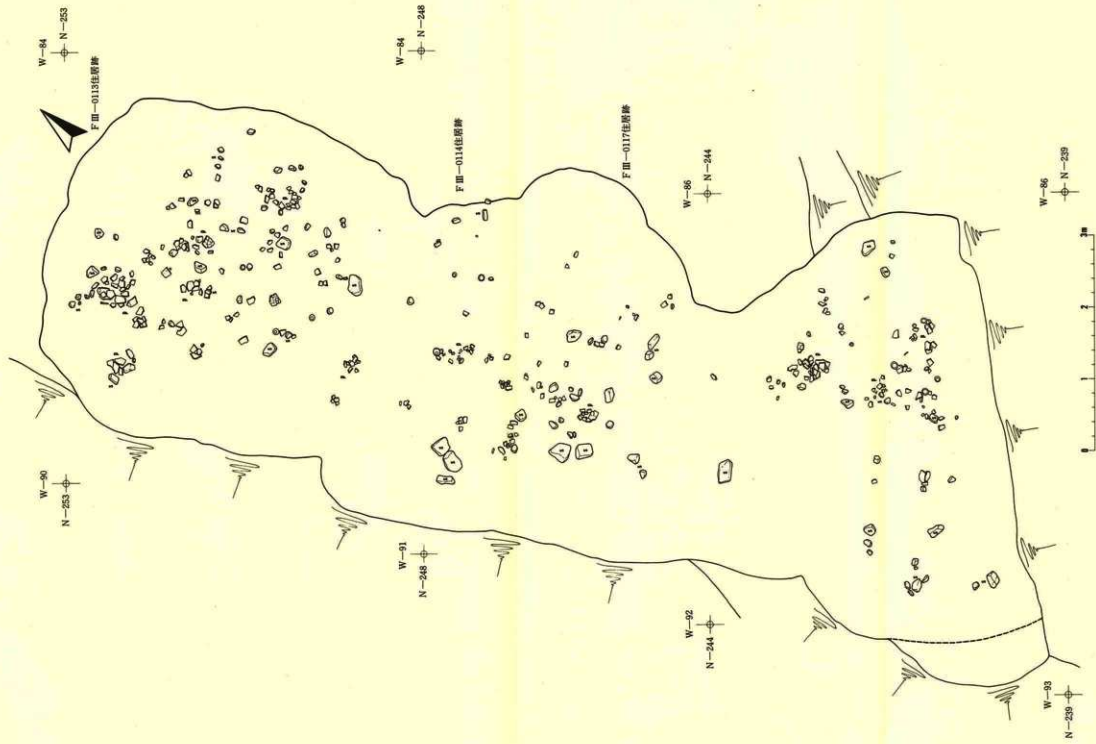
第106图 F III-0116住居跡出土遺物(5)



第107图 F III-0116住居跡出土遺物(6)



第108图 F III—0116住居跡出土遺物(7)



第109圖 F III-0113-0114-0115-0116住居跡遺物出土状況平面図

る土器かもしれない。642、650などは晩期中葉の大洞C₁式に相当しよう。

破片資料では662がもっとも古く、縄文時代後期前葉に入るかもしれない。651～662、699はや、古く、晩期の初頭頃に位置付けられるであろう。663、666のS字状渦巻沈線文は晩期前葉の岩版・土版にしばしばみられることから、ほぼ同時期とみられる。664、665、667、668なども近い時期と思われる。670～676は同様に晩期前葉の大洞B式に、677～689、691は晩期前葉の大洞B—C式に相当するであろう。690、692は晩期中葉の大洞C₁式で皿、または浅鉢型土器の破片とみられる。このうち、690は外面だけでなく口唇部から内側の上部にも装飾が施されている。693～700もほぼ同時期に入れることができる。701は無文の鉢型土器の破片と思われるが、口縁部外面に2条の沈線が廻る。晩期前葉—中葉に入るであろう。702～709は各時期に伴う粗製の大型鉢型土器の破片である。706、709が鋸歯縁であるほか、すべて平縁である。

石器は712～724の13点がある。712、715、716は打製の小型有基石鏃であり、712、715、の基部にはアスファルト様の黒色樹脂が付着している。713、714は石錐である。713では錐部に平らな頭部が付けられている。714は全体に厚く、頭部と錐部の境界が不明瞭である。

717、718、721～724などは刃部に調整痕のある剥片であり、主としてスクレーパーやそれに準じた用途が考えられる。このうち、717には挟りが入り、718は細かな剝離加工があって石鏃などの未製品かもしれない。719、720は石匙型のスクレーパーである。719のつまみ部分にはアスファルト様黒色樹脂が付着している。

726～728は磨製石斧であるが、いずれも刃部を欠損している。730、731は打製の円盤状石製品である。732、733は小型の球形礫であるが、同種の礫は住居跡付近にはみられないので石器として使用された可能性が考えられる。729は細長い四角柱状の礫を利用した叩き石である。

〔時期〕 出土した遺物は縄文時代晩期初頭～中葉のものが非常に多く、ほぼこの時期に入る可能性が大きい。特に床面に接するところからは、642、650など縄文時代晩期中葉の土器が発見されている。

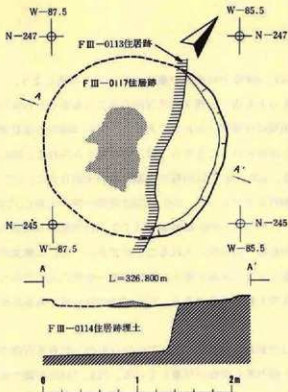
FⅢ—0117住居跡 (第110図 写真図版29)

〔位置〕 調査区西側にあり、FⅢ—0114住居跡の東側に位置している。

〔検出面〕 FⅢ区基準土層の第15層下部に検出された。

〔保存状況〕 床の西側は $\frac{1}{3}$ 分の2がFⅢ—0114住居跡の埋土上に築かれており、この部分では輪郭が明確でない。

〔重複〕 FⅢ—0114住居跡と重複している。土層の堆積状況から、FⅢ—01住居跡が明らかに新しい。



第110図 F III-0117住居跡平・断面図

〔形状〕 直径1.90mのほぼ円形と推定される。検出面からの深さは0.58mほどである。

〔内部施設〕 床の中央部に北北西から南南東方向に長い不整形の地床炉がある。炉の大きさは長さ0.89m、幅0.54mほどである。

〔埋土〕 F III-0114住居跡埋土第2層と同様の堆積層である。

〔遺物〕 発見されていない。

〔時期〕 遺物が伴出していないので詳細な時期は明らかでないが、住居跡付近から出土した遺物や堆積状況などから、縄文時代晩期前葉～中葉頃の可能性が大きいと思われる。

F IV-011A住居跡 (第111図 写真図版31)

〔位置〕 調査区北東の馬場山からせり出した尾根の南麓緩斜面上に位置している。

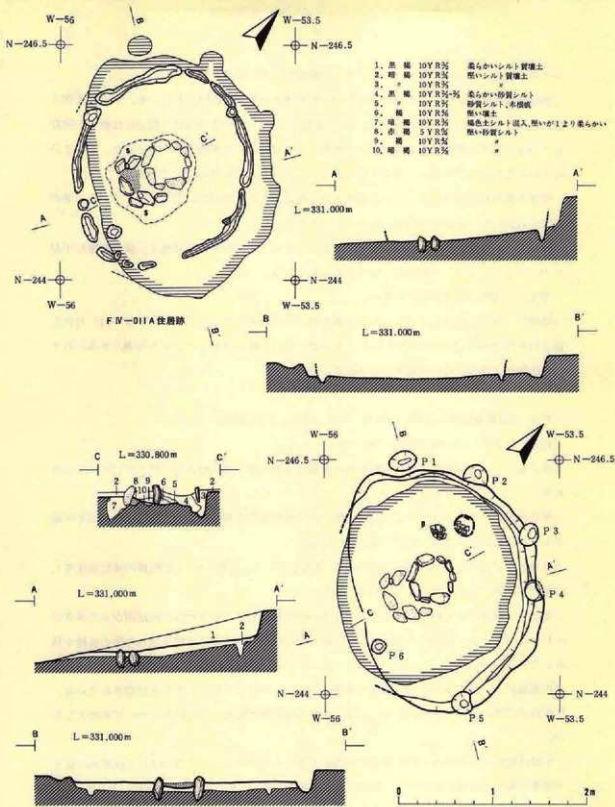
〔検出面〕 F III-011B住居跡の貼床直下で検出された。

〔保存状況〕 壁際の周溝と柱穴状のビット、半壊した炉などが残存している。

〔重複〕 F IV-011B住居跡とはほぼ同心円状に重複している。F IV-011B住居跡は、F IV-011A住居跡の床面に貼床をして炉を築いていることから、本住居跡が古いといえる。

〔形状〕 直径2.10mほどの小型の円形竪穴住居跡と推定される。検出面から床面までの深さは0.41m程度と思われる。

〔内部施設〕 住居跡の上屋構造に関連した柱穴と思われるビットが壁際に2～3みられる。



第III図 F VI-011A・011B住居跡平・断面図

いずれも直径0.1~0.2m未満で全体に浅く、配置形は明らかでない。

炉跡は直径0.59mほどの円形に近い石囲い炉が床の中央部に設けられている。炉の北東側3分の1は、FⅢ-011 B住居跡の炉によって破壊されている。炉床の南寄り部分には焼土が残存している。炉床を囲む礎は他の住居跡と同様、石英安山岩の直角礎を用いているが、その2分の1から3分の2が床面下に固定されており、しっかりした作りになっている。

壁際と思われる部分には、土止の施設とみられる溝の跡が部分的に円形に廻っている。溝の幅は0.11m内外、深さは床面から0.13mほどである。

〔埋土〕 FⅣ-011 B住居跡の貼床土1層からなる。この貼床土層は焼土、炭化物微粒子混りのシルトからなり、一部は固く叩き締められている。

〔遺物〕 遺物は発見されていない。

〔時期〕 遺物が伴出していないので詳細な時期は明らかでない。しかし、FⅣ-011 B住居跡とは炉体の構造、貼床の状況等から、FⅣ-011 B住居跡の構築までに大きな隔りがみられずこの住居跡よりやや古い時期と推定される。

FⅣ-011 B住居跡 (第111・112図 第1・3表 写真図版32・129)

〔位置〕 FⅢ-011 A住居跡と同様である。

〔検出面〕 FⅣ区基準土層第3層相当の黒褐色土層と第4層の暗褐色土層の間付近で検出された。

〔保存状況〕 南西の3分の2は山麓斜面に没って黒褐色土層が厚く、住居跡の輪郭は不明瞭であるが、他は原形に近い状態で残存している。

〔重複〕 FⅢ-011 A住居跡と同心円状に重複している。FⅣ-011 A住居跡の床に貼床をして炉が築かれており、明らかにこれより新しい。

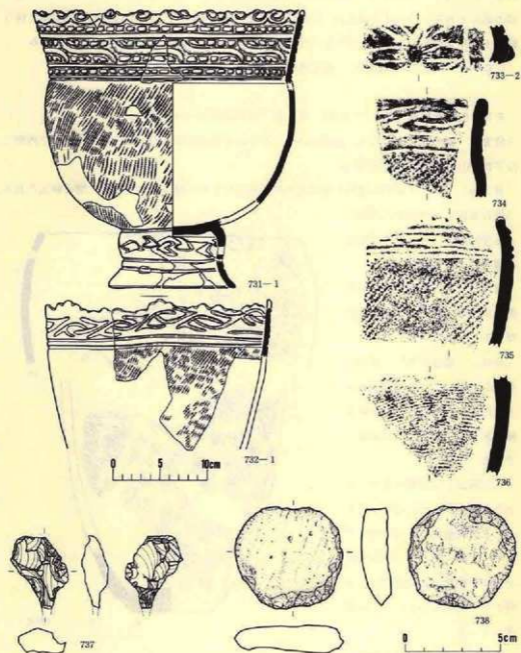
〔形状〕 直径2.60m前後のはゞ円形となる小型竪穴住居跡と思われる。検出面からの深さは0.47mほどである。壁際の一部にはFⅢ-011 A住居跡の拡大に伴う削り残した床の痕跡が残存している。

〔内部施設〕 住居跡の外周に沿って直径0.2m内外の柱穴状ピットが5基確認されている。住居跡の内部にもピットがあるが、FⅢ-011 A住居跡に関連する可能性もあって判然としない。

炉跡は直径0.50mのはゞ円形をなす石囲い炉が床の中央部にある。FⅢ-011 A住居跡の炉と一部重なるように築かれており、焼土の混入がみられる。

北寄りの床面には大型の台付土器が正立の形で埋設されていた。この土器は煮沸用に利用されていたものか多量の炭化物が外壁に付着していたが、埋設後の用途は不明である。

〔埋土〕 黒褐色の柔らかいシルト質土の単層であり、他にFⅢ-011 A住居跡を被う貼床の土層がみられる。



第112図 FⅣ-011B住居跡出土遺物

〔遺物〕 主として北寄りの床面付近から土器6点と石器2点が出土している。

731-1は床に埋設されていた大型の古付土器であり、器表面には多量の煤が付着している。文様からみて、縄文時代晩期前葉の大洞B-C式に比定される。732は三叉文のある中型の深鉢型土器であり、晩期前葉の大洞B式に相当しよう。733-2は後期後葉のいわゆるコブ付土器の破片である。734は大洞B式、735は大洞B-C式とみられる736はこれらの土器に伴う粗製土器片と思われる。737はつまみ付石錐の破片、738はほぼ完形の円板状石製品である。

〔時期〕 伴出遺物の時期から、縄文時代晩期前葉に入ると思われる。

FV-012 住居跡 (第113・114図 第1表 写真図版33・34・129)

〔位置〕 調査区北東にあり、馬場山の南にせり出す尾根の緩斜面上に位置する。すぐ西側にはFV-011A・B住居跡がある。

〔検出面〕 FV区基準土層第3層相当の黒褐色土層と第4層の暗褐色土層の間に検出される。

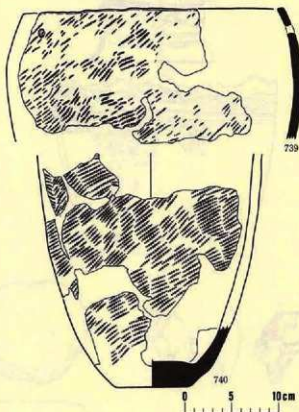
〔保存状況〕 周辺部の木根による攪乱が著しく、全体の形状が損われている。

〔重複〕 床の中央部から南東部にかけて、住居跡より古いFV-021・022ピットがある。

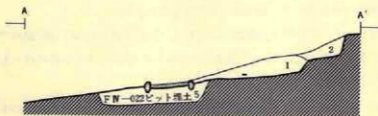
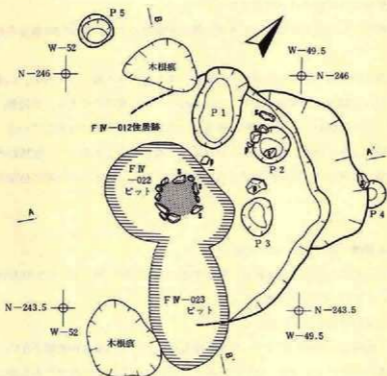
〔形状〕 破壊が著しく詳細は明らかでないが、直径2.60mほどの円形竪穴住居跡と思われる。検出面からの深さは0.45mほどである。

〔内部施設〕 付属するピットとみられるP₁、P₂、P₃があるが、その機能については明確でない。ピット内の埋土は住居跡を被う黒褐色土と同様のシルト質土を主体に褐色シルトを少量含んでいる。

炉跡は直径0.47mほどのほぼ円形をなす石囲炉が床の中央部



第113図 FV-012 住居跡出土遺物



1. 黒 雫 10Y R 7/5 粘土混リシルド、やや柔らかい 褐色粘土粒状に混入。
 2. # 10Y R 3/5



3. 暗 雫 10Y R 7/5 粘土柔らかい、タコガタ質 P 1 0.17m 0.83×0.47m
 4. 黒 雫 10Y R 7/5 粘土褐色シルト混入、炭化物含む P 2 0.15m 0.37×0.36m
 5. # 10Y R 7/5 粘土柔らかい P 3 0.14m 0.39×0.32m
 6. # 10Y R 7/5 粘土に褐色粘土混入、やや柔らかい P 4 0.11m 0.27×0.18m
 P 5 0.14m 0.39×0.32m

第114図 FV-012住居跡平・断面図

に設けられている。炉床にわずかの焼土がみられる。炉を囲む礫は小さいものが多く、FⅣ-011 A・B住居跡にみられるほど堅固でない。

〔埋土〕 黒褐色シルト質土を主体とするが、攪乱や崩落によって部分的に異なる部分もみられる。

〔遺物〕 北寄りの床面付近から出土しているが、主なものは土器2点である。いずれも単節斜縄文の施された粗製の大型深鉢である。739 は口辺～胴上部破片であり、口辺部には補修孔が認められる。740 は胴中～下部の資料である。2点とも煤が外面に付着している。

〔時期〕 床面付近から出土した土器からは詳細な時期を特定できないが、住居跡周辺から出土した土器の多くは縄文時代晩期前葉のものであることから、ほぼこの時期に位置付けられよう。

GⅡ-011 住居跡 (第115図 写真図版36)

〔位置〕 調査区西側の河岸段丘崖縁辺に位置する。すぐ南側にはGⅡ-012 住居跡があり、北にはや、離れてFⅢ-0116住居跡がある。

〔検出面〕 水田の耕作土直下に検出された。

〔保存状況〕 西側から南側にかけて、削平や攪乱が著しいため輪郭が明確でない。

〔重複〕 西側の3分の2がGⅡ-012 住居跡と重複している。炉の西側にある礫の位置からGⅡ-012 住居跡の埋没後にその埋土の一部を床としたことがしられる。

〔形状〕 直径 3.0mの円形掘穴住居跡とみられる。検出面からの深さは0.28mである。

〔内部施設〕 床及び周辺部にP₁～P₅の柱状状ビットがあるが、本住居跡に伴うものか明確でない。そのほか、住居跡の外側にP₆、P₇のビットがある。

炉跡は直径0.57mのはら円形となる石囲炉である。炉床内の焼土が黒褐色土の中にわずかにみられる。

〔埋土〕 3～4層からなるが、残存部では自然堆積の様相を示している。

〔遺物〕 住居跡に伴う遺物はほとんど採集されていない。

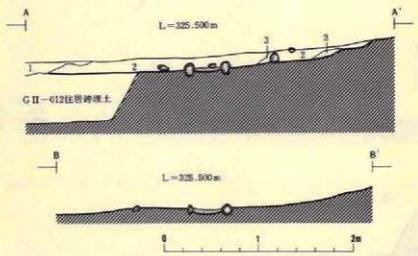
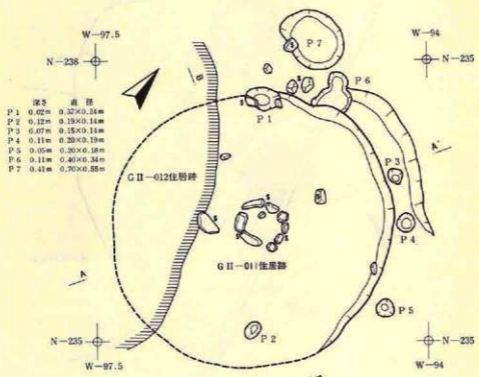
〔時期〕 伴出する遺物がないため不明であるが、GⅡ-012 住居跡との重複関係から縄文時代晩期前葉かや、下の時期の住居跡と考えられる。

GⅡ-012 住居跡 (第116・117図 第1表 写真図版36・130)

〔位置〕 調査区西側の河岸段丘崖縁辺に位置する。すぐ北東にはGⅡ-011 住居跡がある。

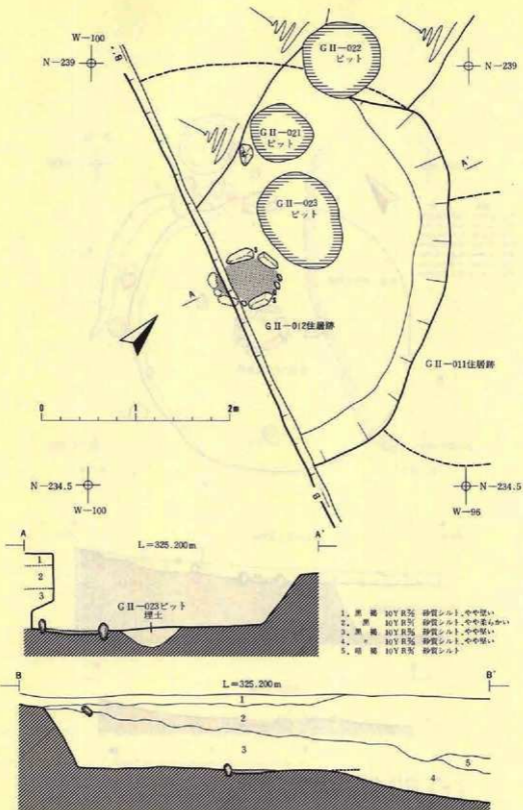
〔検出面〕 水田耕作土の直下にある黒褐色土層下部から検出された。

〔保存状況〕 南半部分が調査区外に続しており、全体は不明である。さらに西側は崖の斜面

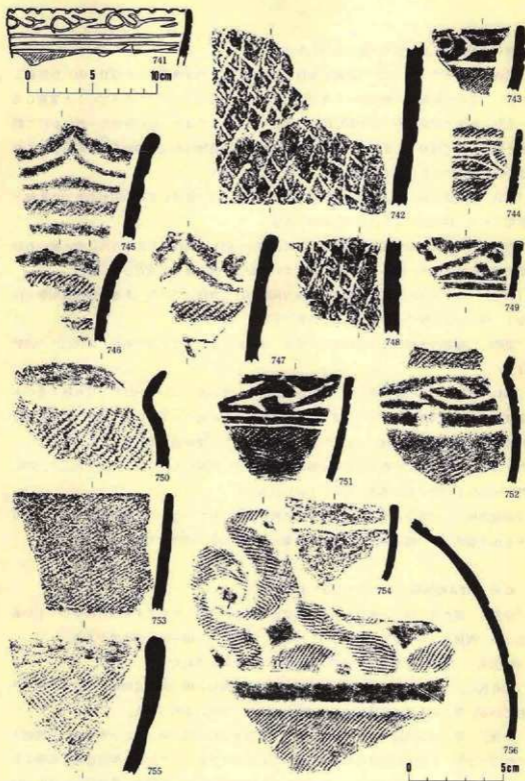


- 1. 黒 10Y 5/1 グロボク質砂シルト、柔らかい
- 2. 黒 黒 10Y 5/1 少々砂混入、やや柔らかい
- 3. 暗 黒 10Y 5/2 小石混入

第115図 G II-011住居跡平・断面図



第116図 G II-012住居跡・断面図



第117图 G II—012住居跡出土遺物

に接して黒褐色土層となり、輪郭が明らかでない。

〔重複〕 北東でGⅡ-011住居跡と重複しており、埋土の堆積関係からGⅡ-011住居跡より古い。また、住居跡の中央部から北辺にかけてGⅡ-021・022・023の3ピットと重複しているが、埋土の観察が不十分で新旧関係は明確でない。そのほか、住居跡の北～西にかけて斜面となり、捨て場跡との重複が認められる。捨て場跡の遺物は本住居跡のそれと同時期かこれより古い時期であり、捨て場跡より新しい。

〔形状〕 未調査分が多く全体の形状は不明であるが、ほぼ直径4.30mの円形の竪穴住居跡と推定される。検出面からの深さは0.55mである。

〔内部施設〕 床の中央部とみられる位置に0.73×0.63mの南西から北東方向にや・長い石囲炉が設けられている。礎の一部は失なわれているが、炉床に焼土が残存している。

〔埋土〕 は、同色の3層が南東から北西方向にかけて堆積している。各層の境界は明瞭ではなく、特に西側の捨て場跡と境界は不明瞭である。

〔遺物〕 遺物の大部分は住居跡埋土の第2・3層から出土した土器であり、床面出土の遺物はない。

741～756には大小の深鉢型土器、壺型土器が含まれている。742・748は格子目状摺糸文のある深鉢型土器の胴部破片であり、縄文時代後期前・中葉のものとみられる。744～747は縄文時代晩期初頭、741、743、749、751、752は三叉文をもち、晩期前葉の大洞B式に相当しよう。756は菱形の磨消文を有する壺型土器の破片であり、同様に大洞B式に比定されよう。750、753～755は上記の土器に伴出するものと思われる。

〔所属時期〕 床面から時期を決定できる資料が発見されていないので特定できないが、もっとも出土遺物の多い縄文時代晩期初頭～前葉の時期に入る可能性が大きい。

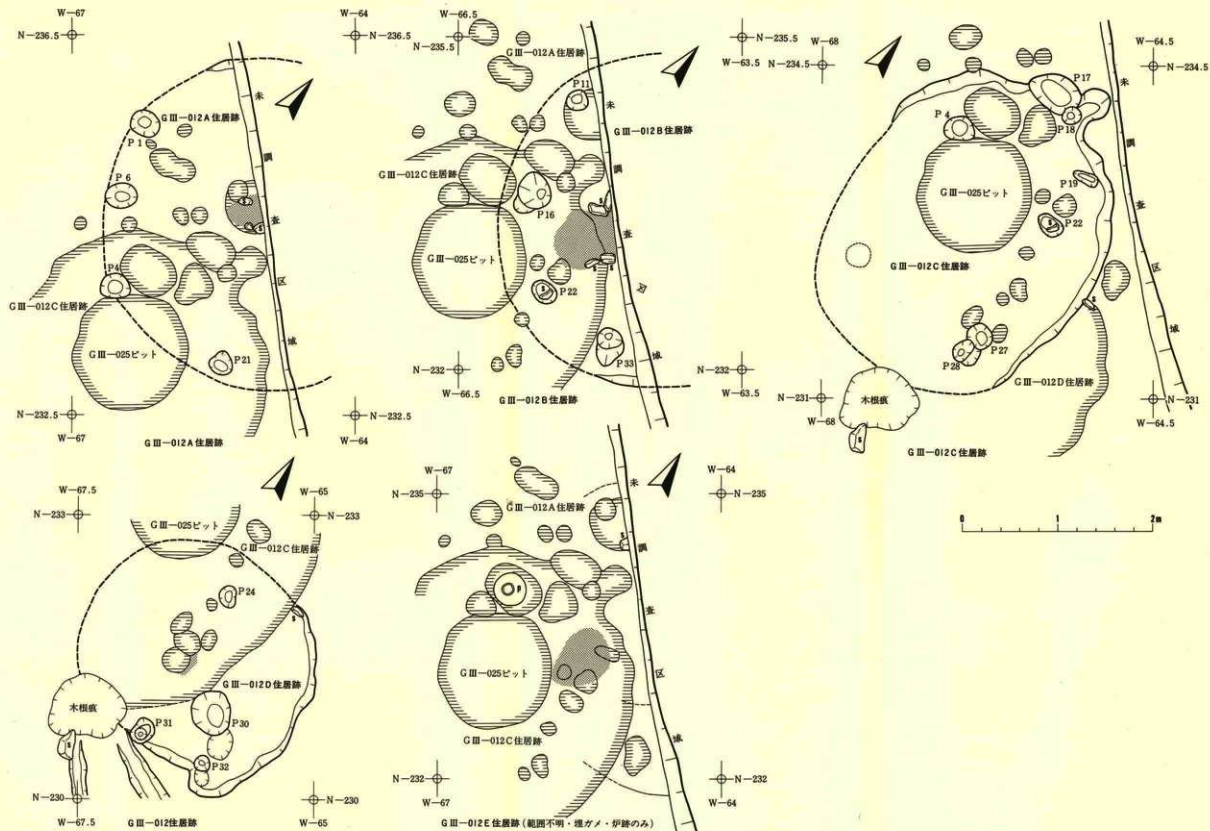
GⅢ-012A住居跡 (第118・119図 写真図版37)

〔位置〕 調査区西側に位置し、一部は町道にかかる。近接して後述する住居跡やピットがあるほか、西側にはや・離れてFⅢ-019住居跡、南西にはGⅢ-013住居跡がある。

〔検出面〕 FⅢ区基準土層第15層に相当する下部で検出された。

〔保存状況〕 多くの時期にわたる遺構が重複し、南西はEⅢ-051道路遺構によって削平されている。さらに北東は道路敷の下に埋没しており、形状は不明である。

〔重複〕 単一の住居跡と予想されていたが、重複する住居跡であることが判明した。図面上の検討により、この付近には5期の住居跡の存在が推定された。このうち本住居跡と重複する住居跡はGⅢ-012B、GⅢ-012C、GⅢ-012Eの各住居跡である。土層の堆積状況からGⅢ-012C→GⅢ-012E→GⅢ-012B→GⅢ-012Aでの順に新しくなる。そのほか、GⅢ-021ピットと



第119図 G III-012A ~ E 住居跡重複解析図

重複しており、住居跡より新しい。

〔形状〕 外壁に沿って柱穴状ピットが廻り、直径3.50mほどの円形の竪穴住居跡と推定される。検出面からの深さは0.57mである。

〔内部施設〕 柱穴状ピットが壁際に4基が確認されている。ピット内の埋土は、黒褐色の軟らかいシルト質壤土を主体としている。

炉跡は南北0.40m、東西0.35m以上のや、長楕円形状をなす石囲炉である。炉跡の礎は大部分失なわれているが、3個残存している。

〔埋土〕 シルト質の黒褐色土を主体とし、11層に分けられる。最上層は町道の路床にあたり固くしまった黒褐色の混土礎層である。その他は遺構の重複により、や、複雑な堆積となり、GⅢ-012C住居跡と重複する部分では埋土上面が床面として利用されている。

〔遺物〕 直接関連する遺物は採集されていないが、周囲の埋土中からは縄文時代晩期前葉の遺物が出土している。

〔時期〕 詳細な所属時期は明らかでない。

GⅢ-012B住居跡 (第118・119図 写真図版37)

〔位置〕 GⅢ-012A住居跡とは、同位置にある。

〔検出面〕 GⅢ-012A住居跡と同様である。

〔保存状況〕 南面の一部を除いて削平されているため、壁の範囲は明らかでない。また、北東側の半分はGⅡ-012A住居跡と同様に道路下にあつて未確認である。

〔重複〕 GⅢ-012A住居跡で記述したとおり、3住居跡と重複している。また、重複するピットについても同様である。

〔形状〕 部分的に残存する壁と柱穴状ピットの配置から、直径約3.50mの円形竪穴住居跡と推定される。

〔内部施設〕 壁際と思われる部分にP₁₁、P₁₆～P₂₂、P₃₃の柱穴があり、平面形は円形、または楕円状を呈する。これらのほかにいくつかの小柱穴が検出されている。柱穴の埋土は、GⅢ-012A住居跡と同様であり、黒褐色のシルト質壤土を主体としている。

炉跡はや、西寄り部分に直径0.70mほどの石囲炉があり、礎の一部が残存するが、西側の一部は町道下に埋没している。

〔埋土〕 GⅢ-012A住居跡と同様に古い時期の住居跡埋土を床面にしている。最上部は町道の路床であり、南東部壁寄りの埋土にや、複雑な堆積状況がみられる。

〔遺物〕 遺構に直接関連する遺物は出土していない。

〔時期〕 GⅢ-012A住居跡と同様である。

GⅢ-012C住居跡 (第118・119図 写真図版37)

〔位置〕 GⅢ-012A・B住居跡とは、同位置にあるが、やや南西寄りに位置する。

〔検出面〕 GⅢ-012A・B住居跡と同様である。

〔保存状況〕 南西側の壁が削平され、若干のピットが重複するほかは比較的良好である。しかし、中央部の炉跡部分はGⅢ-025ピットによって大きく破壊されている。

〔重複〕 GⅢ-012A・B・D・Eの各住居跡とP-025ピット、P₁₇に重複している。新旧関係は、GⅢ-012C→GⅢ-012D・GⅢ-012E→GⅢ-012B→GⅢ-012Aの順になり、P₁₇より明らかに新しい。GⅢ-012DとGⅢ-012Eの新旧は明確ではない。また、これらの上層にはEⅢ-051道路遺構が重複している。

〔形状〕 南北3.30m、東西2.80mの南北に長い楕円形の竪穴住居跡とみられる。検出面からの深さ0.40mである。

〔内部施設〕 上屋の支柱に関連した柱穴と思われる柱穴状ピットは、P₄、P₁₈、P₁₉、P₂₂、P₂₇、P₂₈などである。埋土はGⅢ-012A・Bの各住居跡と同様の黒褐色土を主体としている。P₂₇は完備していないピットである。

炉跡はGⅢ-025ピットとの重複部分にあったものと推定されるが、完全に破壊されているため、その痕跡は認められていない。

〔埋土〕 埋土の大部分が失われているため、黒褐色土を主体とする堆積状況は明確でない。残存部分では自然堆積に近い様相を示している。

〔遺物〕 遺構に直接関係する遺物は、埋土中の粗製土器片758の1点である。

〔時期〕 詳細な時期は不明であるが、周囲から出土した土器のほとんどが縄文時代晩期前葉のものであり、GⅢ-012A・B・Dなどの住居跡と近接する時期の可能性が高い。

GⅢ-012D住居跡 (第118・119図 写真図版37)

〔位置〕 GⅢ-012A～C住居跡とは、同位置にあり、それよりやや南東寄りに位置している。

〔検出面〕 GⅢ-012A～C住居跡と同様である。

〔保存状況〕 西南部の壁が重複する遺構によって削平され、消失している。

〔重複〕 GⅢ-012C住居跡と重複するほか、一部はGⅢ-012B・D住居跡と重複しているとみられる。GⅢ-012C住居跡の柱穴と本住居跡の炉跡との新旧関係から、GⅢ-012C住居跡より新しいと推定される。また、GⅢ-012B住居跡より古く、GⅢ-012E住居跡とは埋土の切り合いが不明瞭で明らかでない。そのほか、一部は新しい時期のEⅢ-071道路遺構と重複している。

〔形状〕 東西2.60m、南北2.20mのや、東西に長い円形の竪穴住居跡である。残存する壁高は0.06mである。

〔内部施設〕 直接遺構に関連する明らかでないが、P₂₄、P₃₀、P₃₂、P₃₁をはじめとする柱穴状ピットが散在している。ピットの埋土は、他の住居跡と同様に黒褐色土を主体としている。

炉跡は直径0.25mほどの小さい円形の地床炉が中央部に設けられている。炉跡はGⅢ-012C住居跡の柱穴P₂₇、P₂₈の埋土上に築かれている。

〔埋土〕 検出にともなう削平のため、残存する埋土は薄く、埋没状況は明らかでない。残存する埋土はシルト質の黒褐色土層の単層である。

〔遺物〕 遺構に伴う遺物は出土していない。

〔時期〕 GⅢ-012C住居跡と同様、縄文時代晩期前葉頃と推定される。

GⅢ-012E住居跡 (第118・119図 第1表 写真図版37・131)

〔位置〕 GⅢ-012A・B住居跡とほぼ同位置にあり、これよりや、北西寄りである。

〔検出面〕 GⅢ-012A～D住居跡と同様である。

〔保存状況〕 重複する遺構による擾乱と検出にともなう削平により、輪郭はほとんど明らかでない。土層観察や炉跡の存在により、住居跡と推定される。

〔重複〕 GⅢ-012A～D住居跡、P_v、EⅢ-051道路遺構と重複している。新旧関係は既述のとおりであり、GⅢ-012C住居跡からGⅢ-012B住居跡の間に入る。

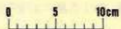
〔形状〕 平面形は明確でないが、町道沿いの土層断面から 穴住居跡とみられる。

〔内部施設〕 中央部と思われる部分に、東西0.50m、南北0.70mの卵形に近い地床炉が設けられており、GⅢ-012C住居跡の埋土上に検出されている。

炉跡の西側には、東西0.59m、南北0.44m、深さ0.15mの楕円形のピットがあり、埋土上面からみて付属施設と推定される。ピットの中央部には壺形土器 752が正立の状態で見られる。検出にともなう破損しているが、中空であったことから上部に石、または土器片で蓋をしていたことが推定される。埋土は2層であるが、上層は堅くつき固められている。

〔埋土〕 黒褐色土を主体としているが、堆積状況から人為的に短期間に埋め戻された可能性が大きい。

〔遺物〕 P₁₅から大型壺形土器757がある。や、扁平な球胴に直立する頸が付き、さらに外傾する口辺部となり、底部は平らである。外面の下半部には斜縄文が施され、中央の2条の沈線を境に胴上半部には楕円形、三叉文、菱形文状の沈線文をあしらった磨消縄文が全面にみられる。頸部との境界にはコブ付の条線がめぐり、頸部は無文である。1条の沈線を境に口辺部には斜縄文がある。胴下半部全面と上部の一部に漆、または水酸化第二鉄とみられる褐色の付着



第120图 G III-012E 住居跡出土遺物

物がみられる。大洞B式と考えられる。

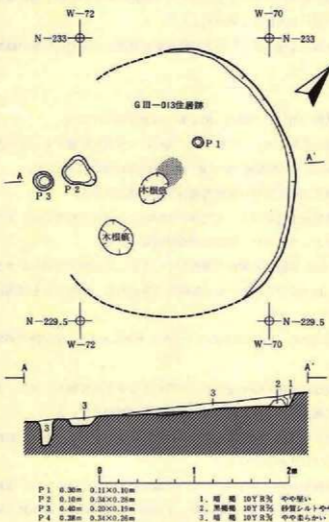
〔時期〕 出土した土器から、縄文時代晩期前葉の住居跡とみられる。

G III-013 住居跡 (第121・122図 写真図版131)

〔位置〕 調査区西側にあり、G III-012 A～E住居跡の南西に位置する。

〔検出面〕 E III-051 道路遺構の路床下で検出した。

〔保存状況〕 E III-051 道路遺構により北西から南東にかけての壁と床の一部が削平されて



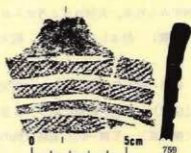
第121図 G III-013住居跡平・断面図

いる。さらに、床面に2ヵ所の木根跡があり、炉を破壊している。

〔重複〕 EⅢ-071 道路跡と重複し、これより住居跡が古い。

〔形状〕 直径2.80mほどの円形をなす竪穴住居跡と思われる。検出面からの深さは、0.14mである。

〔内部施設〕 柱穴等のピットは3基がある。埋土はいずれもシルト質の柔らかい黒褐色土である。



第122図 GⅢ-013 住居跡出土遺物

床面の中央部には直径0.2mほどの円形の小さい焼土があり、住居跡の地床炉と思われる。

〔埋土〕 残存部の埋土は黒褐色土を主体とし、壁際に若干の崩壊土層の堆積がみられる。

〔遺物〕 埋土下部から土器片1点が出土している。

〔時期〕 出土土器の文様によって縄文時代後期最終末から晩期最前葉の時期に入るとと思われる。

GⅢ-014 住居跡 (第123・124図 第1表 写真図版38・131)

〔位置〕 調査区の南西にあり、GⅢ-013 住居跡の南西に位置する。すぐ西北西にはFⅢ-019A-D住居跡があり、東南東にはGⅢ-014 住居跡が隣接している。

〔検出面〕 FⅢ区基準土層第15層相当面の下部に検出される。

〔保存状況〕 黒褐色土層が深く、北東部が木根により破壊されている。また、南西部のほとんどは開田工事によって失われ、原形の把握は困難である。

〔重複〕 GⅢ-015 住居跡と東側で重複しているが、新旧関係は明らかでない。

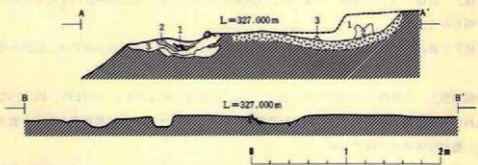
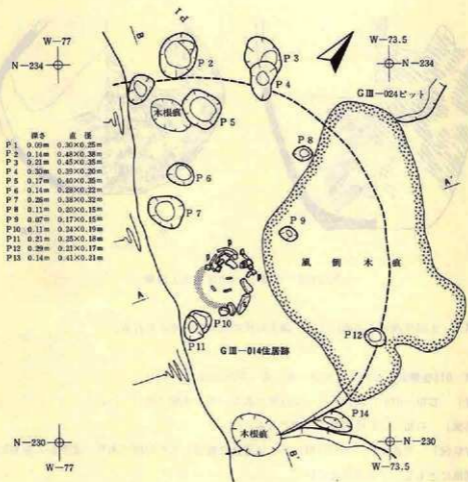
〔形状〕 直径4.10mほどの円形の竪穴住居跡と思われる。東壁に残る壁高は、検出面から0.18mである。

〔内部施設〕 柱穴はP₁-P₁₀のうちのいくつかと考えられるが、住居跡の破壊が著しいため明確でない。

炉跡は床面中央部の直径0.63mほどの円形をなす土器片囲炉である。土器片は炉跡の西から南東にかけて残存し、中央部の凹んだ炉を囲んで外傾している。

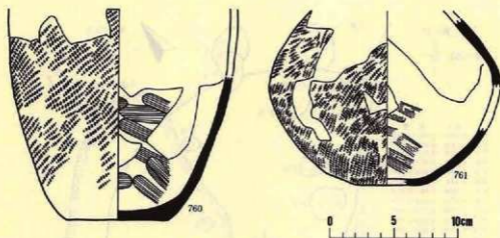
〔埋土〕 木根による攪乱や開田にともなう破壊により、明らかでない。炉跡部分では古い木根の攪乱層が炉の下に広がっている。

〔遺物〕 土器片囲炉の周辺から760、761の土器が発見されている。760は粗製の大型深鉢型土器の下半部、761は球胴の壺形土器の中・下半部であり、いずれも単節の斜縄文が施される。761の形状からは、縄文時代晩期前葉の土器とみられる。



- 1. 黒 10YR 5 砂質シルト、柔らかい
- 2. 暗 10YR 6 粘着性強い
- 3. 暗 10YR 7 粘着性強い

第123図 G III-014住居跡平・断面図



第124図 G III-014住居跡出土遺物

〔時期〕 土器片・土器の土器により、縄文時代晩期前葉と考えられる。

G III-015住居跡 (第125・126図 第1表 写真図版39・131)

〔位置〕 G III-014 住居跡とは、同位置にあり、その東側に接している。

〔検出面〕 G III-014 住居跡と同様である。

〔保存状況〕 北西壁の一部がG III-013 住居跡に重複して不明瞭であり、北西から南東にかけて開田にともなって破壊されている。

〔重複〕 G III-014 住居跡、G III-016 住居跡と重複するが、新旧関係はいずれも擾乱によって明らかでない。

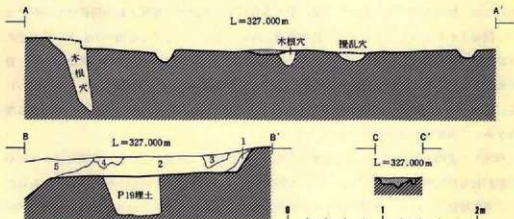
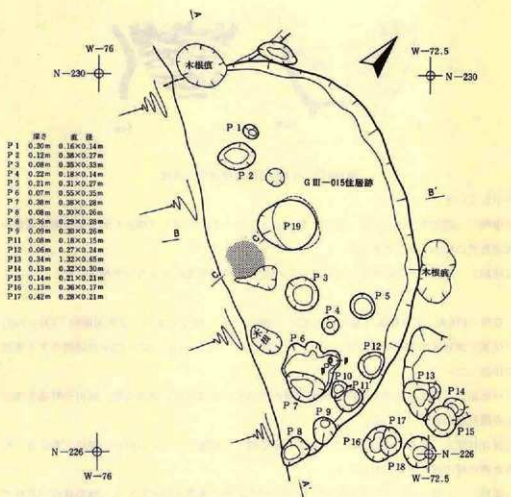
〔形状〕 直径4.30mほどの円形竪穴住居跡と推定される。検出面からの深さは、0.25mである。

〔内部施設〕 住居跡及び周辺のP₁～P₂₂のうち、住居跡に関連するピットはP₃、P₄、P₆などと思われるが、遺構の半分が失われており明確でない。ピットの埋土は黒褐色のシルト質土であり、他の住居跡と同様である。

床の中央からや、北寄りには、外壁が多少外側に傾く円筒状のピットがある。南西～北東は0.52m、北西～南東は0.62mで歪んだ楕円形をなし、床面からの深さは0.42mである。埋土は未確認であるが、中層から上層にかけては柔らかい黒褐色シルト質土が主体をなしている。

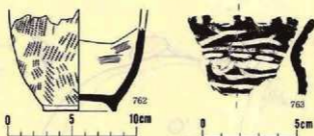
炉跡は直径0.45mほどの円形をなす地床炉であり、炉の一部は木根によって破壊されている。

〔埋土〕 保存状態の良好なところでは、シルト質の黒褐色土が主体であり、自然堆積の様相



1. 堀 10Y R 5 層と堀堀 10Y R 5 層の混土、やや強い
2. 堀 10Y R 5 層 砂質シルト、柔らかい
3. 堀 堀 10Y R 5 層と堀10Y R 5 層の混土、柔らかい
4. 堀 堀 10Y R 5 層 礫土質シルト、やや粘着性
5. 盛土

第125図 G III—015住居跡平・断面図



第126図 G III-015住居跡出土遺物

を示している。

〔遺物〕 埋土下部から762、763の土器が出土している。形状と文様から縄文時代晩期前葉の大洞B式に相当すると思われる。

〔時期〕 埋土中の遺物から、これと近い縄文時代晩期前葉に入るものと推定される。

G III-016 A～E住居跡（第127～131図 付図3・4 第1・3表 写真図版40・131～133）

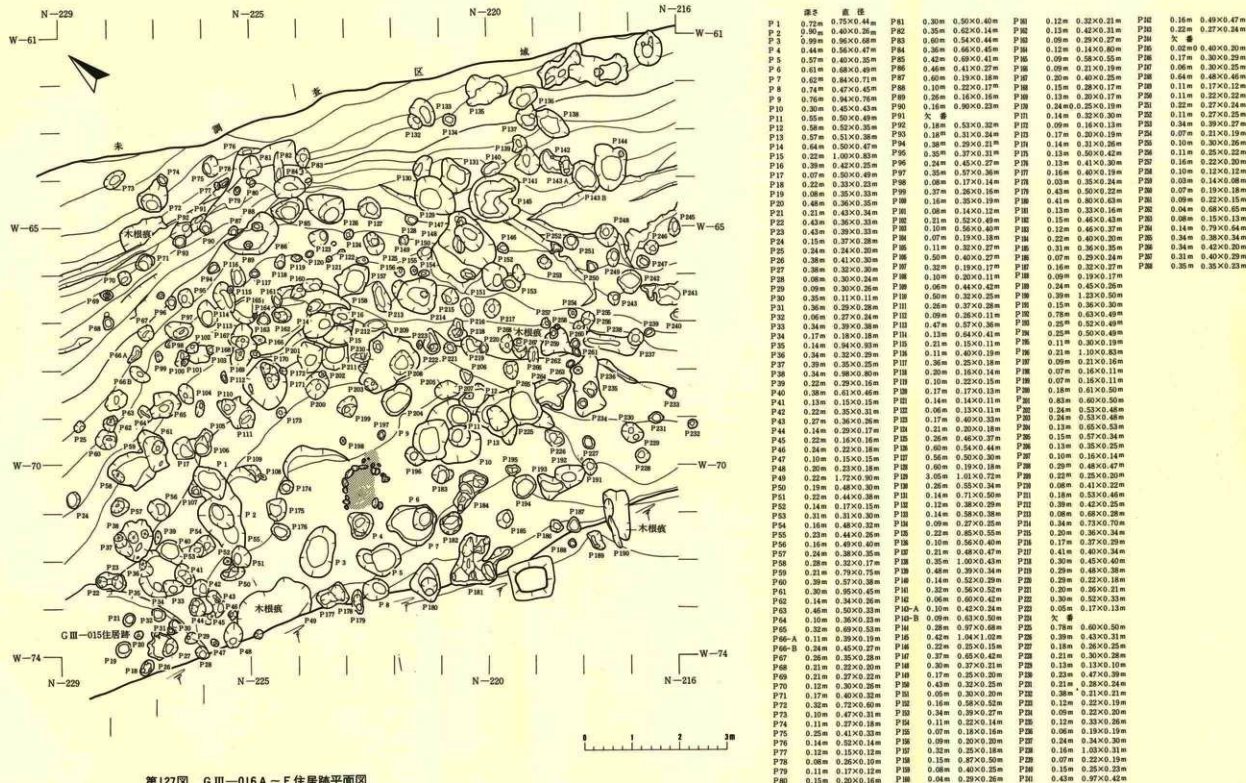
〔位置〕 調査区西側の町道南側にあり、G III-012 A～E、G III-013-015 住居跡のすぐ東側に位置している。

〔検出面〕 F III区基準土層第15層相当層の下部及びE III-071 道路遺構、開田や町道工事による擾乱層の直下にあたる。

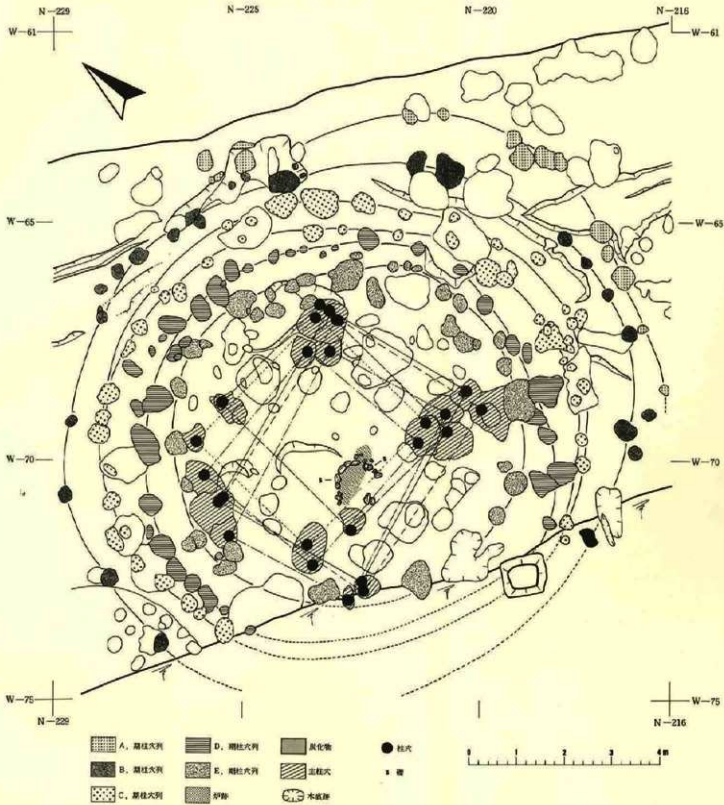
〔保存状況〕 E III-071 道路遺構により北壁部分が破壊されているほか、開田工事によって南南西の縁辺部が削平されている。

〔重複〕 F III-019 A～D住居跡と同様に同心円状の重複が認められる。残存状況が良好でないため、柱穴相互の切り合いや土層に関する資料を欠き詳細な重複と新旧関係は明らかでない。図面上からは少なくとも5～6期の重複とみられるが、ここではG III-016 A～Eまでの5期の重複を想定して図示している。これらの住居跡は、付図の埋土観察から推測すると、最大規模をもつG III-016 A住居跡から最小のG III-016 E住居跡へ順次移行したことが伺われる。また、最大規模の住居跡は一部でG III-015住居跡と重複しているが、開田工事による擾乱があって新旧関係は明らかでない。

〔形状〕 遺構の重複などによる破壊のため、個々の原形は明確でないが、壁際に巡らされたと思われる柱穴列の配置形から、いずれも円形かや、方形がかった円形の竪穴住居跡とみられる。各住居跡の規模は、周囲の柱穴列の直径によって大よそ以下のとおりとなる。G III-016 A住居跡は東西 12.90m、南北 13.30m、G III-016 B住居跡の東西 11.80m、南北 11.30m、G III-016 C住居跡の東西 10.20m、南北9.50m、G III-016 D住居跡の東西8.60m、南北8.30



第127图 G III-016A-E住居跡平面図



第128圖 G III-016住居跡重複關係解析図

m、GⅢ-016 E住居跡の東西7.40m、南北7.10mである。各住居跡の床面は必ずしも明確でないが、検出面からもっとも低い床面までの比高は0.95mである。完掘状態における床面は北東斜面を削り込んで南、または南西に緩やかに傾斜し、北辺部で勾配が強くなっている。床の北半では粘土混りの重角礫層が露出し、凹凸が著しい。そのためか周囲の柱穴列は間隔・深さとも一定していない。しかし、壁の状況や支柱穴群の配置・方向からは、南北を主軸方向として南面する竪穴住居跡であることが推測される。

〔内部施設〕 各住居跡の外壁内には土止めに関連したと思われる柱穴列があり、総数は300を超える。形状は円、楕円、不定形などであり、埋土は黒褐色の柔らかいシルト質土を主体としている。相互の重複関係については不明なものが多い。

上屋構造に関連した支柱穴とみられる大型のピット類は住居跡の中央部から発見され、4柱穴からなる南北に長い長方形の柱配置が6組まで推定される。埋土は柱部分と埋め戻した部分の境界が明瞭である。

炉跡は最終時期の住居跡に伴うと思われる石囲い炉が1基あり、支柱穴群の南辺中央部から発見されている。直径1.10mほどの円形の炉とみられるが、南側の石囲い3分の2ほどが失われている。

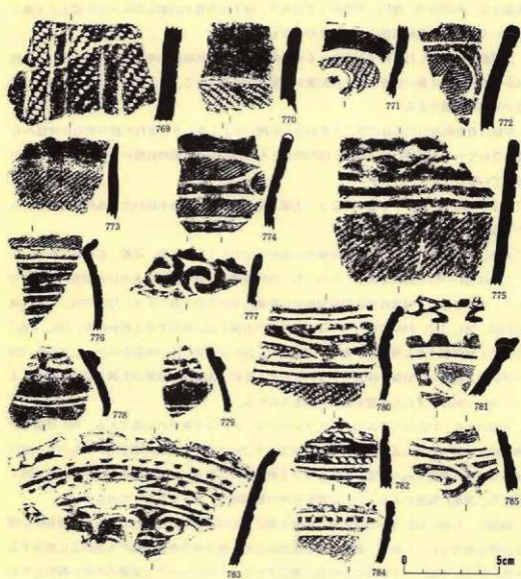
〔埋土〕 床部分は4～5層からなり、上部2層と炉床の焼土層を除いて人為的な移動のあった可能性が高い。

〔遺物〕 主として第3～5層と床面の一部から出土している土器、石器、石製品である。

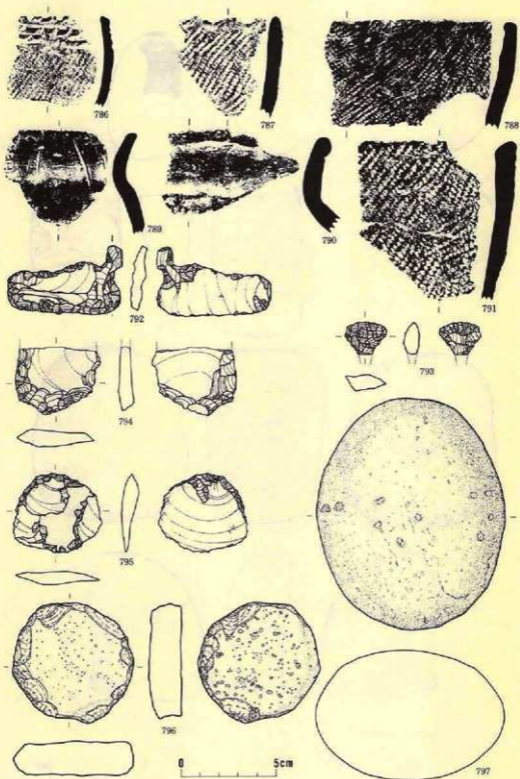
土器は764～791の28点である。このうち、769は縄文時代中期末の大木10式相当の土器片であり、他はほとんど縄文時代晩期最初から前葉にかけての土器である。770～771、774は晩期初頭、764、767、768、775～777は晩期前葉の大洞B式に相当すると思われる。765、766についても同時期である可能性が高い。764、767、768は炉跡に近い床面から出土している。778～786は文様からは時期を決定できないものもあるが、大体晩期前葉の大洞B式に比定されよう。768～791はいずれも晩期前葉の土器とみられる。

石器のうち、792はつまみつきのスクレーパー、いわゆる横型の石匙である。797は扁平で楕円球状の擦り石である。798、800は擦り石であり、798はや、穀頭状の礫を用いたもので一部にタール状の付着物がみられる。800は多少方形がかった厚手の扁平な礫からなり、一面に凹みをもち、側面に擦痕がある。799は磨製石斧の胴部破片、801は石皿片である。

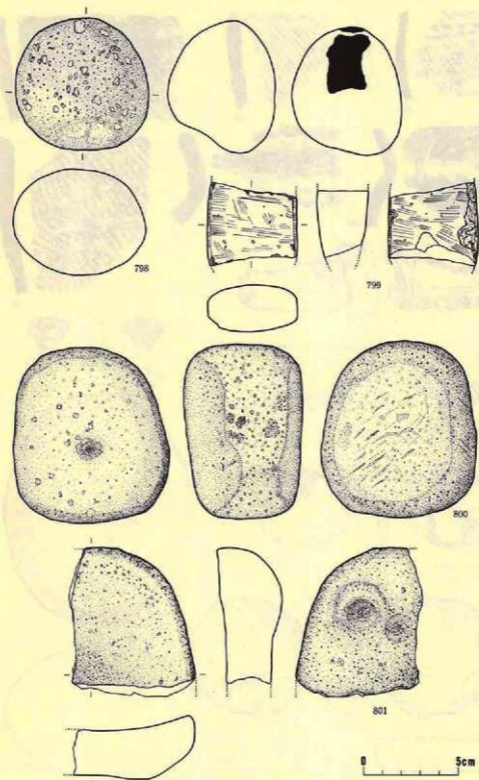
〔時期〕 GⅢ-016 A～E住居跡は規模を異にして同心円状に重複しているが、時期的な開きは明らかでない。しかし、最終時期の床面付近から縄文時代晩期前葉の大洞B式に相当する土器が出土しており、下限はこの時期に想定される。上限については遺構の形態が類似しており、かなり近接する時期に連続的に営まれていた可能性が高く、1形式古い段階が考えられる。



第129圖 G III—016住居跡出土遺物 (I)



第130圖 G III-016住居跡出土遺物(2)



第131图 G III—016住居跡出土遺物(3)

GⅣ-011 住居跡 (第132・133図 写真図版41・45・134)

〔位置〕 調査区西側にある町道のすぐ北東に位置し、町道を挟んで南西にはGⅢ-016 A～E住居跡がある。また、すぐ北東隣にはGⅣ-014住居跡がある。

〔検出面〕 HⅣ区横断土層の第4層にみられる褐色土層上面である。

〔保存状況〕 遺構の南辺部が検出段階で削平され、輪郭が不明瞭であるが、原形は比較的良好に保存されている。

〔重複〕 なし。

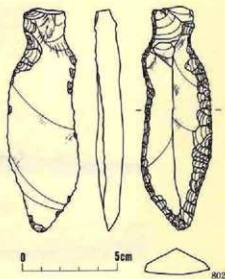
〔形状〕 南東～北西の直径2.90m、北東～南西の直径3.30mのや、歪んだ円形の竪穴住居跡である。床面には粘土砂混りの垂角礫層が露出している。

〔内部施設〕 P₁～P₄の4つの浅いビットがあり、住居跡の上層に関連した支柱穴と思われるものはP₁、P₃であるが、ほかにP₂も加わる可能性もあげられる。埋土は黒褐色土の単層である。炉跡は南西寄りの壁際部分に設けられた地床炉であり、直径0.65mほどのや、歪みのある円形をなす。炉の北半には火をうけた粗製土器の細片があり、隣接する東側の床面には炭化材と砕けた炭が散布している。

〔埋土〕 床面を被う炭化物、焼土、木根跡を除き、自然堆積に近い様相を示している。また、北・東壁際には土留めの痕跡を思わせる堆積もみられる。

〔遺物〕 土器の細片5、6片と大型の縦形つまみ付スクレーパー1点が出土している。

〔時期〕 時期を特定できる資料はないが、検出段階で採集された土器はほとんど縄文時代晩期前葉のものであり、これらと近い時期である可能性がある。しかし、炉跡の位置は他の同時期の例と異なり、疑問が残る。



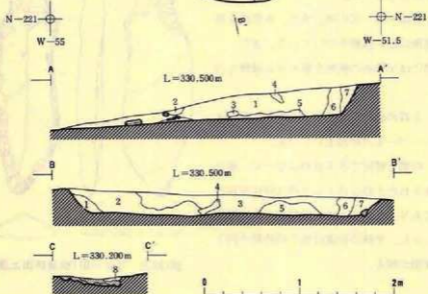
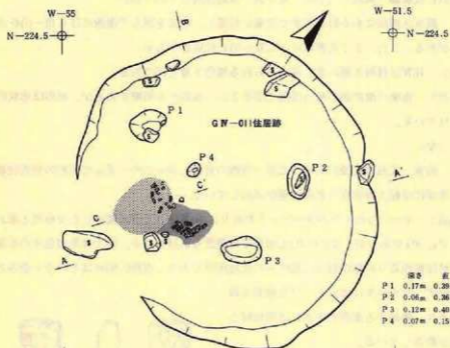
第132図 GⅣ-011住居跡出土遺物

GⅣ-012 住居跡 (第134・135図 写真図版134)

〔位置〕 調査区西側にあり、GⅣ-011住居跡の北東に位置する。また、南方にはGⅣ-014住居跡がある。

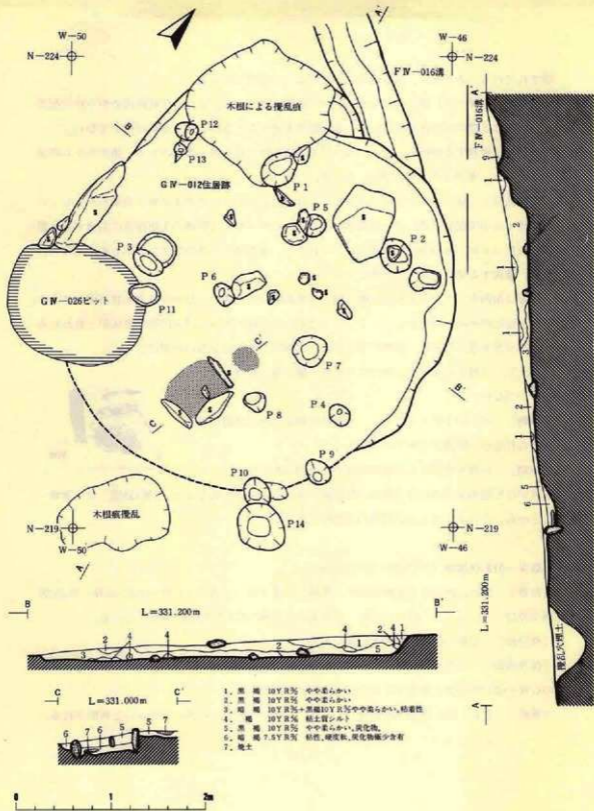
〔検出面〕 GⅢ-011住居跡と同様である。

〔保存状況〕 南半部分の壁が検出段階に削平され、南西部分はGⅣ-026ビットによって破



1. 黒 10Y R 7/ 4ロボク質壤土、粘り
2. 黒 幅 10Y R 7/ シルト質壤土
3. 粘 幅 10Y R 7/ 粘土質シルト、やや粘り
4. 粘 幅 10Y R 7/ シルト質壤土、やや粘り
5. 黒 幅 10Y R 7/ 粘り
6. 黒 幅 10Y R 7/ 粘り
7. 粘 幅 10Y R 7/ 粘土質シルト、粘り。

第133図 GN-011住居跡平・断面図



第134図 G IV-012住居跡平・断面図

壊されている。そのほか、北西部分が木根によって損壊している。

〔重複〕 GⅣ-061 溝とGⅢ-021 ビットに切られている。また、住居跡内の炉や柱穴配置などからは2期の住居跡が重複している可能性も考えられるが、埋土からは明瞭でない。

〔形状〕 残存する壁から、直径4.30mほどの円形堅穴住居跡と推定される。検出面からの深さは0.20m、床面はや、南に傾斜している。

〔内部施設〕 柱穴、または柱穴状のビットは18ほどであり、その大部分は円筒形をなしている。埋土は中央部分が柔らかい黒褐色土である。このうち、住居跡の上屋構造に関連すると思われるビットが、床の中央部を囲むように長方形、または台形状の配置をなすものと想定されるが、重複する場合の柱穴は判然としない。

炉跡は南西寄りに三方を板状の礎で囲んだ東西0.62m、南北0.72mの長方形状石囲炉である。礎は入念に埋め込んで整形している。この北側には直径0.26mのほゞ円形の地床炉と思われる焼土部分がある。しかし、重複に伴う炉跡か石囲炉の副炉的なものか明確でない。

〔埋土〕 5層からなるが、検出された埋土層が薄く重複の有無は明らかでない。

〔遺物〕 803の土器1点である。小型の深鉢型土器の口辺破片とみられるが、時期は不明である。

〔時期〕 時期を特定できる遺物がないので明らかでない。しかし石囲炉の形態が縄文時代後・晩期の住居跡にみられる炉跡と異なることから、それよりや、古い時期の可能性があげられる。



第135図 出土遺物

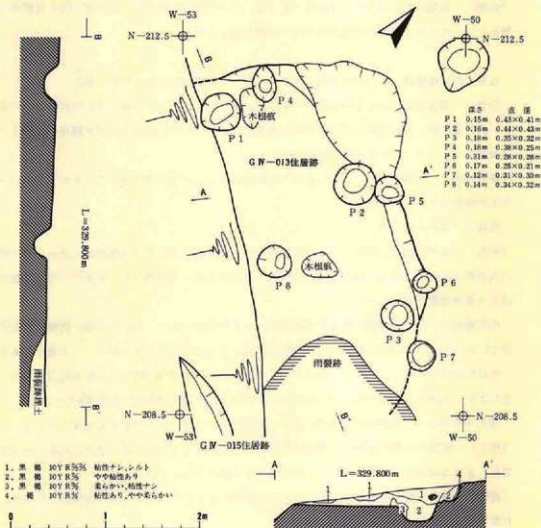
GⅣ-013 住居跡 (第136図 写真図版42)

〔位置〕 調査区西側にある町道のすぐ北側に位置する。北西にはGⅣ-014、GⅣ-011住居跡が並び、東にはHⅣ-011住居跡、北北東にはGⅣ-015住居跡が隣接している。

〔検出面〕 GⅣ-011住居跡と同様である。

〔保存状況〕 抜根や土取りによる破壊が著しく、遺構の原状は損なわれている。また、東壁のGⅣ-051雨裂跡と重複する部分は、黒色土で明瞭でない。

〔重複〕 GⅣ-051雨裂跡に重複しており、住居跡の形態から溝の方が古いと判断される。



第136図 GN-013住居跡平・断面図

〔形状〕 直径4.10mほどの円形、または方形がかった円形の堅穴住居跡と思われる。残存する壁の高さは0.25mである。

〔内部施設〕 住居跡に関連した柱穴とみられるピットは8基であり、このうち、3～6基は壁際に廻る柱穴列の一部と思われる。埋土はシルト質の柔らかい暗褐色、または黒褐色土が主体をなしている。

炉跡は確認されていないが、道路工事によって掘削された部分にあったと推定される。

〔埋土〕 比較的攪乱の少ない部分では、最上層を除いて黒褐色土が多い。

〔遺物〕 遺構に伴う遺物は出土していない。

〔時期〕 時期を特定することは困難であるが、柱穴列の廻る構造からはGN-014住居跡に類似し、これと同じ縄文時代晩期初頭頃の時期と考えられる。

GN-014住居跡(第137~141図 第1~3表 写真図版43~45・134~136)

〔位置〕 調査区西側にある町道のすぐ北に接している。北西にはGN-011住居跡、北にGN-012住居跡、東にGN-015住居跡、南東にGN-013住居跡がそれぞれ隣接している。

〔検出面〕 GN-011住居跡と同様である。

〔保存状況〕 遺構の南西、5分の2ほどが道路工事によって破壊消滅しているが、他はほぼ原形が保たれている。

〔重複〕 認められない。

〔形状〕 東西6.00m、南北5.90mのや、東西に長い楕円形をなす竪穴住居跡と思われる。壁の残存高は0.65mである。他の住居跡と同様に緩斜面を削って構築され、床面の一部には粘土混りの重角礫層が露出している。

〔内部施設〕 壁際の床面に土留めの跡とみられる柱穴列があり、規模や形状、間隔に規則性はないが、いくつかの群に分けられる可能性もある。埋土はほとんど黒褐色のシルト質土である。

支柱穴は散在するピットが多く必ずしも明確ではないが、炉を囲む4~6基を結ぶ長方形、または五~六角形状の配置が考えられる。埋土は壁際の柱穴と同様に黒褐色土が主体をなしている。

床の中央部のや、南寄りに、東西1.00m、南北0.90mほどのや、不整形な地床炉がある。

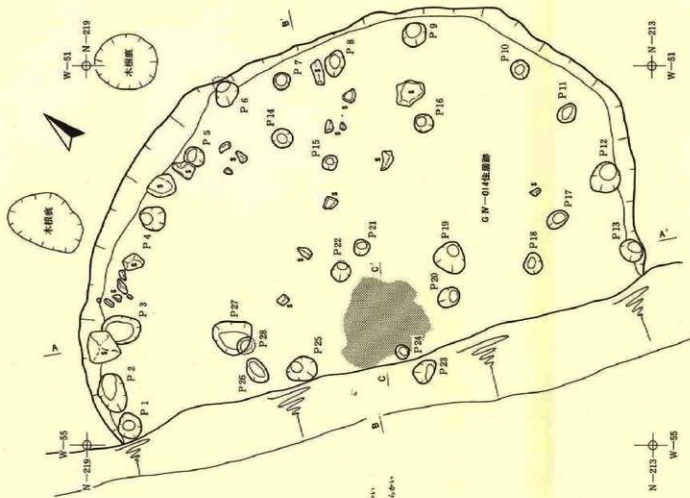
〔埋土〕 壁際の一部には壁や土留め施設の崩壊した痕跡とみられる層が認められる。他は黒褐色、または暗褐色土を主体とした自然堆積に近い様相を示している。

〔遺物〕 埋土下層や床面を中心として多くの遺物が出土している。主要な遺物は土器28点、石器4点、土製品1点である。

土器は804~827である。815~818の縄文時代中期末の大木10式相当の深鉢型土器片を除き、いずれも縄文時代晩期最初頭~前葉の時期にあたるものである。804、806は埋土の上層で発見され、縄文時代晩期前葉の大洞B-C式に相当するものとみられる。809、812は若干時期が下るかもしれない。805、807、808は東壁際の床面から一括出土した土器で、縄文時代晩期最初頭に位置付けられる。819~822も同様である。その他、埋土や床面から出土した810、811、813、814、829、830の粗製大型深鉢、823~827のような晩期前葉の大洞B式に相当する土器片もみられる。住居跡内の遺物出土状況は別図のとおりである。

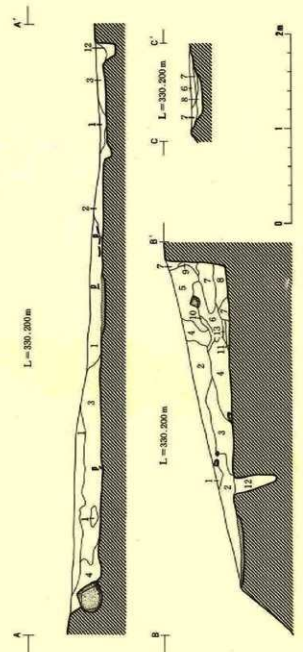
石器のうち、832は葉の羽根状に上下に挟りをもつスクレーパーと思われる石器である。833はいわゆる横型石匙である。834は剥片を利用したスクレーパーとみられる。

土製品の831は、小型土偶の胴部破片である。背面の文様からみて縄文時代晩期最初頭の土

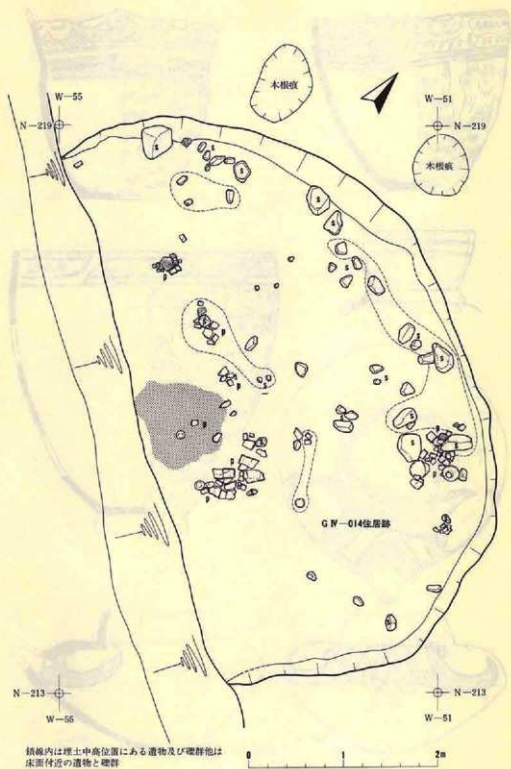


標本	位置	標本	位置
P1	0.25x0.25m	P17	0.15x0.15m
P2	0.25x0.25m	P18	0.15x0.15m
P3	0.27x0.27m	P19	0.15x0.15m
P4	0.25x0.25m	P20	0.15x0.15m
P5	0.14x0.14m	P21	0.15x0.15m
P6	0.14x0.14m	P22	0.15x0.15m
P7	0.25x0.25m	P23	0.15x0.15m
P8	0.14x0.14m	P24	0.15x0.15m
P9	0.14x0.14m	P25	0.15x0.15m
P10	0.14x0.14m	P26	0.15x0.15m
P11	0.27x0.27m	P27	0.15x0.15m
P12	0.27x0.27m	P28	0.15x0.15m
P13	0.27x0.27m		
P14	0.25x0.25m		
P15	0.25x0.25m		
P16	0.25x0.25m		
P17	0.25x0.25m		
P18	0.25x0.25m		
P19	0.25x0.25m		
P20	0.25x0.25m		
P21	0.25x0.25m		
P22	0.25x0.25m		
P23	0.25x0.25m		
P24	0.25x0.25m		
P25	0.25x0.25m		
P26	0.25x0.25m		
P27	0.25x0.25m		
P28	0.25x0.25m		

1. 溝渠
2. 溝渠
3. 溝渠
4. 溝渠
5. 溝渠
6. 溝渠
7. 溝渠
8. 溝渠
9. 溝渠
10. 溝渠
11. 溝渠
12. 溝渠
13. 溝渠



新137号 G IV-014在藤原平-新田区



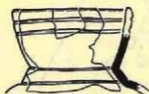
第138図 GN-014住居跡遺物出土状況平面図



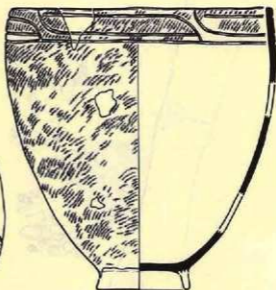
804



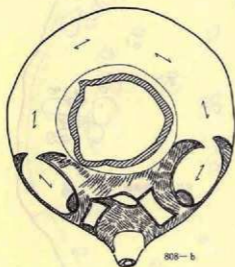
805



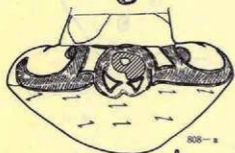
806



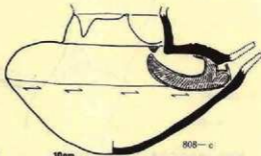
807



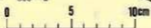
808-b



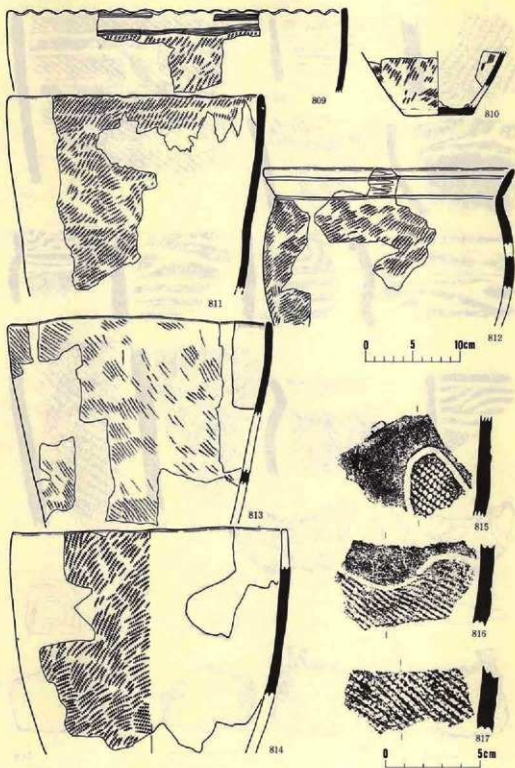
808-a



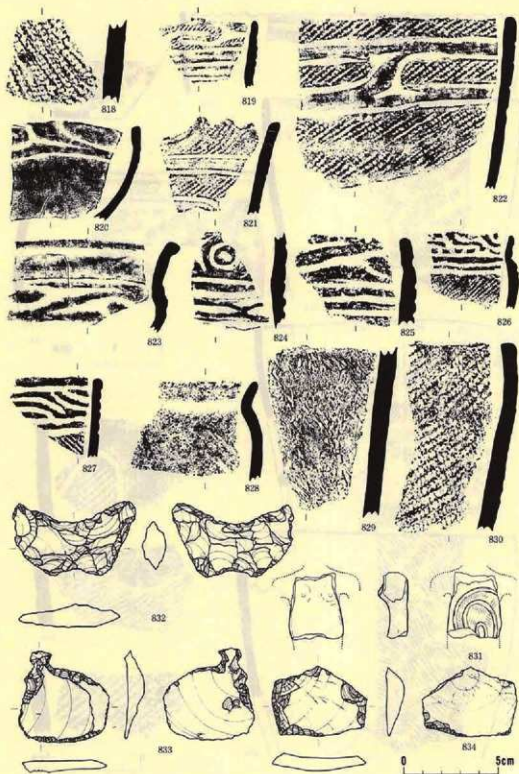
808-c



第139图 G IV-014住居跡出土遺物(1)



第140圖 G IV—014住居跡出土遺物（2）



第141圖 G IV—014住居跡出土遺物(3)

器に伴うものと推定される。

〔時期〕 床面出土の遺物から、縄文時代晩期最初頭にあたると思われる。

GN-015 住居跡 (第142～144図 写真図版47・49・136)

〔位置〕 調査区西側にあり、GN-013 住居跡のすぐ北東に隣接している。

〔検出面〕 GN-014 住居跡と同様である。

〔保存状況〕 GN-051 雨裂跡に重複する東半部分と土層の判別が困難な南西部分が不明瞭である。また、西半は木根の貫入によって破壊され、遺物の散布状況や炉跡の存在から住居跡とされる程度である。

〔重複〕 GN-051 雨裂跡の埋土上にあり、これよりかなり新しい。

〔形状〕 原形が破壊されて不明であるが、円形に近い直径3.80mほどの竪穴住居跡と考えられる。壁の残存高は0.16mである。

〔内部施設〕 住居跡の内外には6基の柱穴状ピットがあり、上屋構造に関連する支柱穴はP₂、P₃とみられる。しかし、対応する柱穴は確認されていない。埋土は床面の埋土と同様の黒褐色土である。

炉跡は住居跡の中央と思われる部分に長さ0.49m、幅0.23mほどの地床炉が設けられている。焼土の範囲や堆積状況からは、短期間しか使用されなかったものと推定される。

〔埋土〕 当初GN-051雨裂跡の一部と考えられたため、埋土はほとんど削除されて明らかでない。土層は雨裂跡の上層と同様である。

〔遺物〕 埋土中に出土する遺物はGN-051雨裂跡の遺物として処理したため、詳細は明らかでない。床面出土の遺物は835の土器片1点であり、文様の特徴から縄文時代晩期前葉の大洞B-C式に相当する。



第142図 出土遺物

〔時期〕 GIII-051 雨裂跡の遺物や床面出土の遺物によって縄文時代晩期前葉の時期と思われる。

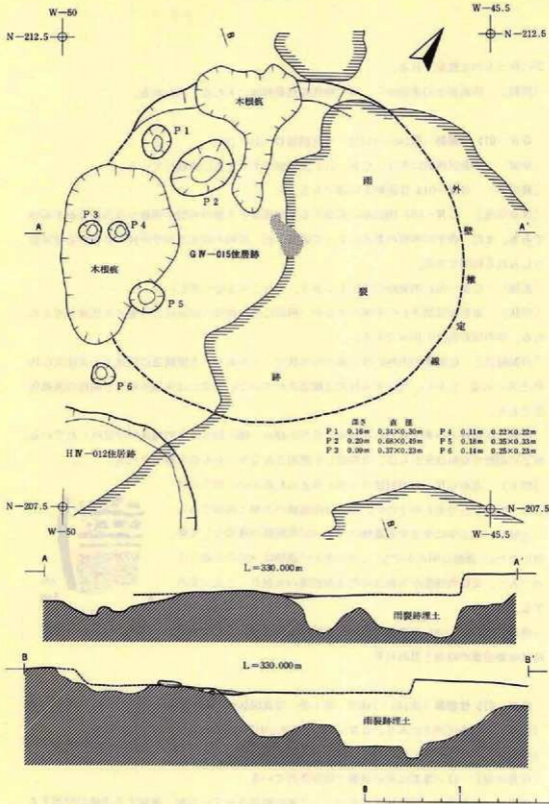
GN-016 住居跡 (第145・146図 第1表 写真図版45・46・136)

〔位置〕 調査区西方にあり、GN-013・GN-015住居跡の北東に位置している。

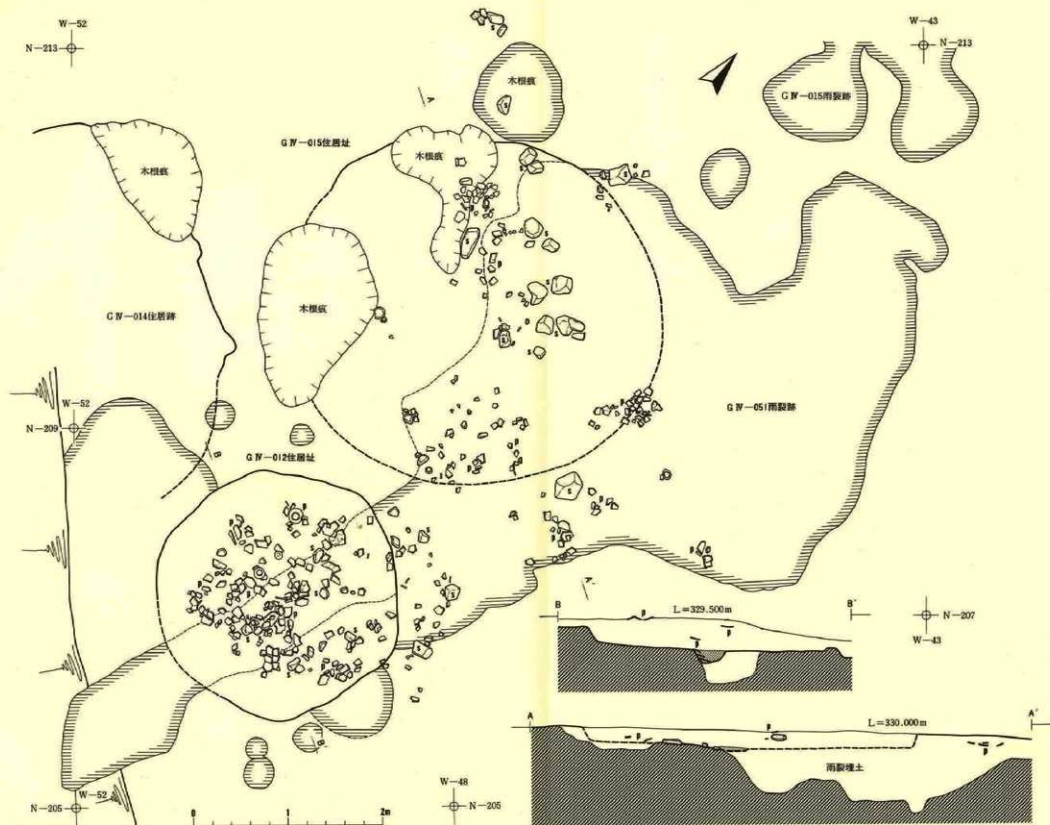
〔検出面〕 GN-014 住居跡と同様である。

〔保存状況〕 ほゞ原形に近い状態で保存されている。

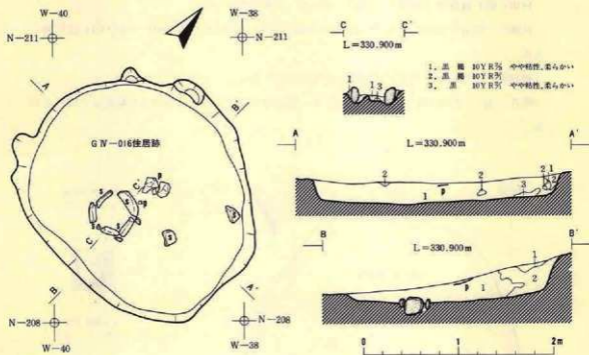
〔重複〕 北西壁の一部に柱穴状のピット2基が確認されているが、重複する遺構か付属する関連遺構なのか判然としない。



第143图 G IV-015住居跡平·断面图



第144図 G N-015・HW-012住居跡及びG N-051雨殺跡埋土上部の遺物出土状況平・断面図



第145図 G IV-016住居跡平・断面図

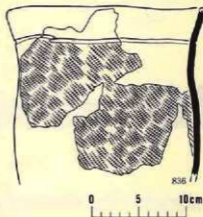
〔形状〕 東西2.30m、南北2.60mのや、いびつな楕円形状をした堅穴住居跡である。壁の残存高は0.45mである。

〔内部施設〕 床の中央部南寄りに厚い板状の礫を五角形に組んだ石囲炉が設けられている。礫は丁寧にしっかり埋め込まれていたが、炉床の焼土はほとんどみられない。

〔埋土〕 壁隙の一部を除いて黒褐色土が主体をなし、自然堆積に近い様相を示している。埋土中にはや、大きめの礫が2、3個混入している。

〔遺物〕 埋土の上に大型深鉢型土器 836の大きい破片が出土しており、斜縄文の粗さや器壁の形状から縄文時代中期末の大木10式、またはこれに近い型式の土器とみられる。

〔時期〕 埋土中から出土した土器と密接な関連が考えられ、大よそ縄文時代中期末に位置付けられる。



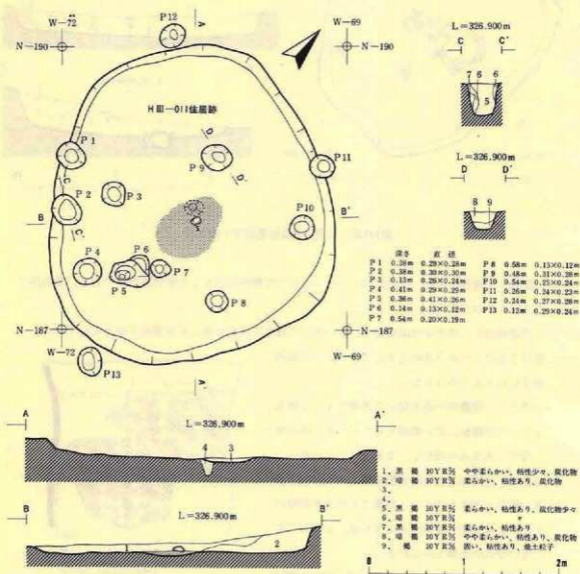
第146図 G IV-016住居跡出土遺物

HⅢ-011 住居跡 (第147・148図 第2表 写真図版49・136)

〔位置〕 調査区西側にある。町道の南に位置し、すぐ南西にはHⅢ-012・013・014 住居跡がある。

〔検出面〕 畑地耕作土直下の褐色火山灰土上面である。

〔保存状況〕 柱穴状ピットの重複により一部破壊されているが、原形は比較的良好に残っている。



第147図 HⅢ-011住居跡平・断面図

〔重複〕 柱穴状ピットと重複しているが、炉床下のピット1基を除いて新旧関係は確認されていない。

〔形状〕 直径3.00×3.30mの不整形の竪穴住居跡である。壁の残存高は0.25mである。

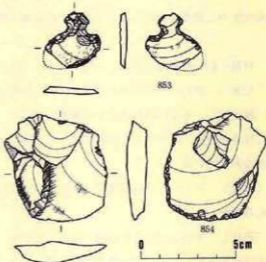
〔内部施設〕 住居跡の上屋構造に関連する支柱穴と考えられるのは、炉を囲むP₃、P₅、P₈～P₁₀などであるが、周囲の柱穴が多く明確でない。埋土は中央部分が黒色か黒褐色系である。

炉跡は床の中央部に設けられた地床炉であり、南北0.77m、東西0.57mの卵形をなしている。炉の中央部には直径0.1m未満の礎1個があり、炉床下の北西寄りには柱穴状ピットが検出されている。

〔埋土〕 黒色土と黒褐色土の2層からなり、自然堆積に近い様相を示している。

〔遺物〕 埋土中から石器2点が出土している。853はつまみ付きの横型石匙、854は不定形のスクレーパーである。

〔時期〕 特定できる遺物がないので明らかでないが、付近の耕作土中から採集された土器のほとんどが縄文時代晩期前葉の土器であることからこの時期に入る可能性が強い。



第148図 H III-011住居跡出土遺物

H III-012・013・014住居跡 (第150図)

〔位置〕 調査区西側にあり、H III-011 住居跡の南～南西に位置している。東西方向に西方からH III-012・013・014 住居跡の順に並んでいる。

〔検出面〕 畑地耕作土直下のシルト質褐色火山灰土の上面である。

〔保存状況〕 いずれも住居跡北壁の残存が良好である。しかし、住居跡相互の境界は明確でない。また、調査区南辺に位置しており、南側は未確認である。

〔重複〕 残存する壁の湾曲状況とピットからみて3棟の住居跡が重複するものと思われるが、新旧関係は土層が不明瞭で確認されていない。

〔形状〕 未調査の部分があり、詳細は不明である。残存する壁によって推定される形状は、H III-012 住居跡が直径6.00m、H III-013 住居跡が直径4.00m、H III-014 住居跡が直径4.10mほどであり、円形か方形かかった円形の竪穴住居跡と思われる。壁の残存高は順に0.24m、

0.16m、0.13mである。

〔内部施設〕 20基近い柱穴状ピットがあり、住居跡に関連するものが含まれていると思われるが、ピット相互の配置関係は明らかでない。ピットの上層は黒色か黒褐色系の埋土である。

〔埋土〕 削平されて薄くなっており、大部分が攪乱をうけている。残存部分の埋土は、黒色か黒褐色土が主体となり、HⅢ-013・014住居跡では底面に暗褐色土の堆積がみられる。全体に自然堆積に近い状況と認められるが、住居跡相互の境界は判明していない。

〔遺物〕 調査範囲からは出土していない。

〔時期〕 伴出遺物がないため明らかでないが、隣接する南側の畑地からは多数の縄文時代晩期前葉の土器片が散在しており、いずれも縄文時代晩期前葉の住居跡と推定される。

HⅢ-015 住居跡 (第149・151図 第1・3表 写真図版136)

〔位置〕 調査区西側にあり、HⅢ-012 住居跡等の西方に位置する。開田工事による削平部分である。

〔検出面〕 水田の耕作土直下で検出した。

〔保存状況〕 削平されて南北壁の一部が残存するにすぎない。炉跡は破壊され、礎の一部が失われている。

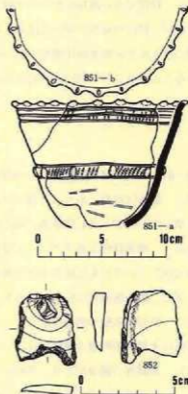
〔重複〕 いくつかの柱穴状ピットを除いて認められない。

〔形状〕 直径4.60mほどのほぼ円形をなす堅穴住居跡と思われる。壁の残存高は南壁で0.11mである。

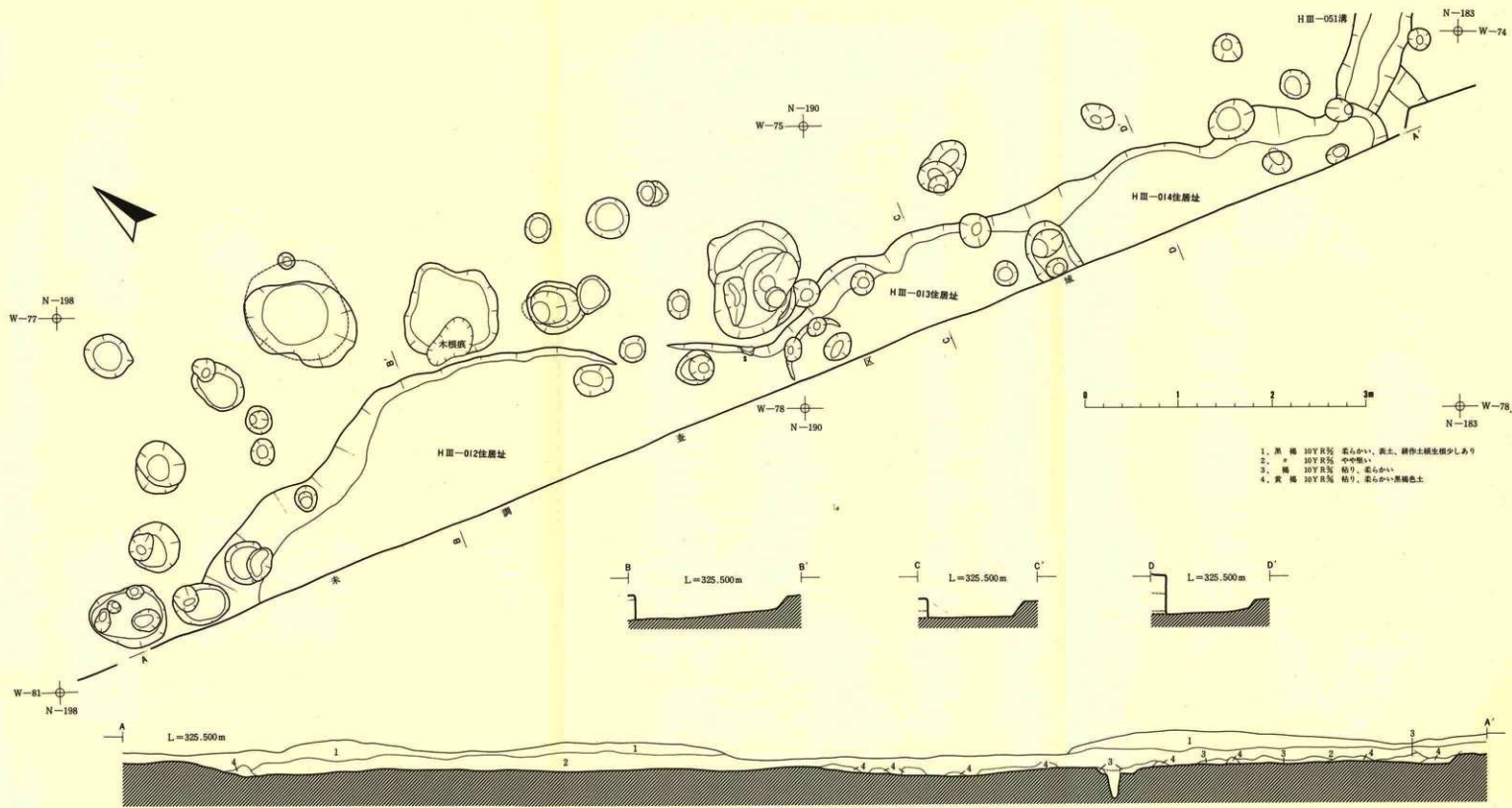
〔内部施設〕 16基の柱穴状ピットが点在し、住居跡の上屋に関連する支柱穴は床の中央部を囲む四～六角形状に配置される一群と推定される。埋土は柔らかい黒褐色土が主体である。

炉跡は床の中央部に直径0.92mほどの石圓炉である。炉床を囲む礎は埋め込まれていないものが多く、開田工事の際に移動しているとみられる。また、炉の北東方向には焼土や炭化物の含まれる薄層が楕円形に分布している。

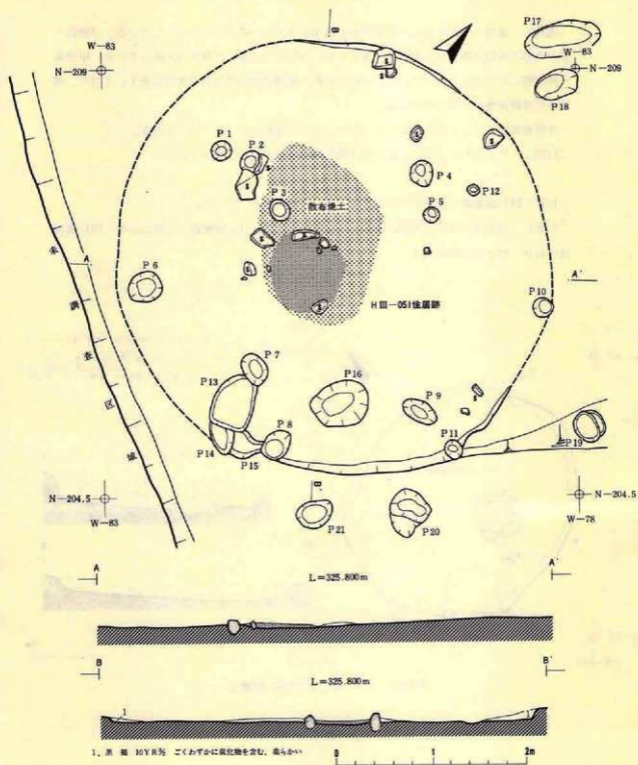
〔埋土〕 残存する埋土は黒色をおびた柔らかいシルト質土であるが、全体の堆積状況は不明である。



第149図 HⅢ-015住居跡出土遺物



第150図 H III-012-013-014住居跡平・断面図



第151図 H III-015住居跡平・断面図

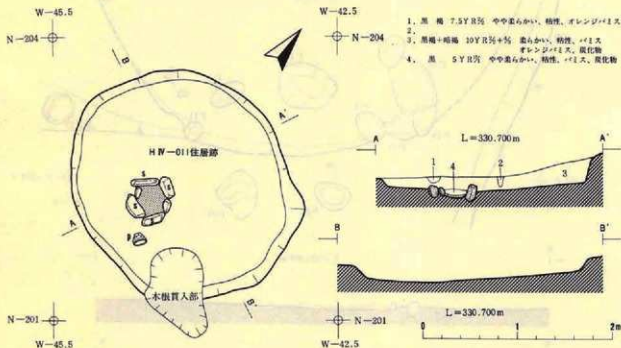
〔遺物〕 東寄りの床面から小型深鉢型土器 851の大きい破片が1点出土している。口唇部と胴中央部に横線区画された単節縄文帯をもち、口唇部の上端には刺突列が廻っている。中央部の縄文帯には4個ほどのコブが付けられている。類例は滝沢村湯舟遺跡に出土しており、縄文時代後期後葉の土器と思われる。

住居跡南辺のピットから出土した 852は、ノッチ付きのスクレーパーである。

〔時期〕 伴出遺物によって、ほぼ縄文時代後期後葉の時期と推定される。

H IV-011 住居跡 (第152・153図 第1表 写真図版48・49・136)

〔位置〕 調査区西側の中央部に位置し、北側にはGW-016 住居跡、西側にGW-051 雨裂跡やH IV-012 住居跡がある。



第152図 H IV-011 住居跡平・断面図

〔検出面〕 GⅣ-016 住居跡等と同様に黒褐色土層下の褐色、または暗褐色土層上面である。

〔保存状況〕 南東壁と床面の一部が木根によって攪乱されているほかは、ほぼ原形に近い状態である。

〔重複〕 認められない。

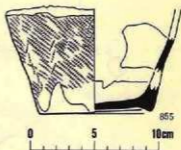
〔形状〕 東西2.60m、南北2.40mのや、東西に長い円形の竪穴住居跡である。壁の残存高は北側で0.30mである。

〔内部施設〕 床の南西寄りに四角形、または五角形状に礫を配した石囲炉が設けられている。炉跡は住居跡の床面よりやや低く、多少焼けている状態である。

〔埋土〕 炉の部分と木根の攪乱を除いてほとんど軟質の黒褐色土層である。

〔遺物〕 炉のすぐ南東側床面から 855の大型深鉢型土器の底部片が出土している。左上がりの単節斜縄文が施されているが、時期は不明である。

〔時期〕 住居跡の形態からはGⅣ-016 住居跡と同時期かもしれないが、住居跡周辺から出土した土器からは縄文時代晩期前葉に入る可能性も考えられる。



第153図 HⅣ-011住居跡出土遺物

HⅣ-012 住居跡 (第154～164図 第1・3表 写真図版50・137～144)

〔位置〕 調査区の西側にあり、北にGⅣ-015 住居跡、西にGⅣ-013 住居跡、東にHⅣ-011 住居跡がそれぞれ位置している。

〔検出面〕 HⅣ-011 住居跡とほぼ同様である。

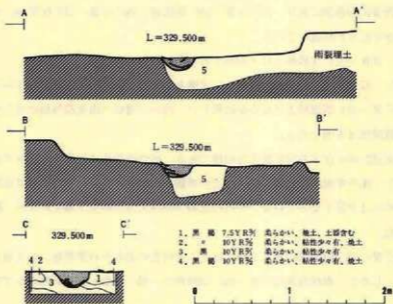
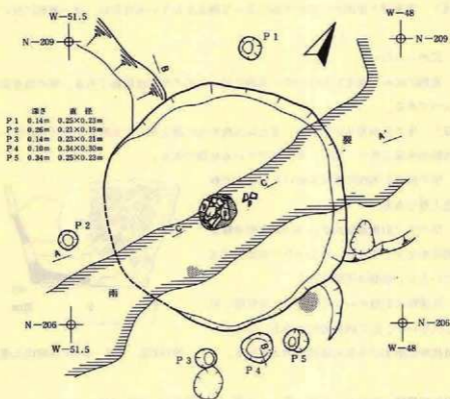
〔保存状況〕 GⅣ-051 雨裂跡と重複し、北側と南側の一部は不明瞭な部分のみられる。

〔重複〕 GⅣ-051 雨裂跡よりはるかに新しい。ほかに遺構の南東部外周に焼土や柱穴群があるが、重複関係は不明である。

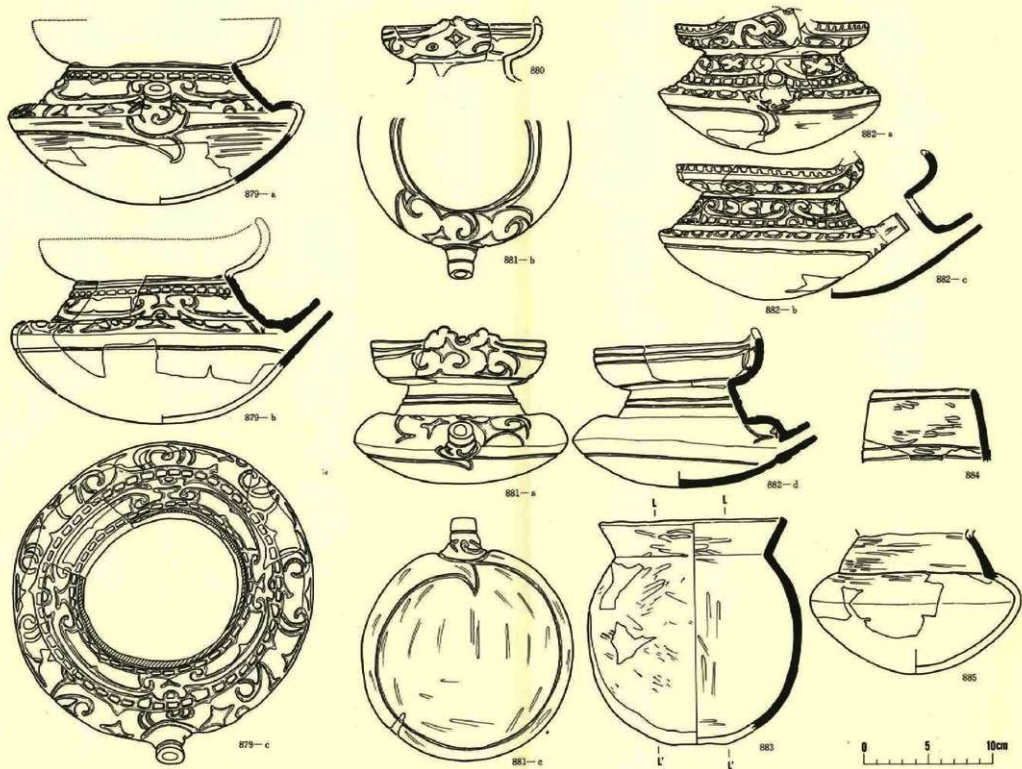
〔形状〕 直径2.60mほどの円形竪穴住居跡である。壁の残存高は北側で0.20mである。

〔内部施設〕 床の中央部に直径0.40mほどの埋竈炉が設けられている。炉底は住居跡の床面から最大0.20mほど低くなっている。炉内の土器 863は大型深鉢型土器であるが、調査段階で破損していた。

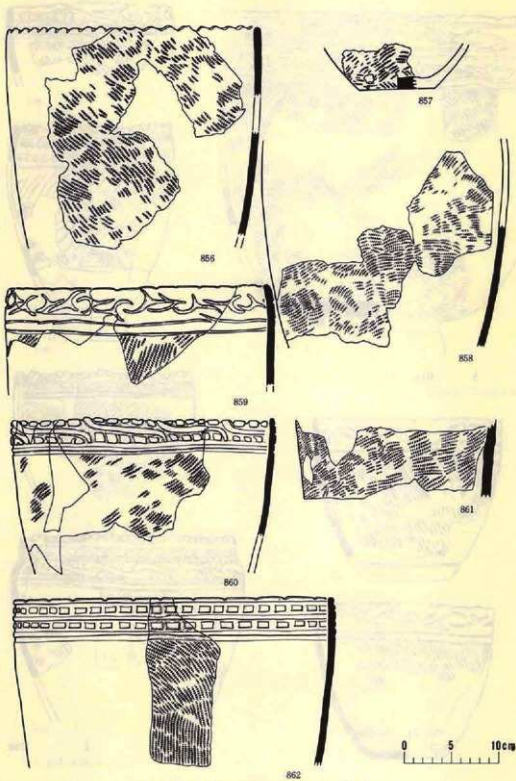
〔埋土〕 GⅣ-051 雨裂跡の埋土上層とほとんど同色の柔らかい黒褐色シルト質土が主体をなしている。しかし、堆積状況はGⅣ-051 雨裂跡の一部とみなしたため明らかでない。



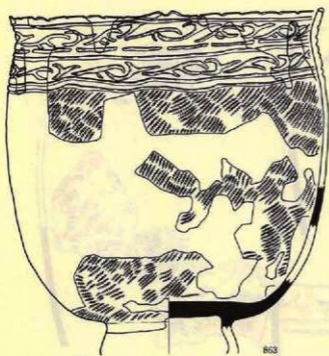
第154図 H IV-012住居跡平・断面図



第155圖 HW-012住居跡出土遺物(1)

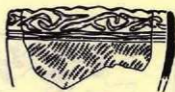


第156圖 H IV—012住居跡出土遺物(2)



863

0 5 10cm



864



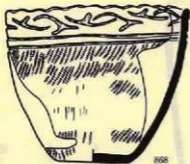
865



866



867



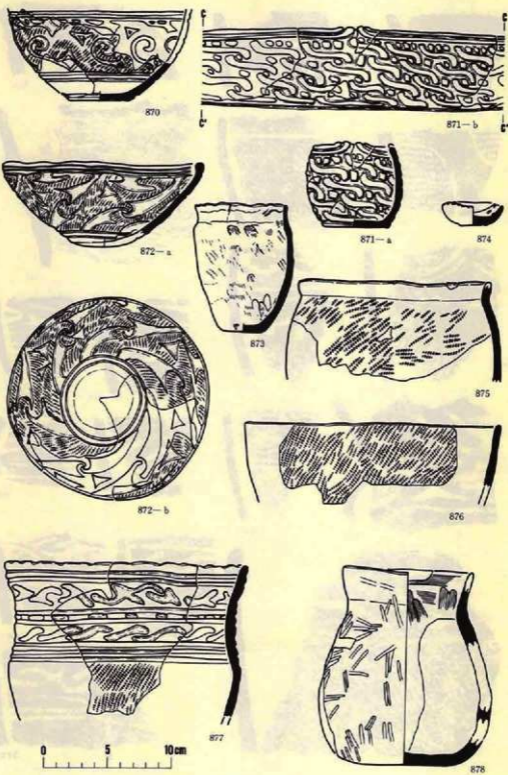
868



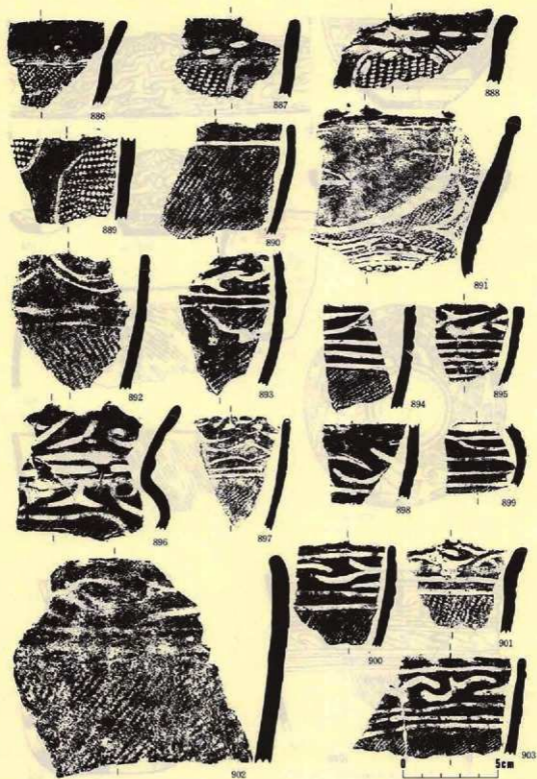
869

0 5 10cm

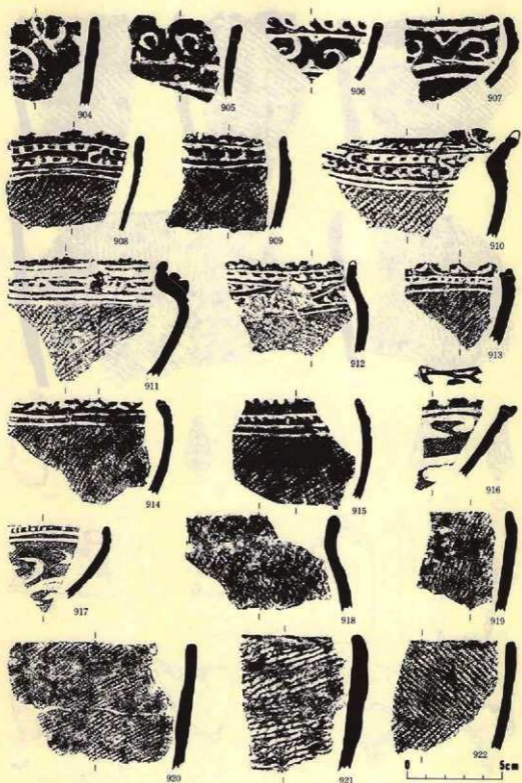
第157图 H IV-012住居跡出土遺物(3)



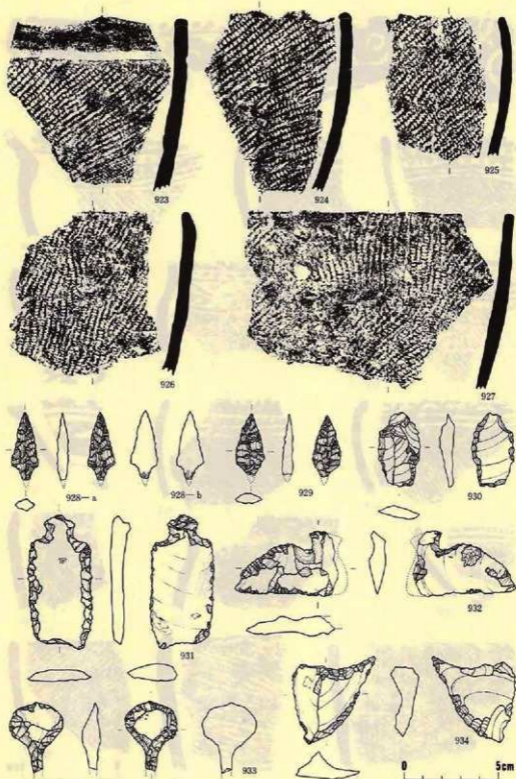
第158圖 H IV-012住居跡出土遺物(4)



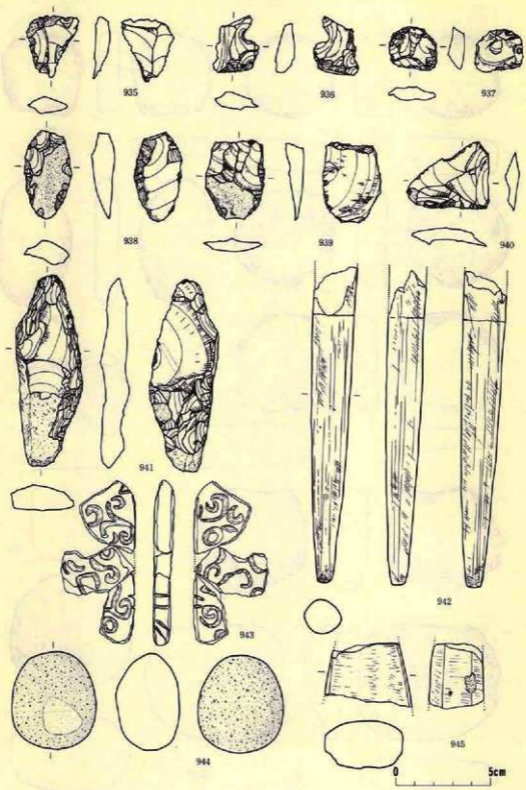
第159圖 H IV—012住居跡出土遺物（5）



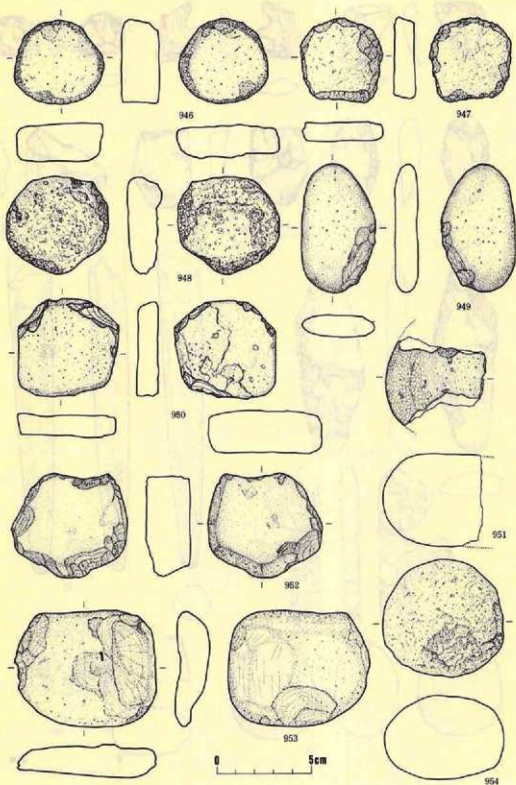
第160图 H IV—012住居跡出土遺物(6)



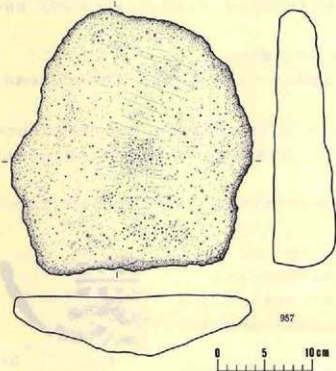
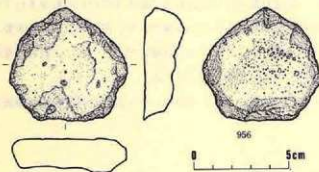
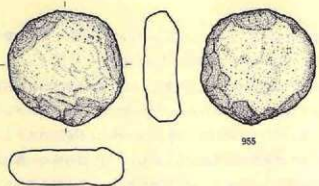
第161图 H IV-012住居跡出土遺物(7)



第162圖 H IV—012住居跡出土遺物(8)



第163圖 H IV-012住居跡出土遺物(9)



〔遺物〕 GⅣ-015 住居跡で図示しているとおり、埋土上層が多数出土している。土器片を主体とするが、散布された状態を示し、住居跡の廃絶した後に廃棄された様相が伺われる。

856～927の土器は、872、886～889、916、917などの少数を除いて、ほとんど縄文時代晩期初頭～前葉であり、特に前葉期のものが多い。器種は、大・小の深鉢型土器、大・小の台付鉢型土器、浅鉢型土器、小型の壺型土器、注口土器などがみられる。晩期の土器のうち、文様の特徴からは890、892、923がや、古く、晩期初頭にのぼるかもしれない。859、863、864、866、868、877、880、881、893～903などは晩期前葉の大洞B式に相当しよう。860、862、865、867、869～871、879、882、906～909などは、晩期前葉の大洞B-C式か、これに近い時期に、872、916、917は晩期中葉の大洞C₁式に、また、910～915も一部に大洞B-C式に近い様相もあるがこの時期に比

第164図 HⅣ-012住居跡出土遺物(10)

定される。そのほか、晩期前～中葉に入る土器としては、856、857、858、861の大型深鉢型土器があり、873～876、878、883～885、918～927など各器種が含まれる。

石器は土器より少ないが、主要なものは928～957の30点である。928～929は有茎の打製石鎌である。928の基部にはアスファルト様の付着物がみられる。930～932、934～940はスクレーパーかそれに類似する剥片石器である。931、932は石匙、930、934～940は不定形のスクレーパーや使用痕のある剥片類である。941は石槍の未製品かもしれない。942は石棒の一部、943は岩版の一部であり、縄文時代晩期前葉のものである。945は磨製石斧、944は小型の擦り石と思われる球状の礫、946、947、955、956は打製の円板状石製品で加工途中のものも含まれている。949は卵形の扁平な礫の一部に打製調整の加えられた痕跡があり、円板状石製品の未製品かもしれない。951、954は小型の円形擦り石であるが、951は細片である。957は板状の垂直礫の一面に擦痕を有し、石皿やまな板に準じた用途が考えられる。

〔時期〕 炉に使われていた鉢型土器の所属時期から、同時期かや、遅れる縄文時代晩期前葉に入ると考えられる。

HV-013 住居跡 (第165・166図 写真図版46)

〔位置〕 調査区西側中央部の町道北側に位置する。すぐ北側にはGN-013住居跡、HV-012住居跡がある。

〔検出面〕 町道北側、切り通し斜面上で検出した。

〔保存状況〕 町道工事によって遺構の大半が失なわれ、切り通しに北壁と床の一部が残存する。

〔重複〕 GN-013住居跡とGN-051雨裂跡と重複するが、埋土の上面が失なわれているため、新旧関係は明らかでない。出土遺物からはGN-051雨裂跡より新しいと思われる。

〔形状〕 直径2.60mほどの円形状をなす竪穴住居跡とみられる。壁の残存高は、北側で0.31mである。

〔内部施設〕 残存部分が少なく、不明である。

〔埋土〕 HV-012住居跡と同様の黒褐色土である。

〔遺物〕 埋土中から958の土器片1点が出土している。文様の特徴から縄文時代晩期前葉の大淵B-C式に相当するとみられる。

〔時期〕 埋土から出土した土器からは、縄文時代晩期前葉頃に位置付けられる。



第165図 出土遺物

J V-011 住居跡

(第167・168図 第1表 写真
図版51・145)

〔位置〕 調査区東側の北西寄りに位置する。東側にはJ V-012 A・B住居跡があり、北東部にはJ VI-012住居跡がある。

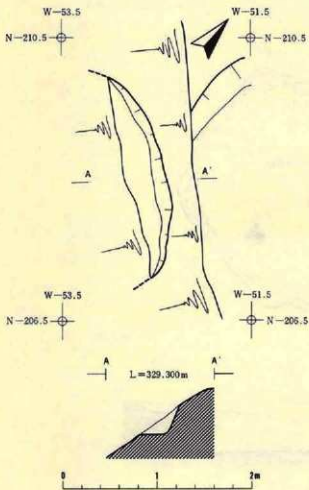
〔検出面〕 J V区横断土層の第2層の黒褐色土層直下、暗褐色土層上面に検出された。

〔保存状況〕 遺構の北西壁の一部が倒木によって破壊されているが、全体に原形に近い状態で保たれている。

〔重複〕 認められない。

〔形状〕 北東～南西方向の長さ、2.80m、北西～南東方向の長さ2.20mの隅丸形状の竪穴住居跡である。検出面から床面までは北東壁で0.47mであり、南西壁の外側に浅い張り出し部分が認められる。

〔内・外部施設〕 北東壁際と南西壁際の一部に土留め施設に関連する



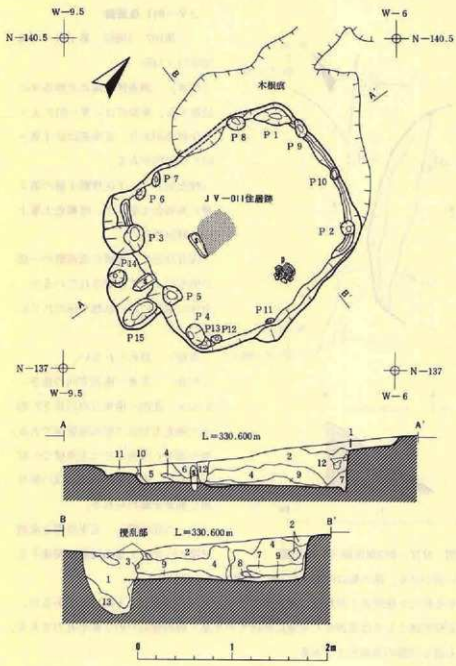
第166図 H IV-013住居跡平・断面図

と思われる細い溝がある。溝の幅は0.05～0.1m、深さ0.05mほどである。

周溝に関連する柱穴と住居の上屋構造に関連する支柱穴とみられるピットは13基であるが、上屋に関連する柱穴跡としては北西から北東にかけての4基と南西壁沿いの3基が有力である。埋土はいずれも溝と同様の黒褐色土である。

炉跡は中央部のや、南西寄りにあり、炉床の南東側に板状の石英安山岩の垂角礫を直立させた「立石炉」といべき形をしている。炉床の規模は0.49×0.34mの南西～北東方向に長い円形である。

南西壁の外側には長さ0.47m、幅0.74mの不整な四角形状の張り出し部分があり、入口施設跡とみられる。張り出し部の床は炉のある床面より一段高くなり、南東へ緩やかに上がってい



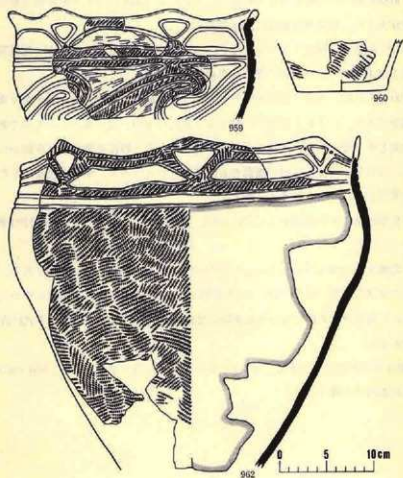
第167図 J V-011住居跡平・断面図

る。両脇には柱穴と思われる浅いピットが2基あり、住居跡との境には細長い垂角礫が1個検出されている。

〔埋土〕 10層からなり、木根による攪乱を除いては自然堆積に近い様相を示している。

〔遺物〕 土器2点がある。963は南東壁際の床面から倒れた状態で出土した小型深鉢型土器である。文様の特徴などから縄文時代後期前葉のやや新しい段階に入ると思われ、従来十腰内I式と呼称されている一群に近い時期に入るようである。960は埋土中から出土した深鉢型土器の底部である。

〔時期〕 伴出遺物によって縄文時代後期前葉に入るものと推定される。



第168図 J V-011・012住居跡出土遺物

● J V-012A 住居跡 (第168~171図 第1・3表 写真図版52・145)

〔位置〕 調査区東側の北西寄りに位置し、すぐ南西には J V-012B 住居跡、西側に J V-011 住居跡、北側に J W-012 住居跡がある。

〔検出面〕 J V-011 住居跡と同様である。

〔保存状況〕 土層による識別が困難であり、北壁の一部を除いて確認されていない。

〔重複〕 土層断面の観察が完掘後の柱穴配置の検討により、本住居跡の上部に時期の降る J V-012B 住居跡の重複が明らかになっている。そのほか、J V-0218 ビットが住居跡の北壁に重複しているが、新旧関係は明らかでない。また、J V-026 ビットが住居跡の埋土上にある。J V-0214 ビットとの重複も考えられるが新旧関係は確認されていない。

〔形状〕 直径3.40mの円形ともみられるが、一辺2.5~3.0mほどの方形か長方形の竪穴住居跡の可能性が大きい。壁の残存高は0.28mである。

〔内部施設〕 住居跡に関連するビットは P₁~P₁₀に含まれると思われるが、配置関係は明確でない。埋土は柔らかいシルト質の黒色~黒褐色土を主体にしている。

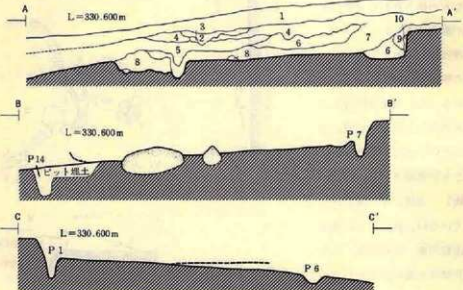
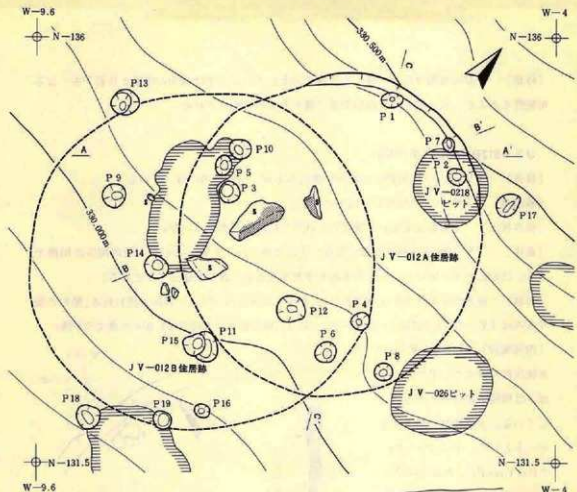
炉跡と思われるのは、床の中央部からやや西寄りに3個の垂角礫が南々西~北々東方向に並んでいる部分である。いずれも床面下の粘土混り垂角礫層の一部が露出したものであるが、北側の礫の北面と中央礫の東面が火熱をうけて赤変している。特に北側の礫は床面から0.30mほど高くなり、「立石炉」の礫と同様の機能をもつ可能性が充分ある。他の赤色変化した礫についても炉跡に関係していることが考えられる。

〔埋土〕 自然堆積に近い様相を示しているが、多少埋没した段階で J V-012B 住居跡の築かれた状況がしられる。

〔遺物〕 北側床面の埋土中から出土した959~970の土器、964~967の石器がある。

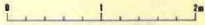
959・962の深鉢型土器、961・968・970の壺型土器、969はいずれも北部埋土中から出土した土器であるが、時期の明らかでない969を除いて縄文時代後期前葉の十腰内I式に近い文様をもつものである。

964は磨製石斧の頭部破片である。965は円形がかった形のスクレーパー、966・967は小型の礫石と思われる球状の礫である。



- | | | | | | | | | | |
|---------|----------|---------|----------|---------|----------|---------|----------|---------|----------|
| 1. 黒 土 | 7.5Y R/2 | 1. 黒 土 | 7.5Y R/2 | 1. 黒 土 | 7.5Y R/2 | 1. 黒 土 | 7.5Y R/2 | 1. 黒 土 | 7.5Y R/2 |
| 2. " | 7.5Y R/2 | 2. " | 7.5Y R/2 | 2. " | 7.5Y R/2 | 2. " | 7.5Y R/2 | 2. " | 7.5Y R/2 |
| 3. " | 10Y R/2 | 3. " | 10Y R/2 | 3. " | 10Y R/2 | 3. " | 10Y R/2 | 3. " | 10Y R/2 |
| 4. " | 7.5Y R/2 | 4. " | 7.5Y R/2 | 4. " | 7.5Y R/2 | 4. " | 7.5Y R/2 | 4. " | 7.5Y R/2 |
| 5. " | 10Y R/2 | 5. " | 10Y R/2 | 5. " | 10Y R/2 | 5. " | 10Y R/2 | 5. " | 10Y R/2 |
| 6. " | 7.5Y R/2 | 6. " | 7.5Y R/2 | 6. " | 7.5Y R/2 | 6. " | 7.5Y R/2 | 6. " | 7.5Y R/2 |
| 7. " | 10Y R/2 | 7. " | 10Y R/2 | 7. " | 10Y R/2 | 7. " | 10Y R/2 | 7. " | 10Y R/2 |
| 8. 粘 土 | 10Y R/2 | 8. 粘 土 | 10Y R/2 | 8. 粘 土 | 10Y R/2 | 8. 粘 土 | 10Y R/2 | 8. 粘 土 | 10Y R/2 |
| 9. " | 10Y R/2 | 9. " | 10Y R/2 | 9. " | 10Y R/2 | 9. " | 10Y R/2 | 9. " | 10Y R/2 |
| 10. 粘 土 | 10Y R/2 | 10. 粘 土 | 10Y R/2 | 10. 粘 土 | 10Y R/2 | 10. 粘 土 | 10Y R/2 | 10. 粘 土 | 10Y R/2 |

第169図 J V-012A・012B住居跡平・断面図



〔時期〕 一部の遺物は床面に接する状態で出土している点では遺物の時期より若干古くなる可能性もあるが、同じ縄文時代後期前葉に属するものを推測される。

J V-012B住居跡 (第169図)

〔位置〕 J V-012A住居跡とはほぼ同位置にあるが、やや南西に寄っている。

〔検出面〕 J V-012A住居跡と同様である。

〔保存状況〕 土層断面を除いて遺構の形状や規模は確認されていない。

〔重複〕 J V-012A住居跡の埋土を掘り込んで築かれ、J V-026ピットとの関係は同様である。ほかにP V-0212ピットとの重複も予想されるが、新旧関係は不明である。

〔形状〕 柱穴の分布状況や土層断面から、直径3.40m以内の竪穴住居跡と思われる。竪穴の掘り込みはJ V-012A住居跡とはほぼ同一面とみられ、検出面からの深さは0.20m程度でやや浅い。

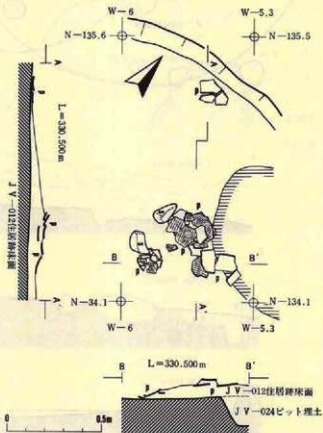
〔内部施設〕 柱穴はJ V-012

A住居跡を含めて13基であり、埋土は同様の黒褐色土を主体にしている。上部構造に関連するピットとして、P₁₀・P₃~P₆とP₈・P₁₄・P₁₅、あるいはP₁₁・P₁₆などの組み合わせを想定できるが確定できない。

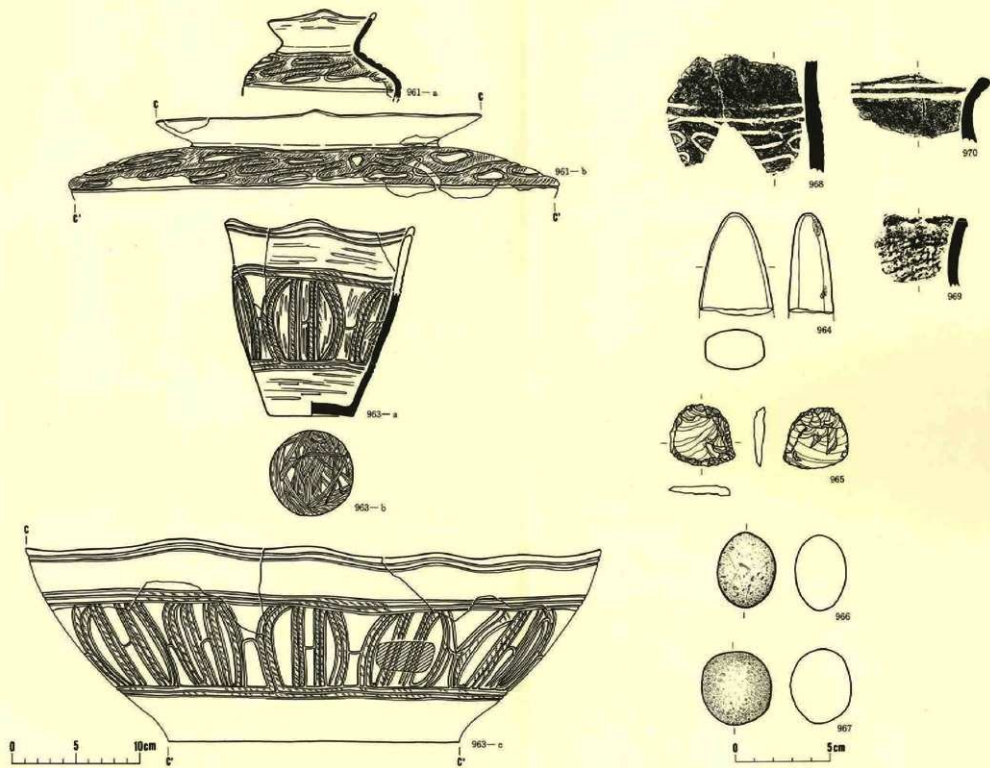
炉跡は検出されていないが、遺構の検出中に焼土の薄層が認められる。焼土は直径0.40m内外の円形をなし、石囲いの痕跡がないところから地床炉であることが推測される。

〔遺物〕 遺構に伴う遺物は出土していない。付近からは縄文時代後期前葉、晩期前葉、弥生時代前期の土器片が出土している。

〔時期〕 J V-012A住居跡との重複関係や周囲から出土した



第170図 J V-012住居跡内土器出土状況図



第171图 J V—011·012A住居跡出土遺物

遺物から、縄文時代後期前葉～弥生時代前期に入る事が予測される。しかし、詳細な時期を特定することは困難である。

JV-013住居跡（第172区）

〔位置〕 調査区東側の北西寄り緩斜面上に位置し、すぐ南側にはJV-012A・B住居跡、東北東にはJV-011A・B・C住居跡がある。

〔検出面〕 JV-012A・B住居跡と同様である。

〔保存状況〕 遺構の埋土と周囲の土層が酷似しており、床面まで掘り下げた段階で炉跡や柱穴が確認された。このためほとんど外形を失っている。また、試掘トレンチによって東壁の一部を破壊している。

〔重複〕 JVI-022ピットと東壁で重複しているが、新旧関係は不明である。また、支柱穴とみられるピット群の組み合わせによっては、2時期以上の建て替えの可能性もあるが明確でない。

〔形状〕 上屋の支柱穴と思われるピットの配置などから、南北3.70m、東西3.10mほどの長方形、または隅丸長方形をなし、壁際に支柱穴の廻る竪穴住居跡とみられる。壁は残存していないが、床面までの深さは0.30m程度と推定される。

〔内部施設〕 柱穴状のピットは17基である。埋土はやや明るい黒褐色の柔らかいシルト質土を主体とするものが多い。大部分のピットは垂直に掘られているが、4基はやや斜め方向になり、P₇・P₈は底部で接している。上屋構造に関連する柱穴としてはP₁～P₁₇が有力であり、2時期に及んでいることが推定される。

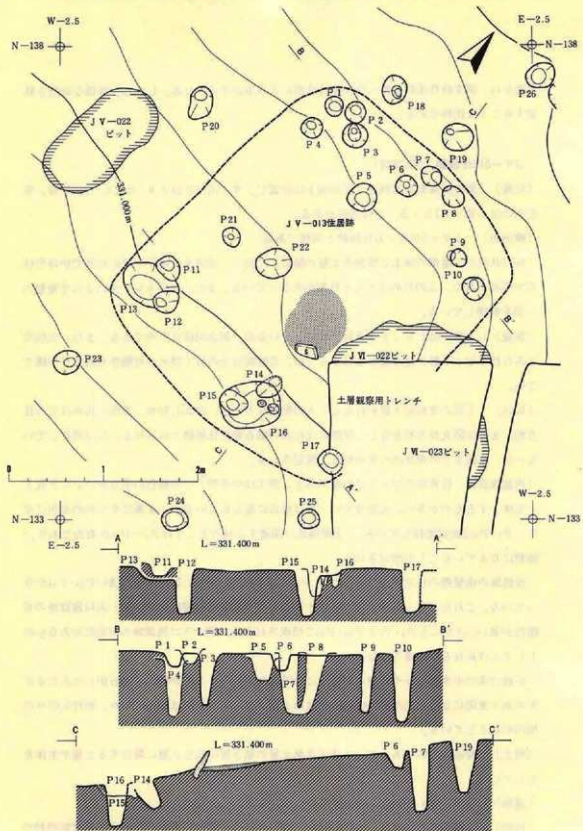
住居跡の南壁際の柱穴P₁₁・P₁₂とP₁₄・P₁₅にはそれぞれ深さ0.20m未満の浅いP₁₃・P₁₆が伴っている。これらのピットは、他の柱穴と異なる点や位置的な関係などから、入口施設跡の可能性が高い。ほかにもP₃・P₆とP₁₈・P₁₉で構成される柱穴群が入口施設跡の可能性のあるものとしてあげられるが明確ではない。

炉跡は床の中央部よりやや南々東寄りに設けられている。この炉跡は「立石炉」にあたるが炉の南々東辺に立てられた礫は内側に40度ほど傾いている。炉床は長径0.76m、短径0.60mの楕円形状をしている。

〔埋土〕 詳細は不明であるが、JVI区基準土層の第3層暗褐色土層に類似する土層が主体をなしている。

〔遺物〕 出土していない。

〔時期〕 遺構の形態がJV-011住居跡やJVI-011A住居跡に類似しており、これは同時期の縄文時代後期前葉に入るものと思われる。



第172図 J V-013住居跡平・断面図

J V-013住居跡及び周辺の杭穴・柱穴状ビット

深さ		直径					
P1	0.15m	0.20×0.19m	P10	0.77m	0.23×0.23m		
P2	0.15m	0.23×0.22m	P11	0.14m	0.23×0.20m		
P3	0.37m	0.26×0.25m	P12	0.46m	0.29×0.28m		
P4	0.61m	0.21×0.20m	P13	0.18m	0.63×0.41m		
P5	0.23m	0.29×0.26m	P14	0.30m	0.23×0.15m		
P6	0.18m	0.22×0.21m	P15	0.43m	0.27×0.25m		
P7	0.72m	0.23×0.19m	P16	0.18m	0.60×0.49m		
P8	0.04m	0.32×0.20m	P17	0.04m	0.25×0.25m		
P9	0.62m	0.19×0.16m	P18	0.18m	0.27×0.24m		
					P19	0.57m	0.30×0.30m
					P20	0.24m	0.30×0.22m
					P21	0.17m	0.18×0.18m
					P22	0.20m	0.38×0.28m
					P23	0.31m	0.16×0.25m
					P24	0.11m	0.16×0.23m
					P25	0.08m	0.30×0.20m
					P26	0.14m	0.31×0.27m

J VI-011A・B・C住居跡 (第173~177図 第1・3表 写真図版53・54・146~148)

〔位置〕 J V-013住居跡と同様である。すぐ西南西にはJ V-013住居跡があり、東南東、または東方向にやや離れてK VI-011住居跡やK VI-012住居跡がある。

〔検出面〕 J V-013住居跡と同一面で検出された。

〔保存状況〕 遺構の西辺が木根によって破壊されているほか、壁の崩壊している部分があるが、全体に原状の残りが良い。

〔重複〕 炉床や炕床の観察によってほぼ同じ位置に同規模の住居跡が重複していることが判明し、下からJ VI-011A、J VI-011B、J VI-011Cの順とした。

〔形状〕 北西~南東方向が3.50m、北東~南西方向が4.10mほどの隅丸長方形の竪穴住居跡である。いずれも床面は平らであるが、床面の広がりや排水溝の位置に多少のずれがみられる。

〔内部施設〕 上屋構造に関連すると思われる柱穴は、壁沿いの四隅と各辺の中央部に大小あわせて14基がある。このうち、四隅と各辺の中央部にある8基が、一時期に設けられた柱穴とみられる。埋土はほとんど黒色、または灰黒色で柔らかく湿気をおびている。

南西壁の中央から南東壁の中央までの壁溝は、長さ2.40m、幅0.10~0.15m、深さ0.03mである。このうち、南西壁から西壁の中央部までは他の部分より少し高い位置にあり、水の滞留がほとんどない。南西壁の中央から東側にかけては常時湿気があり、浸透水の湧出があることから排水溝とみなされる。さらに後者には直線状の溝が続き、樹枝状に床面を通過して南壁中央部の袋状ビットに注いでいる。ここからは南西に開口する小さなトンネル状の穴を通過して外部にのびる大溝に連なっている。集水施設と思われる袋状ビットは、底部の規模が0.93×0.68mで北西~南東方向にやや長い。南壁中央部からの深さは0.42mである。

袋状ビットに接続する大溝は、長さ5.30m、上幅0.22~0.52m、底部幅0.15mで緩やかに蛇行しながら南西に延び、浅くなって消滅する。溝の深さは袋状ビットの接続部分で検出面から

0.45mである。これらの排水施設は土層の重複などによってJVI-011C住居跡の段階でなくなることが判明した。

住居跡の南西壁中央部には、袋状ビット部分と重複するようにやや浅い不整形の凹みがあり袋状ビットと大溝を結ぶ穴の両側には2基の柱穴が認められる。これと同様の遺構は、JV-011住居跡にあり、入口施設跡と思われる。集水ビットとの重複部分では出入口施設と併用された痕跡は認められず、集水ビットの埋土上に貼床がなされている。

炉跡は床の中央よりやや南西壁に寄った部分にある「立石炉」である。炉床には貼床があり3期にわたる使用痕がある。炉床の南西辺に立つ一枚の立石は、長さ0.45m、最大幅0.32m、厚さ0.20mの石英安山岩亜角礫で全体の半分ほど埋め込まれている。特に抜き替えられた痕跡はなく、火熱をうけた部分の変色が著しく3期を通じて用いられていると推定される。

〔埋土〕 全体で22層に分けられるが、貼床部分や埋め戻した部分を除いて自然堆積に近い状況である。土層断面中には土留め施設の部材とみられる痕跡や崩壊過程を表わす部分がみられる。

〔遺物〕 JVI-011A・B住居跡からは出土していないが、JVI-011C住居跡の床面と埋土中から出土する土器と石器である。主要な遺物は971～999の土器、1000～1007の石器である。

971は縄文時代後期前葉の十腰内I式に相当する時期の壺で網代底を有し、胴上部に漆液が付着固結したと思われる黒褐色のシミが広がっている。972～974は同時期の土器である。972の深鉢型土器は炉の南東側床面から斜めに傾いて出土し、973の深鉢型土器は炉の北側床面から横倒しになって出土している。また、974は小型の完形の壺であるが、器表全体に暗褐色をおびた漆液の付着がみられる。内部には多くの気泡を含んだ暗褐色の薄片状樹脂が2分の1ほど入ったまま固結している。樹脂は分析によって、水分を多量に含んだ状態で放置され、固結した漆であることが判明している。

そのほか、975～999の土器がある。976～981は縄文時代中期末葉の大木10式に相当する土器である。埋土の中～上層から出土しており流れ込みと思われる。975はJV-011住居跡出土の土器と類似する文様をもつ。982～994・997は多少前後するもののはば近接する時期といえる。995・996・999の粗製土器も縄文時代中期末～後期前葉に入ると思われる。

石器では1000・1002・1003のつまみのない不定形なスクレーパー類、1001・1004・1005の使用痕や細調整痕のある剥片があるほか、1006の楕円礫を用いた凹み石、1009の三角柱状の石片1007の浮石質流紋岩の板状砥石、1008の板状礫を用いた白石などがある。これらのほとんどは床面を被う埋土から採集されている。1008は972の深鉢型土器が出土した床面から出土し、1007は住居跡外に延びる大溝の北半の埋土上層から出土している。

〔時期〕 床面出土の遺物によって、最終の住居跡は縄文時代後期前葉のやや新しい時期とみ

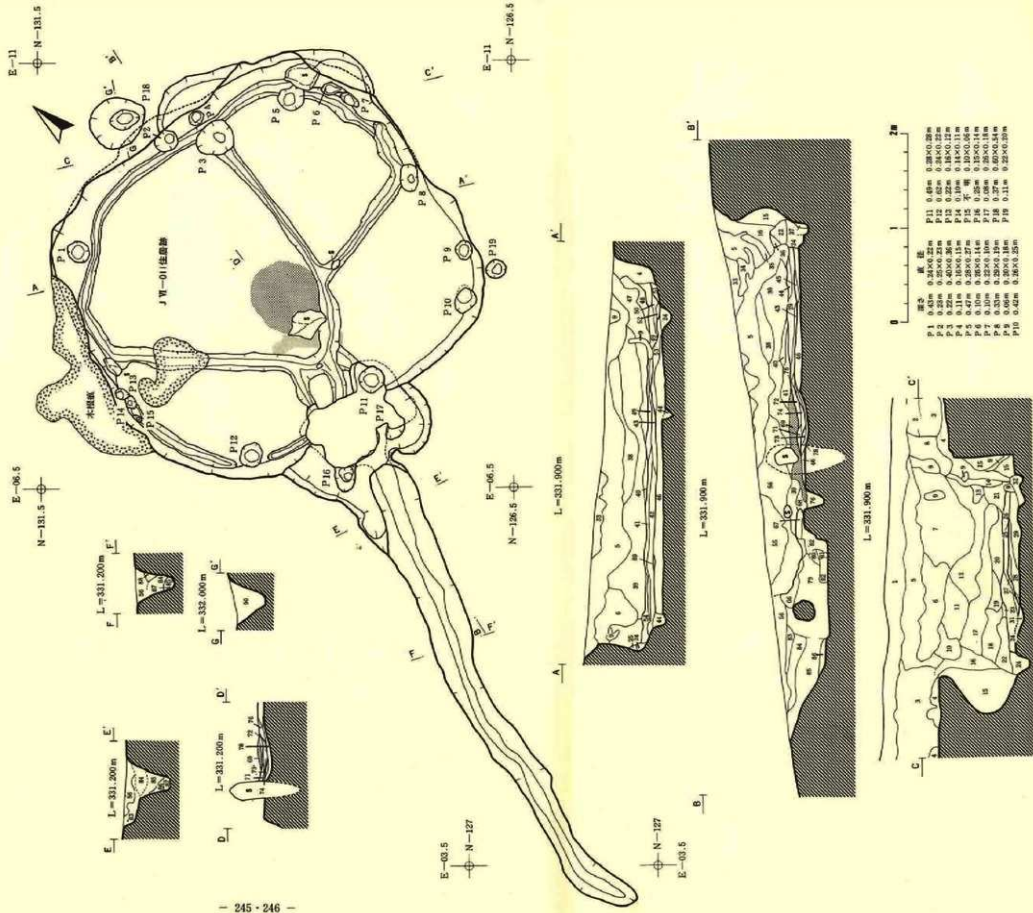
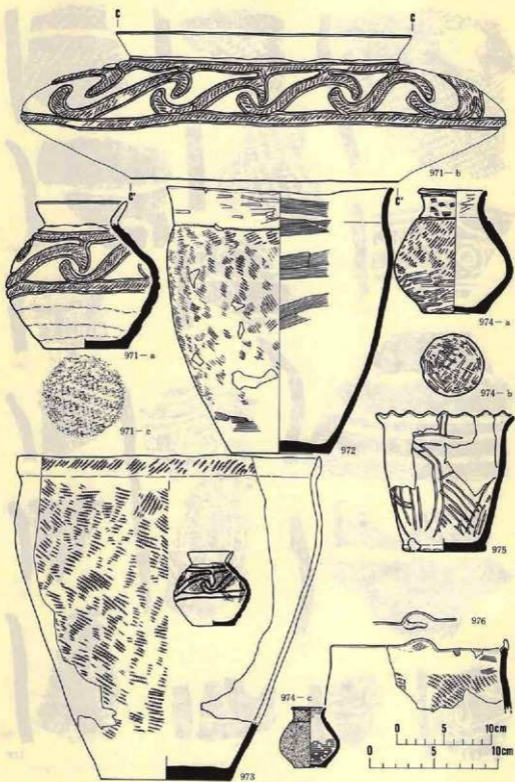


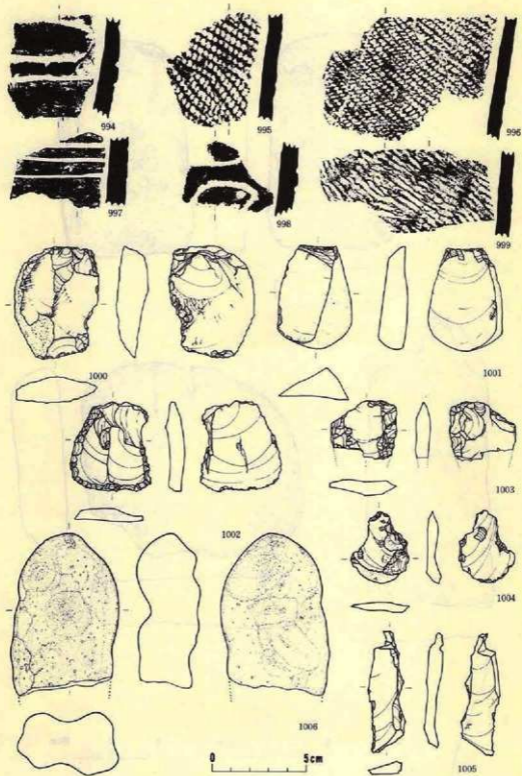
圖 173 圖 JW-01 (Livingstone Plateau) 断面圖



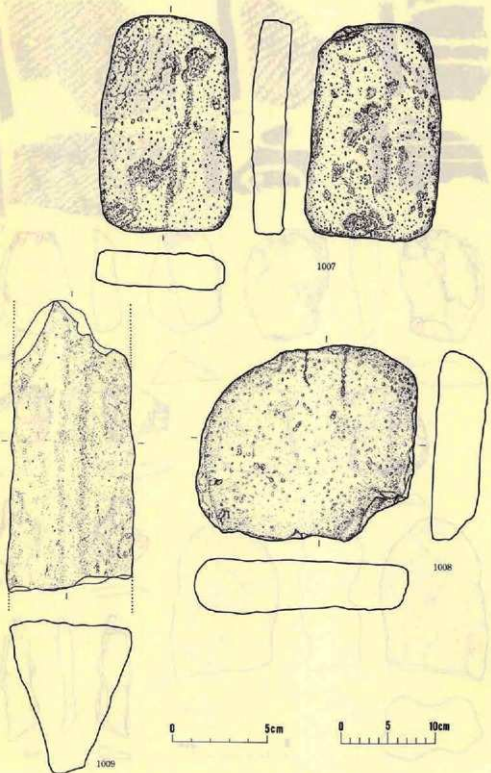
第174图 J VI-011住居跡出土遺物(1)



第175圖 J VI-011住居跡出土遺物(2)



第176圖 J VI—011住居跡出土遺物(3)



第177图 J VI-011住居跡出土遺物(4)

られ、これに重複する住居跡についても貼床や炉の使用状況からほぼ連続して営まれたものと推定される。1住居跡の耐用年数を5～10年程度と見積るとほぼ15～30年の期間となり、JVI-011A住居跡は縄文時代後期前葉の土器を伴うJVI-011C住居跡より15～30年ほど古くなる可能性がある。しかし、その所属時期は壁や炉跡を共有している点でほぼ同時期かやや古い段階に入る程度の相違と思われる。

JVI-012 掘立柱建物跡 (第178図 写真図版55)

〔位置〕 調査区東側北西辺の緩傾斜面にあり、南にはJV-013住居跡、舟底形のピット群が散在している。

〔保存状況〕 JV-013住居跡と同様に弥生時代以降の擾乱をうけている。そのため、擾乱土層を削平した段階で確認され、詳細な原形は不明である。

〔重複〕 遺構の内外にピットが分布しているが、擾乱のため相互の新旧関係は明らかでない。

〔形状〕 検出された状況からみると、長さ3.20m、幅1.40mほどの西北西から東南東に長い長方形の掘立柱建物跡と思われる。柱穴数は6基である。柱並びや柱間寸法は必ずしも一定していないが、周囲に対応する規模・形状のピットがないことから、とままりある一連のものといえる。各ピットには直径0.35～0.68m程度の不整な円、または楕円形をなし、底部は平らである。深さは0.36～0.56mである。周囲に壁のまわる竪穴柱居跡である可能性もあるが、確認されていない。柱穴の埋土はいずれも黒、または黒褐色の柱部分と黒褐色か暗褐色の部分に分けられる。柱部分の直径は0.20～0.30m未満である。

〔内部施設〕 保存状態が不良なため遺構の原形は不明である。柱穴以外の付属遺構の有無についても不明である。

〔埋土〕 周囲に弥生時代中期のピット群があって土層の擾乱が著しく、土層の詳細な堆積状況は不明である。

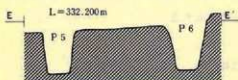
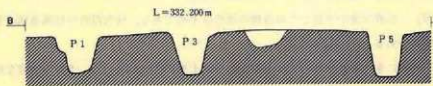
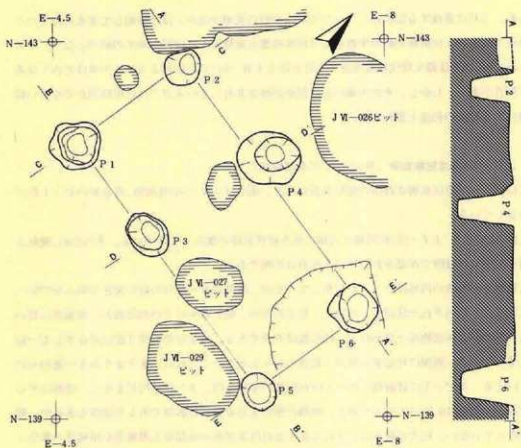
〔遺物〕 遺構に伴うと思われる遺物は出土していない。

〔時期〕 伴出遺物もなく、土層の擾乱が著しいため所属する時期を特定できないが、周囲の土層の観察から弥生時代中期までは降らないとみられる。付近から出土した弥生時代中期の土器は、本遺構より0.15～0.20mほど高い位置から発見されている点で遺構の下限がさらにさかのぼり、縄文時代晩期以前に入る可能性も十分考えられる。

KVI-011 住居跡 (第179・180図 写真図版149)

〔位置〕 ～〔形状〕については、KVI-031焼土遺構に記述する。

KVI-031焼土遺構を中心とする直径8mの範囲に住居跡の存在が想定されるが風倒木などに



深さ	直径				
P1	0.30m	0.35×0.55m	P4	0.56m	0.64×0.35m
P2	0.41m	0.42×0.38m	P5	0.43m	0.42×0.35m
P3	0.44m	0.52×0.39m	P6	0.44m	0.49×0.40m

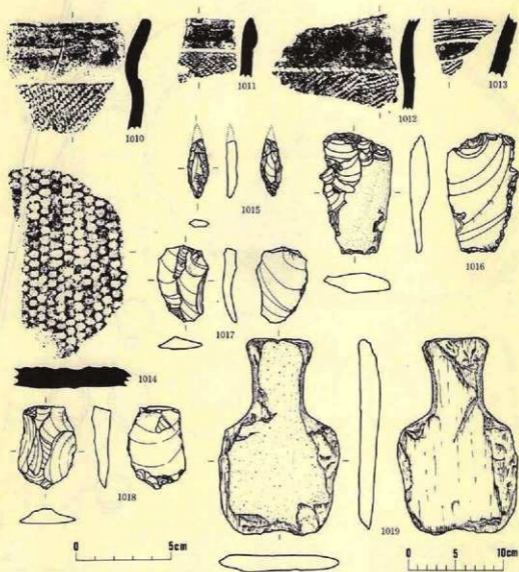
0 ————— 1 ————— 2m

第178図 JVI-012掘立柱建物跡平・断面図

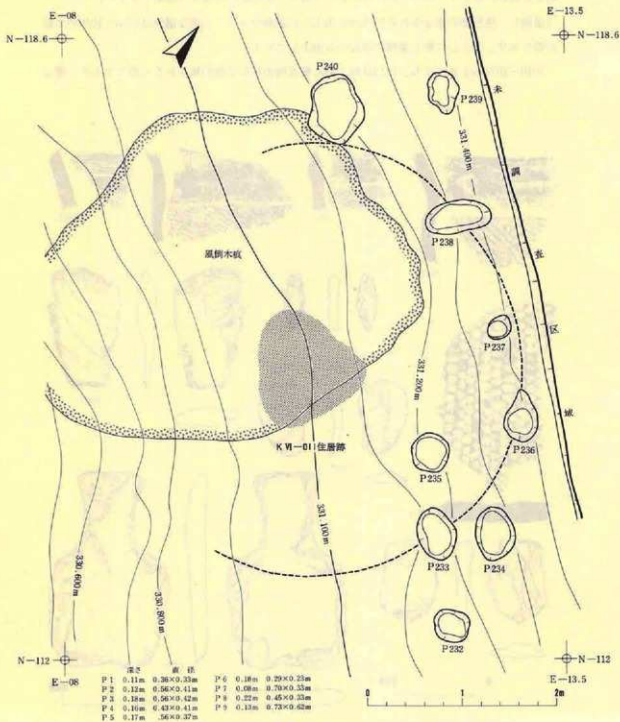
よって付近一帯が攪乱をうけており、形状は不明である。しかし、焼土遺構の北東側には環状に廻ると思われるピット列の一部が検出されており、住居跡の可能性は否定できない。

〔遺物〕 住居跡の想定される区域内に出土した遺物のうち、主要な遺物は1010～1019の土器石器があり、主として焼土遺構の周辺から出土している。

1010～1014の土器のうち、1013は胴上部に横方向の撚糸匠敷の施された土器片であり、縄文



第179図 K VI-011住居跡出土遺物



第180图 K VI-011住居跡平面图

時代後期前葉とみられる。1014は網代痕をもつ深鉢型土器の底部で弥生時代中期か1013と同時期であろう。1012は弥生時代中期、1010・1011は縄文時代晩期前～中葉、または1012と同時期と思われる。

石器のうち、1015は柳葉形の打製石鏃である。1016は剥片を利用したつまみのないスクレーパー、1017・1018は使用痕のある剥片である。1019は輝緑凝灰岩の板状石材を利用した打製の掘具であり、上部に細かな槌打加工をした握り部分が認められる。1019に類似する掘具は、縄文時代晩期から弥生時代中期にみられ、この時期に入る石器かもしれない。

K VI-012住居跡（第181・182図 第1・3表 写真図版55・56・150）

〔位置〕 調査区東側の北辺に位置しており、西北西にやや離れてJ VI-011A-C住居跡、K VI-011住居跡などがある。

〔検出面〕 全体に著しい攪乱をうけているが、攪乱の少ないところでは耕作土下の黒褐色火山灰、または暗褐色、鈍い黄褐色の浮石粒混りシルト質土の直下に検出されている。

〔保存状況〕 木根や開墾の深掘りにより部分的に破壊されているほか、南壁部分は土層の識別が困難であり、遺構の境界は不明である。

〔重複〕 認められない。

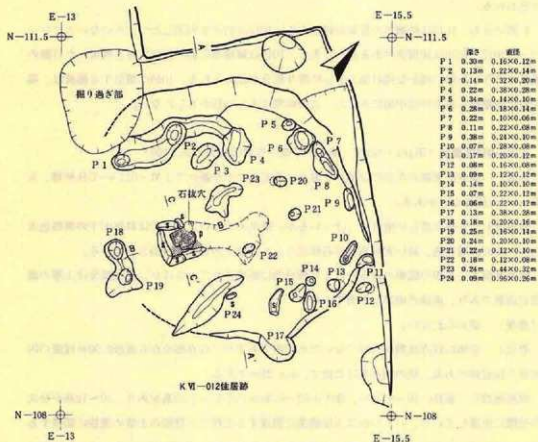
〔形状〕 全体に保存状態が良好でないため不明であるが、残存部分から直径2.90m程度の円形竪穴住居跡である。壁の残存高は北側で、約0.25mである。

〔内部施設〕 直径0.10～0.32m、深さ0.07～0.34mの小ビット20基があり、10～12基が竪穴の壁際に位置している。いくつかは上層構造に関連する支柱穴と壁際の土留め施設に関連する柱穴の跡と思われるが、構造物に関連する柱穴を特定することはできない。そのほか、床部にもビットが散在しているが、その機能については明らかでない。埋土は黒味の強い黒褐色か暗褐色の柔らかいシルト質土である。

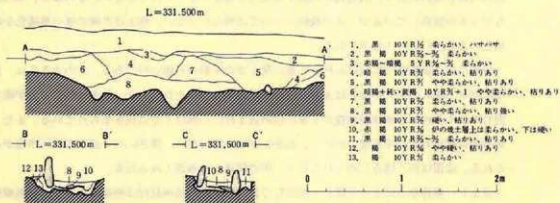
炉跡は床の南西寄りに設けられ、北東に開くコの字形の石囲い炉である。炉の大きさは、長さ0.45m、幅0.47m、炉床には大型深鉢型土器の破片が敷かれており、焼土は少ない。炉床を囲む壁はやや肉厚の板状直角壁が丁寧に埋め込まれ、一部はすでに抜き去られている。また、炉の開口部から床の中央部にかけて、長さ0.66m、幅0.23m、深さ0.05m以下の浅い凹地がみられる。底部は固く踏みしめられており、炉に関連した施設とみられる。

〔埋土〕 耕作などによって著しく攪乱しており、土層の堆積状況は明確でないが、自然堆積に近い状態で埋没した可能性が高い。

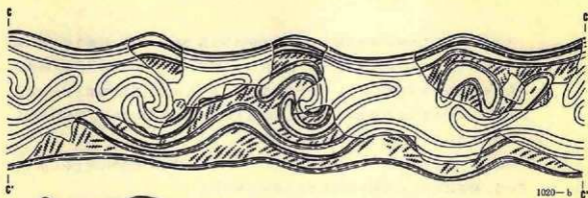
〔遺物〕 床面のほか、床面からやや高い位置の埋土中から出土した1020～1024の土器・石器がある。



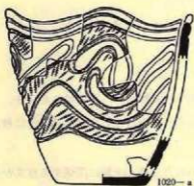
	深さ	直径
P 1	0.30m	0.16×0.12m
P 2	0.13m	0.22×0.14m
P 3	0.14m	0.22×0.20m
P 4	0.22m	0.28×0.28m
P 5	0.34m	0.14×0.10m
P 6	0.28m	0.18×0.14m
P 7	0.22m	0.10×0.06m
P 8	0.11m	0.22×0.08m
P 9	0.38m	0.24×0.10m
P 10	0.07m	0.28×0.08m
P 11	0.17m	0.20×0.12m
P 12	0.08m	0.16×0.08m
P 13	0.09m	0.12×0.12m
P 14	0.14m	0.10×0.10m
P 15	0.07m	0.22×0.12m
P 16	0.06m	0.22×0.12m
P 17	0.13m	0.38×0.26m
P 18	0.18m	0.20×0.16m
P 19	0.25m	0.18×0.14m
P 20	0.24m	0.20×0.10m
P 21	0.22m	0.12×0.10m
P 22	0.18m	0.12×0.08m
P 23	0.24m	0.44×0.32m
P 24	0.09m	0.56×0.26m



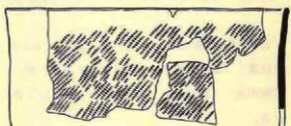
第181図 K VI-012住居跡平・断面図



1020-b



1020-a



0 5 10cm

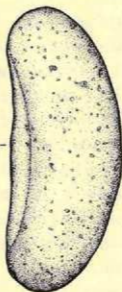
1021



1020-c



1022

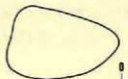


1024



1023

0 5 10cm



0

第182图 K VI-012住居跡出土遺物

床面から出土した1020は深状口縁をもつ小型の深鉢型土器である。沈線に区画された磨消縄文が施されており、縄文時代後期最初頭の段階に入るものであろう。底部には笹の葉の圧痕がみられる。1021は炉床に敷かれていた大型深鉢型土器であり、1020とほぼ同時期と思われる。1022は埋土中から出土した無文の小型浅鉢、1023は小型の長胴壺型土器である。時期は必ずしも特定できないが、前2者と同時期かもしれない。

石器とすべきか疑問もあるが、1024は肉厚のパナナ形をした礎で東壁際の床面上から出土している。断面は内湾した側面を底辺とする二等辺三角形に近い。

〔時期〕 床面の出土遺物から、縄文時代後期最初頭に入るものと推定される。

L V-011掘立柱建物跡（第183～185図 第1表 写真図版150）

〔位置〕 調査区東側の町道南側に位置し、南にやや緩やかに傾斜した平坦地にあたる。

〔検出面〕 耕作土直下の黒褐色土とさらに下層の暗褐色、または褐色土の境界付近に検出される。

〔保存状況〕 遺構の埋土が大部分重機剥土時に失なわれたため、上屋に関係する柱穴が残存するものの原形は明らかでない。

〔重複〕 周囲に柱穴状の小さいピット4基が散在するが、重複関係は明らかでない。

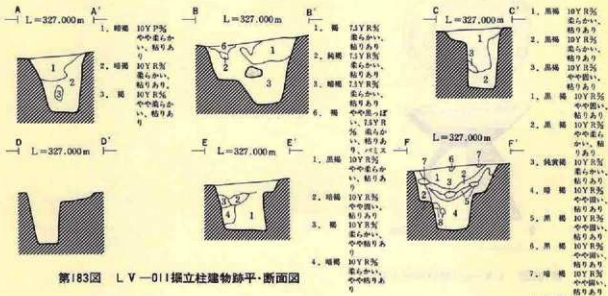
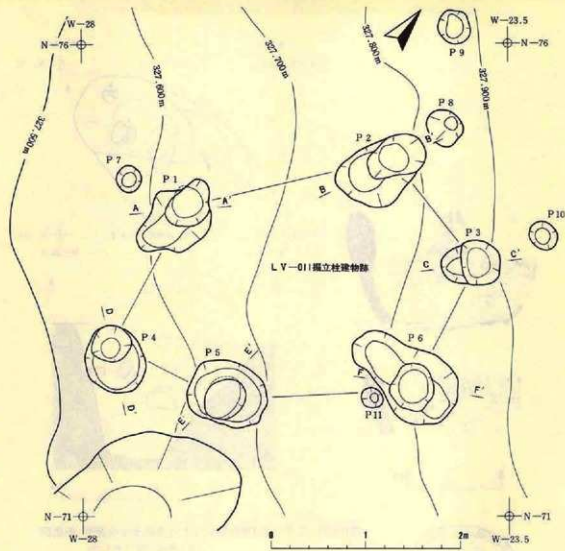
〔形状〕 竪穴住居跡の可能性もあるが、外壁その他の竪穴に関連した施設跡の存在は確認されていない。P₁～P₆の柱穴から掘立柱建物と考えられ、全体に多少いびつな六角形状をなして配置されている。各柱穴の形状や規模は一定していないが、埋土は柱部分とその周辺に分けられ、一部は自然堆積に近い様相を示している。

〔付属施設〕 床面には焼土の痕跡もみられず、炉跡などは検出されていない。

〔埋土〕 遺構全体を被う埋土の堆積状況は明確でないが、床に相当する部分は全体として周囲より濃い暗褐色か褐色のシルト質の柔らかい土層である。

〔遺物〕 1025～1027の土器がP₁の埋土中層から出土し、1025は北東にやや傾き、1026・1027もやや斜めに放置された状態で検出されている。いずれも文様や形態の特徴から、縄文時代後期後葉の土器と思われる。

〔時期〕 P₁から出土した土器は必ずしも遺構に伴う遺物といえないが、ほぼ完形に近い、1025の出土状況をもて意図的に埋め込まれた状態に近いといえる。また、付近に同時期の遺構が認められないことから、一応土器と同じ縄文時代後期後葉に位置付けられよう。



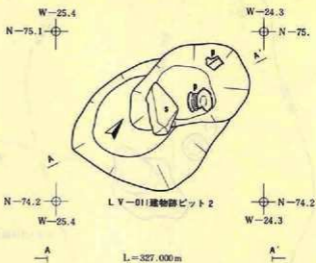
第183図 LV-011 獨立柱建物跡平・断面図



1026

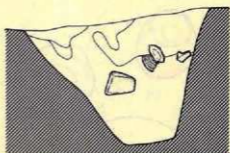


1027



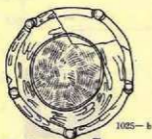
L V-011 建物跡ピット 2

L=327.000m



第184図 L V-011建物跡ピット内遺物出土状況平・断面図

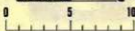
(※土層図に投影したもの)



1025-b



1025-a



第185図 L V-011建物跡出土遺物

一 小括 一

63棟の住居跡と3棟の掘立柱建物は多少疑問の残る遺構もあるが、ほとんど縄文時代に属するものである。遺物と住居跡の関係が明らかでなかったり、伴出遺物がないために所属期時を特定できない例も多いが、時期の特定できるものについてみると、縄文時代中期末葉、後期前葉・後葉・晩期前葉まで比較的多くの時期にわたっている。中でも、縄文時代晩期前葉の住居跡が多く、ほぼ40棟の住居跡が調査区西半の山麓から段丘縁辺にかけて広く展開している。ついで後期前葉の住居跡4～5棟が、調査区東側の北半にまとまってみられる。これに対して、中期末及び後期前葉・後葉の住居跡や掘立柱建物は1～3棟であり、調査区内では集落跡といえるようなまとまりは認められず、居住地としての利用の衰えた様相を示している。このように多少の断続や盛衰があるものの、比較的長い時期にわたって居住地として利用されている。

住居跡の形状や付属遺構の形態には、時期によって多少の変化がみられる。例えば住居跡の形状では縄文時代中期末に円形の竪穴であるが、後期前葉のやや新しい時期になると隅丸長方形、または正方形の竪穴が一般的となる。さらに後期後葉及び晩期前葉には再び円形となるが晩期前葉の住居跡の中には隅丸の多角形や楕円形をなす例もいくつかみうけられる。

柱配置については判明する例が比較的少なく、時期的な変遷について詳細にふれることはできないが、後期後葉及び晩期前葉の住居跡では床の中央部に4～6基の柱穴が廻る例がいくつかみられる。これに対して形状の明らかな後期前葉の隅丸長方形の住居跡では壁に沿って6基ほどの柱穴の配される形態が一般的な形態のようである。

壁際に土留め工作の跡と思われる柱穴列や周溝をもつ例は後期前葉と晩期前葉の住居跡にいくつかみられるが、晩期住居跡ではほとんど重複がみられる。

炉跡では中期末に五・六角形の石囲い炉、後期初頭にコの字形の石囲い炉、後期前葉にJ V-011住居跡などにみられるような「立石炉」、そして後期後葉に円形の石囲い炉、晩期前葉に円形石囲い炉や土器片囲い炉、埋篋炉・地床炉等の各形態がみられる。

その他の付属施設として後期前葉の住居跡には入口施設と思われるものや屋内外の排水溝を伴うものもみられる。

住居跡の大きさは、最小が直径2.5m未満、最大の直径12mほどであり、直径5～6mの住居跡がもっとも多い。住居跡の大小による機能の相違が考えられるが、晩期の住居跡では特に規模の大きいG III-016 A-D住居跡が集落跡の中央部に占地し、同一場所に建てかえられている。このような規模や位置、重複関係からは、一般の住居跡とは異なる特殊な機能、例えば集会所や祭祀施設などであることが予想される。時期差と住居跡の面積との関係については、晩期前葉と後期前葉の住居跡以外に資料が乏しく、一般的な比較は困難である。

住居跡相互や他の遺構との重複は、居住区域が比較的限られた場所に集中しているため、GⅢ-016A-D住居跡をはじめとしてかなり多い。そのほか、後期前葉及び晩期前葉にはほぼ同一の場所に多数の住居跡の重複する例がみられる。

住居跡の埋設状況を見ると、重複する住居跡の一部に人為的な埋め立ての痕跡が認められるものの、多くの住居跡では自然堆積に近い様相を示している。しかし、晩期前葉の住居跡ではEⅢ-011住居跡やFⅢ-0113~0116住居跡、GⅡ-011・012住居跡、そしてGⅣ-031雨裂跡と重複する住居跡群のように廃棄後間もなく、あるいはかなり時間が経過した後に捨て場として転用されている例が多く、時期的な特色となっている。

したがって晩期における住居内の遺物の多くは、他の時期と異なって埋土中から採集される遺物が大多数を占めている。その中には時期的にかなりの幅を考慮すべき遺物も含まれているが、埋土層中に混在しているため詳細な新旧関係を把握できない状況である。

そのほか、孤立柱建物跡3棟がある。個々の形態は異なっているが、規模は大きくかわっていない。所属時期は縄文時代後晩期と考えられるが、位置はそれぞれ隔たっており、相互の関連性は薄いと思われる。他の住居遺構との関連についても明確でないが、居住活動に関連した施設跡であることは確実と思われる。

(3) 歴史時代の住居跡状遺構と掘立柱建物跡

JⅣ-011住居跡状遺構（第186・187図）

〔位置〕 調査区東側の西寄り南辺に位置し、すぐ東側にはJⅣ-012掘立柱建物跡、JⅣ-013掘立柱建物跡がある。

〔検出物〕 耕作土直下の褐色粘土混りシルト質土層上面で検出した。

〔保存状況〕 南面の耕作土が深くなり、遺構の西壁が消失している。他は比較的良好である。

〔重複〕 住居跡に付随する排水溝と水溜めと思われるピットが、JⅣ-012掘立柱建物跡の西辺と重複しているが、攪乱によって両者の新旧関係は明らかでない。

〔形状〕 北西から南東方向に長く、長さ2.90m、幅2.20mほどの隅丸長方形の竪穴をなしている。壁の残存高は0.15mである。南西壁の中央部には、長さ0.85m、幅1.15mの長方形入口部分が残っている。

〔付属施設〕 上屋と側壁の構造物に関連する柱穴跡は四周と中央部に合せて7基、入口の両側に2基であるが、建て替等があればさらに増える可能性がある。これらのピットはやや不整な円形をなすものが多く、直径0.10～0.46m、深さ0.02～0.06mである。埋土は柱部分がやや粘りのある黒色土であり、その周辺は黄褐色か灰黄白色のシルト質粘土である。

土溜め施設の跡と思われる溝跡は、南西の壁際の一部と北東壁際に残存している。幅0.19m、深さ0.23m、埋土は柱穴と同様の黒色土である。

排水溝はややS字状をなし、入口近くの床から外側にのびている。長さ3.10m、幅0.17～0.40m、深さ0.27mほどであり、埋土は上層にやや粘りのある黒色土、外側の末端部では下層に黄灰色の細砂がみられる。

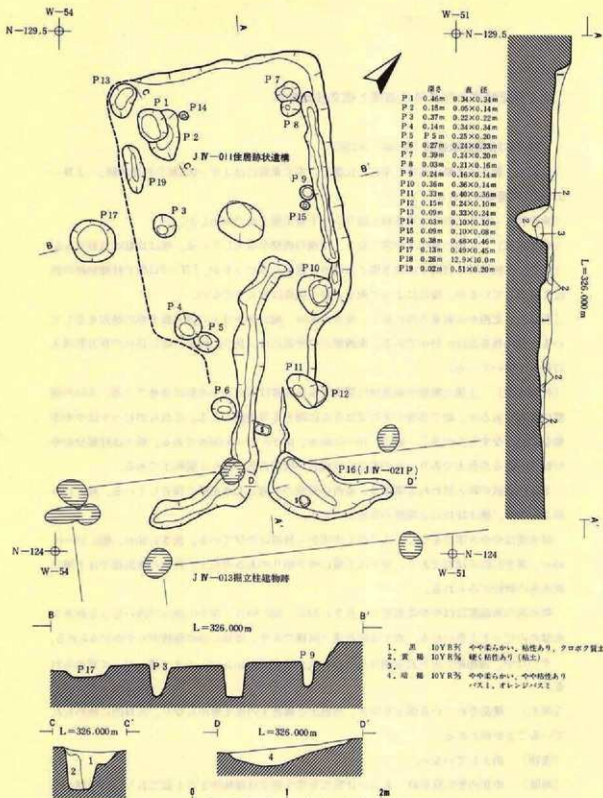
排水溝の末端部にはやや北東寄りに長さ1.33m、幅0.58m、深さ0.28mの浅いピットがあり水溜めのピットと思われる。埋土は排水溝と同様であり、底部に砂の堆積がわずかにみられる。

そのほか、通路跡とみられる削り出しが、入口の北東側からピットまで溝に沿って認められる。

〔埋土〕 攪乱されている部分を除き、黒色土と褐色土の混土層からなり、人為的に埋められていることが伺われる。

〔遺物〕 出土していない。

〔時期〕 中世の竪穴住居跡、あるいは竪穴を伴う掘立柱建物跡とよく似ており、同時期かもしれない。また、案内にみられる冬場の作業小屋の一つに半地下式の簡易建物があるが、これと同様の遺構とするとさらに時代が降る可能性がある。



第186図 JN-011住居跡状遺構平・断面図

JⅣ-012掘立柱建物跡（第187図・付図5）

〔位置〕 調査区東側の南辺に位置しており、すぐ西側にはJⅣ-011住居跡状遺構がある。また、南にはJⅣ-013～015掘立柱建物跡がある。

〔検出面〕 JⅣ-011住居跡状遺構と同様に耕作土直下に検出された。

〔保存状況〕 遺構の床面と思われる部分は耕作により削平され、わずかに柱穴跡が残存している。

〔重複〕 やや小さい長方形の柱穴列が1棟分重複している。この柱穴列の中心と建物跡の長軸方向が一致しており、本遺構の一部である可能性もあるが、柱間寸法などに差異がある。この点で多少時期を異にした別遺構と考えられる。そのほか、JⅣ-013～015住居跡に付属するKⅣ-021～025の各ピットに重複するが、いずれも新旧関係は明らかでない。

〔形状〕 長さ12.20m、幅6.50m、北西から南東方向に長い長方形をなす掘立柱建物跡である。柱穴は直径0.20～0.30m、深さ0.15～0.35mの円筒形状である。柱数は17であり、横方向で4～5縦方向で5～7と一定していない。柱間寸法は1.63～3.15mとバラツキがみられ、柱並びにズレがある。南北両端の比高差は約1mであり、元来は盛土などの地業が行なわれていることが推定される。柱穴の埋土はほとんど柔らかい火山灰質の黒色土である。

〔付属施設〕 建物跡の北東側に平行する形で長さ4.00mの柱穴列がある。建物との距離は0.50～0.70mである。柱穴の直径は0.30m、深さ0.17mほどである。

〔埋土〕 遺構の旧表土はすでに失われており、ほとんど耕作土で被われている。

〔遺物〕 出土していない。

〔時期〕 伴出遺物がないため明らかでない。形態からは中～近世以降の建物のようなが、大正時代以降に同規模の建物がなかったことから、これより古い時期と考えられる。

JⅣ-013掘立柱建物跡（第187図・付図5）

〔位置〕 JⅣ-012掘立柱建物跡とほぼ同位置にある。

〔検出面・保存状況〕 JⅣ-012掘立柱建物跡と同様である。

〔重複〕 JⅣ-012掘立柱建物跡と長軸方向が一致する形で重複している。JⅣ-012掘立柱建物跡の一部とも考えられる。そのほか、KⅣ-021～024ピットと重複しているが、埋土の攪乱によって原状が破壊されて新旧関係は不明である。

〔形状〕 縦5.00m、横10.60mの北西から南東方向に長い掘立柱建物跡である。柱穴数は12、柱間寸法は2.20～2.90m、平均2.60mである。柱穴の規模は直径0.30m、深さ0.23～0.42m、南北両端の比高差は0.8mほどであり、JⅣ-012建物跡と同様に盛土の行なわれていることが想定される。柱穴の埋土は重複する建物跡の柱穴とほとんど同様である。

〔付属施設〕 ない。

〔埋土〕 ほとんど耕作によって失われている。

〔遺物〕 出土していない。

〔時期〕 JⅣ-012掘立柱建物跡と同様に中～近世以降の建物跡と思われる。

JⅣ-014掘立柱建物跡（第187図・付図6）

〔位置〕 JⅣ-012・013掘立柱建物跡とはほぼ同位置にあり、調査区南辺にある。

〔検出面〕 JⅣ-012掘立柱建物跡と同様であるが、勾配がかなり緩やかである。

〔保存状況〕 遺構を被う埋土はほとんど攪乱をうけており、原状は明らかでない。遺構の大半は調査区以外の畑地にあり、全体の規模や形状は不明である。

〔重複〕 JⅣ-015・016掘立柱建物跡など2棟以上の掘立柱建物跡が重複している。しかし攪乱をうけて新旧関係は明らかでない。

〔形状〕 北西～南東方向の長さ4.10m、北東～南西方向の長さ2.10m以上の方形、または長方形の掘立柱建物跡と思われる。柱間寸法は1.74m前後、柱穴は直径0.25mほどの円形をなし深さは0.17mほどである。柱穴の埋土はJⅣ-012掘立柱建物跡の柱穴と同様の黒色土であるが一部は周辺に暗褐色土か褐色土がみられる。

〔付属施設〕 北東辺の外側にはほぼ平行して0.50mの柱穴列がある。3間の柱間寸法は1.91m、柱穴の規模はJⅣ-013掘立柱建物跡とはほぼ同様である。

柱穴列のさらに外側には雨落ち溝か排水溝と思われる1条の溝跡がめぐっており、JⅣ-014掘立柱建物の北東をとり囲むようにコの字形に屈曲している。その一部はさらに分岐し、南東端で浅くなって消失するが、一方は屈曲して北西に延び、南側の畑地に続くようである。この点ではJⅣ-014掘立柱建物跡以外の遺構に伴う可能性も考えられる。溝の幅は中心部分で上幅0.35m、底部の幅0.15m、深さ0.10mである。埋土は人為的な堆積か自然堆積が明らかでない。

〔埋土〕 遺構を被う埋土は一部に黒、または黒褐色土層が残存するが、柱穴や溝跡以外の大部分は耕作により旧状を留めていない。

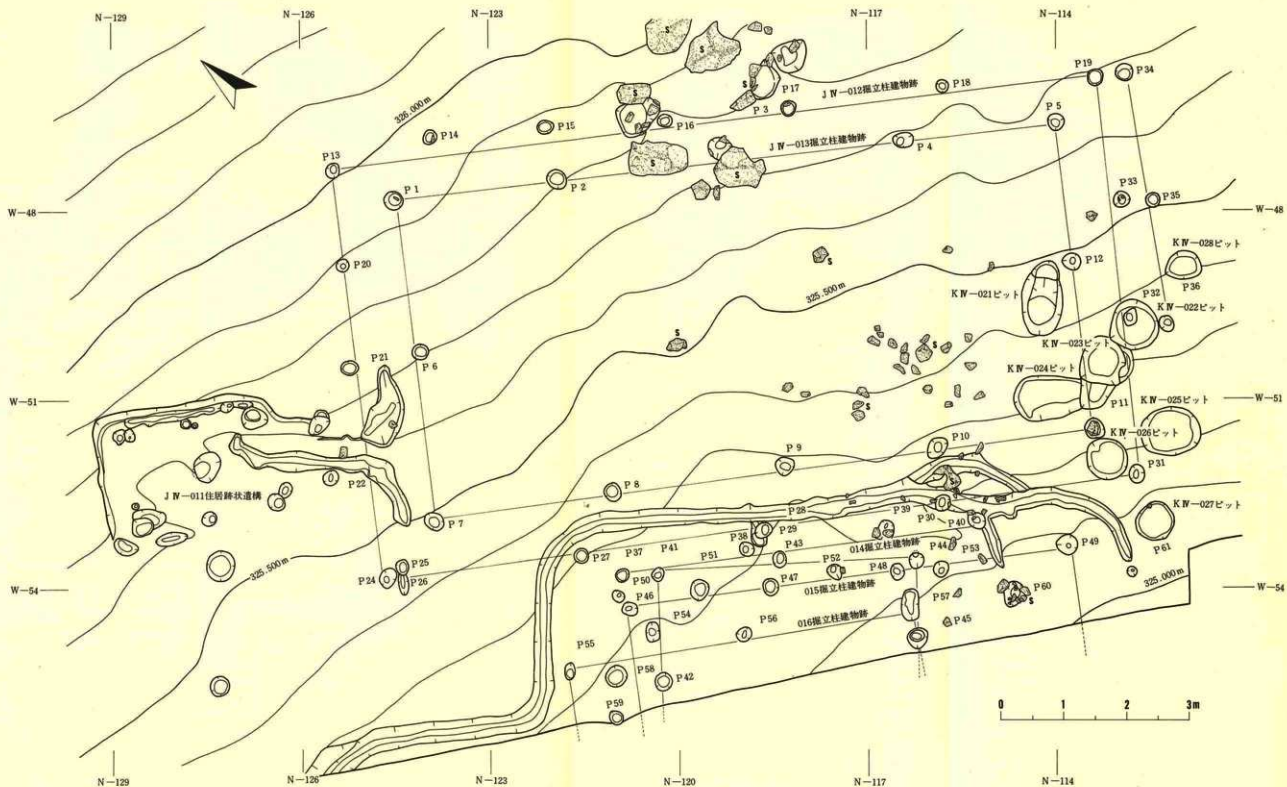
〔遺物〕 溝の北西の埋土中から縄文時代の土器片1点が出土している。

〔時期〕 形態や柱穴の配置などからJⅣ-012・013掘立柱建物跡と関連することが予想されほぼ近接する時期の遺構と思われる。

JⅣ-015掘立柱建物跡（第187図・付図6）

〔位置〕 JⅣ-014掘立柱建物跡よりやや北西に寄っている。

〔検出面・保存状況〕 JⅣ-014掘立柱建物跡と同様である。



第187図 JN-011住居跡状遺構・JN-012-016掘立柱建物跡平面図

〔重複〕 JⅣ-014・016掘立柱建物と重複しているが、新旧関係は不明である。

〔形状〕 北西～南東方向の長さ7.10m、北東～南西方向の長さ1.20m以上の長方形、または方形の掘立柱建物跡と思われる。柱間寸法は平均2.37m、柱穴の形状は規模は多少異なるが、埋土ともJⅣ-014掘立柱建物跡の場合と同様である。

〔埋土〕 遺構を被う埋土はJⅣ-014掘立柱建物跡と共通している。

〔遺物〕 出土していない。

〔時期〕 JⅣ-014・016掘立柱建物跡と同時期とみられる。

JⅣ-016 掘立柱建物跡（第187図・付図6）

〔位置〕 JⅣ-014掘立柱建物跡と同位置にある。

〔検出面・保存状況〕 JⅣ-014掘立柱建物跡と同様である。

〔重複〕 JⅣ-014・015掘立柱建物に重複している。

〔形状〕 北北西～南南東方向の長さ5.60m、東南東～西南西方向の長さ0.90m以上の掘立柱建物跡である。柱間寸法は2.70～2.85m、各柱穴の規模・形状・埋土等はいずれもJⅣ-014掘立柱建物跡の場合とはほぼ同様である。

〔埋土〕 遺構を被う埋土はJⅣ-014掘立柱建物跡にはほぼ同様である。

〔遺物〕 出土していない。

〔時期〕 JⅣ-014掘立柱建物跡と同時期とみられる。

一 小括 一

竪穴住居跡状遺構と掘立柱建物跡は、いずれも歴史時代に属するものである。類似する遺構はすでに中～近世にみられるが、本遺跡の場合には伴出遺物などの決定資料が乏しいため、詳細な所属時期は明らかでない。従って現段階では、形態上から幅広く中世以降近代に至る時期とするものである。下限については大正昭和期にJⅣ-011竪穴住居跡状遺構やJⅣ-012掘立柱建物跡等に相当する建物が存在しなかったという証言もあり、それ以前と考えられる。

これら各遺構相互の新旧関係は、遺構付近に存在したと思われる盛土や埋土が耕作等によってすでに攪乱や削平をうけて明らかでない。しかし、JⅣ-012～016掘立柱建物跡のうち、JⅣ-013掘立柱建物跡とJⅣ-014掘立柱建物跡というように共存していた可能性も十分考えられる。また、JⅣ-011竪穴住居跡状遺構やKⅣ-022～026ピットが単独の遺構ではなく、掘立柱建物跡に付随する遺構であることも予想され、さらに検討が必要である。

遺構の性格についてみると、竪穴住居跡状遺構は住居跡の可能性を否定することはできないが、屋内に炉をもたないこと、狭い床の中央部に柱穴を有することなどから半地下式の倉庫や

作業小屋としての機能が強いようにみうけられる。また、掘立柱建物跡については、建物跡を構成する柱穴が建物跡の規模に比較して小さいこと、柱穴が外側にのみ配されて内部にみられないことなどから、この建物跡が間仕切りや床の補強を必要としない作りの建物であったことが何われる。さらに柱筋が通らなかったり、柱穴数や間尺が不規則であり、建物を作る際に盛土などをして床を平らにしたであろうが、全体に簡便な作りである印象はまぬがれない。

このようなことから、建物跡は一時的な物置や作業場のような簡易的な性格をもち、仮に居住にあてられたとしてもその生活はかなり質素なものであったと推測される。仮に、中世～近代の民家跡とすれば、当地方における民家構造の変遷をたどるうえで重要な手掛りになるものと思われ、今後の対比資料の増加がのぞまれる。

(4)ピット (第188～225図 第1・3表 写真図版57～73・151～155)

縄文時代～歴史時代の住居跡や建物跡と関連して多数のピットが発見されている。ピットの所属する時期は多時期に渡り、時期不明のものも多く含まれ、形態も様々である。ここではこれらのピットを形態別に区分し、一括して記述することとする。なお、欠番は住居跡と同様、調査の過程で遺構でないことが判明し、削除したものである。

(1) フラスコ形ピット・鉢形ピット (第190～194・218・219・221～223図 第1・3表)

〔ピット名〕 EⅢ-021、GⅣ-021、HⅢ-028、HⅣ-028、HⅢ-021、HⅣ-022、HⅤ-021、JⅤ-023A・023B・024～026、JⅥ-021～024、LⅣ-027・028、IⅤ-021、LⅣ-029・0211・0213などがあげられる。これらのピットは、さらにHⅢ-028ピットやHⅣ-028ピットのようないわゆるフラスコ型ピットのほかに、LⅣ-027・GⅣ-021のようは浅鉢型ピットやIⅤ-021ピットのように主要部が円筒形に近いものに細分できる。

〔検出面〕 ほとんどの住居跡と同様に表土層や耕作土層下の黒褐色～暗褐色土層の下部付近に検出される。

〔保存状況〕 重複する遺構によって破壊されたり、JⅥ-022、JⅥ-023ピットのように試掘中に破壊されたものがあるが、大旨良好である。

〔規模〕 直径1.5m未満、深さ1m未満の比較的小規模なものが多い。

〔分布と重複〕 EⅢ～LⅣ区の調査区の東西各区に分布している。HⅤ-021ピットのように散在し性格の不明なものもあるが、JⅥ-022・023ピットなどのようにいくつかのピットがまとまって群をなすことが多い。また、JⅤ-023A・023B・023C～JⅥ-023にいたる各ピットのように遺物や位置関係等から付近の住居跡群に付属する関連施設と思われるピットがありほぼ近接した時期に営まれたピット相互の重複例も多い。そのほか、新旧の遺構の重複がある。その主なものは、EⅢ-021ピット→EⅢ-011住居跡、HⅣ-028ピット→EⅢ-081道路遺構、JⅤ-023Aピット→JⅤ-023Cピットがある。また、新旧関係の不明なものでは、GⅣ-027ピット↔GⅣ-011住居跡、JⅤ-023Bピット↔JⅤ-023Cピット (JⅤ-023A↔023B)、JⅥ-022ピット↔JⅥ-023ピット、LⅣ-027ピット↔LⅣ-028ピット、JⅥ-022・023ピット↔JⅤ-04住居跡などがある。(旧→新、↔新旧関係不明)

〔埋土〕 構成が単純なものから複雑なものまでかなり多様であるが、全体に自然堆積に近い様相を示すものが多い。

〔付属遺構〕 HⅢ-021・JⅥ-021・IⅤ-021・LⅣ-027・028ピットなどの周囲には平面が不定形の浅いピット状の凹地がある。成因や性格は明らかでない。そのほか、JⅥ-021ピット

トでは凹地の一部に焼土を伴って立石炉と思われる施設の痕跡がみられる。この遺構については住居跡との関連も十分予想されるが、住居跡の存在は確認されていない。焼土とピットの埋土からは、ピットよりやや時代の降る遺構と推定される。また、J V-024ピットではこれとより囲むように4つの柱穴状ピットが存在する。しかし、埋土の重複状況が明らかでない。L V-0213ピットでは3個の柱穴状ピットが伴うほか、壁の一部に横穴1個が伴っている。

〔遺物〕 遺物の伴わないピットが多いが、いくつかのピットの床面及び埋土から若干の土器が出土している。

E III-021ピット出土の1028の球形に近いすばみ口の異形壺型土器1点であるが胴部に4区画からなるO字状の磨消縄文帯を伴うものである。O字文帯のうち、1ヵ所には上部の中心に浅い凹みがある。用いられた縄文は非常に細かく、無文帯がよく磨かれるなど、全体の作りも極めて精緻である。類例はほとんど見当たらない。O字形の文様帯の特徴と縄文時代後期前葉の核果状文との類似から一応この時期のものとしておきたい。埋土中の遺物では、1037-1039の土器があるが、文様の特徴から縄文時代後期前葉の土器とみられる。

H IV-028ピットの埋土中からは、1049-1057の土器が出土している。1049・1050は粗製の大型深鉢、1051の中型深鉢、1053-1055は粗製小型深鉢形土器である。1052・1056は縄文以外の文様を伴う小型深鉢、1057は環状のつまみをもつ大型深鉢形土器の破片と思われる。これらのうち、1049-1051は埋土下層部から潰れた状態で一括出土したものであるが、他は上層部の埋土から分散して出土している。従って、両者には多少の時間幅があるかもしれないが、1057を除いていずれも縄文時代晩期前葉に入る可能性が大きい。1057はなお検討を必要とする。

I V-021ピットの埋土上層下部-中層部で1058・1059が出土している。これらの土器は、胎土中に植物繊維を含んでいる。さらに1058の口辺部にみられるループ状の縄文は、東北-北海道南部の縄文時代前期初頭の土器にしばしばみられる文様に類似しており、比較的近接した時期の土器と考えられる。

J V-022ピットの埋土中からは、1067・1068のような縄文時代後期前葉の土器が出土している。また、J VI-023ピットには、1069・1070の波状口縁を有する土器があり、いずれも縄文時代後期前葉の土器である。

J V-025ピットの埋土上層部からは、1060・1061の土器片が出土している。このうち、1060・1061は文様の特徴から縄文時代後期前葉の十腰内I式に相当するとみられる。

J VI-023ピットの埋土には、1069・1070の口縁部に波状突起をもち、胴部に格子目状の燃糸文や沈線によるX字状文の施される中型の深鉢形土器が出土している。J V-025ピットの土器と同様、縄文時代後期前葉とみなすことができる。

〔時期と性格〕 伴出遺物や埋土の状況、平面的な分布状況などから、少なくとも縄文時代前

期前葉、後期前葉、晩期前葉の3時期のピットの存在がしられる。

前期前葉のピットとしてはI V-021ピットがあり、陥し穴などの施設が想定される。後期前葉のピットと考えられるものは、後期前葉の住居跡群の周囲にあるJ V-023A・023B・023C・024-026、J VI-021-023などの各ピットやE III-021ピットである。機能としては貯蔵穴のような性格が考えられる。

晩期前葉のピットはH IV-028ピットが代表的なピットである。ほかに、遺物の面からは明確でないが、H III-021、022、H IV-021ピットなども含まれるかもしれない。そのほか、G IV-021、L IV-021・027・028・029・0213の各ピットなどもあるが、遺物がほとんどないため、時期不明である。

しかし、付近から出土する遺物は縄文時代後期末～晩期中葉のものが多く、ほゞこの時期に入るものと思われる。機能としてはやはり貯蔵穴などが考えられる。

(2) 大型の円形皿形ピット・中型鉢形ピット・皿形ピット・円筒形ピット (第194～199図)

〔ピット名〕 やや大型のものでは、F III-0213、G III-023・025、G IV-026、H III-023、H IV-021・023・027・029、L IV-023の各ピットがある。

これより小さめのピットでは、E III-022、F III-021・024・0212、F IV-021、G II-021～023、G III-021・029、G IV-0212-0214、H III-022、H IV-023・024、J V-024、J V-0211・0218、J VI-024・0210・0220・0221・0222、K IV-025-028、L V-022・025・026・0211、M V-029などのピットがあげられる。

大小2種に分けられるピットの形態は、皿形から鉢形、円筒形のものなど各種であるが、J V-024ピットやJ V-028ピットのように既述の(1)類に入れられるものも含まれている。

〔検出面〕 大部分は(1)類のピットと同様であるが、一部は耕作土直下や重複遺構の下から検出されている。

〔保存状況〕 重複や木根の貫入、検出時の削平により、一部不明なピットもあるが、大部分は全形がよく保たれている。

〔規模〕 大きいピットでは直径1.40～2.12m、深さ1.12～1.50mほどあり、小さめのピットでは直径0.60～1.05m、深さ0.10～0.40m程度である。

〔分布と重複〕 調査区のはほぼ全域にわたって分布し、多少の粗密はあるものの極端な偏在はみられない。

他の遺構と重複する例はいくつかあるが、新旧関係の不明なものが多い。新旧関係の明らかなのは、E III-021ピット→E III住居跡、G III-011A→E住居跡→G III-025ピット、H IV-028ピット→E III-081道路跡、J VI-021ピット→J VI-031焼土遺構、J V-023Aピット→J

V-023B ビット→J V-023 C ビットなどであり、不明なものはL IV-027 ビット⇔L IV-028 ビット、G IV-027 ビット⇔G IV-013 住居跡などである。(旧→新)

〔埋土〕 各ビットの埋土は、単層に近いものから複雑な層をなすものまで各種に渉る。堆積状況は、自然堆積に近い様相を示すものが多い。

〔付属遺構〕 L IV-0213 ビットのように柱穴状ビットが周囲に配置され、横穴の設けられる例がある。ビットの底部壁際に小ビットを伴う例は、F III-0213、H IV-029 ビットなどにみられる。H III-023 ビットの場合には壁の一端に柱穴状ビットがみられるが、これは他の遺構に重複するものとみられる。

〔遺物〕 G II-022 ビットの埋土中から、縄文時代晩期前葉の土器2点が出土している。1031は羊歯状文風の文様をもち、1032は小型深鉢の口辺部と思われ、無文である。これらは混入の可能性もある。

G III-021 ビットからは、1033～1036の遺物が埋土中から出土している。1033は縄文時代後期最終末か晩期最初頭頃の土器であろう。1034も同時期の土器片かもしれない。1035は楕円がかった剥片の両側が丁寧に剝離調整されたスクレーパー、1036は打製の円盤状石製品である。

H III-022 ビット中からは1040の扁平な楕円礫、H III-023 ビットからは1042～1044の土器片が出土している。いずれも縄文時代晩期前葉のものと思われる。

1063はJ V-024 ビットの埋土上部から倒立した状態で出土した小型の浅鉢形土器であり、縄文時代後期前葉のものである。

〔時期と性格〕 各ビットのうち、柔らかい黒色の埋土層を伴うK VI-022・023・025～027のビット以外はいずれも古く、縄文時代後～晩期から弥生時代中期までのビットと思われる。特に遺物の出土地G III-021 ビットやG III-022・023、J V-024の各ビットは多少前後するとみられるが、おおよそ遺物の時期に近いものと思われる。その他のビットについては不明である。

(3) 楕円形の舟底形ビット (第189・199～208・218・224図 第1・3表 写真図版62～73)

〔ビット名〕 F III-022・023・025・027・028・0211、F IV-022・023・026、G III-022～024、G IV-024・025・028・029、H III-024・0211、J V-022・0212・0214・0215、J VI-025・026・028・029・0211・0213・0216、K IV-021～025、L IV-0215～0217、L V-024・025・M IV-023・024、M V-021・022・028などが入るが、この中には形が整わず、他の類型に入れられそうなビットも含まれる。

〔検出面〕 大部分は畑地の耕作土やその直下の黒～暗褐色土の下であり、K IV区やL V、M IV、M Vの各区の一部を除いて、縄文時代～弥生時代の遺構検出面と同様である。

〔保存状況〕 (2)類のピットと同様に擾乱などにより不明なものもあるが、大部分のピットは保存状態が比較的良好である。

〔規模〕 長さ0.76～2.05m、深さ0.05～0.65mであり、形状も一様ではない。

〔分布と重複〕 多少の粗密があるものの、調査区全域に及んでいる。分布の濃いところではJ V-022、J VI-025・026・028・029・0211・0213のようにいくつかのピットが集まって一群をなすのがみられる。

重複は比較的少ないが、F III-023ピットなどいくつかのピットは他の遺構と重複している。新旧関係の明らかなものには、F III-031焼土遺構→F III-028ピット、F IV-012住居跡→F IV-022・023ピット、J V-0212ピット→J V-012A・B住居跡などがあり、不明なものにはF III-023ピット⇔F III-014住居跡、F III-028ピット⇔(または共存) F III-041集石遺構、F IV-022ピット⇔F IV-023ピット、J V-0214ピット⇔J VI-012A・B住居跡、K IV-024ピット⇔K IV-023ピットなどがある。

〔埋土〕 自然堆積に近い様相を示すものが多いが、J VI-025・026ピットの下層部やJ VI-0216ピットの中層部などでは人為的に埋めたような状況も認められる。また、L IV-0217、L V-024・025、M IV-024、M V-021・022・028ピットなどでは、暗褐色土と褐色土の混入した擾乱土層が単層をなし、かなり新しい時期に埋められた様相が伺われる。そのほか、K IV-021・024ピットでは柔らかい黒色土層をなし、新しい埋土とみなされる。

〔付属遺構〕 床面の一部や壁際に小さい柱穴状のピットを伴う例がいくつかみられ、付属遺構と考えられるものがある。縄文時代後期前葉の住居跡北西にあたるピット群のうち、J V-022、J VI-025・026・028・0223ピットでは壁際に柱穴状のピットを伴い、その可能性が大きい。そのほか、J IV-0223ピットでは、周囲に浅い不定形の凹みが認められる。意図的に掘り込まれたものが明確ではないが、埋土はJ VI-0223ピットのそれに近似しており、同時に存在した可能性が強く、付属して設けられた何らかの施設跡であることも考えられる。

〔遺物〕 F III-022ピットの埋土中から出土した1029は、深鉢型縄文土器の破片で右上がり単節斜縄文が施されている。時期は明らかでない。F III-027ピットの埋土から出土した1030は、縄文時代晩期最初頭頃のものかと思われる。H III-024ピット埋土中の1041は、縄文時代晩期前葉の土器片と思われる。

J VI-028ピットの埋土下部からは、1071～1074の土器が出土している。1071はやや深い無文の鉢型土器、1072は横方向に縄文を並べて施文する小型の壺型土器であり、底部に網代圧痕を伴っている。1073は無文の小さい壺型土器で底部にやはり網代圧痕を伴う。この3点はまとめて出土したが、いずれも胎土が赤紫色がかり、外面に煤が付着している。1074は平行する斜行沈線によって多重の逆三角形文の施されたような土器片である。この種の文様は弥生時代や

縄文時代後期前葉に似た文様がみられるようであるが、後者の可能性が大きいと思われる。

KⅣ-021ビットからは、板状の円形に近い鉄片1075が出土している。板面の一方に垂直に細長い高まりがあるが、板面をなしていたものと推定される。機械の部品と思われるが、全体に錆化が著しく不明である。

KⅥ-025ビットには埋土上層に漬れた状態で出土した1076がある。小型深鉢型土器で口辺部に補修孔がみられる。縄文時代晩期初頭の土器と思われる。

〔時期〕 (2)類と同様不明なものが多いが、大部分は縄文時代晩期～弥生時代におさまるものと思われる。出土遺物や分布等から所属時期が判明するビットは、FⅢ-028ビットが縄文時代後期前葉、JⅤ-022・025・026・028、JⅥ-029・0211・0223の各ビットが弥生時代中期前葉に含まれ、KⅣ-021・024ビットは歴史時代、おそらく中・近世以降、特にKⅣ-021は近・現代にまで降る可能性がある。また、KⅥ-025ビットは縄文時代晩期初頭頃とみられる。

〔性格〕 形態的には東北地方北部で発見されている縄文時代中期～晩期の墓壇に極めてよく似ているものがあり、いくつかのビットは同種のビットと推定される。特に一群をなすJⅤ-022・025・026・028、JⅥ-029・0211・0223の各ビットのうち、JⅥ-0226ビットの埋土下層部にはベンガラと思われる赤色顔料の散布が認められ、JⅥ-028ビットにはほぼ完形の土器を伴っている。弥生時代の土壌に土器を伴う木沢市常盤広町遺跡の例や赤色顔料の散布される縄文時代晩期の遺跡の例があり、一群のビットは墓壇とみなされる。

KⅣ-021・024、LⅣ-0217、LⅤ-024・025、MⅣ-024、MⅤ-021・022・028の各ビットについては、墓壇とは考えにくく別の機能が予想される。

(4) 不定形ビット (第208～215・222・223・225図 第1・3表 写真図版67・71・72)

〔ビット名〕 FⅢ-0210・0214、FⅣ-025・028、GⅢ-0210、GⅣ-021・022・027・0210・0215、HⅢ-029・0210・0212・0213、IⅢ-021・022、JⅤ-027～0210・0217、JⅣ-022、KⅥ-024、LⅣ-022・026A～C、LⅤ-023・027A～D・0210・0211～0214、MⅣ-021・022、MⅤ-023～025・027のビットである。これらの中には、先の(2)、(3)類に含まれそうな若干のビットも含まれている。

〔検出面〕 (2)、(3)類と同様各所に散在しており、検出面も縄文時代～弥生時代の住居跡と同一面のものから、これより上面のものまでさまざまである。

〔保存状況〕 HⅢ-029・0213、HⅣ-0212ビットなどのように木根によって一部破壊されているものもあるが、比較的良好なものが多い。

〔規模〕 各ビットの規模は別表のとおりであり、大小がある。

〔分布と重複〕 (2)、(3)類のビットと同様各所に点在している。ほとんど単独の遺構であるが

L V-023、M V-022ピットなど他の遺構と重複する例もみられる。そのほか、F III-0214、F IV-025、G IV-021、H III-0210、J V-027、L V-023・026 A～C、027 A～D、M V-021・022・024、M V-023・025・027ピットのように形状が複雑でいくつかの遺構が重複しているような例も多いが、重複関係はいずれも確認されていない。

〔埋土〕 L V-023・027 A～D・0211ピットのような単層のものから、M V-022ピットのようにやや複雑な層を構成するものまで多種である。堆積の状況は、L V-023・027 A～D・0211ピットなどでは人為的に埋めた様子もみられるが、他の遺構ではM V-022ピットのように自然堆積に近い様相を示している。

〔付属遺構〕 明らかに付属遺構とみなすべきものはみられないが、L IV-0214、M V-023、025・027ピットなどでは、柱穴とそのまわりの浅いピットが組み合っているのかもしれない。

〔遺物〕 J V-0210ピットの埋土からは、1064の円盤状石製品と1065の磨製石斧の破片が出土している。縄文時代後期～晩期のもと思われる。

J V-0217ピットの中央部埋土中からは、1066の白付鉢型土器が正立した状態で出土している。口辺の一部に小さな山形突起をもち、縄文時代晩期から弥生時代中期中葉の初めまでに入るものと思われる。

L IV-026 A～Cの埋土中とは、1017の縄文土器片1点がある。縄文時代後期～晩期に入るであろう。

M V-024ピット埋土中からは、1079～1081の遺物が出土している。1078は大型石棒の破片、1079～1084はいずれも縄文時代晩期中葉の大洞C₁式に相当する土器片である。そのほか、F III-0214ピットの埋土上・中層から縄文時代晩期前葉の土器片が出土している。

〔時期と性格〕 所属時期は他の類と同様に不明なものが多いが、出土遺物からはF III-0214ピットが縄文時代晩期前葉頃、J V-0211、L IV-026 A～Dの各ピットが縄文時代後期～晩期、J V-027ピットは縄文時代晩期～弥生時代中葉初め、M V-024ピットがM V-061捨て場跡と同時期の縄文時代晩期中葉にそれぞれ位置付けられる。そのほか、I V-023ピットについても焼土遺構にやや先行するものの、縄文時代後期～晩期の中に入るものと思われる。埋土が極めて新しい様相をおびているL V-023・027 A～D・0211ピットなどはかなり時代が降るものかもしれない。その性格については不明なものが多いである。

(5) 柱穴状ピット (第216・217・220図 第1表 写真図版73)

柱を埋めるための小型円筒形ピットは、住居跡や他の遺構に関連するものを除いて2,500ほどである。個々のピットの形状や規模は保管資料によることとし、概略を記述することとする。

〔検出面〕 住居跡や建物跡と同様に耕作土直下やその下の黒～黒褐色土層直下で検出されて

いる。

〔保存状況〕 他の遺構との重複や木根により遺構の輪郭が一部不明なものがあるが、全体に良好なものが多い。

〔分布と重複〕 東端部を除くほぼ全域にみられるが、縄文時代晩期の住居跡が密集するEⅢ・GⅢ・HⅢ・HⅣ区と後期住居跡の集中するJⅤ・JⅥ・KⅣ・KⅤ区付近に特に多くみられる。これらの密集した柱穴状ピット群は散在しているようであるが、環形や多角形の配置形をとる部分もみられる。

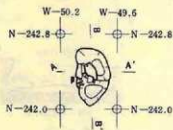
〔埋土〕 浅いピットではGⅢ-0245ピットのように2～3層がレンズ状に堆積することがない。GⅢ-0246ピットの例は一般的な堆積であり、柱部分とその周囲の埋土からなる。柱の部分は周囲の埋土より柔らかく、黒味をおびている。周囲の埋土は、大きいピットで2～5層から構成されることもあるが、多くは1～2層で成りたっている。重複する場合はHⅢ-023ピットのようになるものもみられる。また、礫が2～3個混入したり、HⅣ-025ピットのように異なる場合もみられる。JⅥ-027ピットやJⅥ-0217・0218ピットでは抜きとられているのかもしれない。

全体に古い時期のピットでは、柱部分が濃い黒褐色で周囲がうすい黒褐色～暗褐色をおびていることが多い。それに対して時代の下る新しいピットでは柱部分が不明瞭が極めてうすい場合が多く、柱部分がほぼ黒色を呈し、周囲が褐色土と黒色土の混土になっているのが一般的である。

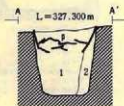
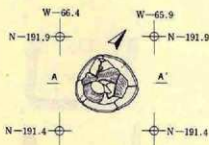
〔遺物〕 埋土中の遺物はほとんどみられないが、HⅢ区のピットなど2～3のピットから縄文土器が出土している。1047・1048はHⅢ区E₆グリット内のピットから出土した縄文時代晩期前葉の土器である。他のピットから出土したものは細片で時期が明らかでない。また、1045は鋸歯状口縁をもつ縄文時代晩期前葉の無文の小型壺型土器であり、HⅢ区の柱穴状ピットのひとつから出土したものである。

〔時期と性格〕 大多数のピットには伴出遺物がないため時期は不明である。しかし、他の遺構群との位置関係からEⅡ～Ⅳ、FⅢ～Ⅳ、GⅡ～Ⅳ、HⅢ～Ⅳ区のピット群は、一部に縄文時代前・中・後期のものを含む可能性もあるが、大部分は縄文時代晩期住居跡とほぼ同時期のものと思われる。また、縄文時代後期住居跡や弥生時代中期末の楕円形ピットの集中するJⅤ・KⅤ・Ⅵ区付近のピットは、年代幅はあるものの同遺構群と同時期と推定される。KⅣ-011建物跡付近のピットの場合には、やはり建物跡群と同年代の位置付けが考えられ、MⅤ-061捨て場跡周辺のピットについても捨て場跡と同時期が想定される。

LⅣ～LⅤ区の北東～南西方向に直線状ピット列については、埋土が新しい様相をおびており、縄文時代後期～晩期に入る可能性がある。



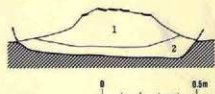
FN-019ビット



H III-091ビット

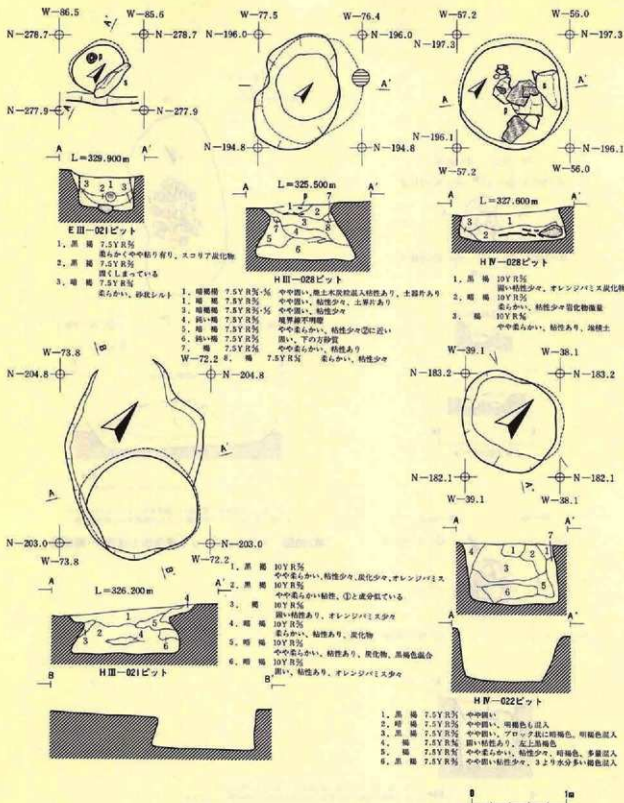
1. 黒 10Y R% 柔らかい、しまりなし、柱心硬土
2. 暗褐+原褐 10Y R%・10Y R%の混合、やや固い、しまりあり

第188図 埋壘ビット平・断面図

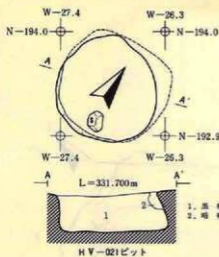


1. 黒 10Y R% 柔らかい、粘性あり、オレンジパイミストヤ
2. 暗 10Y R% やや固い、かなり粘性あり、炭化物微量

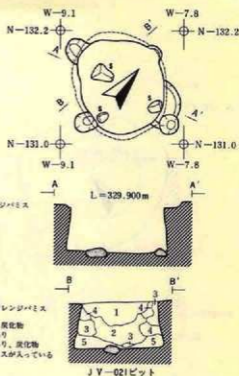
第189図 K VI-025ビット遺物出土状況平・断面図



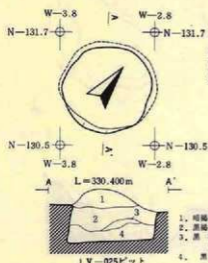
第190図 大一中型ビット平・断面図(1)



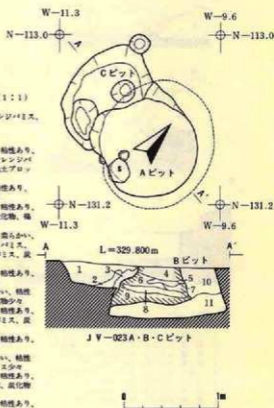
1. 黒 層 7.5Y R 粘り少々、やや柔らかい、オレンジパミス
2. 黒 層 7.5Y R やや柔らかい、パミス



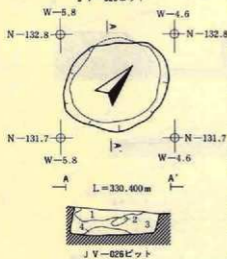
1. 黒 層 10Y R 粘り少々、やや柔らかい、オレンジパミス、炭化物少々
2. 黒 層 7.5Y R とても柔らかい、粘性あり、炭化物
3. 黒 層 10Y R 十層褐色、柔らかい、粘性あり
4. 黒 層 10Y R 十層褐色、柔らかい、粘性あり、炭化物
5. 黒 層 10Y R 4と似ているがオレンジパミスが入っている



1. 暗褐・黒 10Y R 粘り少々、柔らかい、粘性有り(1:1)
2. 黒層+暗褐 10Y R 粘性有り、炭化物少量
3. 黒 層 7.5Y R 柔らかく粘性有り、オレンジパミス、炭化物少量
4. 黒 層 7.5Y R やや柔らかい、粘性有り

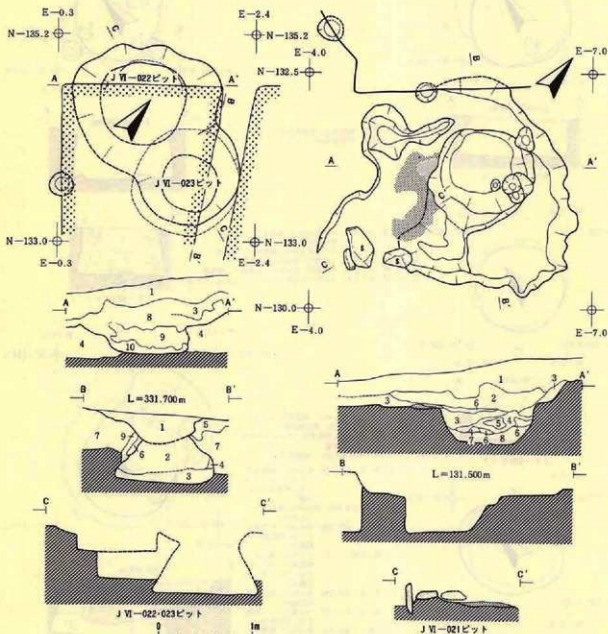


1. 黒 層 10Y R 柔らかい、粘性あり、パミス、オレンジパミス、褐色土アロップ
2. 黒 層 10Y R 柔らかい、粘性あり、パミス少々
3. 黒 層 10Y R 柔らかい、粘性あり、パミス、炭化物、褐色泥入
4. 黒・暗褐(1:1) 10Y R 柔らかい、粘性あり、パミス、オレンジパミス、炭化物多い
5. 黒 層 10Y R 柔らかい、粘性あり、炭化物少々
6. 黄 層 10Y R やや柔らかい、粘性あり、炭化物少々
7. 黒 層 10Y R 柔らかい、粘性あり、オレンジパミス、炭化物
8. 黒 層 10Y R 柔らかい、粘性あり、炭化物少々
9. 黒 層 10Y R やや柔らかい、粘性あり、パミス少々
10. 黒 層 10Y R 柔らかい、粘性あり、パミス全体、炭化物小
11. 黒 層 10Y R 柔らかい、粘性あり、パミス多い、7と似ている



1. 黒 層 7.5Y R やや柔らかい、粘性あり、オレンジパミス、炭化物
2. 黒層+暗褐 10Y R やや柔らかい、粘性あり、炭化物少々
3. 黒 層 7.5Y R 細粒状-固粒状パミス、褐色土少量、炭化物
4. 黒 層 10Y R やや柔らかい、粘性あり、炭化物少量

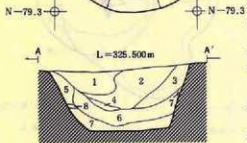
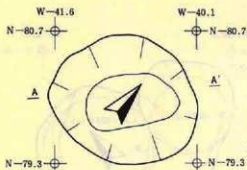
第191図 大-中型ビット平・断面図(2)



1. 埋 堀 10Y R% やや柔らかい、シルト質粘土、オキシドノイズ微量
2. 埋 堀 10Y R% 柔らかい、シルト質粘土、ノイズと炭化物微量
3. 埋 堀 10Y R% やや柔らかい、粘性少々、ノイズ微量
4. 埋 堀 10Y R% 固い、粘性少々
5. 埋 堀 10Y R% やや固い、浮石粒が混入
6. 埋 堀 10Y R% 固い、粘性少々、ノイズ微量
7. 埋 堀 10Y R% 固い、粘性少々
8. 埋 堀 10Y R% 固い、粘性やや強い
9. 平掘成

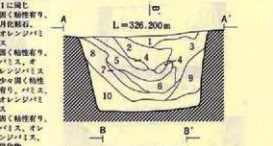
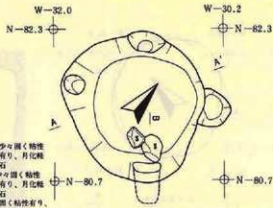
1. 埋 堀 10Y R% 柔らかい、シルト質でノイズが散在
2. 埋 堀 10Y R% やや固い、柱ノイズが多数
3. 埋 堀 10Y R% やや柔らかい、粘性少々
4. 埋 堀 10Y R% やや柔らかい、粘性少々、ノイズ微量
5. 埋 堀 10Y R% 固い、粘性少々
6. 埋 堀 10Y R% 柔らかい、粘性少々、ノイズ少々
7. 埋 堀 10Y R% やや固い、粘性少々
8. 埋 堀 10Y R% 固い、粘性少々、HfF固粒が多数

第192図 大～中型ビット平・断面図(3)



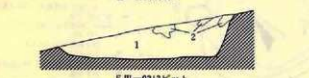
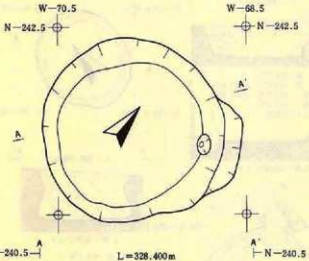
L IV-021 ビット

1. 黒 礫 10Y R% やや柔らかい、粘性有り
2. 黒 礫 10Y R% *
3. 黒 礫 10Y R% *
4. 暗 礫 10Y R% 粘石粒、オレンジパミス少量
5. 暗 礫 10Y R% やや柔らかい、粘性有り
6. 暗 礫 10Y R% やや柔らかい、粘性有り、シルトブロック状
7. 黄褐色 10Y R% やや粘性
8. 黒 礫 10Y R% やや柔らかい、粘性有り



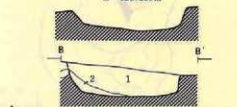
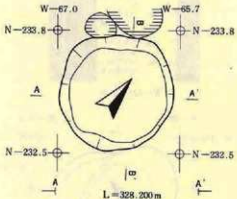
L IV-0213 ビット

1. 黒 礫 1.5Y R% 少し固く粘性有り、月化粧石
2. 暗 礫 1.5Y R% 少し固く粘性有り、月化粧石
3. 黒 礫 1.5Y R% 固く粘性有り、1に同じ
4. 黒 礫 1.5Y R% 固く粘性有り、月化粧石、オレンジパミス
5. 灰褐 1.5Y R% 固く粘性有り、パミス、オレンジパミス
6. 黒 礫 1.5Y R% 少し固く粘性有り、パミス、オレンジパミス
7. 黒 礫 1.5Y R% 固く粘性有り、パミス、オレンジパミス、炭化物
8. 暗 礫 1.5Y R% 固く粘性有り、月化粧石多量
9. 暗 礫 1.5Y R% 月化粧石少量
10. 暗 礫 1.5Y R% 固く粘性有り

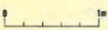


F III-0213 ビット

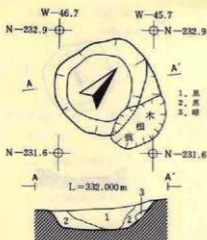
1. 黒 礫 7.5Y R% 炭化物、黄土が含まれている。
2. 黒 礫 10Y R% 粘性なし



G III-025 ビット

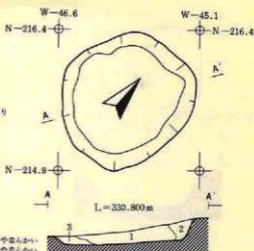


第194図 大～中型ビット平・断面図 (5)



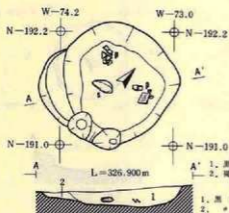
1. 黒 層 10Y R% やや柔らかい
2. 黒 層 10Y R% #
3. 暗 層 10Y R% # やや粘性あり

H Ⅱ-023ピット



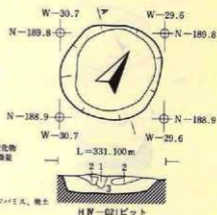
1. 黒 層 10Y R% 粘性少々あり、やや柔らかい
2. 黒 層 10Y R% 粘性少々あり、やや柔らかい
3. 暗 層 10Y R% + 黒層%が混入している、やや柔らかい G IV-026ピット

G IV-026ピット

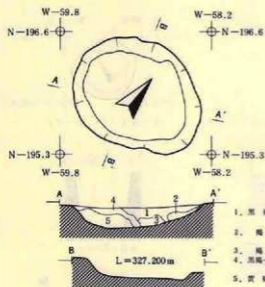


1. 黒 層 7.5Y R% やや柔らかい、粘性少々
2. # 5Y R% 粘土質、暗褐色混入
3. 黒 層 7.5Y R% やや固い、粘性少々、オレンジパミス、粘土

H Ⅱ-021ピット

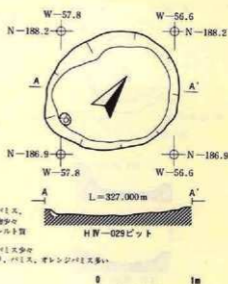


H W-021ピット



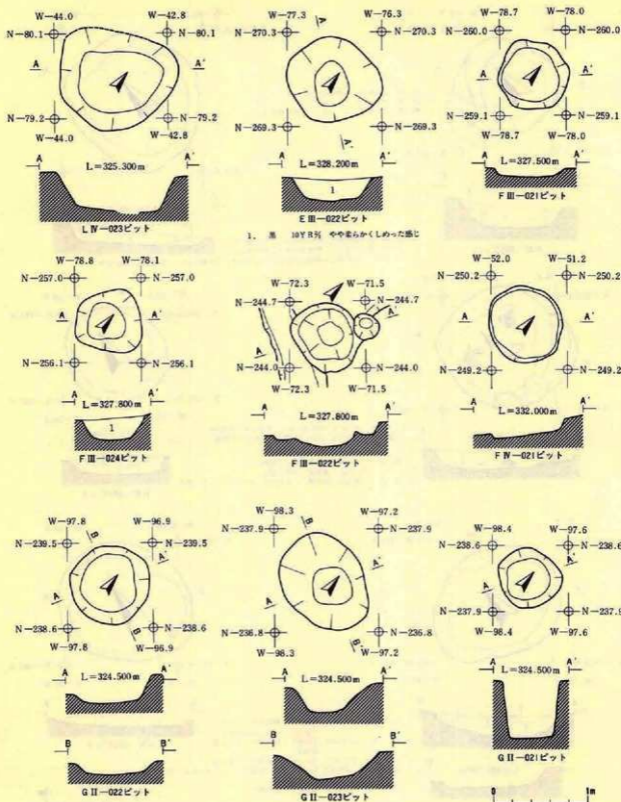
1. 黒 層 10Y R% 柔らかい、粘性あり、パミス、オレンジパミス、炭化物少々
2. 暗 層 10Y R% 柔らかい、粘性あり、シルト質、軽粘土
3. 暗 層 10Y R% 柔らかい、粘性あり、パミス少々
4. 黒層・暗 層 10Y R% + # 柔らかい、粘性あり、パミス、オレンジパミス多い、炭化物少々
5. 黄 層 10Y R% 柔らかい、粘性あり

H W-029ピット

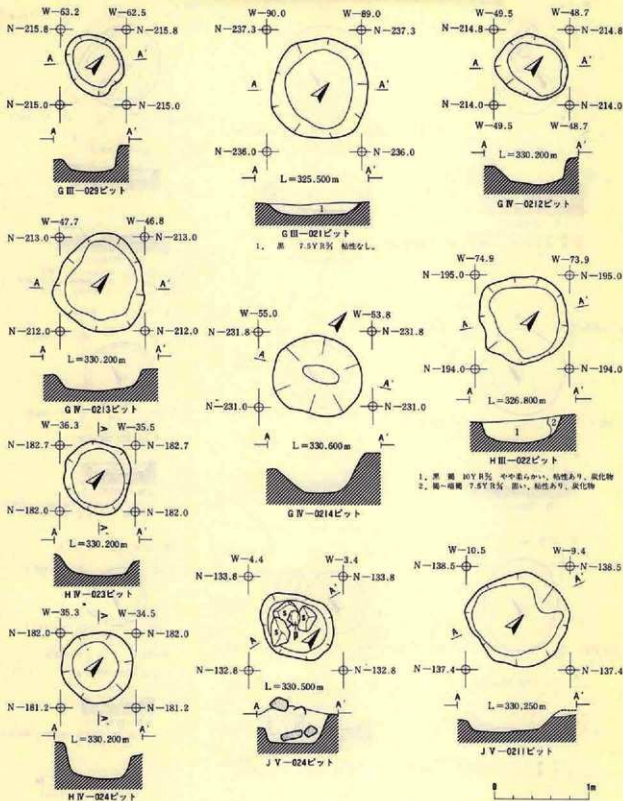


H W-029ピット

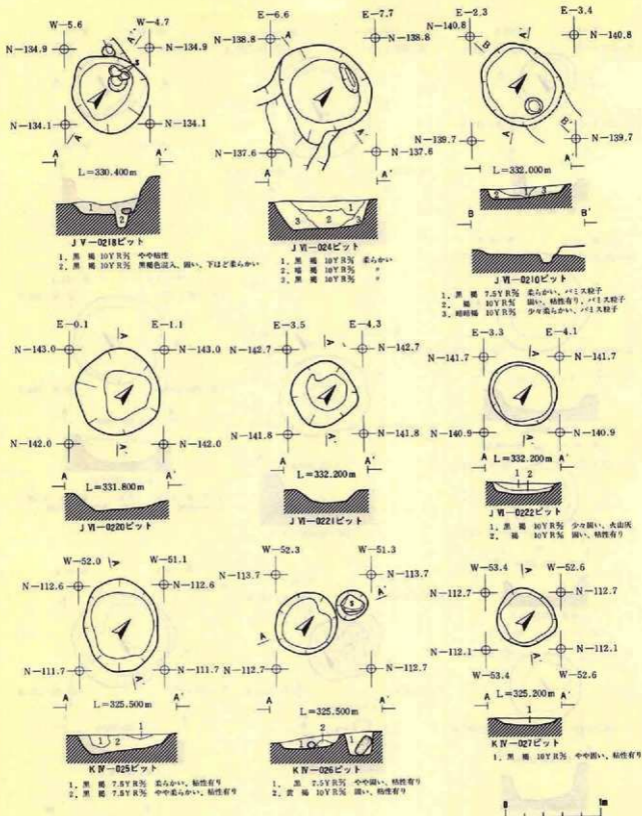
第195図 大一中型ピット平・断面図(6)



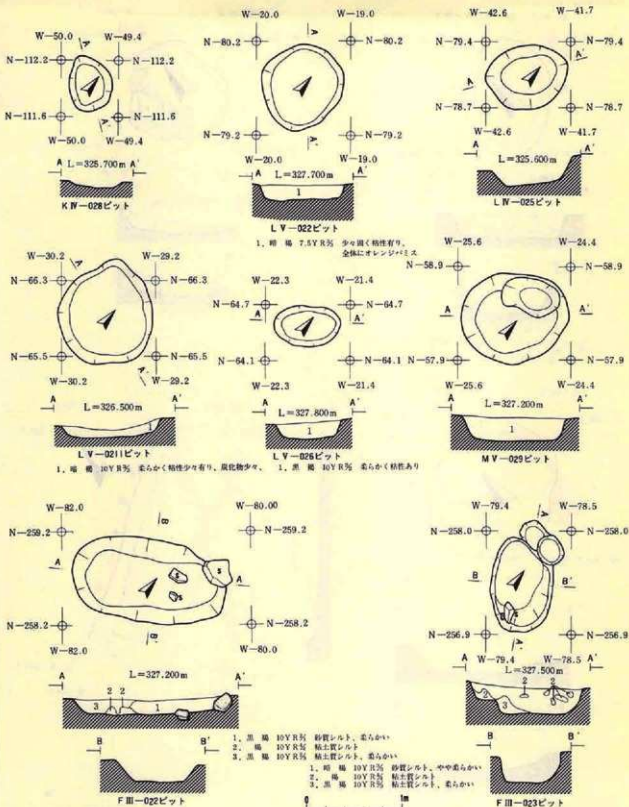
第196図 大～中型ビット平・断面図(7)



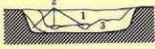
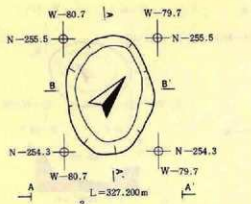
第197図 大-中型ビット平・断面図(8)



第198図 大～中型ビット平・断面図(9)

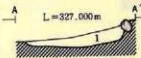
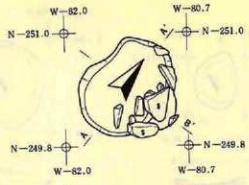


第199図 大-中型ビット平・断面図 (10)

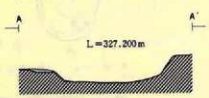
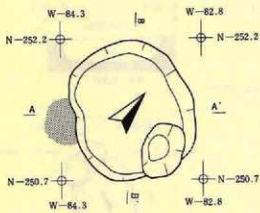


F III-025ピット

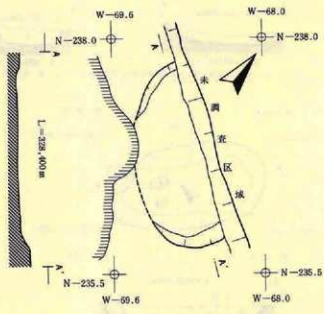
- 1. 泥 層 NOY R% やや柔らかい、粘性あり、粘土質シルト
- 2. 泥 層 NOY R% *
- 3. 泥 層 NOY R% *



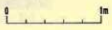
F III-027ピット



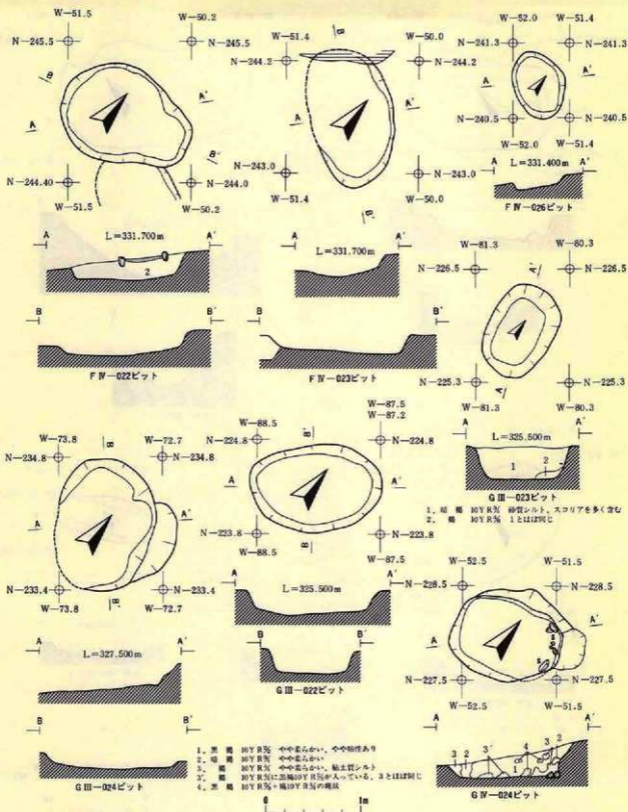
F III-028ピット



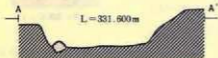
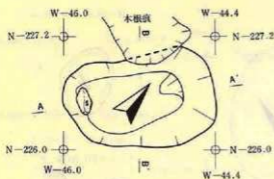
F III-021ピット



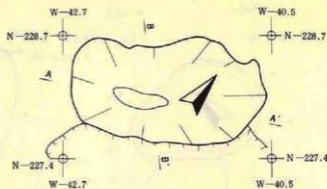
第200図 大～中型ピット平・断面図 (11)



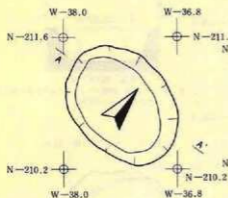
第201図 大-中型ビット平・断面図 (12)



GN-025ビット

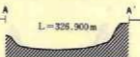
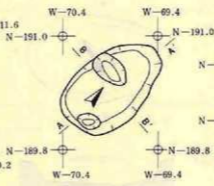


GN-028ビット



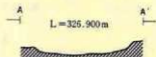
GN-029ビット

1. 粘 礫 10Y R3/2 ごくわずかに粘性あり
2. 黒 礫 10Y R5/2 柔らかく、わずかに粘性

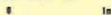


HIII-024ビット

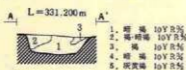
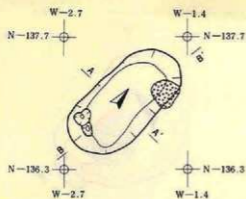
1. 黒 礫 10Y R5/2 固い、粘性なし、オレンジ・ピスト、炭化物微量
2. 粘 礫 7.5Y R5/2-Y R5/2 固い、粘性あり、黒礫一ふらふら、粘性少々
3. 粘 礫 10Y R5/2 固い、粘性あり



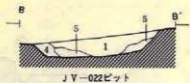
HIII-021ビット



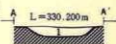
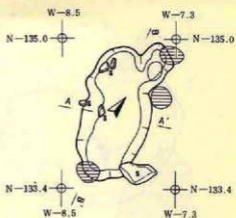
第202図 大-中型ビット平・断面図 (13)



1. 黒 層 10Y R% やや柔らかい、パミス散在
2. 黒-暗褐 10Y R% やや柔らかい、パミス散在、褐色ブロック状
3. 暗 褐 10Y R% やや柔らかい
4. 暗 褐 10Y R% # パミス少量散在
5. 灰黄褐 10Y R% # 粘性少マ



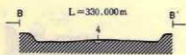
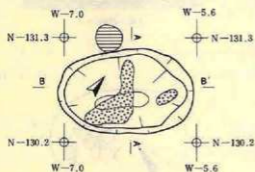
J V-022ピット



1. 黒 層 10Y R% やや柔らかい、オレンジパミスブロック状、炭化物

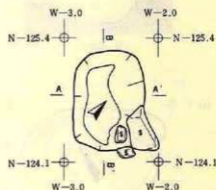


J V-0212ピット



J V-0214ピット

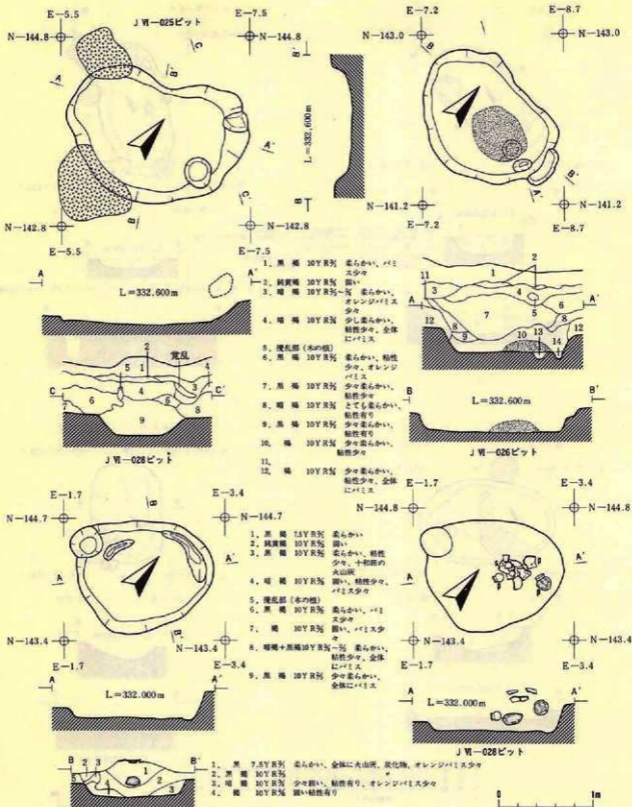
1. 黒 層 7.5Y R% やや柔らかい、粘性少マ、H_p (起面の暗褐色土含む)
2. 黒 層 7.5Y R% やや柔らかい、粘性少マ、1と同じ
3. 黒 層 7.5Y R% やや柔らかい、粘性少マ、H_p (起面のオレンジパミス少量)
4. 木根残土



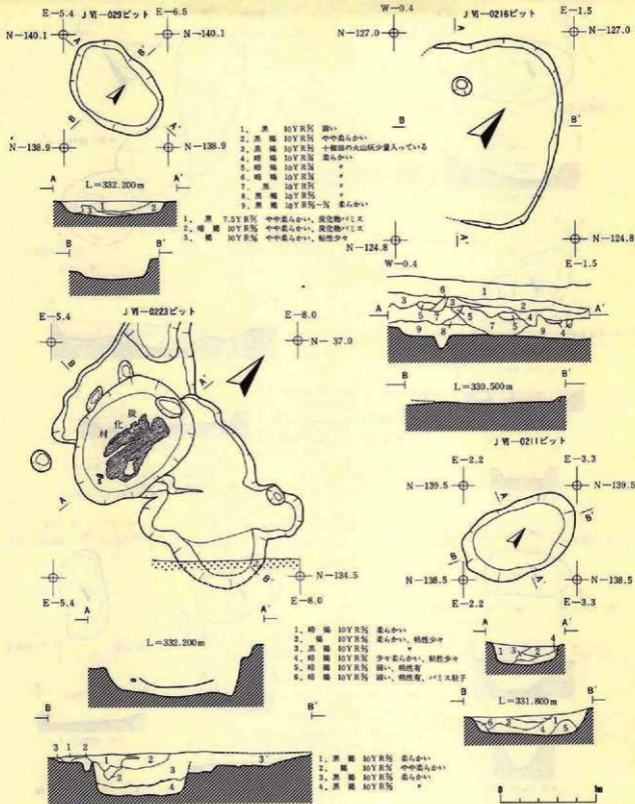
J V-0215ピット



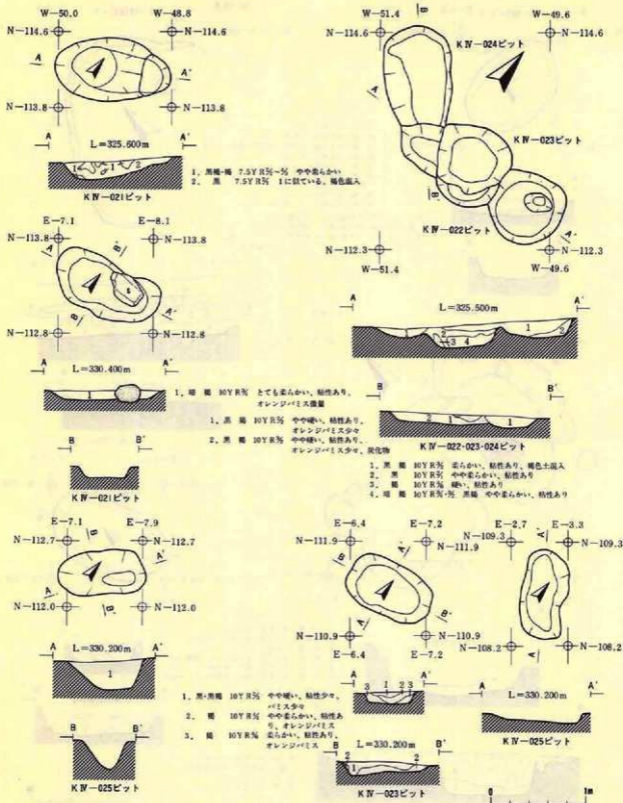
第203図 大-中型ピット平・断面図 (14)



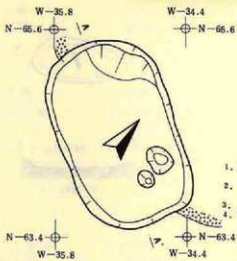
第204図 大～中型ピット平・断面図 (15)



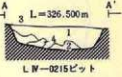
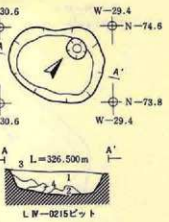
第205図 大～中型ピット平・断面図 (16)



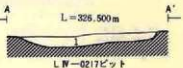
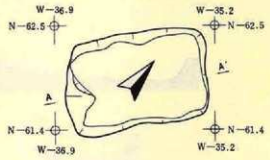
第206図 大～中型ピット平・断面図 (17)



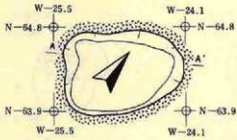
1. 硝 10Y R% 黒く粘性少々、炭化物少々、シルト
2. 硝 10Y R% 黒く粘性少々、オレンジパリス少量
3. 硝 10Y R% 少々柔らかく粘性有り、オレンジパリス少量
4. 硝 10Y R% 少々柔らかく粘性有り、オレンジパリス少量



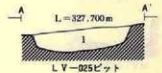
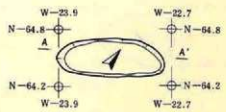
1. 黒 硝 10Y R% 柔らかい、粘性有り、炭化物少量
2. 硝 10Y R% 炭化物少量
3. 硝 10Y R% 粘性少々
4. 硝 10Y R% パリス少量
5. 硝 10Y R% 3に似ている
6. 硝 10Y R%



1. 硝 10Y R% やや硬い



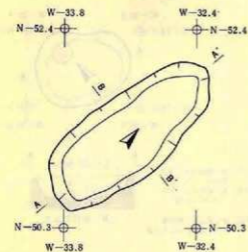
1. 黒 硝 10Y R% 柔らかく粘性有り



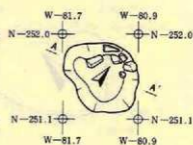
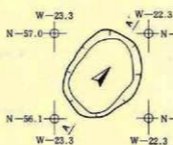
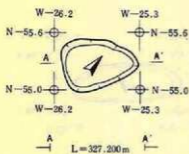
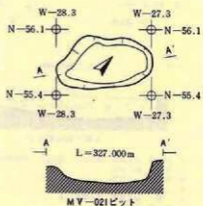
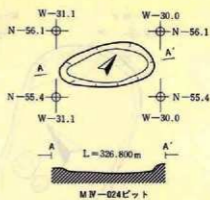
1. 黒 硝 10Y R% 柔らかく粘性有り



第207図 大～中型ピット平・断面図 (18)



- MV-023ピット
1. 泥 層 10Y黄 赤らかい、炭化物微量
 2. 泥 層 10Y黄 赤らかい、粘性少々、オレンジパミス、炭化物少量
 3. 泥 層 10Y黄 少々赤らかい、粘性少々
 4. 泥 層 10Y黄 赤らかく、粘性有り、炭化粒石微量



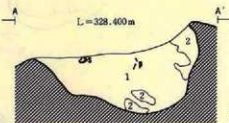
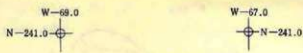
MV-022ピット

MV-028ピット

FIII-026ピット

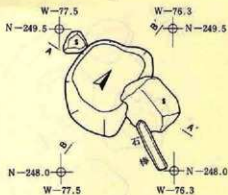


第208図 大～中型ピット平・断面図 (19)

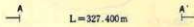


F III-0214ピット

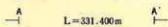
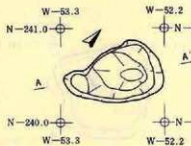
1. 黒 珪 10YR5/2 粘土、炭化物あり
2. 珪 10YR5/2 粘性なし



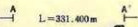
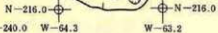
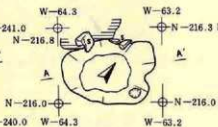
G III-0210ピット



F III-0210ピット



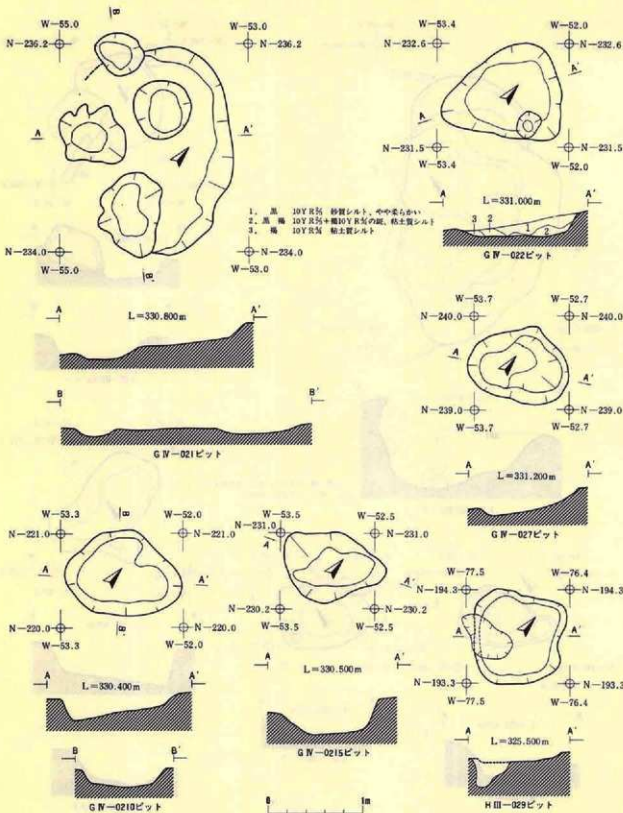
F III-025ピット



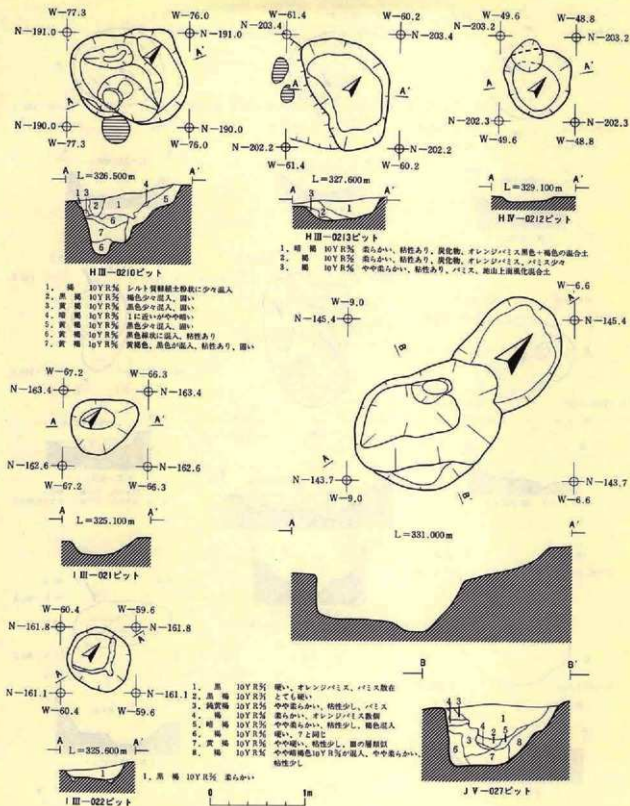
G III-028ピット



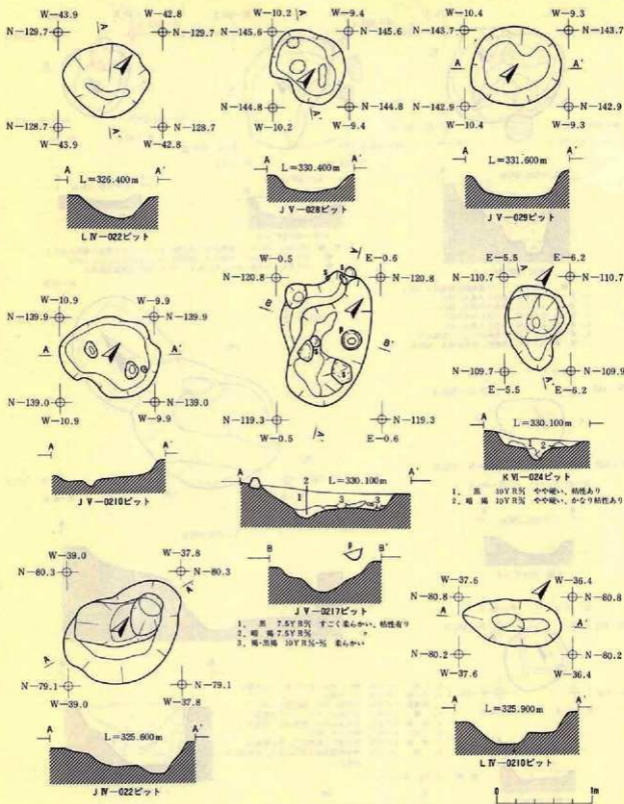
第209図 大-中型ピット平・断面図 (20)



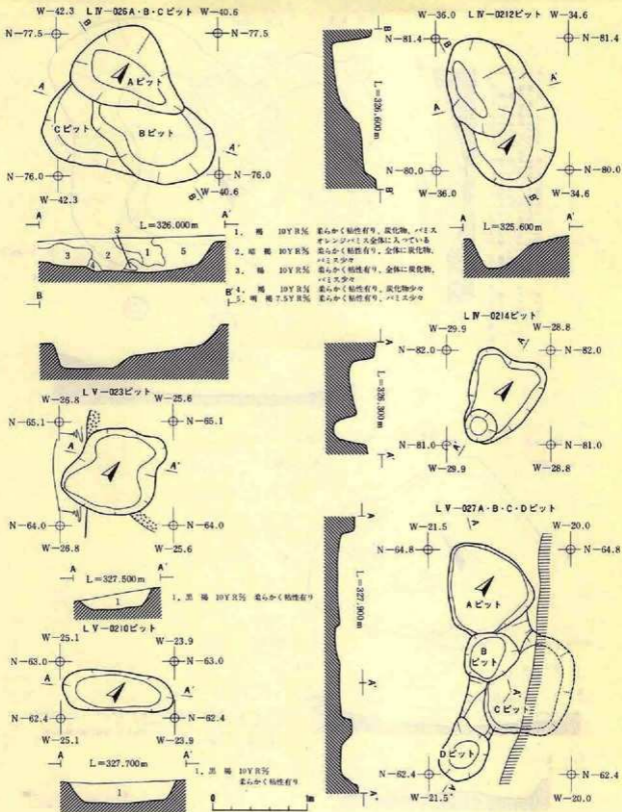
第210図 大-中型ピット平・断面図 (21)



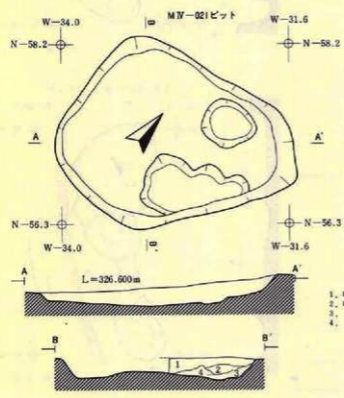
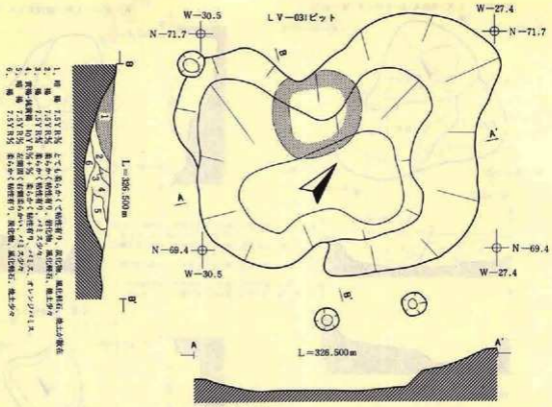
第211図 大-中型ピット平・断面図 (22)



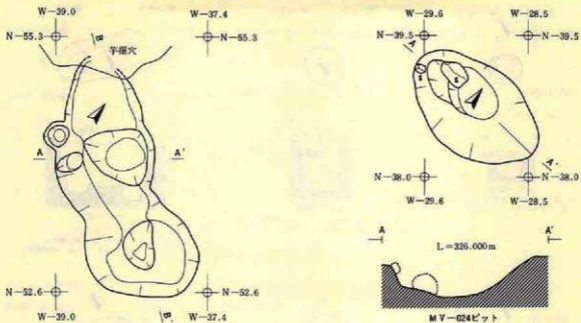
第212図 大～中型ピット平・断面図 (23)



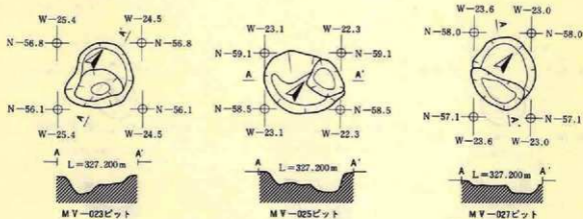
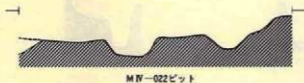
第213図 大～中型ピット平・断面図 (24)



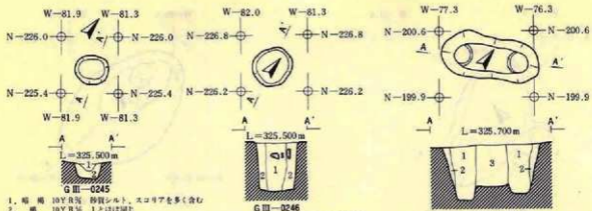
第214図 大~中型ビット平・断面図 (25)



1. 層 10YR5 赤んかい、バツバツ、炭化物、オレンジパイス少々
2. 層 10YR7 赤んかい、粘性少々、オレンジパイス、黒土多い
3. 層 10YR7 赤んかい、粘性少々、炭化物、オレンジパイス全体
4. 層 10YR6 赤んかい、粘性有り、炭化物少々
5. 層 10YR5 赤んかい、粘性少々



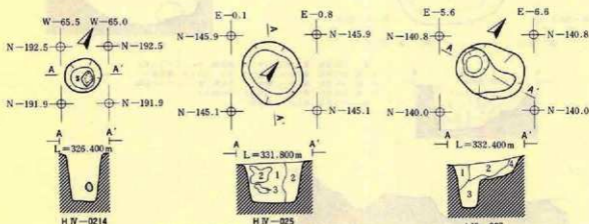
第215図 大・中型ピット平・断面図 (26)



1. 堀 堀 10Y R% 砂質シルト、スコリアを多く含む
2. 堀 堀 10Y R% 1とほぼ同じ

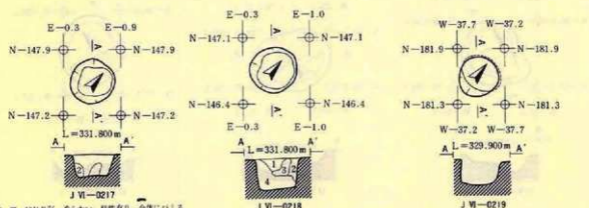
1. 堀 堀 10Y R% 砂質シルト、スコリアを多く含む
2. 堀 堀 10Y R% 砂質シルト、スコリアを多く含む

1. 基層-堀堀 柔らかい、しまりなし
2. 堀 堀 硬い、しまっている、細砂層出入
3. 堀 堀 とても硬い、しまっている、細砂層出入



1. 基 堀 10Y R% 柔らかく粘性有り、全体にパイス
2. 堀 堀 10Y R% 柔らかく粘性有り、パイス、炭化物少々
3. 堀 堀 10Y R% 柔らかく粘性有り、パイス少々

1. 堀 堀 10Y R% やや柔らかい
2. 基 堀 10Y R% 柔らかい、全体にパイス
3. 基 堀 10Y R% 柔らかい
4. 堀 堀 10Y R% パイス少々

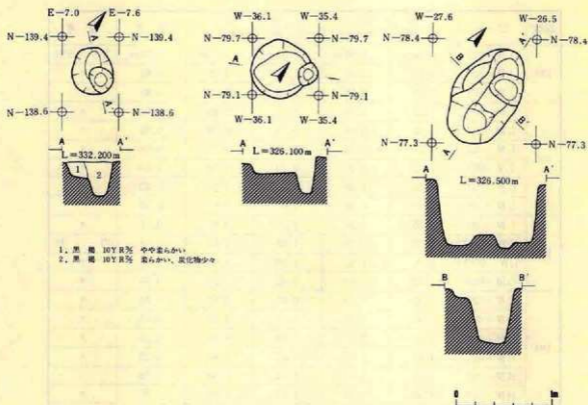


1. 基 堀 10Y R% 柔らかい、粘性有り、全体にパイス
2. 堀 堀 10Y R% 柔らかい、粘性有り
3. 堀 堀 10Y R% とても柔らかい、粘性有り

1. 基 堀 10Y R% 柔らかい、粘性有り、パイス少々
2. 堀 堀 10Y R% 柔らかい、粘性有り、パイス極少
3. 基 堀 10Y R% 柔らかい、粘性有り、パイス少々



第216図 柱穴状ビット平・断面図



第217図 柱穴状ビット平・断面図 (26)

ビット計測表

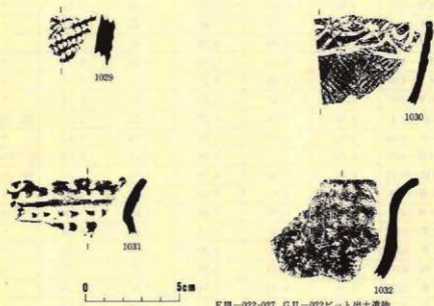
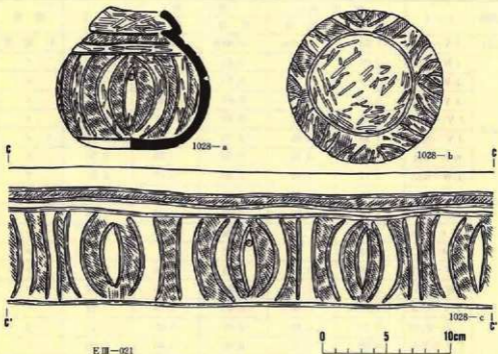
図版	ビット	輸出面		底面		深さ	備考
		長径	短径	長径	短径		
188	FN-019	0.62m	0.03m	0.19m	0.14m	0.20m	埋 奥
	HIII-091	0.33	0.31	0.22		0.35	#
189	KVI-025	0.95	0.47	0.80		0.25	楕円形
190	EIII-021	0.52	0.50	0.62	0.62	0.35	フラスコ形
	HIII-028	1.20	0.90	1.14	1.04	0.60	#
	HN-028	1.12	1.07	1.12	1.15	0.35	#
	HIII-021	1.18	1.10	1.25	1.10	0.54	#
	HN-022	1.02	1.00	0.97	0.78	0.65	#
191	HV-021	1.13	1.05	1.16	1.14	0.43	#
	JV-025	0.95	0.90	1.05	0.92	0.54	#
	JV-026	1.07	0.95	0.93	0.88	0.32	#
	JV-021	1.00	0.87	1.13	0.98	0.50	#
	JV-023A	1.12	1.05	1.37	1.20	0.58	#

図版	ビット	検出面		底面		深さ	備考
		長径	短径	長径	短径		
192	J V-022	0.90m	0.85m	0.85m	m	0.18m	フラスコ形
	J VI-023	0.60	0.65	1.13	1.05	0.62	#
	J VI-021	0.90	0.65	0.65	0.63	0.45	#
193	L W-024	1.25	1.12	1.25	1.18	0.68	#
	L W-027	1.00	0.95	0.78	0.78	0.43	#
	L W-028	1.27	1.24	1.01	0.95	0.55	#
	I V-021	1.03	1.00	0.70	0.70	1.00	#
	G W-0216	1.45	1.28	1.05	1.00	0.40	#
	L W-029	1.00	0.98	1.00	0.93	0.50	#
194	L W-021	1.55	1.36	1.00	0.57	0.67	#
	F III-0213	2.12	1.95	1.53	1.50	0.45	円形
	L W-0213	1.60	1.50	1.08	1.03	0.85	#
	G III-025	1.22	1.20	1.02	0.98	0.35	#
195	G W-023	1.00	0.95	0.70	0.65	0.30	#
	G W-026	1.40	1.40	1.15	1.12	0.25	#
	H W-027	1.35	1.20	1.04	0.89	0.23	#
	H W-021	1.05	1.00	0.85	0.80	0.20	#
	H W-027	1.35	1.20	1.04	0.89	0.23	#
	H W-029	1.40	1.25	1.24	1.00	0.07	#
196	L W-023	1.25	1.10	0.89	0.64	0.39	#
	E III-022	1.00	0.90	0.48	0.35	1.25	#
	F III-021	0.75	0.73	0.60	0.55	0.08	#
	F III-024	0.70	0.67	0.40	0.40	0.23	#
	F III-0212	0.95	0.73	0.53	0.56	0.22	#
	F W-021	0.82	0.78	0.02	0.70	0.17	#
	G II-022	0.84	0.83	0.60	0.59	0.25	#
	G II-023	1.00	0.87	0.40	0.37	0.28	#
	G II-021	0.64	0.95	0.45	0.41	0.60	#
	G III-029	0.65	0.60	0.47	0.47	0.28	#
197	G III-021	1.06	1.00	0.84	0.70	0.13	#
	G W-0212	0.77	0.67	0.57	0.53	0.25	#
	G W-0213	1.04	0.93	0.83	0.74	0.20	#
	G W-024	0.95	0.85	0.35	0.18	0.40	#
	H III-022	0.93	0.92	0.75	0.72	0.27	#
	H W-023	0.76	0.70	0.62	0.55	0.20	#
	H W-024	0.75	0.75	0.51	0.48	0.35	#
	J V-024	0.75	0.65	0.62	0.53	0.28	#
	J V-0211	1.11	1.00	0.97	0.75	0.15	#
	198	J V-0218	0.81	0.80	0.60	0.55	0.40

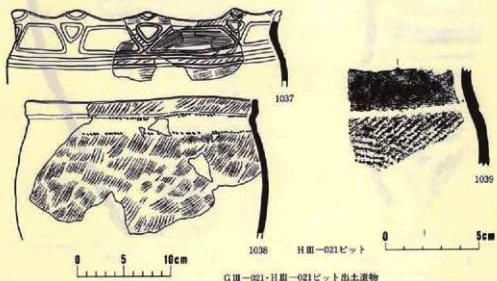
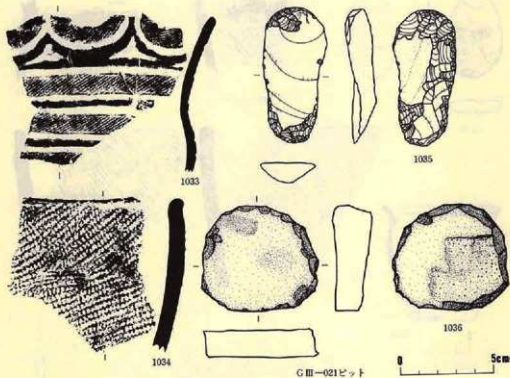
図版	ビット	検出面		底面		深さ	備考
		長径	短径	長径	短径		
198	J VI-024	1.05m	0.95m	0.71m	0.65m	0.32m	円形
	J VI-0210	0.85	0.85	0.73	0.70	0.13	〃
	J VI-0220	0.92	0.89	0.53	0.49	0.18	〃
	J VI-0221	0.70	0.70	0.42	0.37	0.14	〃
	J VI-0222	0.72	0.67	0.61	0.59	0.10	〃
	K IV-025	1.00	0.79	0.71	0.65	0.20	〃
	K IV-026	0.66	0.65	0.54	0.51	0.14	〃
199	K IV-027	0.63	0.62	0.53	0.52	0.07	〃
	K IV-028	0.60	0.45	0.44	0.30	0.08	〃
	L V-022	0.90	0.87	0.80	0.70	0.17	〃
	L IV-025	0.86	0.68	0.59	0.40	0.30	〃
	L V-0211	1.11	1.00	0.94	0.80	0.19	〃
	L V-026	0.71	0.44	0.57	0.32	0.18	〃
	M V-029	1.14	0.97	0.85	0.65	0.26	〃
200	F III-022	1.60	0.90	1.40	0.60	0.24	楕円形状
	F III-023	1.12	0.65	0.72	0.49	0.32	〃
	F III-025	1.25	0.93	1.00	0.71	0.35	〃
	F III-027	1.05	1.00	0.95	0.82	0.25	〃
	F III-028	1.48	1.31	1.27	1.05	0.28	〃
	F III-0211	1.95	0.91	1.73	0.77	0.08	〃
201	F IV-022	1.35	1.05	1.22	0.93	0.27	〃
	F IV-023	1.45	0.91	1.33	0.86	0.23	〃
	F IV-026	0.68	0.56	0.55	0.45	0.15	〃
	G III-023	1.00	0.71	0.70	0.48	0.35	〃
	G III-024	1.40	1.29	1.25	1.00	0.15	〃
	G III-022	1.40	0.95	1.20	0.75	0.26	〃
	G IV-024	1.45	0.98	1.05	0.78	0.35	〃
202	G IV-025	1.62	1.04	1.13	0.60	0.40	〃
	G IV-028	2.05	1.13	0.50	0.20	0.65	〃
	G IV-029	1.20	1.15	0.90	0.82	0.25	〃
	H III-024	0.90	0.85	0.72	0.66	0.25	〃
	H III-0211	0.96	0.48	0.80	0.31	0.11	〃
203	J V-022	0.93	0.90	0.68	0.65	0.27	〃
	J V-0212	1.40	0.75	1.25	0.50	0.10	〃
	J V-0214	1.43	0.78	1.30	0.78	0.10	〃
	J V-0215	1.05	0.75	0.85	0.40	0.17	〃
204	J VI-025	1.85	1.40	1.57	1.12	0.22	〃
	J VI-026	1.40	1.37	1.17	1.15	0.25	〃
	J VI-028	1.45	1.20	1.25	0.95	0.27	〃

図版	ビット	検出面		底面		深さ	備考
		長径	短径	長径	短径		
205	J VI-029	1.10m	0.78m	0.95m	0.65m	0.20m	楕円形
	J VI-0216	2.00		1.88		0.05	#
	J VI-0223	1.43	1.05	1.10	0.82	0.45	#
	J VI-0211	1.28	0.95	0.95	0.65	0.27	#
206	KN-021	1.20	0.66	0.75	0.45	0.25	#
	KN-022	0.76	0.76	0.60	0.68	0.20	#
	KN-023	0.85	0.75	0.50	0.45	0.30	#
	KN-024	1.20~	0.75	0.90~	0.45	0.17	#
	KN-021	1.05	0.63	0.75	0.45	0.10	#
	KN-025	0.95	0.47	0.35	0.14	0.33	#
	KN-023	0.86	0.60	0.45	0.63	0.15	#
	KN-025	0.96	0.50	0.50	0.28	0.10	#
207	LV-0216	0.99	1.31	1.85	1.14	0.35	#
	LV-0215	1.02	0.80	0.81	0.60	0.26	#
	LV-0217	1.51	1.03	1.38	0.89	0.15	#
	LV-024	1.26	0.85	1.02	0.75	0.29	#
	LV-025	1.15	0.42	1.00	0.34	0.29	#
208	MV-023	1.25	1.05	0.95	0.80	0.38	#
	MV-024	0.98	0.47	0.82	0.35	0.08	#
	MV-021	1.00	0.57	0.76	0.43	0.21	#
	MV-022	0.80	0.57	0.71	0.43	0.30	#
	MV-028	0.91	0.80	0.75	0.67	0.15	#
	F III-026	0.78	0.72	0.53	0.50	0.11	不定形
209	F III-0214	2.85	1.70			0.92	#
	F III-0210	1.03	0.90	0.70	0.70	0.20	#
	FN-025	1.06	0.65	0.88	0.55	0.32	#
	G III-028	0.99	0.70	0.52	0.40	0.22	#
	G III-0210	1.18	0.96	0.81	0.63	0.43	#
210	GN-021	2.30		2.05		0.33	#
	GN-022	1.26	1.00	0.90	0.73	0.23	#
	GN-027	1.06	0.83	0.86	0.58	0.27	#
	GN-0210	1.21	0.91	0.96	0.68	0.17	#
	GN-0215	1.05	0.74	0.82	0.40	0.35	#
	GN-029	1.02	0.95	0.83	0.81	0.08	#
211	H III-0210	1.21	1.00	0.20	0.17	0.25	#
	H III-0213	1.16	0.88	0.82	0.68	0.25	#
	HW-0212	0.74	0.71	0.48	0.48	0.05	#
	I III-021	0.70	0.59	0.36	0.22	0.18	#
	I III-022	0.67	0.66	0.37	0.36	0.18	#

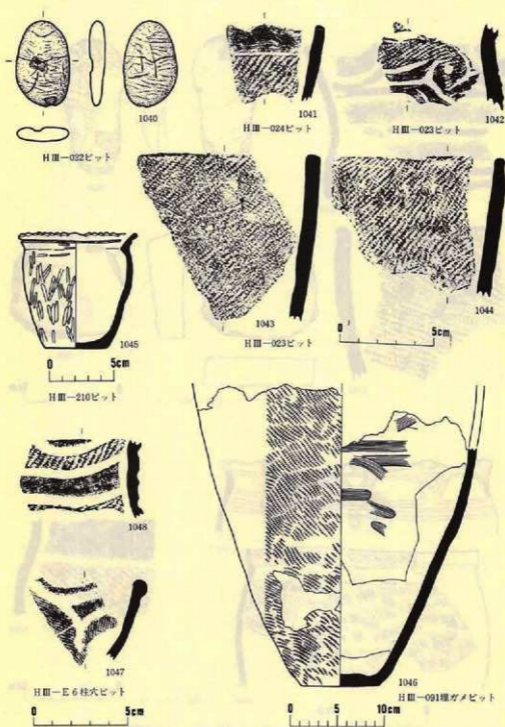
図版	ビット	検出面		底面		深さ	備考
		長径	短径	長径	短径		
211	J V-027	1.53m	1.33m	0.98m	0.56m	0.65m	不定形
212	J V-022	0.92	0.77	0.45	0.07	0.25	"
	J V-028	0.29	0.75	0.70	0.55	0.17	"
	J V-029	0.95	0.83	0.67	0.67	0.25	"
	J V-0210	1.06	0.87	0.85	0.65	0.20	"
	J V-0217	1.38	0.95	0.78	0.30	0.30	"
	K W-024	0.90	0.70	0.70	0.55	0.30	"
	L W-022	1.17	1.01	0.20	0.17	0.31	"
	L W-0210	1.01	0.48	0.60	0.14	0.32	"
213	L W-026 A	1.05	0.85	0.60	0.36	0.46	"
	" B	1.20		0.86			"
	" C	0.85		0.68			"
	L V-0212	1.00	0.70	0.35	0.18	0.45	"
	L V-0214	1.02	0.80	0.84	0.65	0.27	"
	L V-023	1.00	0.90	0.89	0.78	0.24	"
	L V-0210	1.13	0.43	0.87	0.35	0.25	"
	L V-027 A	0.98	0.91	0.90	0.80	0.20	"
	" B	0.56	0.51	0.42	0.34	0.24	"
	" C	1.10		0.89		0.18	"
214	L V-031	2.45	1.90	1.73	1.00	0.43	"
	M W-021	2.53	2.03	2.25	1.78	0.31	"
215	M W-022	2.30	1.20	0.41	0.35	0.45	"
	M V-024	1.13	1.08	0.50	0.40	0.40	"
	M V-023	0.70	0.69	0.20	0.13	0.19	"
	M V-025	0.82	0.65	0.21	0.20	0.21	"
	M V-027	0.76	0.68	0.20	0.30	0.13	"
216	G II-0245	0.35	0.30	0.27	0.21	0.15	柱穴状
	G III-0246	0.43	0.40	0.34	0.34	0.52	"
	H III-023	0.50		0.18	0.17	0.62	柱穴状(重複)
	H III-0214	0.39	0.35	0.25	0.22	0.50	柱穴状
	H W-025	0.66	0.64	0.46	0.45	0.43	"
	J VI-027	0.71	0.58	0.18	0.16	0.52	"
	J VI-0217	0.48	0.47	0.35	0.30	0.24	"
	J VI-0218	0.50	0.50	0.39	0.39	0.35	"
217	J VI-0219	0.42	0.41	0.39	0.37	0.26	"
	J VI-0224	0.50	0.44	0.14	0.14	0.36	"
	L V-0211	0.71	0.64	0.12	0.11	0.38	"
	L V-021	0.92	0.75	0.23	0.20	0.70	"



第218図 ビット出土遺物 (1)

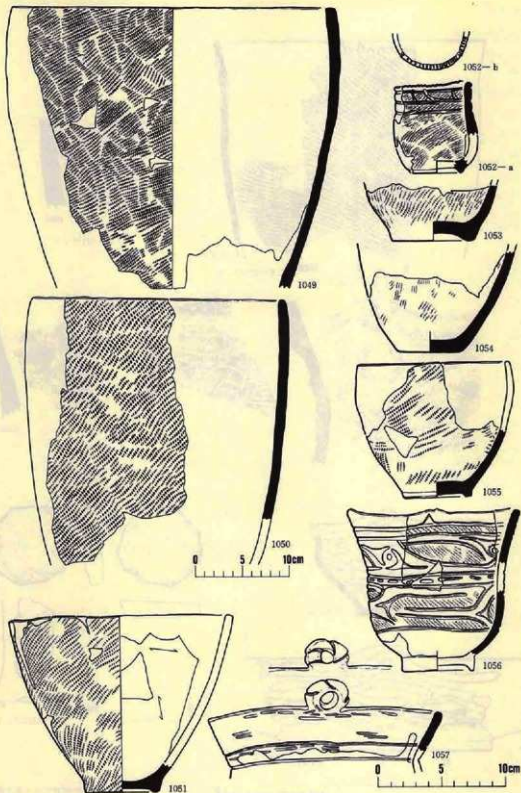


第219図 ビット出土遺物(2)



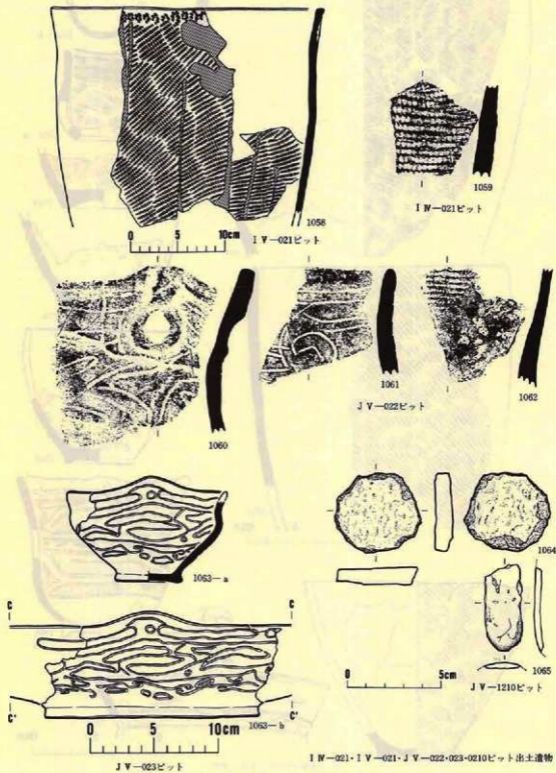
H III-022・023・024・210・H III-091埋ガメビット H III-E.67グリット柱穴ビット 出土遺物

第220図 ビット出土遺物(3)

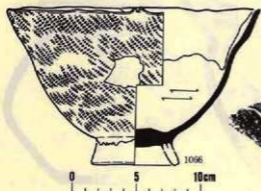


H.W. 022ピット出土遺物

第221図 ピット出土遺物(4)



第222図 ビット出土遺物(5)



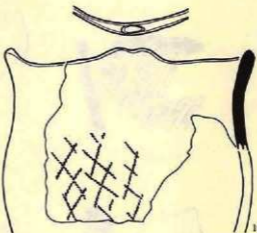
J V-0214ビット



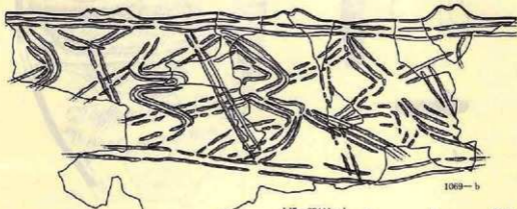
J VI-023ビット



1069-a

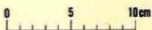


1070



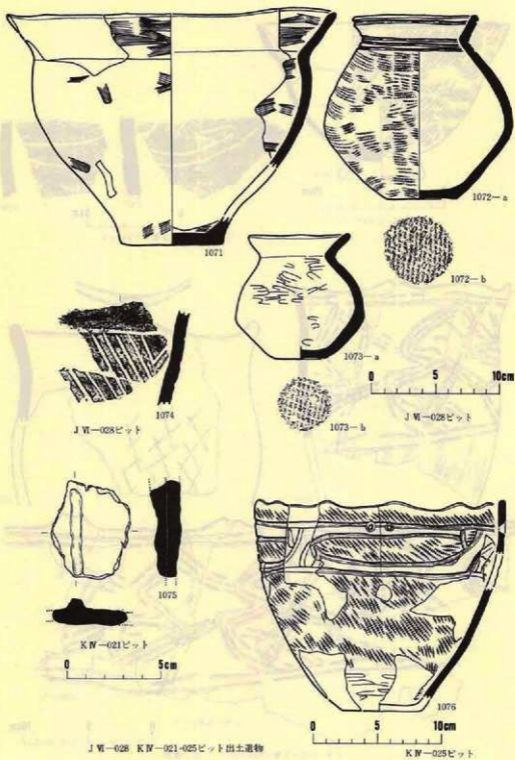
1069-b

J VI-024ビット

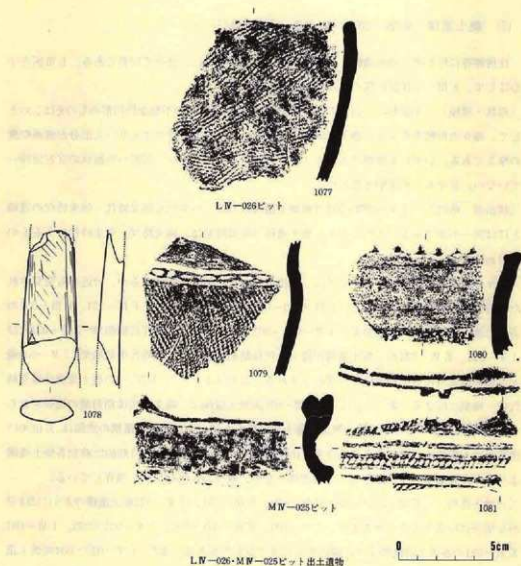


J V-0214・J VI-023・024ビット出土遺物

第223図 ビット出土遺物(6)



第224図 ビット出土遺物(7)



第225図 ビット出土遺物(8)

— 小括 —

規模・形状とも多種多様なビット類である。これらの中には、多数の柱穴状ビットやフラスコビット、鉢型ビットなどのように縄文時代の遺構と思われるものやJ V-022ビットなど一群の楕円形ビットのように弥生時代の遺構と考えられるもの、あるいはL V-025その他のビットのように歴史時代の新しい時期に属するものなどがある。

各ビットはそれぞれ他の遺構と関連して営まれているものと推定されるが、ビット相互の時間的な関係、機能、他の遺構群との関連についてはさらに比較検討を進める必要がある。

(5) 焼土遺構(第226~231図 計測表 写真図版74)

住居跡等に伴わず、他の遺構との関係が不明な焼土遺構は、合せて19基である。EⅢ区を中心にして、EⅢ~IⅣ区に広く散在している。

〔形状・規模〕 平面形は、別表のように直径0.3~1m未満の不整な楕円形のものをはじめとして、種々の形態を有する。焼土の厚さは、最大0.02~0.03mほどであり、大部分が痕跡程度の厚さである。いずれも底部に火熱をうけた形跡が認められるが、石囲いや板状の立石は伴っていない。おそらく地床炉と思われる。

〔検出面・時期〕 IⅤ-033・034の両焼土遺構以外は、いずれも縄文時代~弥生時代の遺構とほぼ同一の面である。このことから焼土遺構の所属時期は、縄文時代~弥生時代に入るとと思われる。

個々の遺構の詳細な時期については、伴出遺物がないので不明であるが、付近から発見された遺構や遺物を考慮に入れると、EⅢ-031~035、FⅢ-031・032、FⅣ-031、HⅢ-031の各焼土遺構が縄文時代晩期前葉、IⅤ-031・032焼土遺構が縄文時代前期前葉、IⅥ-031及びJⅤ-031、KⅥ-031の3焼土遺構が縄文時代後期前葉ないし弥生時代中期前葉、JⅤ-032焼土遺構が縄文時代後期初葉にそれぞれ含まれると思われる。また、LⅣ-031焼土遺構は縄文時代後~晩期に取まるであろう。IⅤ-033・034両焼土遺構は、縄文時代後期前葉の遺物を含むIⅣ-051溝跡をさらに厚く被う無遺物層上面に築かれている。さらに遺構の底部は、EⅢ-011住居跡の上層埋土に類似する黄灰白色火山灰層の一部を切っており、時期的に前記各焼土遺構よりかなり降ることが予想される。両遺構とも燃え残りの炭化材が少し残存している。

〔占地と性格〕 EⅢ-031~035、EⅣ-031、HⅢ-031、JⅤ-031焼土遺構のようにほぼ平坦な場所に位置するものがあるが、FⅣ-031、FⅢ-031・032、IⅤ-031・032、IⅥ-031、KⅥ-031の各焼土遺構のように傾斜地に位置するものもある。また、IⅤ-033・034両焼土遺構の場合は、急峻な崖下の平坦面~緩斜面上に位置している。

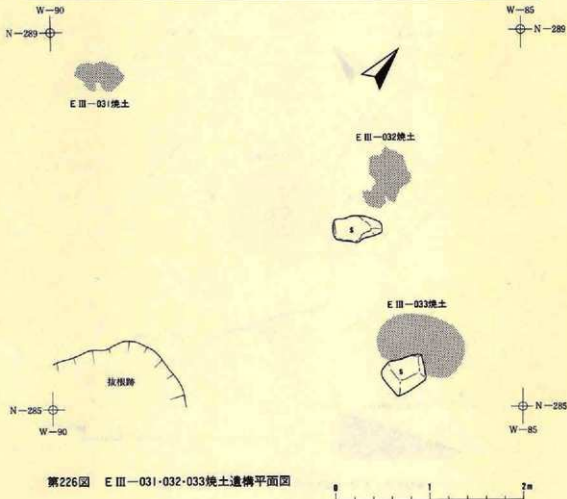
住居跡、その他の遺構との関連については明確でないものが多いが、HⅢ-031、IⅤ-031・032、KⅥ-031焼土遺構などでは、周囲に柱穴状ビットがみられ、それらの一部とともに住居跡を構成する可能性も大きい。

— 小括 —

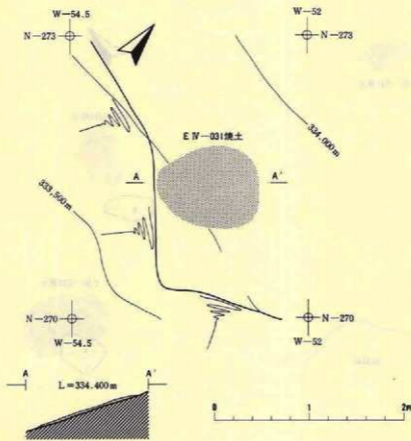
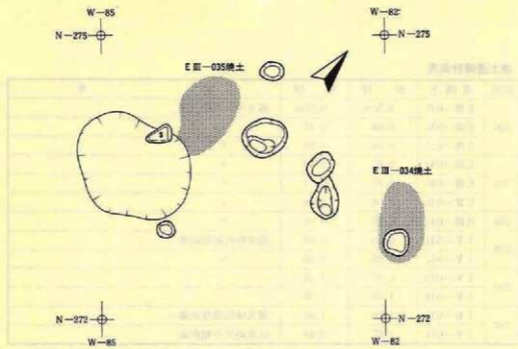
かなり時代の降るものもあるが、大部分は縄文時代~弥生時代中期の範囲に取まるものである。住居跡等の付属施設と推定されるものもあるが、周囲に関連する柱穴状ビットなどもみられず、野外炉などの施設として単独に営まれた形跡の認められる例もある。

焼土遺構計測表

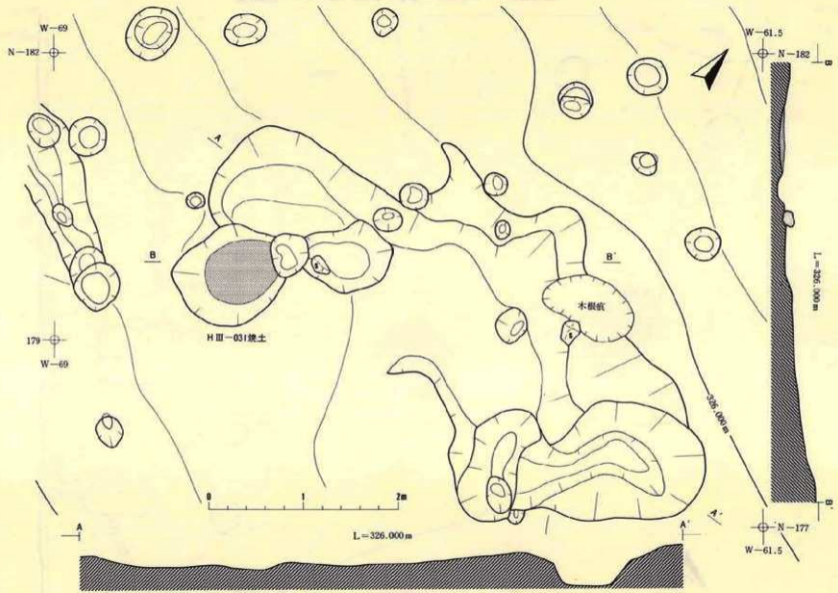
図版	遺構名	長 径	短 径	備 考
226	E III-031	0.52m	0.30m	縄文時代前期前葉
	E III-032	0.64	0.45	"
	E III-033	0.94	0.58	"
227	E III-034	0.85	0.48	"
	E III-035	0.85	0.57	"
	E IV-031	1.06	0.86	"
228	H III-031	0.70	0.66	"
229	I V-031	0.89	0.63	縄文時代前期前葉
	I V-032	0.86	0.60	"
	I V-033	1.47	1.05	
230	I V-034	1.05	0.85	
	I VI-031	1.76	1.03	縄文時代後期前葉~
231	J V-031	0.57	0.48	弥生時代中期前葉



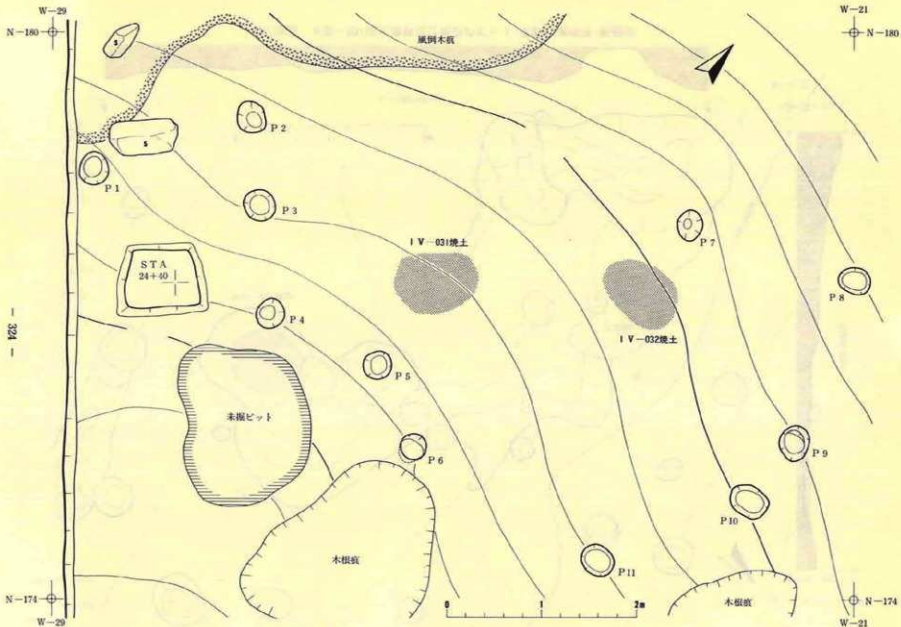
第226図 E III-031・032・033焼土遺構平面図



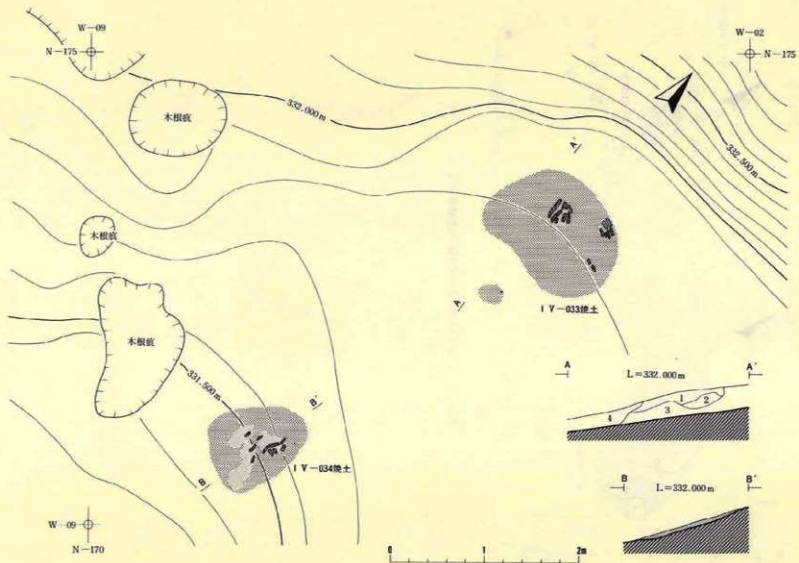
第227図 E III-034-035・E IV-031 焼土遺構平面図



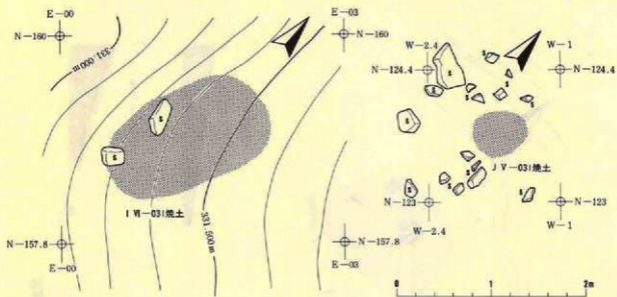
第228図 H III-031焼土遺構及び周辺のビット・雨裂状遺構平・断面図



第229図 I V-031-032焼土遺構と柱穴状ビット群平面図



第230图 I V-033-034烧土遺構平·断面图



第231図 I VI-031・J V-031 焼土遺構平面図

(6) 集石遺構

集石遺構及びこれに類似する遺構は3か所であり、いずれも付近の山地にみられる石英安山岩の亜角礫によって構成されている。形態や立地の面から3遺構とも別々の性格を有するものと考えられる。

FⅢ-041集石遺構 (第232・233図 第3表 写真図版75・156)

〔位置・検出面〕 FⅢ-0113住居跡北側の平地に隣接して検出される。

〔形状・規模〕 北西～南東方向に長く、5.10×1.70mである。集石は最大0.50×0.25mほどの亜角礫を主体とし、その中に長さ0.50m、幅0.20m、厚さ0.10mの角柱礫を2～3混じえている。個々の礫は多少上下の差を保ちながらも、平面的な広がりをもっている。

〔付属施設・性格〕 集石の下には大小のピットが6基ほど存在するが、少なくとも2基のピットは集石遺構と同時にこれより古い時期の遺構と考えられる。仮に同時期の遺構とみると多くの遺跡でしられている集石を伴う土壌墓である可能性が十分考えられる。

〔遺物〕 遺構内の北西端付近から、角柱状石英安山岩を丸めた無頭の石棒1082が1点出土している。

〔時期〕 時期決定資料が乏しく明確ではないが、集石下のFⅢ-028ピットの埋土中から縄文時代後期前葉の土器片が出土しており、この時期に入る可能性もあげられる。しかし、ピットと集石が同時であるか層関係からは明らかにできなかった。

GⅣ-041集石遺構

〔位置・検出面〕 G-016A～D住居跡の埋土中層部に検出される。礫の主体は061集石遺構と同様、付近一帯にみられる石英安山岩の亜角礫である。

〔形状・規模〕 礫の大きさは0.50×0.50m程度のものから0.05×0.05mほどのものまであるが比較的小さいものが多い。FⅢ-041集石遺構にみられるような角柱礫はないが、礫の一部に火熱をうけて赤変したものが随所にみられる。礫はやはり多少の凹凸をくり返しながら層をなすように全体に散在している。また、密度に多少の濃淡があり、中には意図的な配置と思われる部分もある。集石の範囲は、円形に近い形状を呈している。

〔遺物〕 土器などごく僅かに混入する程度である。

〔性格〕 GⅣ-016A～D住居跡がある程度埋没した段階で、付近の住居跡やピットの構築時などに一括投棄された跡と考えられないこともない。しかし、集石の中に意図的に配置された部分がみられることなどから、祭祀や儀礼のための施設跡の可能性も否定できない。

〔時期〕 GⅣ-016住居跡よりかなり遅れるとしても、縄文時代晩期前葉の範囲内に収まる時期に位置付けられるであろう。

Ⅳ-041集石遺構（第233図）

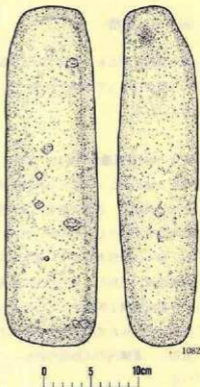
〔位置・検出面〕 Ⅳ-051溝跡(埋没谷)の北東部に検出された。溝跡の底部に丁度、水流をささぎるように位置している。

〔形状・規模〕 長さ1.80m、幅2.20mの範囲に石英安山岩の重角礫25個前後が溝底の砂泥とともに積みあげられ、小さな土手状の高まりをなしている。石組みの中央部は途切れており、その部分の水が流出している。礫の大きさは、先の2遺構とほとんど同様である。

〔遺物〕 石組みの中や周辺の溝底からは縄文時代後期のものと思われる土器片が何点か出土している。土器片は溝の東側に展開する縄文時代後期前葉の集落と関連があると思われる。

〔性格〕 構築場所などから溝を流れる水を堰止めるための施設の跡とみることができる。

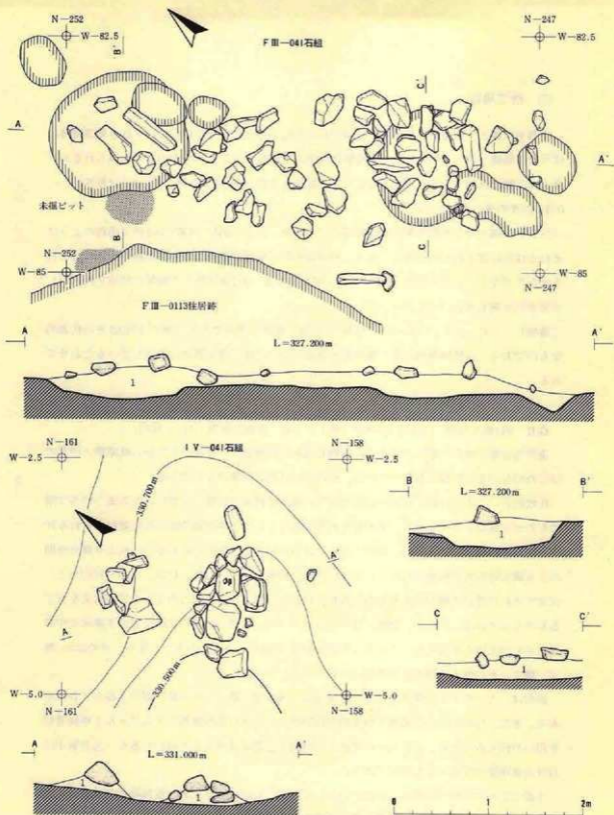
〔時期〕 縄文時代後期の集落に関連するほぼ同期の遺構推定される。



第232図 FⅢ-041集石遺構出土遺物

— 小括 —

発見された集石遺構は、いずれも縄文時代後・晩期に属するものであるが、個々の関連性は乏しく性格もそれぞれ異なるようである。各遺構の性格は、集石を伴う土墳墓、儀礼・祭祀の場跡、堰止め施設などをそれぞれ想定できるが、共に不明な点もあってなお資料の検討を要する。



第233図 F III-014・I V-041集石遺構平・断面図

(7) 捨て場跡

土器を主体とする遺物の密集する区域が10か所以上存在する。これらはいずれも集落跡等に伴う捨て場跡と思われる。出土する遺物はほとんど破片でまとまりをもつものもみられるが、多くは乱雑な状態であり、遺物の含まれる堆積層はIⅢ-061捨て場跡などのように厚さ0.2～0.3m程度の薄いものが多い。

〔位置〕 縄文時代晩期前葉の集落跡周辺に多いが、MV-061、MVI-061捨て場跡のようにそれとは別に営まれた例がある。また、同時期の捨て場跡は集落周辺の平坦地や崖際に営まれるばかりでなく、EⅢ-011、FⅢ-0113～0116、NⅣ-011住居跡など廃屋の凹地を再利用して営まれる例も多い。

〔遺物〕 GⅡ-061、IⅢ-061、MV-061捨て場跡の遺物であり、1083～1310はその代表的なものである。住居跡利用の捨て場跡出土遺物については、各住居跡に既述しているとおりである。

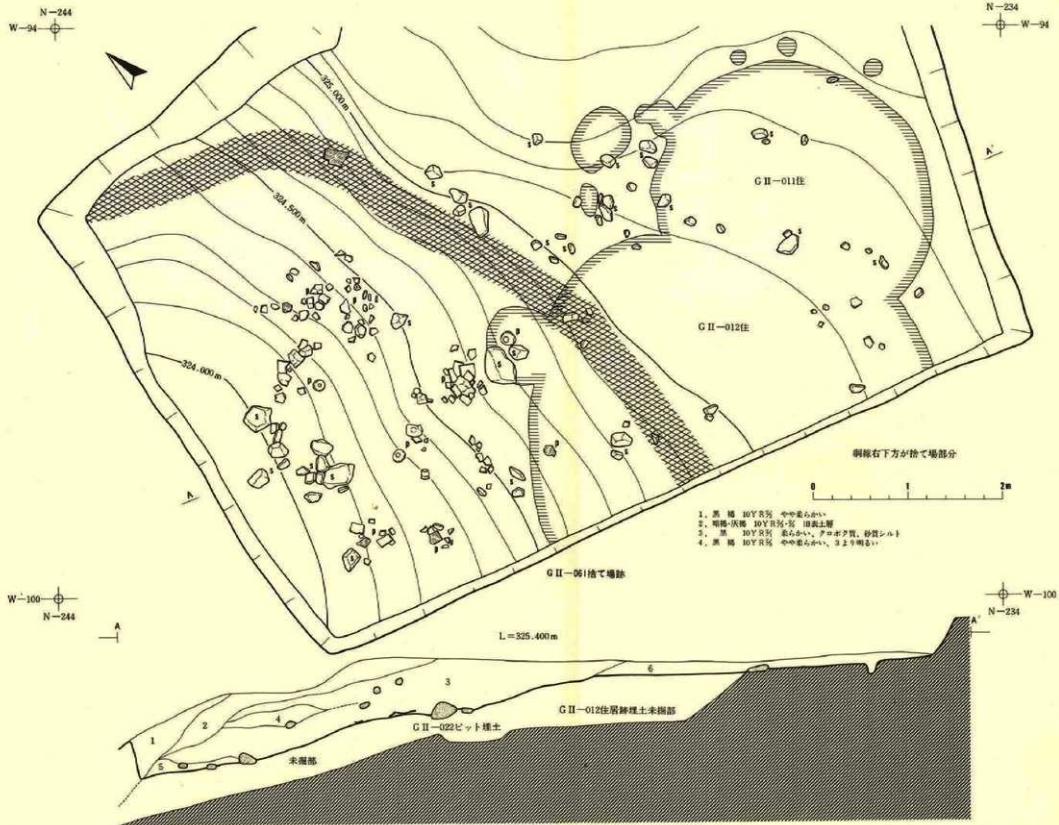
GⅡ-061捨て場跡（第234～250図 第1～3表 写真図版76・156～169）

遺物包含層が比較的厚く、出土する遺物も縄文時代後期前～後葉のものから晩期前・中葉のはじめのものまで長期にわたっている。その中心は晩期前葉のものである。

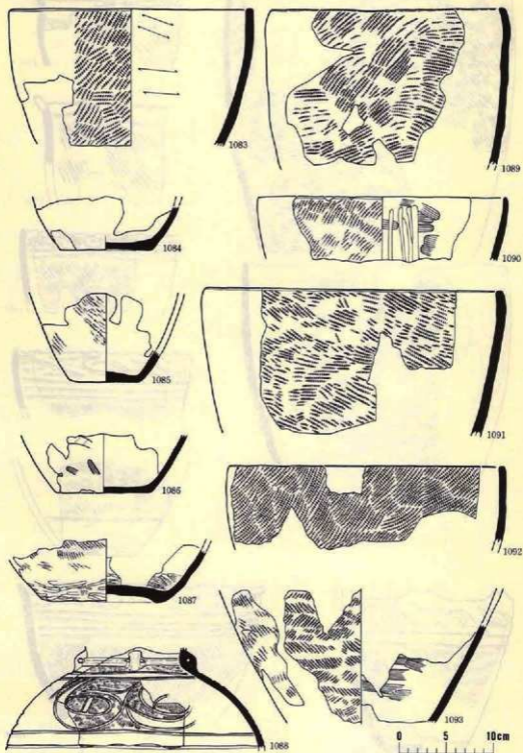
比較的古いものは1149、1153～1173であり、縄文時代後期前葉～末葉にいたるまでの各段階のものが少数ながらみられる。やや時代の下るものとしては晩期最初頭頃に位置付けられる1088、1112～1115、1120、1121、1150～1152、1174～1194などがあげられる。これより幾分時期の下る縄文時代晩期前葉のものとしては、1096、1099～1102、1126、1133、1195～1210など三叉文やそれに近い文様を有するものがあり、1123、1124、1218、1291のようなX字状文を有するものも含まれる。さらに、1106、1109、1116～1119、1123、1224～1339などの羊歯状文や歯列文をもつ土器もみられる。これらはやや下がり、中葉に入るものかもしれない。そのほか、無文、縄文、その他の文様をもつ多数の土器が出土している。

器形は、大・中・小の深鉢型土器や台付土器、浅鉢型土器、注口土器、壺型土器など各種がある。また、1140のような朱塗り土器や1150のように注口部の補修にアスファルト様接着剤を用いた例もみられる。これらはいずれも各時期の土器に共伴すると思われるが、包含層中における共伴関係は必ずしも明確ではない。

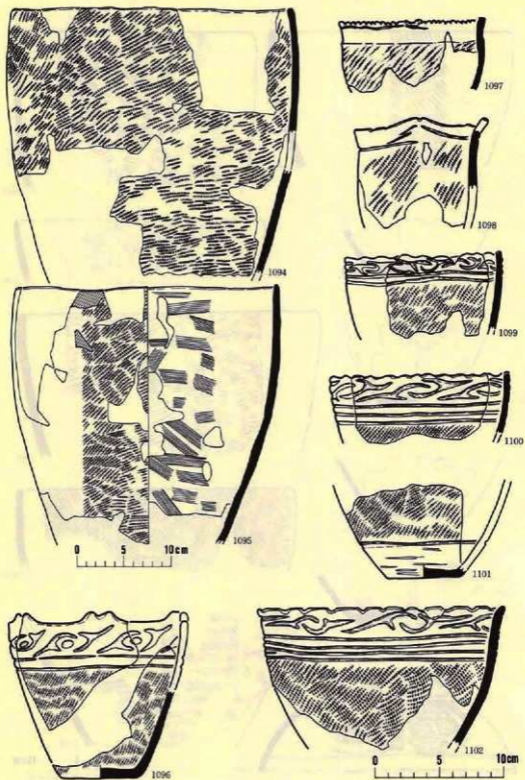
土器とともに各種の土製品、石器が出土している。1265は中空土偶の腹部破片で縄文時代晩期前葉のものである。1266は環状土製品の破片と思われる。1267は椎骨状土製品で耳栓と思われる。1268～1270は円盤状土製品である。



第234図 G II-061捨て場跡遺物出土状況平・断面図



第235圖 G II-061捨て場跡出土遺物(1)



第236図 G II-061捨て場跡出土遺物(2)



1103



1107



1108



1104



1109



1105



1110



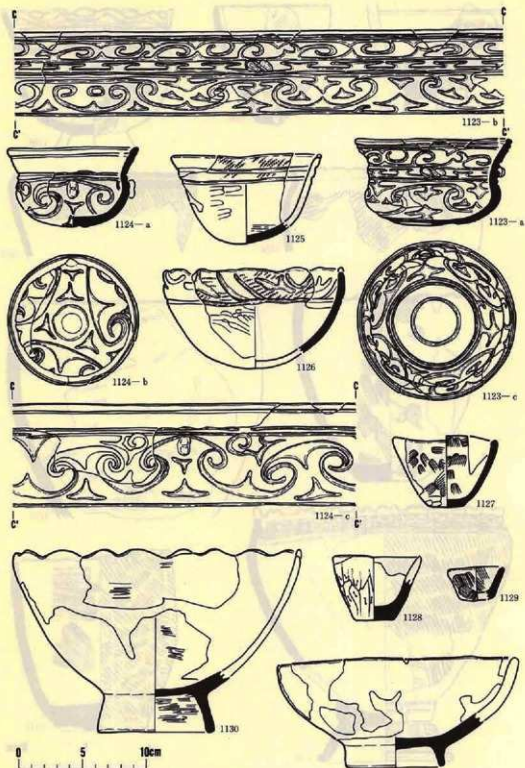
1106



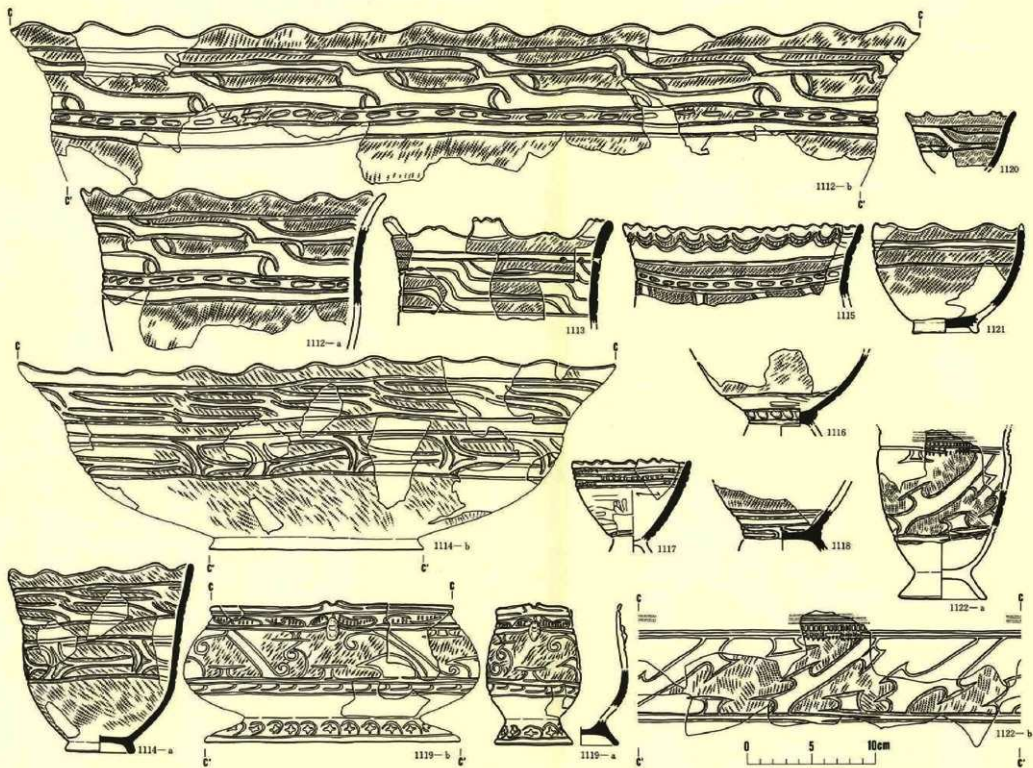
1111



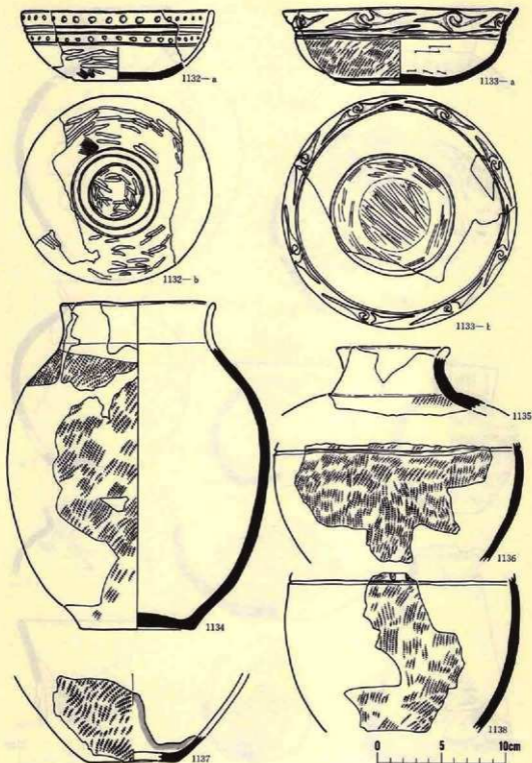
第237図 G II-061捨て場跡出土遺物(3)



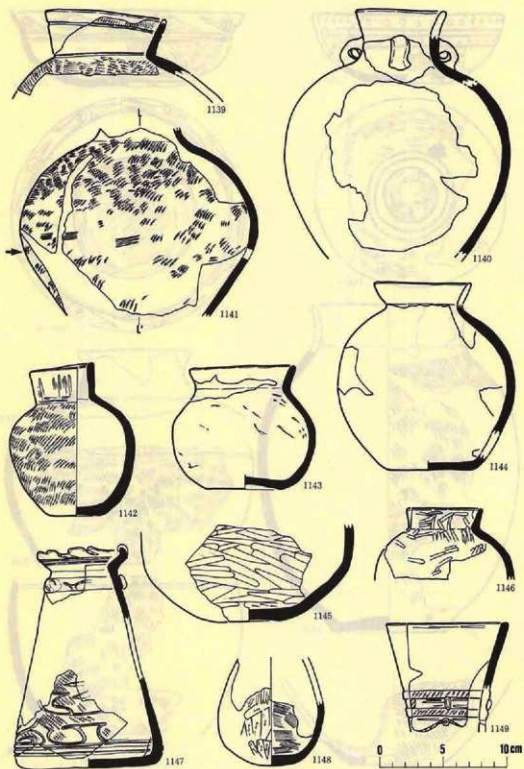
第238図 G II—061捨て場跡出土遺物(4)



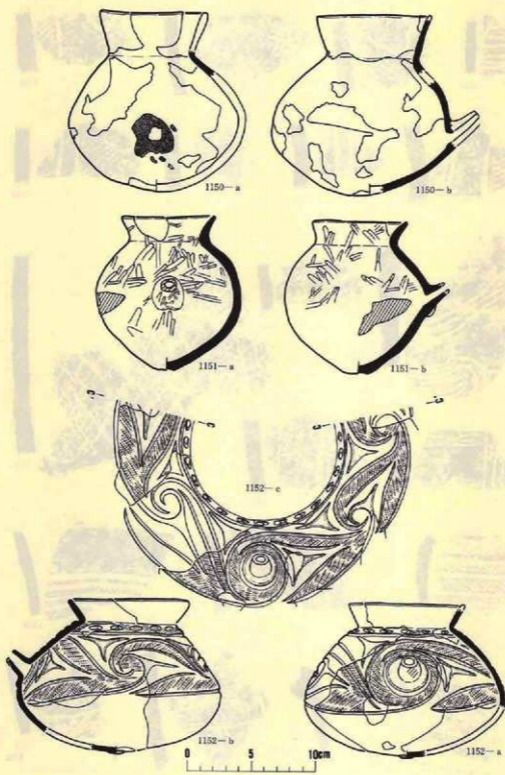
第239図 G II-061捨て場跡出土遺物(5)



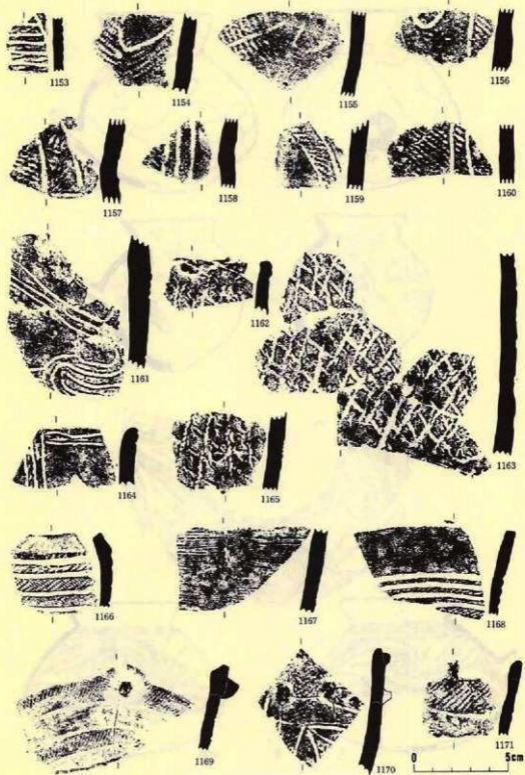
第240図 G II-061捨て場跡出土遺物(6)



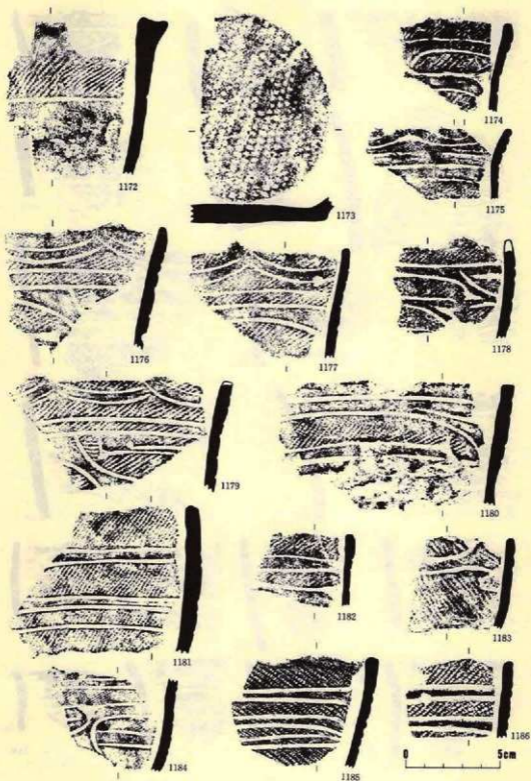
第24|図 G II-06|捨て場跡出土遺物(7)



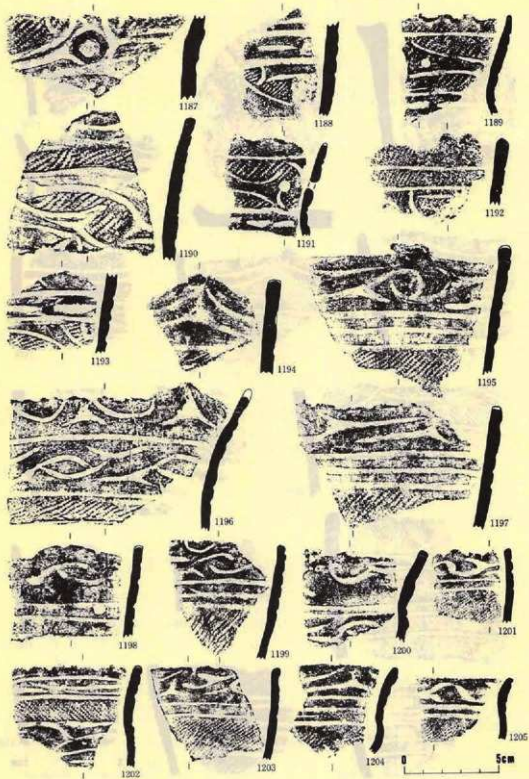
第242図 G II-061捨て場跡出土遺物(8)



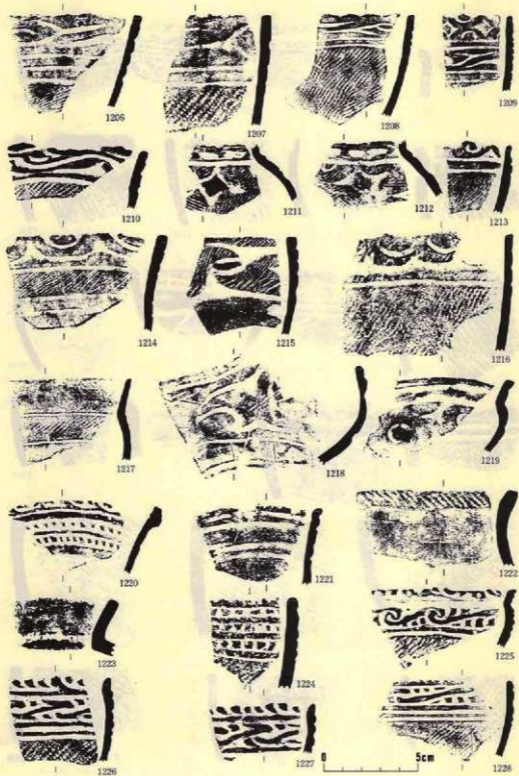
第243図 G II-061捨て場跡出土遺物(9)



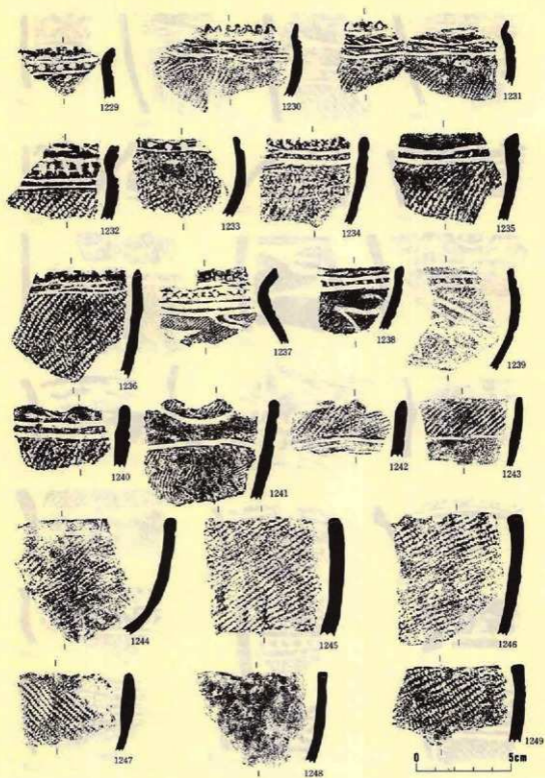
第244図 G II-061捨て場跡出土遺物 (10)



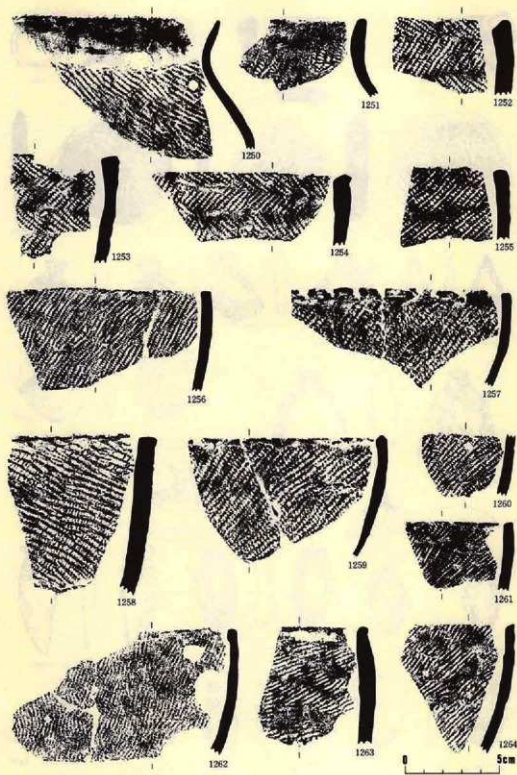
第245图 G II—061捨て場跡出土遺物 (11)



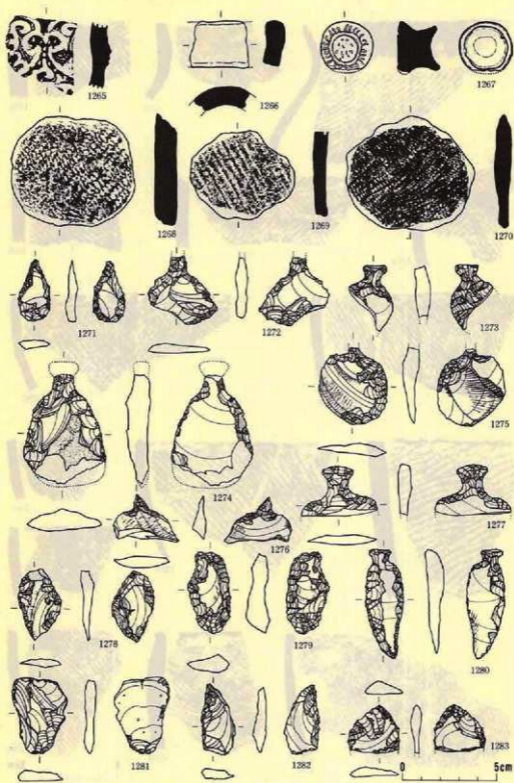
第246図 G II-061捨て場跡出土遺物 (12)



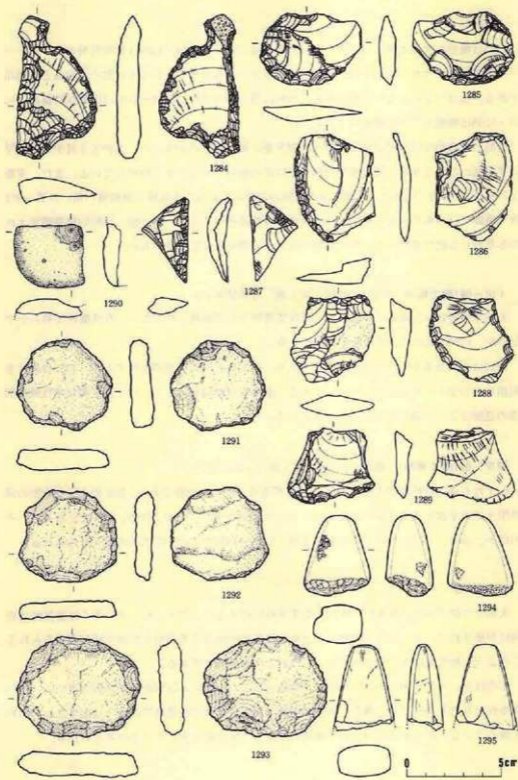
第247図 G II-06I捨て場跡出土遺物 (13)



第248図 G II-061捨て場跡出土遺物 (14)



第249図 G II-061捨て場跡出土遺物 (15)



第250図 G II-061捨て場跡出土遺物 (16)

1271は無形丸尻の石鏃、1271はつまみ付き石鏃の破片、1273～1289は剥片利用のスクレーパーである。そのうち、1273～1277、1280、1284はつまみ付きのいわゆる石匙の完形品と破損品である。他はつまみのないものである。1290は凹み石の破片、1291～1293は円盤状石製品、1294・1295は磨製石斧の頭部破片である。

〔時期〕 時期は住居跡同様縄文時代晩期前葉に属するものが多いが、遺物包含層が比較的厚く下層部にこれより古い縄文時代後期末葉以前の遺物がかなり多く堆積している。また、東寄りのMIV-061捨て場跡には晩期中葉の遺物のみがみられる。小規模で堆積層の薄いNVI-061捨て場跡では粗製の縄文土器片だけで詳細な時期は不明である。その他、比較的短期間営まれたと思われる捨て場跡では、古い時期の混入する例がしばしば認められる。

I III-061捨て場跡（第251・252図 第1表 写真図版169）

大部分の遺物が採集後にI III区の一括採集遺物として処理されたため、全体構成は明らかでないが、1296、1297は出土遺物の一部である。

1297は羊歯状文をもつ小型台付土器であり、縄文時代晩期前葉のものである。1296は剥片を利用したつまみのないスクレーパーである。全体に堆積層がうすく、ほとんど縄文時代晩期前葉の遺物によって構成されていたと思われる。

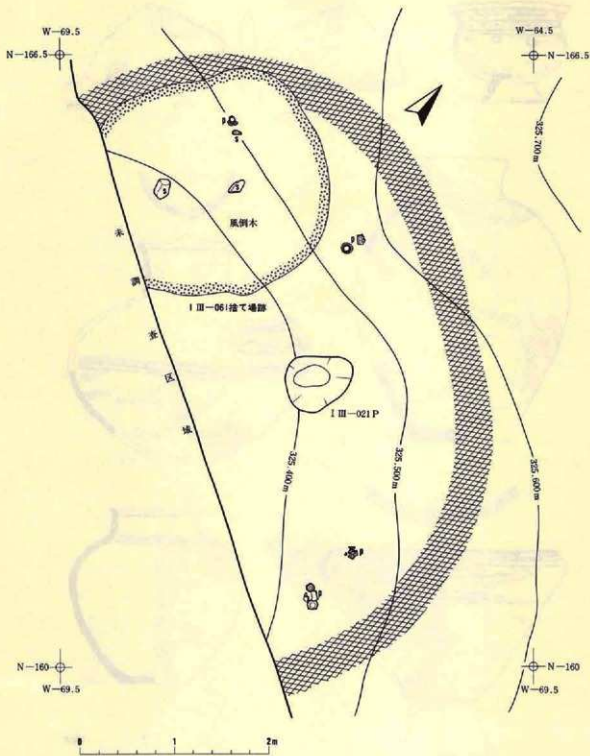
MIV-061捨て場跡（第253・254図 第1表 写真図版170）

いずれも縄文時代晩期中葉の大淵C₁式に相当する時期の遺物である。598のような大型の深鉢型土器が主体を占めるが、復元できたものでは壺が多く、1298、1299、1300などがある。そのほか、1301、1303、1304などの台付土器、1306～1310などの小型土器の破片もみられる。

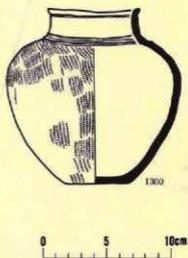
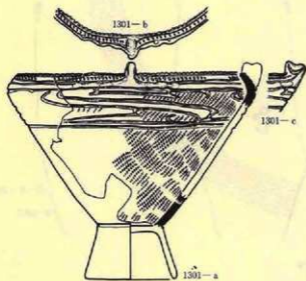
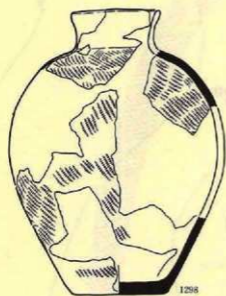
— 小括 —

大部分の捨て場跡は縄文時代晩期前葉集落跡に伴うものと考えられ、その多くは集落跡の周りに形成されている。また、同時期には他の住居跡の凹地を再利用した捨て場が多くみられる。このような捨て場跡は、曲田I遺跡の特殊例なのか検討を要する。

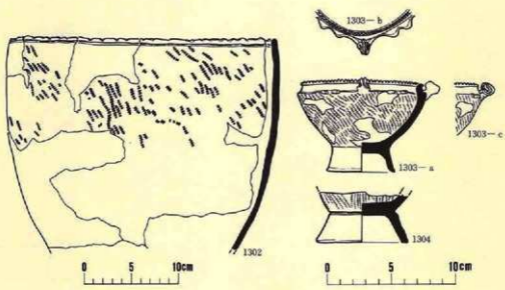
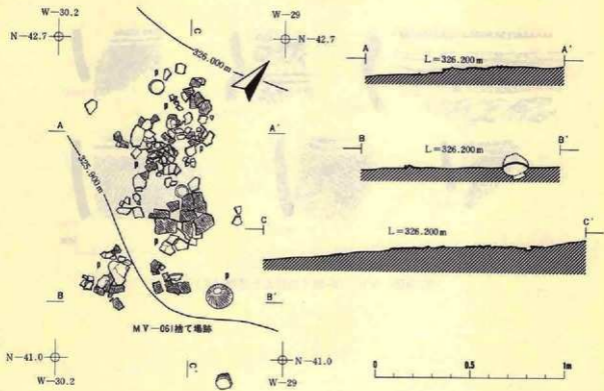
そのほか、MIV-061、NVI-061捨て場跡があるが、これらは別の時期の居住者によって形成されたものと思われる。現在、両捨て場跡の周辺域は耕作や道路等によって削平され、原形を留めていない部分が多いが、捨て場跡に関連した住居跡があったことが考えられる。



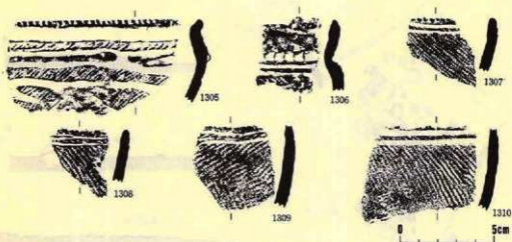
第251図 I III-061捨て場跡範囲図



第252図 I III-061 捨て場跡出土遺物



第253図 M V-061 捨て場跡平・断面図及び出土遺物 (1)



第254図 M IV-061捨て場跡出土遺物(2)

(8) 溝跡

溝や水路、雨裂などの跡は、住居跡や建物跡及び道路遺構に伴うものを除いて6条である。これらは記述の便宜上一括して記述することとする。

GⅣ-051雨裂跡 (第256・257図 第1・3表 写真図版77・78・174)

GⅣ-015、HⅣ-011住居跡などに重複する古い時期の雨裂跡である。両住居跡が営まれた時期には大部分埋没し、やや浅い凹地になっていたことが明らかで、この凹地が捨て場になったことがしられる。

雨裂の溝は縄文時代の住居跡が密集した区域の北側から蛇行してすすみ、途中途切れながら町道際の切り通しの崖に達している。この先については検出されなかった。おそらく、下流部は次第に浅くなり、上流部ほど底跡を残さなかったと思われる。全長28.2m、最大幅5.4m、南端の狭小部の幅は0.6mほどである。深さは検出面から0.2～1.0mである。底部の形状は複雑な侵食によって凹凸が著しく、埋土層も場所によってかなり変化している。

出土遺物の一部は住居跡内出土の遺物に含まれているが、両住居跡の遺物と同時期のものである。主な遺物は837～850である。838～841は縄文時代中期末の土器片であり、839は大木9式、838、840、841は大木10式に相当するであろう。842は縄文時代晩期最初頭、843～847は同晩期前葉の土器とみられる。848は粗製の深鉢型土器片であるが、ほぼ同時期のもかもしれない。849は小型の磨製石斧の胴～刃部破片で全体に擦痕がみられる。850は円板状石製品の破損品である。

GⅣ-052溝跡 (第255図)

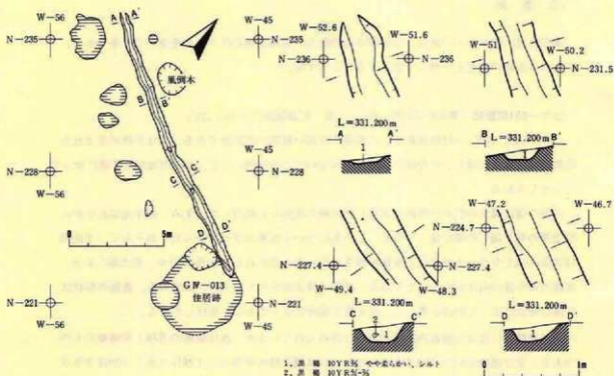
GⅣ-013住居跡と一部重複する、西北西—東南東方向に長い溝である。残存長15.6m、幅0.6m、深さは0.15mほどである。

埋土は黒色の柔らかい火山灰土の単層を主体とし、一部に転礫の混じることがある。遺物は含まれず、かなり新しい様相をおびている。

曲田集落には大正から昭和の初めにかけて防火用水路が引かれており、この溝は形状や位置、走行、埋土の状況からその一部と推定される。

HⅢ-051溝跡 (第256図)

縄文時代のHⅢ-012住居跡及び柱穴状ビット群の一部と重複する。東西方向に大きく彎曲しながら延び、長さ8.9m、幅0.3m、深さ0.08～0.15mの溝である。東端部には直径0.45m、



第255図 G IV-052溝跡平・断面図

深さ0.25mほどの浅い鉢型ピットが付随している。西端部は調査区域外にあるが、次第に浅くなる傾向がみられる。

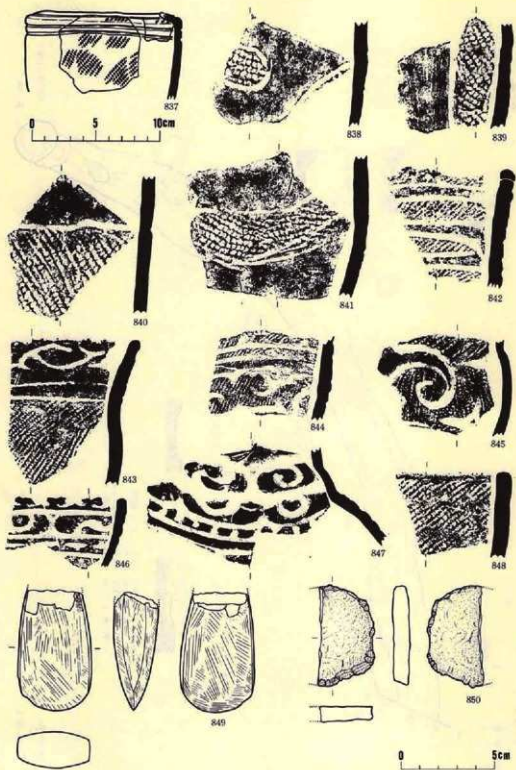
埋土は黒色の水山灰土であるがやや硬くしまり、多少古い様相を示している。しかし、遺物は含まれていない。

縄文時代晩期の住居跡の埋土上に掘り込まれており、時期はそれほどさかのほらないと思われる。ピットの性格については明らかでない。

H IV-051溝跡 (第259・260図 第3表)

調査区西寄りを北東から南東方向に一部蛇行しながら横切る溝跡である。堆積状況から人工の施設跡ではなく、自然の谷が埋もれたものと判断される。かつて流水のあった形跡があり現在でも伏流水が浸透して滞水する状態である。溝の上幅は2.4～4.8m、深さは下流部で、0.8m、他は0.3～0.6mほどである。

遺物は下層部から縄文時代の遺物が若干出土している。主な遺物は1311～1315の土器、石器である。1311は縄文時代後期前～中葉のものと思われる。ほかに縄文後期前葉の土器がある

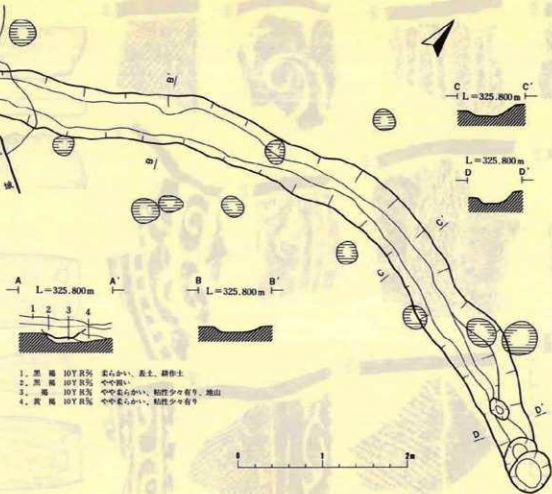


第257圖 G IV—051雨裂跡出土遺物

N-185
W-75.5

W-68
N-185

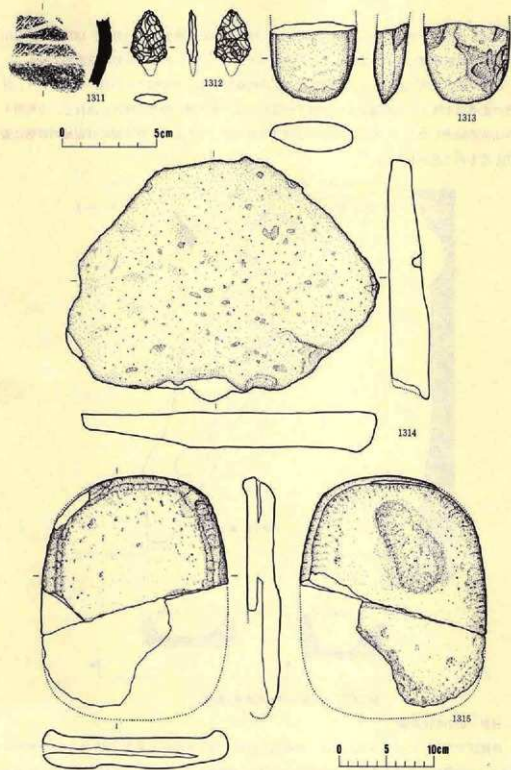
第258図 H III-051 溝防平・断面図



- 1. 黒 腐 10Y 灰 色 土 質 軟らかい、表土、耕作土
- 2. 黒 腐 10Y 灰 色 土 質 やや固い
- 3. 黒 腐 10Y 灰 色 土 質 やや柔らかい、粘性少々あり、地山
- 4. 黄 腐 10Y 灰 色 土 質 やや柔らかい、粘性少々あり

N-179.6
W-75.5

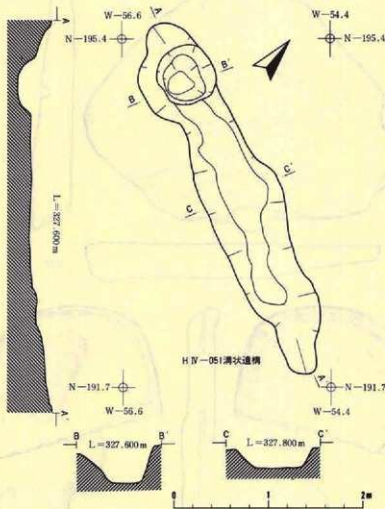
N-179.6
W-68



第259圖 H IV—051溝跡出土遺物

が磨滅して文様が明瞭でない。1312は有茎の石鏃片、1313は磨製石斧の刃部、1314は石英安山岩のうすい板状礫で台石か組板などの可能性が大きい。1315は砂質凝灰岩の石皿片である。

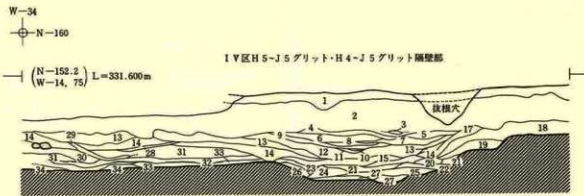
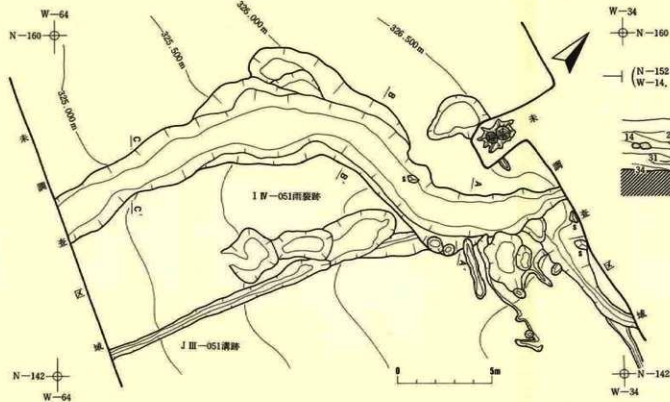
遺物や埋土の状況から、この埋没谷は縄文時代後期前葉～中葉頃には相当の水量があり、付近の生活用水路として機能していた様子が伺われる。その後、徐々に埋没が進行し、十和田^a火山灰の降火したA、D、10世紀頃にはほぼ埋もれたようであるが、終末期には湿地の状態に変化したものと思われる。



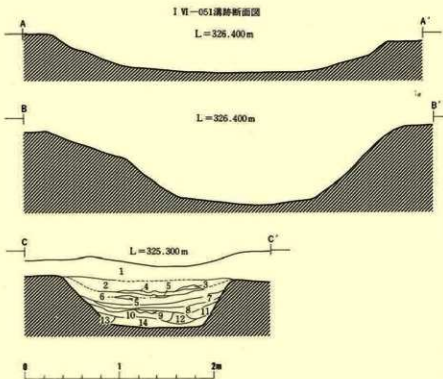
第260図 H IV-051溝跡平・断面図

H IV-052溝状遺構

H IV区で発見された長さ約4.1 m、幅最大0.82 m、検出面からの深さ0.2～0.4 mの東西に長い、一見溝状の遺構である。西端部には直径0.6 m内外、深さ0.4 mの円形の落ち込みがある。埋土は黒色土が主体。遺物なし。時期不明である。



1. 黒 10Y R1.7/1 やや黒くない、砂質シルト、礫石をやや多く含む
2. 黒 10Y R1.7/1 〃
3. 黒 10Y R1/5 黒くない、砂質シルト、全部に黄褐色火山灰が混入している
4. 黒 10Y R1/5 〃と同じ
5. 黒 10Y R1/5 礫石、黒くない火山灰
6. 黒 10Y R1/5 砂質シルト、火山灰を多く含む
7. 黒 10Y R1/5 黒くない、〃と混ざっているが部分的にやや黒い火山灰層
8. 黒 10Y R1/5 〃と同じ、やや黒い
9. 黒 10Y R1/5 7と同じ
10. 黒 10Y R1.7/1 1と同じ
11. 黒 10Y R1/5 7と同じ
12. 黒 10Y R1/5 黒くない、砂質シルト、火山灰を多く含む
13. 黒 10Y R1/5 礫石火山灰層
14. 黒 黒 10Y R1/5 礫石、粘土シルト、黄褐色火山灰層
15. 黒 10Y R1/5 礫石、火山灰を多く含む
16. 黒 10Y R1/5 礫石、粘土シルト、砂質シルトを多く含む
17. 黒 10Y R1/5 礫石、18と同じ
18. 黒 10Y R1/5 礫石、シルト、礫石を多く含む
19. 黒 10Y R1/5 礫石、粘土質石灰質の礫石の沈積物少量あり
20. 黒 10Y R1/5 礫石、砂土礫石層一部に赤褐色の沈積物あり
21. 黒 10Y R1/5 礫石、砂土礫石層、18と混ざっているが、やや黒い
22. 黒 10Y R1/5 礫石、砂土、礫石を多く含む
23. 黒 10Y R1/5 礫石、石灰質を多く含む
24. 黒 10Y R1/5 礫石、礫石を多く含む
25. 黒 10Y R1/5 砂土、礫石を多く含む、赤褐色、多量に沈積
26. 黒 10Y R1/5 中や黒い、砂土、礫石を多く含む
27. 黒 7.5Y R1/5 礫石、砂土、礫石、スコーラ混入、赤褐色少量に沈積
28. 黒 10Y R1/5 13と同じ
29. 黒 10Y R1/5 〃
30. 黒 10Y R1/5 黒くない、礫石、礫石を多く含む、十和田 a ? (細粒砂石)
31. 黒 10Y R1/5 中や黒い、砂土、礫石を多く含む
32. 黒 10Y R1/5 中や黒い、砂土、礫石を多く含む



第261図 I V-051溝跡南半部断面図・I V区土層断面図

IⅣ-051溝跡 (第259図 第1・3表)

調査区の中央部、IⅢ-IⅣ区を蛇行しながら南北に延びている。第3層の直下に検出され、IⅣ-052・053溝の一部に重複しているが、埋土からはIⅣ-052溝が新しく、IⅣ-053溝と同時のようである。また、埋設した段階でEⅢ-081道路跡と重複している。南側では地山の褐色土を浸食して原形が比較的良好に保たれている。しかし、北側では黒、または黒褐色土層になって明瞭でない。

比較的形状の明らかな南端部では、上幅2.40m、底部の幅1.50m、検出面からの深さ0.52mである。北側では土層断面により、上幅0.70~3.50m、底部の幅0.35~2.55mほどである。埋土はかなり複雑であるが、全体に自然な堆積状況を示している。

遺物は溝の底部と埋土中から出土であり、いずれも縄文時代のもと思われる。1311は帯状の磨削縄文のある土器片であり、縄文時代晩期に属する。1312は有茎石鏃の破片で基部を欠いている。1313は小型の磨製石斧の刃部破片、1314は石英安山岩の台石と思われる扁平な石である。1315は淡緑色の砂質凝灰岩の石四片であり、溝の南側中央付近から数点になって出土している。そのほか、縄文時代晩期の土器片が若干である。

〔時期〕 溝の底部埋土中に縄文時代の後・晩期の遺物が含まれていることから、縄文時代後晩期の遺構が共存していることが考えられる。また、溝の終末に近い時期、かなり浅くなった段階でEⅢ-081道路跡の礫が敷きこまれているが、道路遺構の年代が特定できないため明らかでない。

IⅣ-052雨裂跡

IⅣ-051溝跡の下流部に位置し、S字状に蛇行する部分の南岸から南西方向にのびる浅い雨裂の跡である。長さ9.50m、幅2.80m、深さ0.20m以下である。埋土は粘性のある暗褐色土の単層であるが、底部に一部うすい砂層が認められる。

IⅣ-051雨裂跡との関係は認められず、ごく近年のものと思われる。

IⅣ-053溝跡

IⅣ-052雨裂跡に平行するように、IⅥ-051溝のS字状彎曲部から南西方向に直線的にのびる狭い溝跡である。長さ17.50m、幅0.50m、深さ0.05m内外である。埋土は黒褐色火山灰質土の柔らかい単層からなり、新しい様相を示している。遺物は含まれていない。調査以前にこの溝の付近には小土塁があり、これに付随する地境溝かIⅣ-051雨裂跡から浸透する水抜き用の排水路跡などが推定される。

— 小括 —

6条のうち、2条は縄文時代かそれ以前に属するものである。特にI VI-051溝跡は縄文時代後期の居住者と関わりが深く、集落景観を形づくる要素になっている。他の4つの溝や雨裂跡はそれよりはるかに時代の下がる遺構であるが、各時代の地域景観を知る手掛りである。

(9) 道路跡

E III-071道路跡 (第260図 付図1 第3表)

〔位置〕 調査区中央部に位置し、町道に沿って南側を東西にのびる。遺構として確認できたのは調査区西端のE III区までの長さ300mの範囲である。

〔検出面〕 耕作土及び盛土を除去して検出される。

〔重複〕 F III区の土層によってみると、わずかずつ方向を変えながら重複して走る3期ほどの遺構と認められるが、全体に擾乱が多く重複関係は明らかでない。

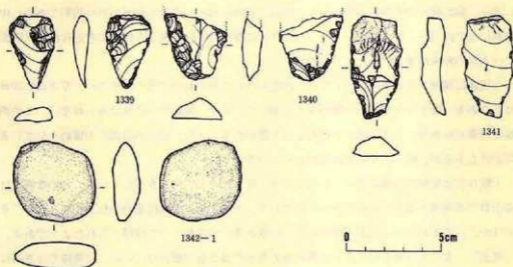
〔保存状況〕 町道との重複部分が多く、耕作によって破壊されている部分が多い。

〔形状・規模〕 破壊された部分が多く全体の形状は不明であるが、その延長は調査区外に続いているものと思われる。比較的残りのよい部分では、堅く踏み固められた幅3.60mほどの路面とその両側につく幅0.30～0.70mの側溝部分からなるようである。道路面には枕木を敷いた横方向のへこみが部分的にみられ、溝を渡る部分では礫や砂利を敷いて固めた跡が認められる。

〔埋土〕 部分的に縄文時代晩期以前の遺構を切り、またこれを被う土層上に築いているが、さらに一部は耕作土や盛土によって被われている。

〔遺物〕 側溝や道路敷土中から縄文時代の遺物が出土している。1331は石製の未製品と思われる。1340はスクレーパーの破片、1341は加工痕のある剥片で両側にケッピングの痕跡が認められる。1342は打製の円板状石製品である。

〔時期〕 遺構の年代を裏付ける伴出遺物や共存する遺構が発見されていないため、時期の特定はできないが、縄文時代晩期以前の遺構や埋土を切っていることからこれより新しい。この付近の道路は明治43年に降付け替えられていないといわれており、史書や古文書に記載されている平安時代の「流霞道」や江戸時代の「鹿角街道」の一部である可能性もあげられる。



第262図 E III-071道路跡出土遺物

(10) 炭焼場跡

F IV—081炭焼場跡 (第261～265図 第1～3表 写真図版79・80・171～173)

〔位置〕 調査区北西のF IV区とG IV区の境界付近に位置し、すぐ西南西にはF IV—011住居跡、F IV—012住居跡がある。

〔検出面〕 地上観察により付近の斜面地形と異なる人工の平場と穴、中央部が凹み焼土のあるマウンドが認められている。

〔重複・保存状況〕 炭焼場跡の床部分には少なくとも3回の補修された痕跡がみられた。天井部はすでに崩落して原形を留めていないが、埋没した床から0.40mの部分は保存状態が良好であり、壁面の立ち上がりも残存している。

〔形状・規模〕 窯体は山麓斜面の一部を平らに掘り込み、褐色の粘土を叩き込んで構築されている。焼成室は斜面に沿って卵形をなし、長さ4.50m、幅2.50mである。底部分は厚さ0.11～0.15m、側壁は厚さ0.23～0.35mの粘土で被われている。焚口部は斜面の下方にあり、幅0.28mである。斜面上方の煙出し部には縦0.85m、横0.23mの長方形の煙突が付き、上方に延びてゐる。

焼成室は入口の4分の1ほどの部分が赤橙色に焼けており、その奥と煙出し部の床と壁は炭素が付着して黒色化している。さらに煙出し部にはタールが厚く付着している。

〔付属施設〕 炭窯に付随する覆屋及び作業小屋のうち、覆屋部分の地下遺構は判明せず、炭窯の南面に続く平場に作業の柱穴列が検出されている。作業小屋は12本の柱穴からなり、長さ

7.20m、幅2.86mの不整長方形をなし、柱穴は直径0.20m、深さ0.30m内外の円形である。中央部にはP₂、P₅、P₇が並び、P₄、P₉はさらに覆屋の支柱に連なる構造が考えられる。床面には木炭の粉末が多量に散乱している。

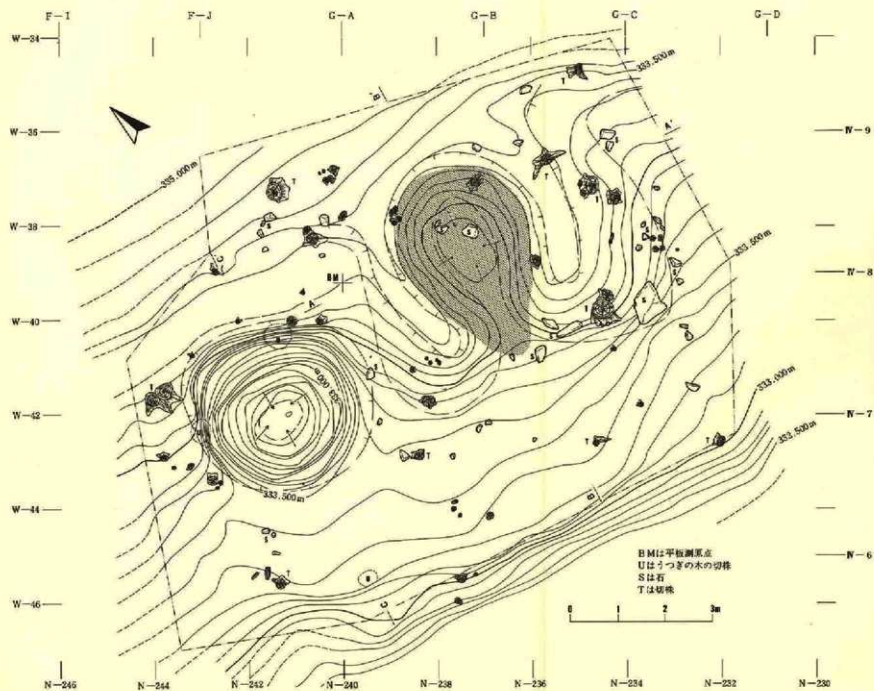
小屋跡に関連する平場は東西4.57m、南北4.70mの長方形に盛土整地され、厚さは0.20mほどである。盛土は炭窯構築の際の排土を用いているが、版築状の痕跡はみられない。この西端には集石があり、土中の礫を置いたものと思われる。また、盛土の周囲に土留めをしている可能性もあるが、明らかな遺構は認められていない。

土取り穴は炭窯の西側にあり、直径0.70m、深さ1.95mの楕形をなしている。穴の底部には安山岩の垂角礫が混じった粘土が露出しており、その上層に窯体構築時の粘土がみられる。そのほか、穴のまわりにうづぎの株があり、炭焼き場が営まれていた頃植えられたようである。
〔埋土〕 すべて腐葉土や流入した黒褐色の黒ボク質土層で液われている。炭窯跡ではさらに褐色や橙色の壁土が崩壊し、木炭の粉末で燃焼室が埋まっている。

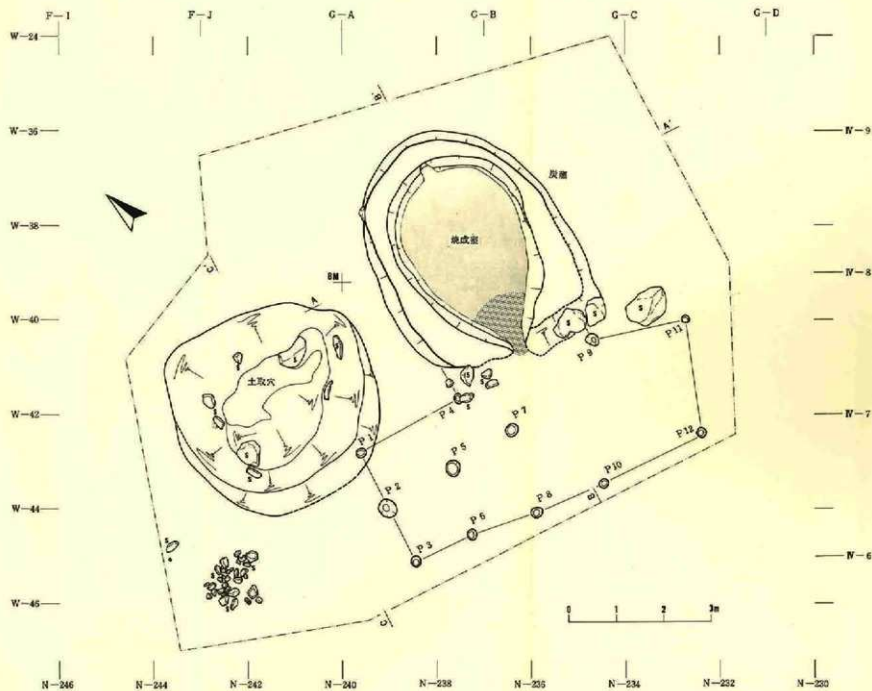
〔遺物〕 主に炭窯周辺の盛土層や表土層下の暗褐色土層中から出土しているが、いずれも縄文時代の遺物である。1316は大型の深鉢型土器で縄文時代中期末頃、1318・1319は後期中葉、1320は後期後葉、1321～1337は晩期前葉の土器とみられる。1328は単節の右上がり斜縄文の施される円板状土製品である。1329は横型の石匙、1330は磨製石斧の頭部破片である。

1331～1338は炭焼き場跡に直接関連する遺物である。5443は小屋跡の表土中から出土した砂石片であり、緑色細粒の凝灰石で火をうけて暗緑色に変色し、砕けて煤が全体に付着している。5840・5841は排煙の調節に用いた長方形の礫であり、全面にタールが黒く付着している。材質は安山岩である。1334～1338は炭窯の天井を補強するために用いた鉄製の釣金具の一部である。四角形の板を天井部の窯壁中に埋め込み、釣手部分を覆屋の梁に結束固定したものであり、板金は長方形に切断加工した1点であり、針金は全体に錆化が著しい。

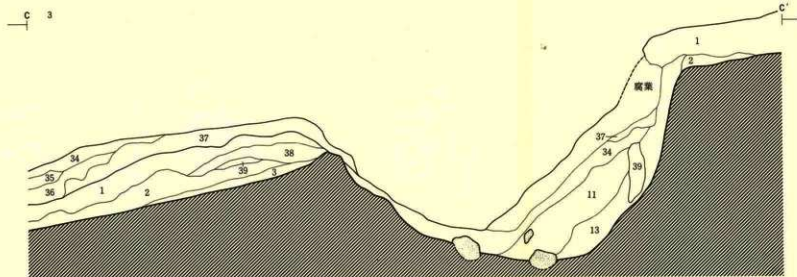
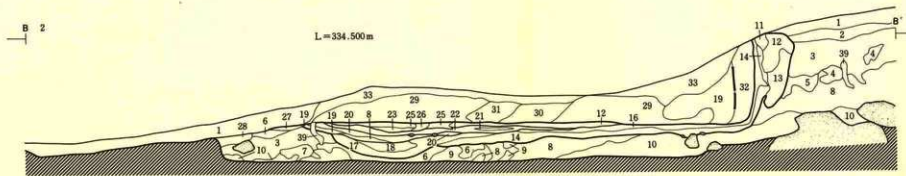
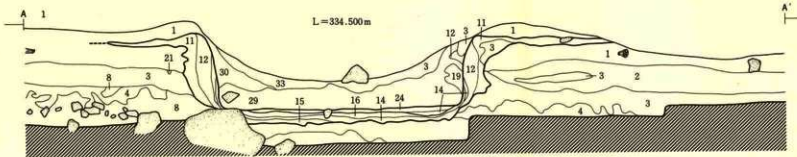
〔時期〕 炭窯の形状から竈崎窯といわれる形式であり、この窯の盛行する時期が昭和前期であることからこの頃に営まれたことが考えられる。この付近には昭和8年頃炭焼きをしていたといわれており、ほぼこの時期の遺構と思われる。



第263図 FV-81炭焼場跡現状地形平面図

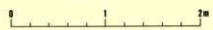


第264圖 F IV-08 灰燒場跡平面圖

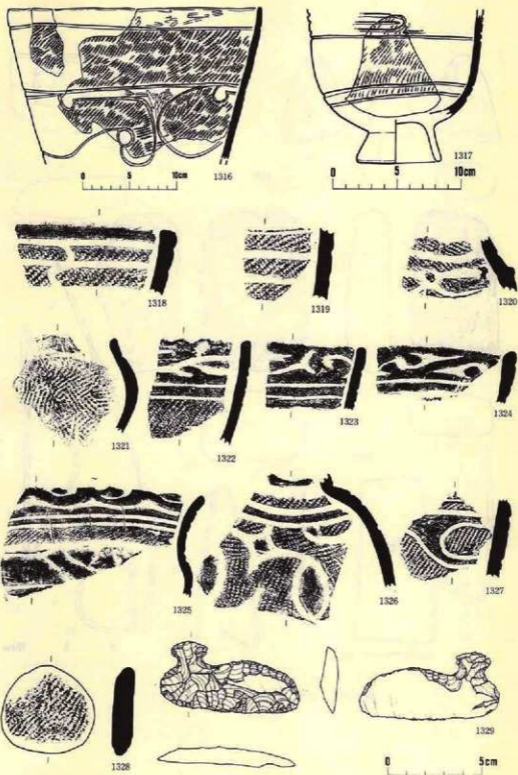


1. 層 7.5V 灰列 黒い土
2. 層 7.5V 灰列 黒土
3. 層 7.5V 灰列 黒土
4. 層 10V 灰列 粘土
5. 層 10V 灰列 粘土
6. 層 10V 灰列 粘土
7. 層 10V 灰列 粘土
8. 層 10V 灰列 粘土
9. 層 10V 灰列 粘土
10. 層 10V 灰列 粘土
11. 層 10V 灰列 粘土
12. 層 10V 灰列 粘土
13. 層 10V 灰列 粘土
14. 層 10V 灰列 粘土
15. 層 10V 灰列 粘土
16. 層 10V 灰列 粘土
17. 層 10V 灰列 粘土
18. 層 10V 灰列 粘土
19. 層 10V 灰列 粘土
20. 層 10V 灰列 粘土
21. 層 10V 灰列 粘土
22. 層 10V 灰列 粘土
23. 層 10V 灰列 粘土
24. 層 10V 灰列 粘土
25. 層 10V 灰列 粘土
26. 層 10V 灰列 粘土
27. 層 10V 灰列 粘土
28. 層 10V 灰列 粘土
29. 層 10V 灰列 粘土
30. 層 10V 灰列 粘土
31. 層 10V 灰列 粘土
32. 層 10V 灰列 粘土
33. 層 10V 灰列 粘土
34. 層 10V 灰列 粘土
35. 層 10V 灰列 粘土
36. 層 10V 灰列 粘土
37. 層 10V 灰列 粘土
38. 層 10V 灰列 粘土
39. 層 10V 灰列 粘土

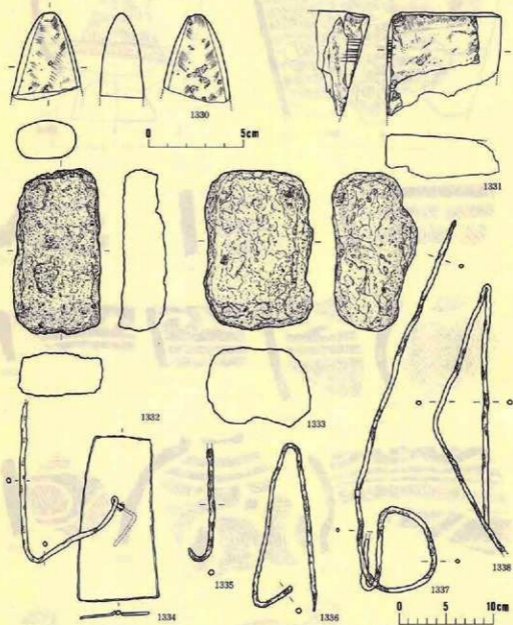
図1. 2の異なる断面図中、太線で囲まれた部分は壁の構成土を表わす。3の土層34-37は盛土層を表わす。



第265図 FIV-081炭焼跡断面図



第266圖 F IV—081炭焼場跡出土遺物 (1)



第267圖 F IV—81炭焼場跡出土遺物(2)

岩手県埋文センター文化財調査報告書第87集

曲田 I 遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連発掘調査

(第1分冊)

印刷 昭和60年2月15日

発行 昭和60年2月25日

発行 財団法人岩手県埋文文化財センター

〒020 紫波郡都南村大字下飯岡11 電話0196(38)9001

印刷 河北印刷株式会社

〒020 盛岡市本町通2丁目8-7 電話0196(23)4256

© 岩手県埋文センター